



Title	分離事象の語彙カテゴリー化と言語化に関する実験認知言語学研究－意味論・構文論・類型論的観点から－
Author(s)	王, 鈺
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/103111">https://doi.org/10.18910/103111</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年度博士学位申請論文

分離事象の語彙カテゴリー化と言語化  
に関する実験認知言語学研究  
—意味論・構文論・類型論的観点から—

大阪大学大学院人文学研究科

言語文化学専攻

王 錦

## 目次

第 1 章 序論 .....	1
1.1 研究対象 .....	1
1.2 研究目的と課題 .....	9
1.3 リサーチデザインと構成 .....	12
第 2 章 分離動詞の意味論・構文論に関する先行研究 .....	18
2.1 分離動詞に関する個別研究と対照研究の概観 .....	18
2.1.1 日本語の分離動詞に関する個別研究 .....	18
2.1.2 日本語と他の言語の分離動詞に関する対照研究 .....	22
2.1.3 本節のまとめ .....	27
2.2 壁塗り交替現象に関する研究の概観 .....	28
2.2.1 交替現象と多義性現象の違い .....	28
2.2.2 日本語の交替動詞と非交替動詞 .....	31
2.2.3 状態変化と位置変化の意味類型 .....	36
2.3 本章のまとめ .....	38
第 3 章 理論的背景 .....	41
3.1 力動性 .....	41
3.2 ネットワークモデルと複層的意味空間 .....	45
3.3 マクロ事象の概念構造と事象統合の類型論 .....	50
3.4 手話言語と中国手話 .....	53
3.4.1 手話言語研究の経緯と自然言語としての位置付け .....	53
3.4.2 中国手話における CL 表現 .....	55
3.5 本章のまとめ .....	60
第 4 章 日本語の分離動詞の多義構造研究 .....	62
4.1 はじめに .....	62
4.2 多義性に関する研究をめぐる諸問題と本研究の立場 .....	64
4.2.1 2 つのカテゴリー観に基づく「切る」の多義構造分析 .....	64
4.2.2 本研究の立場と力動性モデル .....	66
4.3 力動性モデルに基づく「切る」の意味分析 .....	69

4.3.1	「切る」の個別義の認定 .....	69
4.3.2	「切る」の意味パターン .....	74
4.3.3	複合動詞への意味拡張 .....	85
4.3.4	「切る」の意味構造の解明 .....	86
4.4	心理実験による意味構造の検証.....	89
4.4.1	実験目的と実験対象者 .....	89
4.4.2	実験方法と分析方法 .....	90
4.4.3	結果と考察 .....	93
4.5	類義関係にある分断・破壊動詞との比較.....	97
4.5.1	調査方法と分析方法 .....	98
4.5.2	「切る」、「割る」、「裂く・割く」の意味特徴と意味領域.....	100
4.5.3	母語話者と学習者による違い .....	108
4.6	本章のまとめ .....	116
第5章	日本語の分離動詞の意味体系研究 .....	121
5.1	はじめに .....	121
5.2	壁塗り交替現象と本研究の仮説.....	123
5.2.1	格体制交替の条件と現象 .....	123
5.2.2	現代日本語の2種類の分離動詞に関する仮説.....	128
5.3	分離事象における分離元と分離物の空間的関係.....	129
5.3.1	コーパス調査 .....	129
5.3.2	力動性に基づく2種類の分離動詞の一体性 .....	135
5.4	分離事象における位置変化と状態変化の関係付け .....	139
5.4.1	位置変化と状態変化を統合した複合事象の概念構造.....	139
5.4.2	位置変化型分離事象における関係付け .....	141
5.4.3	状態変化型分離事象における関係付け .....	143
5.4.4	事象関係づけのまとめ .....	146
5.5	単一経路制約から見た分離事象構文の成立条件.....	147
5.5.1	分離事象構文と単一経路制約の定義 .....	147
5.5.2	2種類の分離動詞が分離事象構文に参与する特徴.....	150
5.5.3	分離事象の3つ一体性の制約と提案 .....	152

5.5.4 本節のまとめ .....	156
5.6 本章のまとめ .....	157
第 6 章 中国語の分離動詞との対照研究 .....	160
6.1 はじめに .....	160
6.2 “掉”と“V 掉”的意味分析に関する先行研究 .....	162
6.3 力動性モデルに基づく“V 掉”的意味分析 .....	168
6.3.1 力動性モデルの“V 掉”への応用 .....	168
6.3.2 “V 掉”的意味パターン .....	169
6.3.3 “V 掉”的結合制限・傾向 .....	187
6.3.4 “V 掉”的意味構造の解明 .....	191
6.4 中国語の“V 下”、“V 落”との比較 .....	196
6.4.1 本動詞“掉”、“下”、“落”的違い .....	196
6.4.2 複合動詞“V 掉”、“V 下”、“V 落”的違い .....	199
6.5 日本語の分離動詞との比較および「力学動詞」の提案 .....	203
6.5.1 空間的関係から見た日本語と中国語の分離動詞の類似点と相違点 ..	204
6.5.2 意味の文法化から見た日本語と中国語の分離動詞の類似点と相違点 ..	206
6.5.3 「力学動詞」という動詞クラスの提案 .....	215
6.6 本章のまとめ .....	220
第 7 章 分離事象の語彙カテゴリー化の実験的研究 .....	222
7.1 はじめに .....	222
7.2 先行研究と課題 .....	226
7.2.1 事象の語彙カテゴリー化に関する類型論的研究 .....	227
7.2.2 数量的手法を用いた認知類型論的研究 .....	229
7.2.3 研究課題 .....	230
7.3 研究方法 .....	231
7.3.1 実験題材 .....	231
7.3.2 実験対象者 .....	236
7.3.3 実験方法 .....	236
7.4 分析方法 .....	237

7.4.1 分析の観点 .....	237
7.4.2 分析の手続き .....	238
7.5 結果 .....	241
7.5.1 分離動詞の語彙レパートリー .....	241
7.5.2 分離事象の語彙カテゴリー化 .....	246
7.5.3 分離事象の認知プロセス .....	268
7.6 本章のまとめ .....	271
第 8 章 結論 .....	274
8.1 本研究のまとめ .....	274
8.2 今後の課題 .....	279
付録 1 多義動詞「切る」の意味構造に関する心理実験 .....	282
付録 2 分断・破壊動詞の意味・機能に関する心理実験 .....	287
付録 3 ビデオ発話実験題材 .....	289
付録 4 中国手話の指文字表 .....	290
参考文献 .....	292
既発表論文および学会発表との関係 .....	301
謝辞 .....	304

## 図表一覧

図 1-1 研究概念図.....	13
図 2-1 移動の語彙化パターン（松本 1997: 129） .....	23
図 2-2 付帯変化の包入の自律移動の語彙化パターン（松本 1997: 139） .....	23
図 2-3 付帯変化の包入の使役移動の語彙化パターン（松本 1997: 162） .....	24
図 2-4 意味類型の階層モデル（川野 2021: 56） .....	36
図 3-1 Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルの図式.....	41
図 3-2 本研究による改訂版の力動性モデルの図式.....	44
図 3-3 放射状ネットワークモデル（Lemmens 2015: 95 による作成） .....	45
図 3-4 スキーマティック・ネットワークモデル（Langacker 1991: 271） .....	47
図 3-5 円錐形の意味空間（田中 1990: 23） .....	48
図 3-6 多義語の複層的意味空間 .....	49
図 3-7 マクロ事象の概念構造（Talmy 2000b: 221） .....	50
図 3-8 各国の手話言語の法的認知 .....	55
図 4-1 「切る」の放射状ネットワークモデル（森山 2015: 152） .....	64
図 4-2 「切る」の 3 つのイメージ・スキーマ（栗田 2018: 157–159 を元に作成） ..	65
図 4-3 スキーマティック・ネットワークモデル（Langacker 1991: 271 を元に作成） .....	66
図 4-4 多義語の複層的意味空間（図 3-6 を再掲） .....	67
図 4-5 Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルの図式（図 3-1 を再掲） .....	67
図 4-6 意味パターン 1【外的統合性】の力動性図式.....	76
図 4-7 意味パターン 2【内的秩序性】の力動性図式.....	78
図 4-8 意味パターン 3【物理的抵抗性】の力動性図式.....	82
図 4-9 意味パターン 4【心理的抵抗性】の力動性図式.....	85
図 4-10 力動性モデルに基づく「切る」の多義構造.....	87
図 4-11 JNS による類似性判断の結果.....	93
図 4-12 CJL による類似性判断の結果 .....	93
図 4-13 JNS による意味素性評定の結果 .....	96
図 4-14 CJL による意味素性評定の結果 .....	96

図 4-15 母語話者と学習者によるカテゴリー化の違い.....	97
図 4-16 分断・破壊事象を表す動詞のコア図式.....	104
図 4-17 分断・破壊動詞の意味領域 .....	104
図 4-18 分断・破壊事象を表す動詞の共起語の対応分析の結果.....	109
図 4-19 分断・破壊事象における JNS と CJL による使い分け .....	115
図 4-20 「切る」の多義構造（コーパス調査・力動性モデル・心理実験に基づく）	
	119
図 5-1 所有関係の密着度（桃内 2004: 139） .....	135
図 5-2 「抜く」をはじめとする位置変化型分離動詞の力動性図式.....	136
図 5-3 「切る」をはじめとする状態変化型分離動詞の力動性図式.....	137
図 5-4 「切る」の中核的意味「分断・破壊事象」における力動性図式.....	138
図 5-5 マクロ事象の概念構造（Talmy 2000b: 221, 図 3-7 を再掲） .....	139
図 5-6 離脱型壁塗り交替事象の概念構造 .....	141
図 5-7 位置変化型分離事象の概念構造 .....	143
図 5-8 状態変化型分離事象の概念構造 .....	146
図 6-1 “V 掉”の意味拡張のプロセス（刈 2007: 138 をもとに作成） .....	166
図 6-2 Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルの図式（図 3-1 を再掲） .....	169
図 6-3 本研究による改訂版の力動性モデルの図式（図 3-2 を再掲） .....	169
図 6-4 “V 掉”の意味パターン1【状態変化型分離事象】の力動性図式 .....	176
図 6-5 “V 掉”の意味パターン1【位置変化型分離事象】の力動性図式 .....	177
図 6-6 意味パターン2【単純移動型】の力動性図式 .....	180
図 6-7 意味パターン3【消滅事象型】の力動性図式 .....	183
図 6-8 意味パターン4【完遂・極度型】の力動性図式 .....	185
図 6-9 力動性モデルに基づく“V 掉”的意味構造.....	192
図 7-1 ゲルマン語系の4言語の分断・破壊事象の語彙カテゴリー化.....	228
図 7-2 日本語母語話者の階層型クラスター分析の結果.....	247
図 7-3 日本語の分離事象の語彙カテゴリー化 .....	248
図 7-4 日本語における空間的関係という基準の捉え方 .....	249
図 7-5 中国語母語話者の階層型クラスター分析の結果 .....	252
図 7-6 中国語の分離事象の語彙カテゴリー化 .....	253

図 7-7 中国語における空間的関係という基準の捉え方 .....	254
図 7-8 中国手話母語話者の階層型クラスター分析の結果 .....	258
図 7-9 中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化 .....	259
図 7-10 参照点構造 (Langacker 1999: 174 をもとに作成) .....	268
図 7-11 中国手話母語話者の分離事象の認知プロセス .....	270
図 7-12 日本語母語話者の分離事象の認知プロセス .....	270
図 7-13 中国語母語話者の分離事象の認知プロセス .....	270
図 7-14 分離事象の類型化モデル .....	273
表 1-1 「切る」の各コロケーションの慣習化の程度と意味の概念化 .....	5
表 2-1 多義現象と交替現象の違い .....	31
表 2-2 日本語における 4 種類の壁塗り交替現象 .....	36
表 3-1 多義性をめぐる 2 つのカテゴリー観の特徴と問題点 .....	46
表 4-1 「切る」の個別義・意味とその記述 .....	70
表 4-2 各意味パターンの主要な共起名詞のタイプ・構成比 (NLB に基づく) .....	72
表 4-3 類似性判断テストのためのカードリスト .....	91
表 4-4 意味素性評定項目・指標 .....	92
表 4-5 母語話者と学習者における意味構造の相違点 .....	95
表 4-6 実験データのサイズ .....	99
表 4-7 JNS による分断・破壊事象を表す動詞の共起語高頻度リスト .....	100
表 4-8 「切る」と類義語の意味特徴 .....	102
表 4-9 JNS と CJL による分断・破壊事象を表す動詞の共起語高頻度リスト .....	108
表 4-10 JNS と CJL による分断・破壊動詞の共起語と特徴づけ .....	109
表 4-11 分断・破壊動詞の使い分け基準 .....	113
表 5-1 日本語の各分離動詞における分離元と分離物の空間的関係 (NLB に基づく) .....	131
表 5-2 2 種類の分離動詞と離脱型壁塗り交替動詞における空間的関係 .....	135
表 5-3 2 種類の分離事象と離脱型壁塗り交替動詞の事象における下位事象の関係づけ .....	147
表 5-4 2 種類の分離動詞の特徴と関連動詞類との比較 .....	158

表 6-1 複合動詞“V 掉”的 4 つの意味パターン .....	170
表 6-2 中国語の各分離動詞における分離元と分離物の空間的関係 (BCC に基づく) .....	175
表 6-3 意味パターン 1 の結合制限・傾向 (BCC に基づく) .....	188
表 6-4 意味パターン 2 の結合制限・傾向 (BCC に基づく) .....	188
表 6-5 意味パターン 3 の結合制限・傾向 (BCC に基づく) .....	189
表 6-6 意味パターン 4 の結合制限・傾向 (遠心型動詞 V1, BCC に基づく) .....	190
表 6-7 意味パターン 4 の結合制限・傾向 (消極的感情を表す V1, BCC に基づく) .....	190
表 6-8 “掉”、“下”、“落”的表す下降移動の特徴 .....	198
表 6-9 “V 掉”、“V 下”、“V 落”的前項動詞の頻度上位 20 語 (BCC に基づく) .....	199
表 6-10 “V 掉”、“V 下”、“V 落”的違い .....	203
表 6-11 日本語の各分離動詞における分離元と分離物の空間的関係 (NLB に基づく, 表 5-1 を再掲) .....	204
表 6-12 中国語の各分離動詞における分離元と分離物の空間的関係 (BCC に基づく, 表 6-2 を再掲) .....	204
表 6-13 空間関係のカテゴリー化と言語化に関する日本語と中国語の分離動詞の相違 .....	206
表 6-14 完遂・極度を表す「V 切る」、「V 抜く」、“V 掉”的前項動詞の頻度上位 20 語 .....	207
表 6-15 完遂・極度を表す「V 切る」、「V 抜く」、“V 掉”における可能な心的態度 .....	215
表 6-16 「力学的関係」と「空間的関係」の詳細 .....	217
表 6-17 上下の概念メタファーの目標領域となる概念 (山梨 2000: 169) .....	219
表 7-1 ビデオ発話実験を用いた先行研究の考察内容 .....	230
表 7-2 分離事象ビデオクリップとその特徴づけ .....	233
表 7-3 日本語のデータに基づく非類似性マトリックス (一部を抜粋して掲載) ...	238
表 7-4 分離事象ビデオクリップの最頻出動詞リスト .....	242
表 7-5 分離事象の語彙カテゴリー化の基準 .....	265
表 7-6 分離事象の語彙カテゴリー化の基準の上下関係 .....	266

# 第1章 序論

## 1.1 研究対象

主体が対象に力を加えることでモノ全体を分断・分離するという「分離事象 (Separation Events)」は日常生活の中でよく見かける出来事である。分離事象では、物理的世界における様々な種類の関係が絡み合っている。これらの関係は、人間の感覚・知覚的認知メカニズムと深く関与しているものである。

感覚的認知は、人間の身体が備える感覚器をもとに、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、皮膚感覚（触覚、温覚、痛覚を含む）という五感に分類される。分離事象において、対象の大きさや形状、分離動作の特徴は、視覚によって認知され、対象の軟/硬といったテクスチャーは、触覚によって感じ取られる。一方、知覚的認知は、生態心理学によれば、人間の感覚的認知を超えた存在である。例えば、位置や距離は、視覚を通して知覚されることもあれば、聴覚的な音の響きによって発生源が知覚されることもある（仲本 2014: 85）。分離事象における知覚的認知に関わるものとして、「空間的関係」と「力学的関係」という2つの抽象的概念が存在する。

池上（1981）の「場所理論」によれば、あらゆる言語の概念は、空間的概念・関係を基盤に形成されているとされる。「空間的関係」においては、2つの事物が存在する。そのうち、一方の事物は対象であり、事象における焦点となる。他方の事物は対象が位置する場所であり、事象における背景となる。この2つの事物、すなわち対象と場所の相対的位置を示すのが空間的関係である<sup>1</sup>。空間的関係は、<静的な場所・位置の関係>と<動的な移動関係>に分かれる。<静的な場所・位置の関係>には、「前後」、「上下」、「左右」、「内外」、「横」、「接触/非接触」などが含まれる。<動的な移動関係>は、「起点」、「経路」、「着点」によって表される。分離事象では、<静的な場所・位置の関係>と<動的な移動関係>の両方が捉えられる。<静的な場所・位置の関係>に関しては、分離事象と特に関わりが強いのは、「接触/非接触」であり、対象がどのように本来に位置する場所に接触して一体化しているのかが注目されている。<動的

<sup>1</sup> 本研究は、分離事象において、対象かつ焦点となる事物を「分離物」、場所かつ背景である事物を「分離元」と呼ぶ。「分離物」と「分離元」の詳細は、「分離事象」を定義する際に後述する。

な移動関係>に関しては、分離事象では、特に「起点」という要素が際立ち、事物の相対的位置関係の変化はどこから起こるかが注目されている。

「力学的関係」は、動力学的認知に基づく作用と反作用といった力の相互作用を示す。すなわち、「力学的関係」、特に動力学的認知に基づく力的関係には、2つの力実体が存在する<sup>2</sup>。一方の力実体は、攻撃力を行使するモノであり、他方の力実体は、抵抗力を行使するモノである。「力学的関係」を捉える言語モデルとして、Talmy (1985a, 2000a) によって提唱された力動性モデル (Force Dynamics Model) が存在する。このモデルは、攻撃力と抵抗力のバランスによる相互作用をいくつかのパターンに図式化している。また、力的関係の種類として、<物理的な力 (physical forces)>、<社会力学的な力 (sociophysical forces)>、<認識的な力 (epistemic forces)>を挙げている。分離事象においては、力的関係のパターンとして、動作主体と対象における力的関係が存在する一方、対象と、対象が接して一体化している場所の間にも力的関係があると考えられる。また、力的関係の種類に関しては、上記の3つの種類はいずれも、分離事象において捉えられるものである。対象の分離を表す<物理的な力>から、共同体の他の成員と社会的な絆の分離を表す<社会力学的な力>、事態の完遂（未完遂の局面の分離）に対する心理的な傾向性を表す<認識的な力>へと力的関係の概念範囲が広がる傾向が見られる。

また、知覚的認知に基づく「空間的関係」と「力学的関係」以外に、分離事象には、さらに感覚や知覚によって捉えられない抽象的概念として、「時間認識」、「心的態度」が存在する。身体部位を起点として、そこから物体、空間、時間、最後に抽象的な性質へといった比喩的拡張の方向 (Heine et al. 1991: 48) を考えると、「時間認識」は、「空間的関係」と比べてより抽象化されるものである。人間は、分離事象を状態変化として捉えるか、位置変化として捉えるか、それとも、両方を統合する事象として捉えるかを考えるにあたっては、2つの事象の間の時間的関係をどのように認識するかが非常に重要である。また、分離事象は、物理的な物事の変化を表すだけではなく、抽象的な行為/事態の性質の変化を表すことができる。その行為/事態に対する評価的な判断を下し、命題内容に対する好き嫌い、積極/消極といった「心的態度」を伝達している。

---

<sup>2</sup> 現実世界の事態においては、単一の力による変化が存在する。例えば、「ボールが階段から（下に）落ちる」は、重力による位置変化を表す。

以上、感覚に基づく認知的関係（視覚、触覚）、感覚を超えた知覚による認知的関係（空間的関係、力学的関係）、感覚と知覚によって捉えられない認知的関係（時間認識、心的態度）は、相互に作用しながら分離事象を構成する。このような様々な関係性を含む分離事象は、どのようにカテゴリー化、言語化、概念化されるだろうか。以下、分離事象の言語現象をめぐる3つの観点を提示する。

1つ目は、分離動詞の多義性と分離事象の意味的概念化である。以下、日本語の分離動詞「切る」の多様な意味・用法を挙げる。

- (1) a. しかし、旧約聖書の話のようにサムソンの髪の毛を切るには、赤ん坊の可愛い声以上のものが必要だった。

（ファトゥ・ディオム著；飛幡祐規訳『大西洋の海草のように』, 2005, 953）

- b. 音楽の世界とはきっぱり縁を切り、のんびり暮します。

（吉田秀和著『吉田秀和全集』, 2004, 760）

- c. 次々と副社長の首を切り、最後には会長の植田も追い落とした。

（『現代』, 2004, 一般）

- d. 一九六〇年五月の姉妹都市提携を記念して命名されたものだが、仁義を切って鹿児島側にも市のメインストリートにナポリ通りを誕生させた。

（辻原康夫著『世界地図から地名を語る本』, 2002, 290）

用例(1)では、いずれの下線部も「N+を+切る」のコロケーションにあたるが、各コロケーションの慣習化の程度と概念化の内容（多義的意味）が異なる<sup>3</sup>。「髪の毛」の分離を表す(1a)は、目的語項の置き換えが相対的に自由である「自由結合句」である。「自由結合句」は、動詞は本来の中心義、すなわち、物理的な一続きのものを分断・分離することを表す。構成要素の名詞N「髪の毛」も本来的な意味を表し、それを「肉」、「野菜」などの一塊のものに置き換えたとしても意味が変わらず、物理的な分離事象を表現する。

それに対し、(1b) – (1d)は、分離事象が比喩などの人間の主観的な認知プロセス

<sup>3</sup> 広義のコロケーションとは、慣習化していない表現を含む、語と語が作るあらゆる結合体のことである（Sinclair 1991）。Cowie (1998)によれば、コロケーションは段階的な概念であり、「単純共起」、「自由結合句」、「制限コロケーション」、「比喩的イディオム」、「真正イディオム」という5つの段階が挙げられる。

によって概念化され、抽象的な領域における豊かな言語表現が産出されていることを示す例である。これらのうち、(1b) の「縁を切る」は、一部の構成要素（動詞部）が本来の意味から変化するとともに、意味が変わらない要素に共起制限が強くなるという「制限コロケーション」である。構成要素の名詞 N 「縁」 の意味は変わらないが、動詞部「切る」の意味は物理的な分離という基本義から抽象的な分離へ概念化される。

このようなコロケーションでは、構成要素の N を自由に置き換えることはできない。線状的な性質・イメージなどを持たなければならないという制限が増えており、「自由結合句」よりも慣習化と要素間の結び付きの強度が高まる。

(1c) の「首を切る」は、慣習化の段階がさらに高くなり、全ての構成要素の意味が変わる「比喩的イディオム・慣用句」である。『ルーツでなるほど慣用句辞典』によれば、「首を切る」は、古典芸能「人形浄瑠璃」に由来するものであるという。人形浄瑠璃では、演目が変わるたびに人形の「首」がはずされ、新しい役柄の「首」に交換することで、人形を使い回す。人形浄瑠璃での意味をもとに、その後、「社員を免職・解雇する」という意味に拡張したという説明がなされている。このため、構成要素の名詞 N 「首」と動詞部「切る」は、両方とも本来の意味から変化していると考えられる。「鼻」、「胃」などの身体部位に「首」を置き換えることも可能ではあるが、そのコロケーションは本来の意味のみを表し、比喩的意味は読み取れない。すなわち、「比喩的イディオム・慣用句」では、構成要素間の結びつきが強くなり、同一の比喩的意味を保持した入れ替えはほとんど成立しない。また、構成要素の組み合わせのみでは意味を直接的に類推できず、構成要素間の比喩的関係を理解しなければ解釈が困難である。

(1d) の「仁義を切る」は、慣習化の程度が最も進んだ段階である「真正イディオム・慣用句」にあたる。もともと、「仁義を切る」は、「ばくち打ちや香具師などの間で特有の形式に則って交わす、初対面のあいさつ」を指す言葉であるが、現在は、「ビジネスなどの正式な場面で挨拶を交わすこと」を意味するため、物理的な分離事象との意味的関連性が希薄になっている。このような「真正イディオム・慣用句」は、「比喩的イディオム・慣用句」との境界線が曖昧であり、明確に区別できない場合がある。

(1d) の「仁義を切る」で言えば、構成要素の名詞 N 「仁義」と動詞部「切る」は、字義通りの意味を持っておらず、その組み合わせでコロケーション全体の意味を類推することはできない点で (1c) の「首を切る」と一致する。しかし、「真正イディオム・慣用句」と「比喩的イディオム・慣用句」を比較すると、次の 2 点の違いが捉えられ

る。

1点目は、語彙的な緊密度、つまり、構成要素間における副詞などの挿入可能性である。用例(2)のように、(2a)は名詞と動詞の間に副詞「どんどん」の挿入が可能であるのに対して、(2b)は、副詞「堂々と」などの他の要素を挿入すると非文になる。

- (2) a. しかし、契約でそうなっているからといって、契約どおり三ヵ月の予告期間で従業員の首を{どんどん}切ったら、囂々たる非難を浴びるだろう。

(堺屋太一著『日本とは何か』, 1991, 302)

- b. 仁義を{\*堂々と}切る。 (作例)

2点目は、概念化の程度、すなわち、意味理解に対する語源の重要性である。上述の「首を切る」は「人形淨瑠璃」に関する文化的語源を知らなくとも、比喩的意味と字義通りの意味における概念化のプロセスが推測できる。すなわち、人間の身体領域(首)への傷害から心理・精神領域(面子、フェイス)への侵害に意味が転用されていると理解できる。それに対して、「仁義を切る」では、語源が分からなければ比喩的関係は捉えにくく、コロケーション全体の意味は推測できない<sup>4</sup>。

以上の通り、「切る」の各コロケーションでは、慣習化の程度、構成要素の結びつきの高さ、意味の類推が可能かどうかという点で、様々な意味領域における意味の概念化が捉えられる。

表1-1 「切る」の各コロケーションの慣習化の程度と意味の概念化

慣習化の程度	コロケーション	構成要素の意味変化	要素の入れ替え可能性	語彙緊密度	意味の概念化
↓ 高	自由結合句(髪を切る)	なし	○	低	物理的分離
	制限コロケーション (縁を切る)	動詞部あり	△制限あり	低	抽象的分離
	比喩的慣用句(首を切る)	両方あり	×	低	精神的傷害
	真正慣用句(仁義を切る)	両方あり	×	高	際立つ動作

<sup>4</sup> 「切る」は、このコロケーションで「際立った動作をする」意味を表す。「しらを切る」、「啖呵を切る」、「見栄を切る」、「スタートを切る」などもこの意味として使われる。

次に、分離事象に関する 2 つ目の観点として、分離事象を表す構文と構文要素の特徴を説明する。

(1) と (2) という構文「S (N<sub>1</sub>) +が+O (N<sub>2</sub>) +を+V」では、力を被る対象 O を、通常、1 つの言語要素として見なす。しかし、分離事象は、次の (3) と (4) のように、「Z が X から/の Y を V」という構文で表現される場合が多く見られる。

- (3) a. 太郎は木の邪魔な枝を切る。/太郎は木から邪魔な枝を切る。  
b. 太郎はボトルの栓を抜く。/太郎はボトルから栓を抜く。 (作例)
- (4) a. 水となじむ乳化剤や可溶化剤がクレンジングオイルには配合されている  
から、白く濁ってオイルとお化粧を肌から落とすのさ。  
(Yahoo!知恵袋, 2005, コスメ、美容)  
b. 仕上げ剤が軟化したらただちに除去器のスイッチを切り、装飾用スクレーバーを使って木材から塗料をはがす。
- (アルバート・ジャクソン, デヴィド・デイ著『木工技術シリーズ』, 2005, 583)

(1) と (2) は、対象の使役的な状態変化事象を表すのに対し、(3) と (4) は、「カラ」格または「ノ」格によって移動の起点を表すことで、「Z (動作主) が X (分離元) から Y (分離物) を引き離す」 [Z CAUSES Y to MOVE from X] (cf. Goldberg 1995) という使役的な位置変化を表している。すなわち、(3) と (4) の表す事象において、力を被る対象は、「X (分離元)」と「Y (分離物)」という 2 つの言語要素であると捉えられる。この 2 つの要素のうち、「Y (分離物)」は焦点となる事物を指し、「X (分離元)」は背景の場所となる事物を指す。また、(3) と (4) は単一の状態変化事象、もしくは位置変化事象を表しているのではなく、「分離元の状態変化」と「分離物の位置変化」という 2 つの下位事象を統合した複合的な事象を表している。

従来の先行研究では、分離事象（またはそれと類似している事象）を定義する際に、単なる状態変化事象として捉える場合が多く見られる。例えば、Majid et al. (2008)、洪 (2020) は、「切る」に関連する事象を以下のように定義している。

- (5) Everyday events involving a “separation in the material integrity of an object”.

(Majid et al. 2008: 235-250)

- (6) 人が物に力を加えて、一続きの物を分断させる事象 (洪 2020: 64)

本研究は、状態変化と位置変化を統合した「分離事象」を主要な研究対象とする<sup>5</sup>。

(1) (2) と (3) (4) の事象を区別して捉えるために、先行研究と異なる定義を採用し、「分離事象 (separation events)」を以下のように定義する。

- (7) 分離事象とは、動作主体が、対象に力を加えることで、対象の一部を分離させる事象である。この事象には以下の 3 つの特徴がある。

- i. 分離事象には、動作主、分離元、分離物という 3 つのパラメータが存在する。形式的に「Z (動作主) が X (分離元) から/の Y (分離物) を V (分離動詞)」として記述することができる。
- ii. 分離事象は、状態変化と位置変化を統合した複合事象であり、2 つの下位事象を持つ。1 つは分離元の状態変化であり、もう 1 つは分離物の位置変化である。意味的に、Z の使役動作によって、X の状態変化と Y の位置変化が生じると記述できる。
- iii. 分離事象における 3 つのパラメータには、互いに異なる力的関係のパターンが関与する ( $X \Rightarrow Y$ 、 $Z \Rightarrow X$ 、 $Z \Rightarrow Y$ )。

先行研究で提起された (5)、(6) のような定義に当たる事象を、本研究では位置変化が伴わない状態変化事象、いわゆる「分断・破壊事象<sup>6</sup> (cutting and breaking events)」として扱う。なお、分断・破壊事象を表す動詞では、「切る」を含む一部の動詞が分離事象を表すこともできる。「分断・破壊事象」は、「分離事象」と類似している隣接事象であると考えられる。本研究では、「分離事象」を中心に考察するとともに、「分離事象」と「分断・破壊事象」との関連性の分析を通して、「分離事象」の位置付けを明らかにする。以下、分断・破壊事象を (8) のように定義する。

<sup>5</sup> 第 4 章では、「切る」の多義構造を解明するにあたり、「切る」の中核的スキーマである分断・破壊事象を中心に検討する。それ以外の章は、分離事象を中心に検討する。

<sup>6</sup> 洪 (2020) では、「切る・割る」事象と呼ばれている。

- (8) 分断・破壊事象とは、動作主体が、一続きのものである対象に力を加えることで、それを分断する事象である。この事象には以下の 3 つの特徴がある。
- i. 分断・破壊事象には、動作主、被動作主（一続きのもの）という 2 つのパラメータが存在する。形式的に「S（動作主体）が O（対象・一続きのもの）を V（分断・破壊動詞）」として記述することができる。
  - ii. 分断・破壊事象は、状態変化事象の一種である。意味的に、S の使役動作によって、O が一続きのものとしての性質を喪失するという状態変化が生じる。
  - iii. 分断・破壊事象における 2 つのパラメータには、対抗した力的関係が成立する ( $S \neq O$ )。

本研究が目指すのは、個別言語としての日本語の研究のみで完結することではなく、世界の諸言語を対象とした言語類型論の観点を組み合わせることで、日本語の言語現象の本質について、日本語という言語の内外から明らかにすることである。

次に、3 つ目の観点として、分断・破壊事象と分離事象に関する類型的相違を述べる。

従来の研究では、日本語、英語、中国語、韓国語などを対象として「分断・破壊事象」を比較したものが見られる。異言語の話者は分断・破壊事象に関する認識の仕組みが異なる一方、言語間の差異を超えた共通の認識的な要素を持っている可能性があると指摘されてきた (Fujii et al. 2013: 137, Majid et al. 2008: 237, 洪 2020: 63 など)。特に、Majid et al. (2008) による 28 言語を対象とした実験の結果、実験対象の言語すべてにおいて、「裁断面の予測可能性の高さ (the predictability of the locus of separation)」がどの程度であるかというカテゴリー化の基準に応じて、cut 系事象と break 系事象の 2 種類の事象に分類されるという共通点が明らかになった。本研究では、「分離事象」における通言語的な事象カテゴリー化の基準はどのようなものであるかについて考察する。特に、類型論的な相違が大きな言語の間で、各言語の分離事象が持つ個別性と共通性はどのように捉えられるだろうか。比較対象の言語を決定するに際し、動詞の語彙化のパターンに着目する Talmy (1985b) による「語彙化類型論 (typology of lexicalization)」の観点を採用する。

Talmy (1985b) は、どの要素が動詞に語彙化されるかという「語彙化類型論」の観点から世界の諸言語の移動表現を比較した。これによって、①経路が動詞に語彙化さ

れるもの（日本語、スペイン語など）、②様態が動詞に語彙化されるもの（英語、中国語）、③焦点（移動物）が動詞に語彙化されるもの（アツゲウィ語、手話言語など）という3つのパターンがあると提案した。日本語では、パターン①が典型的に見られるが、中国語、中国手話には、それぞれパターン②とパターン③が顕著に存在する。以下の(9)を参照されたい（下線部は動詞の位置を示す）。

- (9) a. 柿の/実を/取った (日本語)  
背景 焦点 経路
- b. 从树上/摘/下/柿子 (中国語)  
背景 様態 経路 焦点
- c. 柿子树/摘柿子/下 (中国手話)  
背景 様態+焦点 経路

本研究は、以降、日本語、中国語、中国手話という類型論的な相違の大きい3言語に渡る理論的分析を行う。また、理論的な分析という側面からの追究だけではなく、語彙化類型論の観点と数量的な手法を統合したアプローチから、日本語と他の言語との比較・対照を行う。これを通して、分離動詞の意味・機能と分離事象の特徴・性格を解明し、その全体像を描く。

## 1.2 研究目的と課題

本研究は、理論と実証の両面を重要視する「実験認知言語学研究」の観点から、分離動詞の意味・機能と分離事象の類型を考察し、日本語と他の言語の相違点と共通点を明らかにすることを目的とする。

認知言語学とは、認知能力との関わりから言語を探究し、人間の「言語・心・知」について明らかにすることを目標とする言語学・認知科学の一分野である。「認知の営みがいかにして言語を作り上げているか」、あるいは逆に「いかに言語が認知のあり方を特徴付けているか」というような観点から、言語と認知、ひいては言語文化の普遍性と多様性に関する包括的な説明を試みる（辻 2013: 272）。

認知言語学の初期の研究では、研究者の内省判断に基づく研究が長年主流であった

が、データ分析の客観性などの点でしばしば問題が指摘されてきた。これらの問題を解決するために、理論言語学の研究に数量的手法と実験的手法を取り入れることを提倡する実験認知言語学という流派が登場してきた(Gries 2006, Divjak and Gries 2006, Gibbs 2007, 松本 2020, 篠原・宇野 2021 など)。特に、2000 年代以降、国際的な研究の場において、「量的転回 (quantitative turn)」と呼ばれる統計的手法や実験的手法を積極的に用いる数量的研究の重要性が認識され始めている。また、認知言語学研究は、学問的射程が大きいことが特徴となっている。本章の 1.1 節で述べた分離事象の意味の概念化、分離事象を表す構文の形式と意味、日本語と他の言語の間の類似と相違という観点はそれぞれ、認知言語学の学問における意味論、構文論、類型論という 3 つの研究分野に関わる課題である。この 3 つの分野における主要な学問的関心は、以下の通りである。

(10) 【認知意味論 (cognitive semantics)】

人間が外的世界との相互作用を通じて対象を概念化するときの心的プロセスを研究する領域である。認知言語学における「意味」研究は概念化研究とほぼ同義と見なしてよい。このときの概念化には、五感や感情、運動感情から、物理的・社会的環境の認識、文脈理解や対人関係の捉え方まで、人間が経験しうるあらゆる心的経験が含まれる。心的経験は、神経学的には、組織的なニューロン発火にかかわる「前=記号的」表象のプロセスであるが、それらが何らかの仕方で分節化され、カテゴリー化され、スキーマ化される段階に至ると、記号系としての情報に転嫁されるものと考えられる。

(吉村 2013a: 264-265)

(11) 【構文文法 (construction grammar)】

認知文法の枠組みから捉えられた新しい構文観に基づく文法を指す。その特色を以下に挙げる。第 1 に、構文にはそれ自体に意味があり（構文的意味）、それは経験的基盤を持つゲシュタルトとしての場面に直接結びつくこと。第 2 に、構文は、辞書の語のように、個々に息立させて記述・記録するだけのリストではなく、相互に関連し合う情報が高度に構造化されたカテゴリーであること。第 3 に、こうした高度な構造化は、典型とその構文的拡張からなるプロトタイプ構造をなしており、構文同士がネットワーク的な連携を形成し

ていること。第4に、動詞の語彙的特性が構文的意味の全てを決定するとはみなさないこと。

(吉村 2013b: 116-117)

(12) 【認知類型論 (cognitive typology)】

認知言語学と言語類型論の融合的研究分野である。類型論的に異なる文法的特徴を有する言語間の構造的相違点・類似点を、その背後にある、当該言語間の社会・文化的側面を含めた広義の認知様式（認知スタイル）の相違・類似と相関させて解明しようとする学問分野。個別言語の文法・語彙構造には、人間言語としての共通性と、その言語の持っている「個(別)性」の両面があるが、認知類型論は、認知・機能言語学と言語類型論の分析手法を複合させて、個別言語の文法・語彙構造を持つ「個性」の解明を目指す学問分野である。

(堀江 2013: 285-286)

本研究は、上記の3つの分野の視点を統合することで、分離動詞と分離事象の全体像を総合的に明らかにしていく。具体的には、次の3つの課題に取り組む。

(13) 本研究で取り組む課題と、各課題が取り扱われる章

課題1: 「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」

認知意味論の観点から、分離動詞の意味・機能とそれに関する意味構造はどのように捉えられるか。 (第4章、第6章)

課題2: 「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」

認知意味論・構文論の観点から、分離動詞・分離事象の特徴・性格、意味体系はどのように捉えられるか。また、分離事象はどのように位置づけられるか。

(第5章、第6章)

課題3: 「分離動詞と分離事象の類型の提案」

認知類型論の観点から、分離動詞と分離事象の類型的特徴、各言語の類型的特徴はどのように捉えられるか。 (第7章)

課題1の「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」に関して、本研究は、認知意味論の観点から、特に分離動詞の多義性に注目する。分離動詞の意味・機能がど

のような方向へ拡張しているか、概念化のプロセスはどのような特徴を持つか、そして多義性の認知メカニズムにおいてはどのような認知的要因/関係性が際立つかといった問題を検討する。課題2の「分離動詞と分離事象の意味体系と位置付け」に関して、本研究は、分離動詞と関連動詞類との比較を行う。分離事象を表す構文の形式と意味の対応関係に注目し、状態変化構文と位置変化構文との関連性を分析した上で、分離事象構文の位置付けを明確にする。これを通して、分離動詞と分離事象の内部と外部を含む全体の意味体系を解明する。課題3の「分離動詞と分離事象の類型の提案」に関して、本研究は、分離事象が文中でどのように表されるかについて、分離事象の語彙カテゴリー化という問題を中心に検討する<sup>7</sup>。他の言語との比較・対照を通して、言語間の個別性と共通性を探求する一方、日本語の分離事象の特性をより一層解明できると考える。

次節では、各章の内容を詳細に説明した上で、本研究のリサーチデザインと構成を論じる。

### 1.3 リサーチデザインと構成

本研究は、本章を含めて合計8章から構成される。

まず、第1章から第3章は第一部の【序論】である。第1章は、研究全体の構想と内容を紹介する章として、研究対象の定義と範囲、研究目的と問題提起、そして研究意義について述べる。

第2章は、先行研究を概観する章として、認知意味論・構文論の観点から、分離動詞と分離事象に関わる言語現象について、従来の研究ではどのように論じられてきたかを確認し、先行研究の問題点とそれに関わる課題を指摘する。2.1節は、日本語の分離動詞に関する個別研究と対照研究の概観を通して、分離動詞と分離事象の定義と位置付けを確認し、先行研究によって明らかにされていた分離動詞の特徴と性質を抽出する。これによって、残された課題と分析の焦点を明確にする。2.2節は、分離事象構文、そして多義性現象と一見類似した特徴をもつ離脱型壁塗り交替現象を参照しつつ、多義性現象と交替現象の違い、格体制の交替を起こす動詞の条件と原理（交替動詞と

---

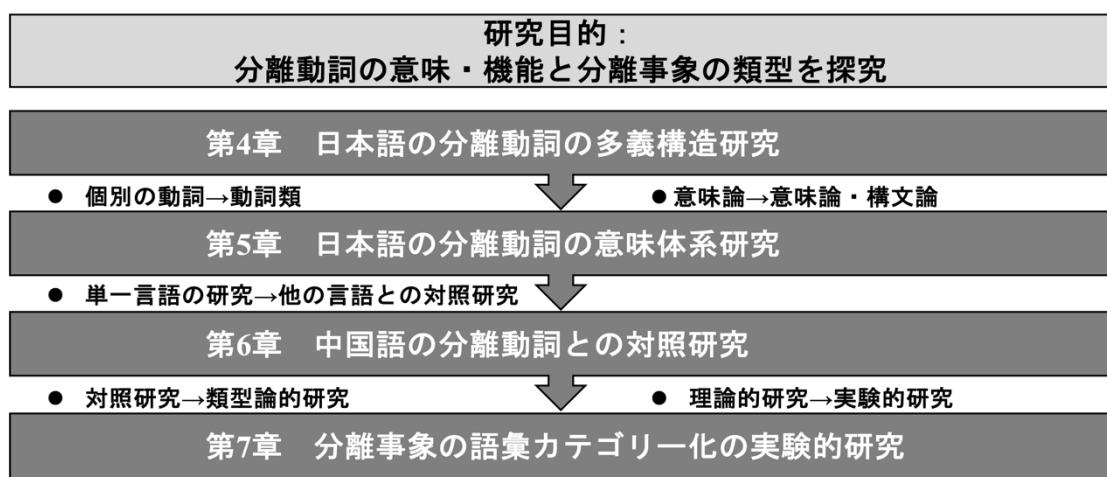
<sup>7</sup> 分離事象が文中でどのように表現されるかに関して、主に事象の語彙カテゴリー化と言語化といった2つの考察の観点がある。本研究では、分離事象の語彙カテゴリー化に関する考察のみを第7章で行う。各言語における分離事象の言語化に関する考察を、今後の課題とする。

非交替動詞の違い)、状態変化事象と位置変化事象の下位類型、特に、川野(2021)による意味類型の階層モデルを紹介する。その上で、分離事象構文に関する本研究の立場を示す。最後の2.3節は、第2章の総括として、先行研究の問題点と本研究の立場について述べた上で、分離事象の性質を統一・全面的に説明できるように、新しい理論的枠組みを採用する必要性を示す。

第3章は、理論的背景を説明する章である。本研究が用いる主要な理論的枠組みであるTalmy(1985a, 2000a)の「力動性モデル(force-dynamics model)」、田中(1990)による多義語の複層的意味空間、Talmy(2000b)の「マクロ・イベント(macro-event)」、そして手話言語学の理論的知見、特に手話言語の特有のCL表現について、3.1節から3.4節という4つの節に分けて紹介し、これらの理論的枠組みを採用した理由を述べる。最後に、3.5節で第3章の内容をまとめ、本研究の立場を明確にする。

続いて、第4章から第7章は第二部の【本論】となる。図1-1の研究概念図にある通り、第4章から第7章は、それぞれ「日本語の分離動詞の多義構造研究」(4章)、「日本語の分離動詞の意味体系研究」(5章)、「中国語の分離動詞との対照研究」(6章)、「分離事象の語彙カテゴリー化の実験的研究」(7章)という4つの個別の研究テーマに対応している。

図1-1 研究概念図



本研究は、主に3つの観点から、上記の4つの研究テーマを関連づけつつ展開する。1つ目は、個別の動詞→動詞類→事象という「研究対象の拡大」である。2つ目は、意味論→構文論→類型論という「研究視点の展開」である。そして3つ目は、理論→実

験という「研究手法の展開」である。また、1つの研究対象を考察する際に、その研究対象の分析のみに終始するのではなく、その対象と隣接する事柄との関係性を念頭に、対象に関する全面的な考察を求める。これらを踏まえ、多角的な対象・視点・手法を統合した形で研究を進める。

以下では、各章の研究内容と章の間の関係性についての詳細を提示する。

第4章は、本研究が用いる理論的枠組み「力動性モデル」を分離動詞に応用する合理性と有効性を検証し、日本語の分離動詞の1つである「切る」の意味構造分析を行う章である。4.1節では、「切る」を考察対象とする理由を説明する。現代日本語における数多くの多義動詞の中でも、「切る」は複数の意味用法を持っており、典型的な多義動詞として認められる。その一方、分離動詞の中で、「切る」は、特殊性を備えた分離動詞でもあり、対象に力を加えることでモノ全体の部分を切り取る、または切り捨てるといった状態変化と位置変化を統合する「分離事象（separation events）」を表すことができるので加え、位置変化を伴わない単純な状態変化事象、いわゆる「分断・破壊事象（cutting and breaking events）」を表すこともできる。そして、4.2節では、認知言語学における主要な2つのカテゴリー観とそれに基づく「切る」の意味構造分析の先行研究を紹介する。その上で、本研究の立場と意味構造の捉え方を述べる。4.3節は具体的な考察に進み、認知意味論の観点から、力動性モデルに基づき「切る」の意味・機能に関する分析を行い、「切る」の意味構造を解明する。そして、4.4節は、類似性判断テストと意味素性評定テストを用いて認知理論に基づく意味分析の結果を検証し、意味構造を検証・修正する。また、日本語母語話者と中国人日本語学習者における意味カテゴリー化の相違を示す。なお、多義語の意味のカテゴリー化を分析するためには、その語の内部構造を明らかにするとともに、語彙間の構造、すなわちカテゴリーの周囲にある類義語との意味の関連性も考察する必要がある。このため、4.5節は、「切る」と類義関係にある「割る」、「裂く」との関係性について検討し、日本語母語話者と中国人日本語学習者による動詞の使用状況を比較し、使い分け基準を推測する。最後に、4.6節は第4章の総括として、日本語における分離動詞「切る」の意味構造と位置付けを明確にする。

第5章は、「切る」のような状態変化が主事象となる分離動詞とは異なるタイプとして、「抜く」のような位置変化が主事象となる分離動詞が存在することを指摘し、現代日本語には2種類の分離動詞が存在するという仮説を提案・論述する。第5章は、以

以下の 2 つの側面で、第 4 章をもとにさらに考察の幅を広げた章となっている。1 つ目は、個別の動詞の多義構造研究から、分離動詞という動詞類の全体に関する研究に展開している点である。2 つ目は、意味論だけではなく、構文論の観点も考察に加えているという点である。これにより、動詞類とそれが表す事象の構文的特徴を明確にしている。具体的には、5.1 節では、5 章の考察対象に関わる言語表現の意味と形式を述べる。5.2 節は、壁塗り交替現象とそれに基づく本研究の仮説を示す。5.3 節は、調査方法、データの収集について述べた上で、分離事象における分離元と分離物の空間的関係を、収集したデータに基づき考察し、力動性モデルで 2 種類の分離動詞の間の一体性の違いを示す。5.4 節は、分離事象における 2 種類の変化事象の関係付けを時間的関係付けと論理的関係付けという 2 つの側面から分析し、Talmy のマクロ事象の概念構造を踏まえ、分離事象という複合事象の概念構造を提案する。5.5 節は、単一経路制約の観点から、分離事象構文（特に状態変化型分離動詞が参与する分離事象構文）の成立条件と原理を解明する。5.6 節は、2 種類の分離動詞の特徴と、「離脱型壁塗り交替動詞」、「破壊動詞（使役変化動詞）」という関連動詞類との比較の結果をまとめ、日本語における分離動詞の意味体系の全体像を記述する。

以上の第 4 章と第 5 章は、1 つの分離動詞の意味構造という個別の研究テーマから、日本語の分離動詞全体の特徴へと掘り下げる。しかし、影山（2021: 2）では、＜深く狭く＞という「縦方向」の考察だけでは、1 つの言語現象が他の現象とどのように関係するのか、また、それらを関連づける大元の原理が何なのかといった横つながりの関係が見えてこないことが指摘されている。このため、第 4 章から第 5 章の研究結果を踏まえ、続く第 6 章から第 7 章は、＜広く深く＞という「横方向」の考察を視野に、日本語だけではなく、日本語を世界の諸言語の中に位置付け、他の言語と対照することで日本語の特性を総合的に明らかにする。

第 6 章は、中国語の分離動詞 “V 掉 (diao, 落ちる)” の意味構造を考察した上で、“V 掉” と日本語の分離動詞の比較・対照研究を行う章である。第 4 章と第 5 章は、日本語の分離動詞を対象としているのに対し、第 6 章は、日本語を他の言語と比べることで、さらに分離動詞と分離事象の全体の性質を明らかにする。具体的には、6.1 節では、分離動詞 “V 掉” を研究対象とする理由を述べる。6.2 節は、通時と共時の 2 つの視点から見た本動詞 “掉” と “V 掉” の意味拡張に関する先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。6.3 節は、日本語の分離動詞の分析に用いた力動性モデルを、中国

語の分離動詞にも適用できるかを検討した上で、力動性モデルで“V 掉”の意味分析を行い、その意味構造を解明する。6.4 節は、中国語における複合動詞“V 下 (xia, 降りる/下がる)”, “V 落 (luo, 落ちる)”と“V 掉”との比較を行う。“V 下”, “V 落”は、本動詞として使用される際には下降移動義を表す動詞であるが、このような“V 掉”と類義関係にある動詞の意味の文法化や、結合制限における相違点を説明する。そして、6.5 節は、日本語の分離動詞との比較を行う。中国語と日本語の分離動詞はいずれも、分離事象を表す実質的意味から、事態の完遂・状態が極度であることを表すアスペクト的意味と心的態度を伝達する機能に拡張する傾向がある。これを踏まえ、「力学的関係」と「空間的関係」の比較を通して、「力学動詞」という新たな動詞クラスを提案し、「力学的関係」が分離動詞の中核的な関係性であることを示す。最後に、6.6 節では、第 6 章の内容をまとめる。

第 7 章は、分離動詞が表す事象を、それぞれの言語の母語話者によってどのように認識してカテゴリー化するのかを考察する章である。この章も前の章をもとに研究を発展させた内容となっており、具体的には、第 4 章から第 6 章と比較すると、以下の 2 つの点で特徴的である。1 つ目は、研究視点に関するものである。第 6 章の日本語と中国語の対照研究をもとに、第 7 章では、言語類型論の観点から、日本語と、中国語、視覚言語である中国手話を比べることで、人間言語の多様性（個別性）と共通性・法則性（普遍性）を明らかにすることを試みる。2 つ目は、研究手法に関するものである。第 4 章から第 6 章は、理論的研究であるのに対し、第 7 章では、理論的成果を基盤として、統一した実験的枠組みで、多言語の分離動詞・分離事象の特徴と類型を探求する。理論的成果を検証すると同時に、実験的手法による新たな考察を提示する。具体的には、第 7 章は分離事象の語彙カテゴリー化について考察している。7.1 節は、Talmy (1985b) の語彙化類型論から見た日本語、中国語、中国手話の特徴と、分離事象がこれらの言語においてどのように表現されるかということを説明する。7.2 節は、理論上の課題と方法論上の課題を分けて、先行研究を概観し、ビデオ発話実験を採用した理由を述べる。7.3 節は実験題材、実験対象者、実験方法を含めた研究方法を述べる。7.4 節は分析の観点と分析の手続きを含めた分析方法を述べる。そして、7.5 節は実験結果について論じる。実験から得られた最頻出動詞リストに基づき、3 言語における分離動詞の語彙レパートリーを提示する。それに加え、階層型クラスター分析によって分離事象の語彙カテゴリー化の特徴について考察し、3 言語における語彙カテゴリー化

の基準と認知プロセスの相違を示す。これによって、3言語の個別性と共通性を分析し、その背後にある認知的要素、すなわち、各言語の話者の共同体において共有されている認知的メカニズムを明らかにする。7.6節は、第7章の内容をまとめ、分離事象の類型的特徴と性質、および事象の類型化から見た3つの言語の特徴を総括する。

最後の第8章は第三部の【結論】に当たる。第8章は、研究全体のまとめと総括を行う。本研究の知見、本研究が示唆する内容を提示し、研究の独自性と研究の意義を示した上で、今後の課題を述べる。

## 第2章 分離動詞の意味論・構文論に関する先行研究

### 2.1 分離動詞に関する個別研究と対照研究の概観

本章は、先行研究において具体的にどのように分離動詞を定義して分析しているかを説明した上で、本研究が注目している分離動詞、分離事象の言語現象に関する研究を概観する。それらを踏まえ、序論で提示した課題に合わせて、先行研究の問題点を総合的に指摘し、本研究の立場を述べる。

まず、本節では、以下、分離動詞を対象とする個別研究と対照研究を概観する。

#### 2.1.1 日本語の分離動詞に関する個別研究

日本語の分離動詞、分離事象に関する最も基本的な典型概念を表す動詞として、「分ける」という動詞が挙げられる。以下の用例を参照されたい。

- (1) a. 握り飯を分ける。  
b. 野村さんと握り飯を分けあって食べる。 (木村 2002: 24)
- (2) a. ちゃんと温かい物と、冷たい物を分けてくれてるんですね。  
(Yahoo!知恵袋, 2005, 法律、消費者問題)  
b. 油水分離浄化槽、(水と油を分け、水のみ排水させる為の物) 解体する場所をコンクリートの地盤にして分解する際に出る廃液が地面に浸透しないようにする。 (Yahoo!知恵袋, 2005, 就職、転職)

「分ける」は、(1a) の「X を分ける」という 1 つの対象に対する分割の意味を表す。特に、(1b) のように、相互動詞「～あう」との結合により、同一の対象に向かって両者の働きかけによる対称的分割を表すことができる。その一方、(2) のように、「X と /から Y を分ける」という用法も見られる。(2) は、対称的分割ではなく、全体 (X) から一部のもの (Y) を移動するという位置変化の意味を表す。すなわち、「分ける」の表す事象には、2 つの事象概念が捉えられる。この 2 つの事象概念は、「分ける」の異なる意味として扱われるべきだと考えられる。前者の用例 (1) は、本研究の序論の言う「分断・破壊事象」に当たるのに対し、後者の用例 (2) は、「分離事象」に類似す

ると考えられる。

しかし、従来の先行研究では、「分ける」などの分離動詞を考察している際に、「分断・破壊事象」と「分離事象」の違いを指摘せず、基本的に両者を同様なものとして捉えている。例えば、Fujii et al. (2013) は、「壊す」、「折る」、「割る」、「切る」、「ちぎる」、「もぐ」などを取り上げ、日本語の各分離動詞 (verbs of separation) のフレーム要素 (frame parameter) を分析し、以下の用例を挙げている。

(3) a. 私はクッキーを壊してしまいました。

b. プラスチック板を折った。

(4) a. 柿の実をもいた。

b. パンを一口ちぎった。

(Fujii et al. 2013: 141-146)

Fujii et al. (2013) の分析によれば、(3) の用例では、「機能の喪失 (loss of functionality)」と「力の作用による形状的変化/破壊 (forceful bending and breakage)」というフレーム要素が抽出される。それに対し、(4) の用例は、動作主の意図性 (human intentionality and agentivity) による結果変化というフレームを共有している。しかし、(3) は、単に対象「クッキー」、「プラスチック板」の形状的変化を表す。(4) は、物全体「柿」、「パン」の形状的変化を表すだけではなく、対象「柿の実」、「パンの一部（食べやすい分量）」の位置変化も含意されている。すなわち、(3) と (4) は結果変化の類型に関して異なる事象を表現し、それぞれ位置変化を伴わない「分断・破壊事象」、位置変化を伴う「分離事象」に当たる。また、Fujii et al. (2013) で取り上げられた動詞には、「壊す」、「割る」という「分断・破壊事象」のみを表す動詞があり、「もぐ」のような「分離事象」のみを表す動詞もある。さらに、「切る」、「折る」、「ちぎる」のような両方の事象を表すことができる動詞も存在する。しかし、Fujii et al. (2013) では、これらの動詞の表す結果変化の違いが指摘されず、同一の事象として扱われている。

また、Fujii et al. (2013) のような理論的分析に基づく研究だけではなく、後に述べる実験的手法を用いた研究である洪 (2020) では、分断・破壊事象の語彙カテゴリー化を考察するための実験的題材には、「バナナの皮を剥く」、「顎髏を剃る」のような分離事象の場面が混在している。その結果、言語話者によって、分離事象を表す場面は、分断・破壊事象を表す場面と区別し認識されている傾向が捉えられる。

一方、分離事象と分断・破壊事象の違いを認めており、日本語の分離事象を表す動詞を考察する研究では、Benom (2012)、李 (2016, 2019a) などがある。

Benom (2012) は、分離元と分離物の特徴、動作主の意志性、分離動作の様態という観点から、分離事象を表す多義的な自動詞「ぬける」、「とれる」、「はずれる」を比較しながら分析し、それぞれの核となる意味的特徴を (5) のように記述している。

- (5) Nukeru: to exit from an IN relationship, broadly construed, involving tight fit.  
(ぬける：きつく密着した関係を含む内包 (IN) の関係から脱すること)  
Toreru: to separate by overcoming resistance (Force Dynamics).  
(とれる：抵抗 (力動性) に打ち勝って分かれること)  
Hazureru: to separate by “unlocking”.  
(はずれる：「解錠すること」によって分かれること)

(Benom 2012: 124)

(5) が示すように、「ぬける」の意味的特徴は、IN という空間的関係によって捉えられるのに対し、「とれる」の意味的特徴は、力動性に基づく力学的関係によって捉えられる。また、「はずれる」の意味構造には、どのような関係性が含意されるかは明確ではない。すなわち、Benom (2012) は、単に用例を用いて各分離動詞の特徴をそれぞれ抽出している。統一の理論的枠組みを用いて、これらの類義関係にある動詞を分析しているのではない。この 3 つの分離動詞を、(5) の特徴によって明確に区別することができないと考えられる。また、Benom (2012) は、個別の動詞の意味的特徴の分析にとどまっており、これらの動詞が、分離動詞全体の意味体系において、どのように位置付けられるかに関する考察には至っていない。

李 (2016, 2019a) は、Benom (2012) と同様に、自動詞の分離動詞を考察対象として取り上げている。しかし、個別の動詞の意味的特徴から、分離動詞という動詞類の意味体系へと考察の範囲を広げている。

李 (2016) は、「とれる」、「おちる」の意味・用法に関する比較を通して、分離動詞と移動動詞の違いを考察した。

- (6) 二階のボールが {一階に} おちた。

- (7) a. シャツのボタンが {\*いすに} とれた。  
 b. 服の汚れが {\*地面に} おちた。 (李 2016: 79-80)

(6) は対象「ボール」の位置変化を表し、「ニ」格と共にできるのに対し、(7) は「ボタン」、「汚れ」が元の位置から移動するという位置変化を表すほかに、ノ格で表示された名詞「服」の状態変化を含意し、「ニ」格と共にできない。これによって、「おちる」は移動動詞の用法と分離動詞の用法という 2 つの用法を持つのに対し、「とれる」は、分離動詞の用法のみを持つことが分かる。

さらに、李 (2019a) は、意味の面と構文の面で分離動詞の内部体系を考察した。意味の面に関して、分離動詞の表す事象には、事象 I 「A が B から位置変化する」と事象 II 「A がなくなることで B が状態変化する」という 2 つの下位事象が含まれる。構文の面に関して、「とれる」、「はずれる」、「はげる」、「むける」は、(8) のように、「B の A が V」という構文をとることができると共通していると指摘した。

- (8) a. シャツのボタンがとれた。  
 b. 車のタイヤがはずれた。  
 c. ベンチのベンキがはげた。  
 d. みかんの皮がむけた。 (李 2019a: 64)

一方、これらの分離動詞は、「カラ」格や結果補語と共にできるかどうかという点で違いが見られる。

- (9) a. ボタンが服からとれた。  
 b. タイヤが車からはずれた。  
 c. \*ベンキがベンチからはげた。  
 d. 痢蓋が背中からむけた。  
 (10) a. \*爪が赤くとれた。  
 b. \*靴の底が薄くはずれた。  
 c. 壁紙がまだらにはげた。  
 d. みかんの皮が汚くむけた。 (李 2019a: 64)

(9) と (10) が示す各動詞の構文的特徴を踏まえ、李 (2019a) は、「とれる」、「はざれる」のように、「カラ」格と共にできるが、結果補語と共にできない分離動詞を「位置変化が焦点化された類」として位置付けている。また、「位置変化焦点化類」の分離動詞は、部分の動きを表すと主張した。それに対し、「はげる」のように、結果補語と共にできるが、「カラ」格と共にできない分離動詞を「状態変化が焦点化された類」として捉え、「状態変化焦点化類」の分離動詞は、全体の状態変化を表すと主張した。さらに、この 2 つのタイプの間に、「むける」のように、結果補語と「カラ」格の両方をとることができるものの中間的なものが存在すると指摘した。

しかし、李 (2019a) が提示した分離動詞の意味体系は、自動詞のみに適用することが可能である。「取る」、「外す」、「剥がす」、「剥く」、「抜く」などの分離事象を表す他動詞は、カラ格と結果補語の両方とも共起できるため、自動詞の構文的特徴をそのまま対応する他動詞に適用するのは、妥当性に欠ける。分離動詞と分離事象の全体像を明らかにするため、分離事象を表す他動詞は、どのような意味体系を持つか、分離事象全体はどのような特徴と性質を持つか、また移動事象や状態変化事象とはどのような関係性を持つのかという点について、さらなる検討が必要である。

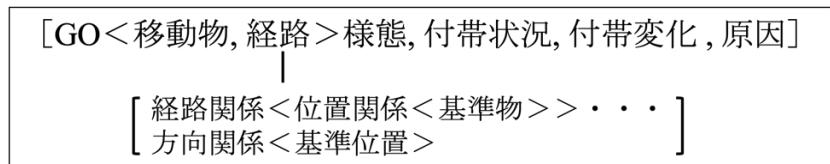
以上の通り、日本語の分離動詞に関する先行研究では、自動詞を対象とする研究が比較的多く見られる。また、これらの研究は、日本語の分離動詞の特徴、分離動詞と移動動詞の違いを部分的に明らかにしてきたものであると言える。しかし、分離動詞と状態変化動詞との違いが言及されていない。また、分離動詞と分離事象に関する定義が明確ではないこと、分離動詞の全体像が解明されていないことという問題点が残る。次節では、日本語と他の言語の分離動詞に関する対照研究を概観する。

### 2.1.2 日本語と他の言語の分離動詞に関する対照研究

分離動詞に関する対照研究を概観するにあたって、本節では、日本語と英語を対象とする松本 (1997)、日本語と中国語を対象とする李 (2019b) を説明する。

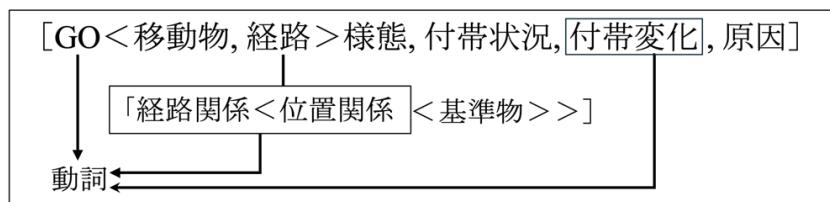
松本 (1997) は、移動事象を構成する要素を検討した際に、図 2-1 のような移動事象における語彙化パターンを提案した。

図 2-1 移動の語彙化パターン（松本 1997: 129）



この語彙化パターンでは、GO は移動の事実を表し、移動物と経路の 2 つの必須要素を含む。そのほかに、様態、付帯状況、付帯変化、原因は、移動の付帯的な要素として存在する。これらの付帯的な要素のうち、松本（1997）は、付帯変化の包入の場合を考察し、付帯変化を含む自律移動の語彙化パターンを図 2-2 のように示した。

図 2-2 付帯変化の包入の自律移動の語彙化パターン（松本 1997: 139）



この語彙化パターンでは、付帯変化が移動の事実と同様に、動詞に語彙化される。英語では、自律移動の語彙化パターンに当たる動詞には、drain（水が引く）、separate（分かれる）のような動詞が挙げられる。

- (11) a. The marshes have been drained.

「湿地が水を抜かれた。」 (OED)

- b. South America separated from Africa 200 million years ago.

「南アメリカは 2 億年前にアフリカから分離した。」 (OED)

- c. After drying, the paint has separated from the wall.

「乾燥後、ペンキは壁から剥がれた。」 (作例)

(11) のように、これらの動詞は、いずれも「移動+状態変化」という使役的な変化を表す他動詞が自動詞化したものである。自動詞の用例があまり見られないことが指摘

されている。それに対し、日本語では、付帯変化を含む移動を表す自動詞が多く見られる。「ちぎれる」、「はがれる」、「抜ける」、「脱げる」、「もげる」という動詞が挙げられる。以下の用例を参照されたい。

- (12) a. 風船の空気が抜けた。 (作例)  
 b. その釘は、その釘抜きでは板から抜けなかつた。 (松本 1997: 144)

日本語では、付帯変化の移動を表す自動詞は、(12a) のように、動作主が存在しない自律移動を表すことができる一方、(12b) のように、特定の動作主の外力によらなければ起こり得ない使役移動を表すこともできる点で、英語の分離動詞と異なる振る舞いが見られる。

一方、松本 (1997) は自律移動の語彙化パターンと区別し、付帯変化を含む使役移動の語彙化パターンを図 2-3 のように示した。

図 2-3 付帯変化の包入の使役移動の語彙化パターン (松本 1997: 162)

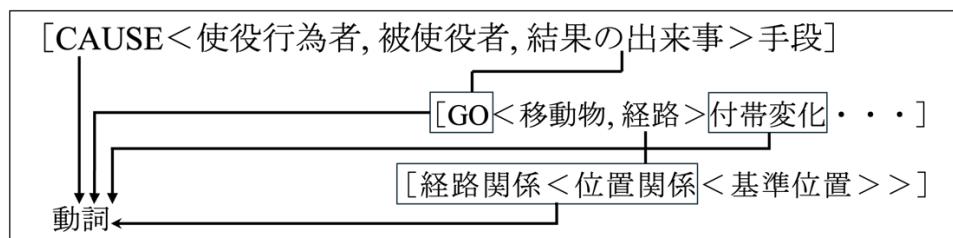


図 2-3 の使役移動の語彙化パターンでは、CAUSE は使役の事実を表し、使役行為者、被使役者（移動物）、結果の出来事（結果変化）という必須要素を含む。付帯変化は移動の事実と同様に、結果の出来事の 1 つとして、動詞に語彙化される。このパターンに当たる英語の他動詞が多く存在すると指摘されている。clear (片付ける)、wipe (拭う/拭く) のような動詞が挙げられる。

- (13) a. she cleared dishes from the table.  
 「彼女はテーブルから皿を片付けた。」  
 b. She cleared the table of dishes.  
 「彼女は皿を片付けてテーブルをきれいにした。」 (松本 1997: 163)

- (14) a. she wiped the dust off the table.

「彼女は埃をテーブルから拭き取った。」

- b. She wiped the table (\*of the dust)

「彼女はテーブルを拭いた。」

(松本 1997: 164)

(13) と (14) のように、これらの動詞は、移動物と起点基準物（場所）の両方を目的語とすることができる点で共通している。しかし、起点基準物を目的語とした場合、

(13b) のように、clear は移動物を前置詞 of で表示できるのに対し、(14b) のように、wipe は移動物を文中で表示することができない。

日本語では、同様に付帯変化を含む動詞が多く見られる。「取る」、「除く」「ちぎる」、「離す」、「はがす」、「抜く」、「もぐ」、「分ける」という動詞が挙げられる。しかし、英語と比べると、日本語では、移動物のみを目的語とする動詞が多いことが指摘されている。以下の (15)、(16) を参照されたい。

- (15) a. ボトルから栓を抜いた。

- b. \*ボトルを抜いた。

- (16) a. 壁からポスターを剥がした。

- b. \*壁を剥がした。

(作例)

以上の通り、松本 (1997) の分析では、日本語と英語の分離事象を表す動詞では、2つの相違点が抽出される。1つは、状態変化を伴う移動事象を表す他動詞と自動詞における違いである。英語では、分離事象を表す自動詞は限られている。自発的な分離事象は、一般的に、他動詞として使用される動詞が自動詞化したものによって表現されている。それに対し、日本語の分離動詞の特徴として、自動詞と他動詞はどちらも数が多い。特に、自動詞は、自発的な分離事象を表すことができる一方、「切れる」、「抜ける」、「ちぎれる」などの自動詞は、動作主の外力による使役的な分離事象を表すことも可能である。この指摘は、池上 (1981) による「なる」型の言語の性質にも当てはまる。

もう1つは、起点基準物（場所）を目的語とする可能性である。英語の分離動詞は、対象目的語と場所目的語の両方をとることが可能である。すなわち、移動物も場所も

目的語として取れる動詞が多く存在する。それに対し、日本語の分離動詞には、移動物のみを目的語としてとれる動詞が多いと指摘されている。

一方、李 (2019b) は、日本語の分離事象を表す自動詞と中国語の分離動詞“掉 (diao, 落ちる)”を比較した。両言語における分離動詞の振る舞いに関して、主に 2 つの違いが存在すると指摘している。

1 つは、「Y (分離物) が V」という分離物が主語である場合、分離動詞が場所項と共に起することが可能かどうかということである。(17) を参照されたい。

- (17) a. 表紙が本からとれる。  
b. ??封皮 从 书 上 掉 了。  
      表紙 から 本 上 diao た  
「表紙が本からとれた。」  
c. 书 的 封皮 掉 了。  
      本 の 表紙 diao た  
「本の表紙がとれた。」

(李 2019b: 127)

日本語の分離事象を表す自動詞は、一般的に、中国語の“掉”と対応している。(17a) のように、「とれる」は、移動の起点を示す「カラ」格と共に起できる。しかし、(17a) を中国語に訳すと、(17b) のように、“掉”は「カラ」格と意味的に対応する“从 (cong, から)”と共に起できず、(17c) のように、「ノ」格と意味的に対応する“的 (de, の)”で分離元「表紙」を表示する。

もう 1 つの違いは、「X (分離元) が V」という分離元が主語である場合、分離物が文中で出現する必要性である。

- (18) a. 踵がむけた。  
b. 踵の皮がむけた。  
(19) a. \*脚后跟 掉 了。  
      踵 diao た  
「踵がむけた。」  
b. 脚后跟 掉 皮 了。

踵       diao皮  た

「踵の皮がむけた。」

(李 2019b: 128-129)

(18) の分離元（踵）が主語である場合、日本語では、(18a) のように、分離物（皮）が文中に出現せず、分離元全体の状態変化に焦点を当てる。また、分離物を文中に付けると、(18b) のように、「ノ」格で分離元の後に表示することが可能である。この場合、(18b) は、分離物（皮）が主語となり、物の部分的移動に焦点を当てる指摘されている。それに対し、同様な事象を表す中国語では、(19a) のように、分離物（皮）が文中で出現しないと非文となる。(19b) のように、分離物を動詞の後に付ける必要がある。

以上、松本 (1997) と李 (2019b) の対照的分析から、日本語の自動詞の分離動詞と、他動詞の分離動詞では、それぞれ以下の特徴が抽出されている。

自動詞の分離動詞の構文的振る舞いに関して、分離物と分離元の両方を主語として取ることが可能である。分離物が主語であるという「Y（分離物）が V」の場合、分離元を「カラ」格で表示することができる。分離元が主語であるという「X（分離元）が V」の場合、分離物を文中で表示する必要はない。

一方、他動詞の分離動詞の構文的振る舞いに関して、「X から/の Y を V」という構文形式をとることができ、分離物（Y）を目的語としてとる動詞が多い。それに対し、「X を V」という構文形式をとることができず、場所項である分離元（X）を目的語としてとれる動詞が僅かである。

しかし、なぜ他の言語と比べて、日本語の分離動詞は上記の異なる振る舞いが見られるかについて、検討されていない。特に、他動詞の分離動詞の場合、「X から/の Y を V」と「X を V」という 2 つ構文形式はどのような違いがあるか、なぜ「抜く」、「外す」、「剥がす」などの分離動詞は、「X を V」という構文形式をとることができないかについて、明らかにされていない。

### 2.1.3 本節のまとめ

以上、分離動詞を対象とする個別研究と対照研究に関する概観により、分離動詞は、2 つの重要な特徴・性質を持つことが分かる。1 つは、分離動詞の多くは多義動詞であ

る。位置変化を伴わない分断・破壊事象を表す一方、位置変化を伴う分離事象を表すこともできる。両者は異なるタイプの事象概念に当たるため、別の事象・意味として捉えられるべきである。また、この 2 種類の物理的な事象以外に、分離動詞は、抽象的な領域、心理的な領域における分離事象を表すこともできる。もう 1 つは、分離動詞の表す事象は、状態変化と位置変化を統合した複合的事象である。動詞のとる構文形式によって、複合的事象はどのように捉えられるかは異なっている。

また、以上の分離動詞の 2 つの特徴・性質に関して、前者の方は、分離動詞の意味的特徴に関わる多義性の現象である。これについて、第 4 章と第 6 章では日本語と中国語の分離動詞の多義的意味・機能を考察する前に、それぞれの動詞の多義性に関する個別の先行研究を具体的に説明する。繰り返すことを避けるため、本章では、分離動詞の多義性研究の概観を省略する。

後者の方は、分離動詞の構文的特徴に関わる交替・非交替現象である。特に、状態変化と位置変化を含む壁塗り交替という言語現象に関わっている。次節では、先行研究において、壁塗り交替現象は、どのように論じられているかを説明した上で、分離事象が壁塗り交替現象との関連性、および本研究の立場を論じる。

## 2.2 壁塗り交替現象に関する研究の概観

本節は、多義性の現象と一見類似した別の現象である「壁塗り交替現象」に関する先行研究を概観する。特に川野（2021）によって指摘された多義動詞と交替動詞の違いを述べた上で、各タイプの交替現象とそれに関わる動詞について見る。また、交替動詞と非交替動詞それぞれの表す位置変化と状態変化の意味類型の違いを述べる。

### 2.2.1 交替現象と多義性現象の違い

壁塗り交替（spray paint alternation）、または場所格交替（locative alternation）は、同じ動詞が 2 種類の格体制をとった上で、その 2 種類の格体制をとる文がそれぞれ位置変化と状態変化という 2 つの意味を表す現象である。（20）は、英語の壁塗り交替現象の事例である。

- (20) a. John spayed paint on the wall.

<移動物> <場所>

b. John spayed the wall with paint.

<場所> <移動物> (岸本 2001:101)

(20a) は、移動物であるペンキを対象目的語として、場所項である壁を前置詞 *on* で表示するという構文形式で、移動物の位置変化を表す。(20b) は、壁を場所目的語として前置し、ペンキを前置詞 *with* で表示するという構文形式で、場所の状態変化を表す。日本語においても、(21) のように、同様な交替現象が見られる。

(21) a. 太郎は 壁 に ペンキ を 塗る。  
           <場所>      <移動物>  
       b. 太郎は 壁 を ペンキ で 塗る。  
           <場所>      <移動物>

一見すると、交替動詞が位置変化と状態変化の2つの意味を持つことは、1つの動詞が複数の意味を持つという、動詞の多義性を意味する現象であるかのように思われるが、交替動詞は多義動詞と本質的な違いがあると指摘されている。

川野（2021）は、意味の違いが生じるレベルを（22）に示す4つ、すなわち、「現実世界の事態」、「事柄的意味の層」、「叙述事態の層」、「通達機能の層」に分ける。

(22) 現実世界の事態 ……多義動詞における各意味の違い  
事柄的意味の層 ……「～ニ～ヲ塗る」と「～ヲ～デ塗る」の意味の違い  
叙述事態の層 ……ヴォイス対立における意味の違い<sup>8</sup>  
通達機能の層<sup>9</sup>

この4つの層のうち、多義性現象と交替現象と関連があるのは「現実世界の事態」と

<sup>8</sup> 川野（2021: 231）によれば、ヴォイス対立における能動文と直接受動文の意味は、現実世界の事態および事柄的意味の層では一致しているが、叙述事態の層では違いが生じる。

<sup>9</sup> 仁田（1997, 2007）では、日本語の主語とモダリティの間に関連性があると指摘されている。このモダリティ的意味は、通達機能の層の意味に当たると考えられる。

「事柄的意味の層」である。「現実世界の事態」は一番上位の層として、主体が対象にどのような使役行為を行うのか、どのような事態が発生するかということについて指示する。「事柄的意味の層」は二番目の層であり、述語の表す事態の類型（動き、状態など）や、名詞句の意味役割（動作主、対象など）などがこの層に含まれる。多義動詞の複数の意味は、異なる指示対象にあたり、「現実世界の事態」において違いが見られる。例えば、前節の言う「分断・破壊事象」と「分離事象」は現実世界の異なる事態を指示し、多義語の異なる意味として扱われている。それに対し、交替動詞の持つ状態変化的意味と位置変化的意味は、現実世界の同一の事態を指示するが、「事柄的意味の層」において違いが見られる。以下、「塗る」を例に、多義的意味と交替の意味それぞれの位置付けについて説明する。

(23) 「塗る」が表す意味間の関係

①塗布の意

- a. 位置変化用法 e.g., 壁にペンキを塗る。
- b. 状態変化用法 e.g., 壁をペンキで塗る。

②築造の意 e.g., 壁を塗る（※壁を造る、の意）

①と②の関係：指示対象が異なる（多義関係）。

①a と①b の関係：指示対象は同一だが意味類型が異なる（交替関係）。

（川野 2021: 225）

「塗る」は多義動詞ではあり、交替動詞でもある。「現実世界の事態」に関して、「塗る」は、「ペンキなどを壁の表面へ塗布する」という事態（①塗布の意）を表すとともに、「壁そのものを築造する」という事態（②の築造の意）を表すこともできる。すなわち、①塗布の意と、②の築造の意は指示対象が異なる「多義関係」にあり、それぞれの意味を多義語の個別義として認めることができる。一方、①塗布の意という個別義の下に、「壁にペンキを塗る」と「壁をペンキで塗る」は、同一の指示対象を表すが、それぞれ位置変化の事柄を表すのか、状態変化の事柄を表すのかという点で異なる。すなわち、①a と①b は、意味類型が異なる「交替関係」にあり、①塗布の意という個別義の下位レベルの事柄的意味として位置付けられる。

先行研究が定義する多義性現象と交替現象の違いを表 2-1 の通りまとめる。

表 2-1 多義現象と交替現象の違い

	現実世界の事態（指示対象）	事柄的意味（事象類型）
多義現象	対立	
交替現象	同一	対立

## 2.2.2 日本語の交替動詞と非交替動詞

次に、各交替現象における交替動詞と非交替動詞の異なる振る舞いを説明する。

前節に説明したように、壁塗り交替現象は多義性現象と区別されており、語の意味と構文に関わる特別な現象である。交替現象は偶発的なものではなく、類型的に異なる言語で確認できたということが明らかにされている。日本語は、壁塗り交替現象が広範に存在する言語である。川野（2021）は日本語の壁塗り交替現象を対象に詳細な分析を行い、「付着移入型壁塗り交替」、「餅くるみ交替」、「満ち欠け交替」、「離脱型壁塗り交替」という4つの種類に分類した。これらの交替現象は、構文交替のパターンにおいて異なる。また、構文交替のパターンに該当する交替動詞が存在する一方、それぞれ意味的に類似関係にある非交替動詞も見られる。

まず、1つ目の「付着移入型壁塗り交替」では、「～ニ～ヲ」と「～ヲ～デ」の構文交替が起こる。

- (24) a. 太郎は 壁 に ペンキ を 塗る。

    <場所>    <移動物>

- b. 太郎は 壁 を ペンキ で 塗る。

    <場所>    <移動物>

- (25) a. 太郎は 壁 に ペンキ を 付ける。

    <場所>    <移動物>

- b. \*太郎は 壁 を ペンキ で 付ける。

    <場所>    <移動物>

（川野 2021: 17）

「塗る」は交替動詞として、2種類の格体制をとることができる。(24a) と (24b) は、

どちらも移動物「ペンキ」、場所「壁」という要素を含む事態を表すが、それぞれ異なる事柄的意味を表す。(24a) は移動物の位置変化を表すのに対し、(24b) は場所の状態変化を表現する。一方、(25) のように、「付ける」は、「塗る」と類似する使役的付着の意味を表すが、非交替動詞として認められる。(25a) のような位置変化の構文形式をとることができると、(25b) のような状態変化の構文形式をとることができない。また、場所と移動物が「表面-付着物」の空間的関係に当たる「塗る」のほかに、「容器-中身」の空間的関係に当たる「満たす」も、「付着移入型壁塗り交替」を起こす交替動詞である。

2つ目の「餅くるみ交替」は、その名称の通り、(26) のように、特定の場所に餅を入れて包む事態を表現する。構文交替は、「付着移入型壁塗り交替」と同様に、「～ニ～ヲ」と「～ヲ～デ」の形式で表される。

(26) 餅くるみ交替

- a. 太郎は 桜の葉 に 餅 を 包む。  
          <場所>    <移動物>  
b. 太郎は 餅 を 桜の葉 で 包む。  
          <移動物>    <場所>

(川野 2021: 49)

(27) 付着移入型壁塗り交替

- a. 太郎は グラス に 水 を 満たす。  
          <場所>    <移動物>  
b. 太郎は グラス を 水 で 満たす。  
          <場所>    <移動物>

(川野 2021: 1)

(26) では、場所に相当する事物（桜の葉）を移動物（餅）の表面の形状に適応させながら、餅をその中に位置付けることを表すため、両者は、「容器-中身」の空間的関係に当たる。一方、(27) の動詞「満たす」の表す事態は、同様に、「容器-中身」の空間的関係にあるが、「付着移入型壁塗り交替」として位置付けられる。一見すると、この2種類の交替現象は非常に類似しているが、「満たす」は「付着移入型壁塗り交替」の

タイプに当てはまり、「包む」は「餅くるみ交替」のタイプに当てはまる理由として、両者が表す事態の違いが挙げられる。

(28) ~ヲ~デ形から~ニ~ヲ形への交替

<~ヲ~デ形>

満たす：ヲ格句の事物（グラス）が外側、デ格句の事物（水）が内側

くるむ：デ格句の事物（桜の葉）が外側、ヲ格句の事物（餅）が内側

↓

↓

<~ニ~ヲ形>

ニ格句

ヲ格句

(川野 2021: 59)

(28) は、「付着移入型壁塗り交替」と「餅くるみ交替」において、「~ニ~ヲ」から、「~ヲ~デ」へ交替する仕組みを示す。<~ヲ~デ形>という状態変化の構文形式に着目すると、「付着移入型壁塗り交替」では、ヲ格句の場所（グラス）がその内側にデ格句の移動物（水）を伴うという形で状態変化が起こる。それに対し、「餅くるみ交替」では、ヲ格句の移動物（餅）がその周りにデ格句の場所に相当する事物（桜の葉）を伴う形で状態変化が生じる。すなわち、「付着移入型壁塗り交替」では、状態変化が生じる事物は、場所のグラスであり、位置変化が生じる事物は、移動物の水である。一方、「餅くるみ交替」では、状態変化と位置変化が生じる事物はどちらも移動物の餅であると考えられる。また、川野（2021）では、「餅くるみ交替」を起こさない非交替動詞について言及されていないが、実際には「包む」と意味的に類似関係にある「囲む」という非交替動詞が存在する。

3つ目の「満ち欠け交替」では、「~ニ~ガ」と「~ガ~ニ」の構文交替が見られる。その名称の通り、(29) の「欠ける」と (30) の「満ちる」はこのタイプの構文交替を起こす典型的な動詞である。

(29) a. 彼 に 積極性 が 欠けているコト

<主体> <内在物>

b. 彼 が 積極性 に 欠けているコト

<主体> <内在物>

- (30) a. 選手達に 自信 が 満ちているコト  
           <主体>    <内在物>  
   b. 選手達 が 自信 に 満ちているコト  
       <主体>    <内在物>

(川野 2021: 115)

「欠ける」や「満ちる」は静態述語であり、対象の動的な位置変化ではなく、静的な存在を表す。このため、「満ち欠け交替」では、ガ格とニ格は、「移動物」と「場所」ではなく、「内在物」と「主体」に当たる。(29a) と (30a) は、内在物（積極性、自信）が主語となり、内在物が主体である人間（彼、選手達）に存在するようになるという位置関係・変化を表す。(29b) と (30b) は、主体である人間が主語となり、主体（彼、選手達）の状態変化を表す。

一方、(31) と (32) が示すように、「存在/非存在」の意味を表す述語「ある/ない」、「多い/少ない」は、構文交替を起こさない非交替述語である。「ある/ない」、「多い/少ない」は、「～ニ～ガ」という位置変化の構文形式をとることができると、「～ガ～ニ」という状態変化の構文形式をとることができない。

- (31) a. 彼 に 指導力 が ある（ない）コト  
           <主体>    <内在物>  
   b. \*彼 が 指導力 に ある（ない）コト  
       <主体>    <内在物>
- (32) a. 日本に 資源 が 多い（少ない）るコト  
           <主体>    <内在物>  
   b. \*日本 が 資源 に 多い（少ない）コト  
       <主体>    <内在物>

(川野 2021: 120)

最後に、4つ目の「離脱型壁塗り交替」では、「～カラ～ヲ」と「～ヲ」の構文交替が見られる。このタイプの交替現象は、本研究の考察対象である分離事象と非常に類似しており、動作主が、ある場所に存在する事物をその場所から分離するという事象

を表す。本研究では、分離動詞とは、離脱型壁塗り交替が表す事象と類似した事象を表しながらも、非交替動詞であるものと定義し、交替動詞に関しては従来通り、離脱型壁塗り交替動詞として扱う。(分離事象と壁塗り交替現象の概念構造の違いについて、第5章では具体的に分析する)。(33)の交替動詞「空ける」の用例と(34)の非交替動詞である分離動詞「抜く」の用例を参照されたい。

- (33) a. 太郎は グラス から 水 を 空ける。

<場所> <移動物>

- b. 太郎は グラス を 空ける。

<場所>

(川野 2021: 93)

- (34) a. 太郎は グラス から 水 を 抜く。

<場所> <移動物>

- b. \*太郎は グラス を 抜く。

<場所>

(作例)

(33) が示すように、日本語の「離脱型壁塗り交替」の構文交替の特徴として、日本語には、(35)英語の of/off のような移動物が存在しないことを表す格成分が存在せず、移動物の要素が状態変化の構文形式で表示されていない。

- (35) a. John cleared dishes from the table.

<移動物> <場所>

- b. John cleared the table of dishes.

<場所> <移動物>

(岸本 2001: 103)

(33a) 「～カラ～ヲ」という位置変化を表す構文形式には、場所（グラス）と移動物（水）が含まれる。(33b) 「～ヲ」という状態変化を表す構文形式には、移動物が出現せず、場所要素だけが文中で残る。一方、「抜く」は「空ける」と意味的に類似してお

り、水を取り除くことで、水の位置変化と、グラスには水がなくなるという状態変化という複合的事象を表すことができる。しかし、「抜く」は、(34a) のように位置変化の構文形式をとることができると、(34b) のように状態変化の構文形式をとることができない。

以上のまとめとして、この 4 種類の壁塗り交替現象の構文交替のパターンと、それぞれの交替動詞や関連する非交替動詞/非交替述語の例を表 2-2 に示す。

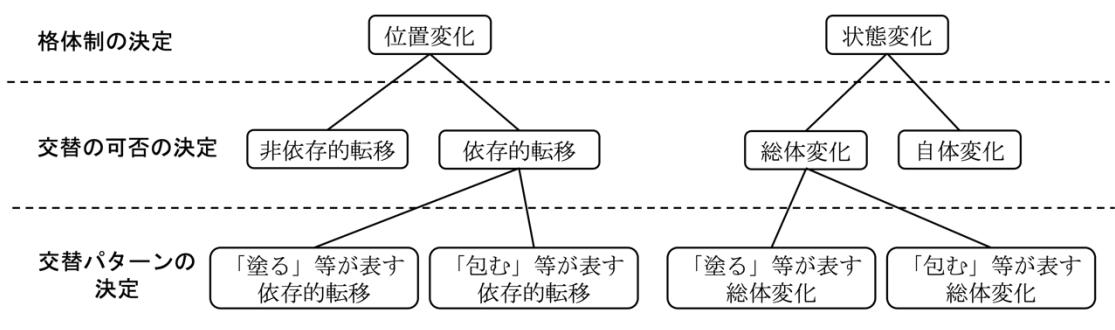
表 2-2 日本語における 4 種類の壁塗り交替現象

	位置変化	状態変化	交替動詞	非交替動詞/非交替述語
付着移入型交替	～ニ～ヲ	～ヲ～デ	塗る/満たす	付ける
餅くるみ交替	～ニ～ヲ	～ヲ～デ	包む	囲む
満ち欠け交替	～ニ～ガ	～ガ～ニ	欠ける/満ちる	ない/ある、少ない/多い
離脱型壁塗り交替	～カラ～ヲ	～ヲ	空ける	抜く

### 2.2.3 状態変化と位置変化の意味類型

上述の意味的に類似する交替動詞と非交替動詞はいずれも状態変化事象と位置変化事象を表すことができるが、格体制の交替の可否において違いが見られる。では、交替動詞と非交替動詞の違いとは具体的にはどのようなものなのか、また、どのような条件の下で交替が起こるかという点に関して、川野（2021）は意味類型の階層モデルを提案した。

図 2-4 意味類型の階層モデル（川野 2021: 56）



格体制を決定する意味階層（図 2-4 の最上位の層）の下に、格体制の交替の可否を決定する意味階層（図 2-4 の 2 番目の層）がある。さらに、4 つの壁塗り交替現象の交

替パターンを決定する意味階層（図 2-4 の最下位の層）が存在する。

従来の先行研究（奥津 1981, 岸本 2001 など）は主に、構文形式が位置変化を表すか、それとも状態変化を表すかという最上位の層に着目している。例えば、「塗る」は、「～ニ～ヲ」という構文形式をとる場合、移動物の位置変化を表す。「～ヲ～デ」という構文形式をとる場合、場所の状態変化を表す。すなわち、奥津（1981）や岸本（2001）は、この 2 つの格体制、構文形式の表す意味の違いを明らかにしている。

一方、川野（2021）が 2 番目の層に着目し、「位置変化」や「状態変化」の意味類型の下に、動詞の文法的振る舞いに関する下位類型があると指摘している。具体的には、「交替の可否の決定」という意味階層を見ると、「位置変化」と「状態変化」それぞれに関して、2 つの下位類型を設けている。「位置変化」の下位類型として、「依存的転移」と「非依存的転移」がある。両者の違いとしては、「依存的転移」とは、事物が別の事物に依存的なあり方でそこに存在するようになる事態である（例えば、「ペンキを壁に塗る」）。「非依存的転移」とは、事物の位置変化後の存在のあり方に、もう一方の事物が関わらない事態である（例えば、「ペンキを壁に付ける」）。交替動詞の表す位置変化は「依存的転移」であるのに対し、非交替動詞の表す位置変化は「非依存的転移」であると指摘されている。例えば、「ペンキを壁に塗る（交替動詞）」と「ペンキを壁に付ける（非交替動詞）」の表す位置変化の違いについて具体的に考察すると、「塗る」の場合、ペンキがどのような形状で壁に存在するようになるかが、壁の表面の形状と大きさによって決められる。「付ける」の場合、ペンキの形状が壁の形状によって左右されることがない。

「状態変化」の下位類型として、「総体変化」と「自体変化」がある。「総体変化」とは、一方の事物が別の事物の結果状態を構成するという空間の状態変化である（例えば、「壁をペンキで塗る」）。「自体変化」とは、ある事物そのものの結果状態が変化するという属性の状態変化である（例えば、「壁をペンキで汚す」）。交替動詞の表す状態変化は「総体変化」であるのに対し、非交替動詞の表す状態変化は「自体変化」であると指摘されている。例えば、「壁をペンキで塗る（交替動詞）」と「壁をペンキで汚す（非交替動詞）」の表す位置変化の違いについて具体的に考察すると、「塗る」の場合、壁自体の属性が変化せず、壁を構成する色の変化に伴い、見た目に変化が生じる事態を表す。「汚す」の場合、壁自体の属性が悪くなるという事態を表す。

この意味類型の階層モデルは、交替の可否を予測する役割を持つとも考えられる。

位置変化動詞の中で、「依存的転移」を表す動詞は、交替を起こすのに対し、「非依存的転移」を表す動詞は、交替を起こさない。状態変化動詞の中で、「総体変化」を表す動詞は交替を起こすのに対し、「自体変化」を表す動詞は交替を起こさないと主張されている。

また、川野（2021）による交替現象に関する捉え方は、奥津（1981）や岸本（2001）による捉え方と異なる。意味類型の階層モデルは、同一の事態が状態変化と位置変化の2つの事象に類型化されるという考え方に基づくものである（川野 2021: 226）。それに対し、奥津（1981）や岸本（2001）による捉え方は、1つの動詞が一続きの事態の別の段階や局面を焦点化すると、異なる構文形式で表現されるというものである。

本研究は、川野（2021）と同様な捉え方を採用し、状態変化と位置変化を同一の複合的事象の下にある2つの事象類型として位置付ける。第5章では、分離事象において、この2つの事象類型がどのように統合されるかという概念構造を分析し、分離事象の概念構造は、交替現象の概念構造とどのような違いがあるか、そして分離事象における2つの事象類型はどのような特徴があるかを検討する。

### 2.3 本章のまとめ

本章は、まず、2.1節では、分離動詞と分離事象を対象とする個別研究と対照研究に関する概観を通して、先行研究によって明らかにされている分離動詞と分離事象の2つの重要な特徴と性質を抽出している。1つは、分離動詞が多義語のことである。もう1つは、分離事象は単純な状態変化事象か位置変化事象ではなく、位置変化と状態変化を含む複合的事象のことである。また、その特徴と性質に関わる現象として、意味的特徴に関わる多義性の現象、構文的特徴に関わる構文交替の現象を指摘した。続いて、2.2節では、壁塗り交替現象に関する先行研究を概観し、分離動詞と分離事象は、壁塗り交替現象との関連性を論じた上で、本研究の立場を示した。すなわち、本研究では、分離動詞を離脱型壁塗り交替動詞と区別した「非交替動詞」として位置づけ、川野（2021）と同様な立場を踏まえ、位置変化と状態変化を分離事象における2つの下位事象として位置づける。本章の内容を踏まえると、以下、先行研究の問題点と課題として、次の3つが挙げられる。

1つ目は、分断・破壊事象と分離事象の違いと位置付けである。この問題は、序論で

提示した本研究の課題 1「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」に対応している。分断・破壊事象と分離事象は同様に力学的関係を含意する事象であるが、両者は、位置変化を伴うかどうかという点で違いが見られる。分断・破壊事象と分離事象の両方を表せる動詞（例えば、「切る」）の意味構造では、両事象はどのように位置づけられるか、それぞれの力学的関係はどのように図式化されるかについて、明らかにされていない。また、分離事象のみを表せる動詞（例えば、「抜く」）に含意される力学的関係は、分断・破壊事象と分離事象の両方を表せる動詞に含意される力学的関係とどのような違いが存在するか、更なる検討が必要である。これらの問題を明らかにするために、本研究は、統一した理論的枠組みで分離動詞の意味構造と意味拡張のメカニズムを解明する。次章の 3.1 節と 3.2 節では、意味構造を解明するための「力動性」と「複層的意味空間」を説明する。

2 つ目は、分離事象を表す他動詞はどのような意味体系を持つかということである。これは、本研究の課題 2「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」に対応している。この問題点を明らかにするために、2 つの分析の側面が必要である。1 つは、分離事象を表す他動詞の内部体系の解明である。これに関して、「切る」、「抜く」、「ちぎる」、「落とす」などの動詞は意味的特徴と構文的特徴によって分類されることが可能であるか、検討する必要がある。また、分類の仮説を踏まえ、各タイプの分離動詞の表す事象はそれぞれどのような特徴が見られるか、分離事象における位置変化と状態変化はどのように統合されているかを解明する必要がある。もう 1 つは、分離事象を表す他動詞の外部体系・位置付けの解明である。これに関して、分離動詞は、移動動詞、状態変化動詞、交替動詞などという意味的に隣接関係にある動詞類とどのような関係性が見られるか、それぞれの表す事象はどのような類似と相違が存在するかを明確にする必要がある。次章の 3.3 節では、分離事象の意味体系と概念構造を解明するための「マクロ事象の概念構造」を説明する。

3 つ目は、分離動詞と分離事象はどのようにカテゴリー化し類型化されるかということである。この問題は、本研究の課題 3「分離動詞と分離事象の類型の提案」に対応している。

先行研究は、単に日本語の「抜く」、「剥がす」などの動詞の表す分離事象は、離脱型壁塗り交替現象と類似する非交替現象のものであると述べた。しかし、分離事象自体は、どのような特徴と性質を持つか、どのような下位類型を持つかについて、検討

されていない。Majid et al. (2008)、洪 (2020) は、実験的手法を用いて、分断・破壊事象のカテゴリー化を考察した。分断・破壊事象の下位類型として、cut 系事象と break 系事象が存在することを明らかにした。一方、松本・氏家 (2024) は、日本語の状態変化表現を分析し、統合性の概念領域における物理的破壊（「壊れる」、「壊す」、すなわち、本研究による分断・破壊事象と対応する）を 1 つの調査対象として、状態変化が表示される位置に着目し、コーパス調査を行った。その結果、状態変化の種類によって、変化の表示位置が異なるという言語内の変異が捉えられる。

これらの先行研究のように、分離事象という複合的事象の語彙カテゴリー化と言語化に関する考察は、分離事象全体の性質を解明するための重要な課題であると言える。各言語における分離事象のカテゴリー化と類型化の結果に関して、どのような傾向が見られるか、それに加え、その傾向における類似点と相違点から、各言語においてどのような類型的性質がうかがえるかを検討する必要がある。次章では、各言語の理論上の類型的相違を論じる。特に、3.4 節では、本研究の対象言語の 1 つとなる中国手話の理論的背景を説明する。

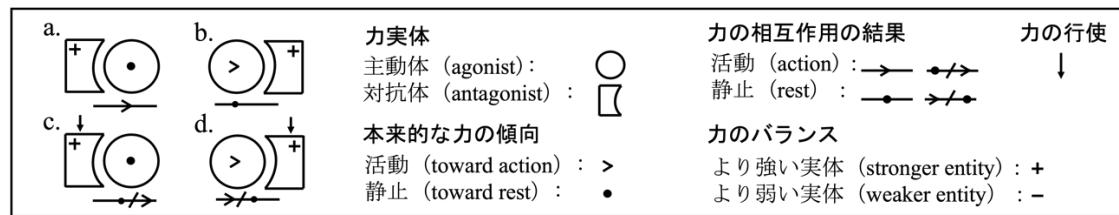
## 第3章 理論的背景

### 3.1 力動性

本節では、分離動詞と分離事象の特徴と性質を分析するための理論的背景を述べる。まず、本研究の最も重要な理論的道具立てとして、動力学的な観点に基づく「力動性(Force Dynamics)」について説明する。

Talmy (1985a, 2000a) によって提唱された力動性は、動力学的な観点から見た個体(力実体)の相互作用を示したものである。力動性モデルにおいては、2つの力実体が存在し、内在傾向性(初期傾向, tendency)をもつ力実体は主動体(agonist, AGO)と呼ばれ、主動体に対抗する力を加える力実体は対抗体(antagonist, ANT)と呼ばれる。この2つの対抗した力実体の力のバランス(強弱)によって、相互作用の結果状態が異なると考えられる。以下、図3-1に力動性モデルを図示する。

図3-1 Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルの図式



- (1) a. The fan <sub>(ANT)</sub> kept the air <sub>(AGO)</sub> moving.  
「扇風機が空気を動かし続けた。」
- b. The brace <sub>(ANT)</sub> kept the logs <sub>(AGO)</sub> from rolling down.  
「留め金が丸太が転がり落ちるのを防いだ。」
- c. The piston <sub>(ANT)</sub> made the oil <sub>(AGO)</sub> flow from the tank.  
「ピストンが油をタンクから流れ出させた。」
- d. The shutoff valve <sub>(ANT)</sub> stopped the gas <sub>(AGO)</sub> from flowing out.  
「遮断バルブがガソリンが流れ出すのを止めた。」

(松本 2003: 60-64)

図 3-1 では、円形は主動体を表すのに対し、窪んだ形は対抗体を表す。主動体の本来的な力の傾向（初期傾向）は、静止に向かう傾向と活動に向かう傾向という 2 つがあり、それぞれ円形の中心で「・」、「>」で表示される。また、主動体と対抗体という 2 つの力実体のうち、対抗体の力が主動体の力より強い場合と、主動体の力が対抗体の力より強い場合がある。力のバランス（強弱）として、それぞれ対抗体である窪んだ形の内で「-」、「+」で表示される<sup>10</sup>。さらに、力のバランスに応じて、2 つの力実体のぶつかり合い、相互作用の結果として、主動体が静止傾向になる、活動傾向になるという 2 つの可能性がある。加えて、図 3-1 の a, b と c, d はそれぞれ力動性モデルの 2 種類の基本的なパターンを示しており、相互作用の結果に関しても、2 つの表示の仕方が見られる。この 2 つのパターンは動作と動作の結果が生じる時間という点で違いが見られる。

1 つ目のパターンは、KEEP 型の力動性モデル、または拡張使役（extent causation, 図 3-1 の a, b）と呼ばれる。（1a）では、主動体、すなわち目的語項（空気）は本来的に静止傾向にあったが、対抗体、すなわち主語項（扇風機）から継続的に強い力が加わることで、空気には活動傾向が保持される。（1b）では、主動体、目的語項（丸太）は本来的に活動傾向にあったが、対抗体、主語項（留め金）からの力を受けることで、丸太には活動傾向が保持される。すなわち、このパターンの力動性モデルの表す事象では、使役と使役の結果が同時に生じている。主動体の傾向性について見ると、力が行使されている間は一貫して、初期傾向と逆の傾向性が保持されている。力が一旦緩和されると、主動体が初期傾向に戻る。

もう 1 つのパターンは、MAKE 型の力動性モデル、または開始時使役（onset causation, 図 3-1 の c, d）と呼ばれる。（1c）では、主動体、すなわち、目的語項（油）は、本来的に静止傾向にあったが、対抗体、すなわち、主語項（ピストン）から油に力が加わることで、油の状態に変化が生じており、静止傾向から活動傾向に変化する。（1d）では、主動体、目的語項（ガソリン）は、本来的に活動傾向にあったが、対抗体、主語項（遮断バルブ）からの力によって、ガソリンが活動傾向から静止傾向に変化する。す

<sup>10</sup> 図 3-1 と用例（1）では、対抗体が主動体より力が強い場合のみが挙げられる。このため、図 3-1 の a-d は、力のバランスとして、いずれにもいて窪んだ形の内「+」で表示される。一方、例えば、The ball kept rolling despite the stiff grass. / The shed kept standing despite the gale wind blowing against it. という用例は、対抗体が主動体より力が強いことを表す。このような場合、力のバランスとして、「-」で表示される。

なわち、このパターンの力動性モデルの表す事象には、使役行為をきっかけとした変化のプロセスが生じる点で、拡張使役と異なる。

また、上記の用例 (1a) – (d) はいずれも目的語項が主動体、主語項が対抗体であるが、主動体および対抗体は、必ずしも項と緊密な対応関係を持つわけではない。主動体/対抗体の間の関係性から、それぞれの特徴について考えると、主動体とは力の行使とその結果に焦点が当てられるものであり、対抗体とは主動体と対立するものである。一見すると認知文法におけるトラジェクター/ランドマークの間の関係性と類似しているが、両者は必ずしも対応するとは限らない。

- (2) a. The ball<sub>(AGO)</sub> kept rolling because of the wind<sub>(ANT)</sub>.

「風が原因でボールが転がり続けた。」

- b. The wind<sub>(ANT)</sub> kept the ball<sub>(AGO)</sub> rolling.

「風はボールを転がし続けた。」

トラジェクター/ランドマークという観点から見ると、主語は一番焦点が当てられるものであり、このような焦点が当てられる要素がトラジェクター (trajector) となる。そして、目的語を含む他の項はランドマーク (landmark) となる。このため、用例 (2a) では、主語項（ボール）がトラジェクターであり、風がランドマークである。認知主体は、ボールの移動の事実に焦点を当てる。(2b) では、主語項（風）がトラジェクターであり、目的語項（ボール）がランドマークである。認知主体は、ボールの移動の要因である風の作用に焦点を当てる。一方、主動体/対抗体という観点からは、本来的な傾向、すなわち初期傾向を持つ力実体は主動体となり、主動体に対抗する力を持つ力実体は対抗体となる。用例 (2a) と (2b) では、ボールは初期傾向を持つものであり、風はボールに対して対抗する力を持つものである。このため、(2a) では、主語項（ボール）が主動体であり、風が対抗体である。一方、(2b) では、目的語項（ボール）が主動体であり、主語項（風）が対抗体である。すなわち、力動性モデルにおいては、いずれの項も主動体になることが可能である。

本研究では、力動性の観点から分離事象について考察するが、考察に際して、Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルで扱うことができる事象の種類について確認する必要がある。特に、Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルは、力の相互作用の結果である状

態変化のみに注目すると指摘されている。しかし、すべての力的概念を含意する事象は、必ずしも状態変化を表すとは限らない。以下の(3)を参照されたい。

- (3) a. A flyball (AGO) can sail out of the stadium (ANT) .

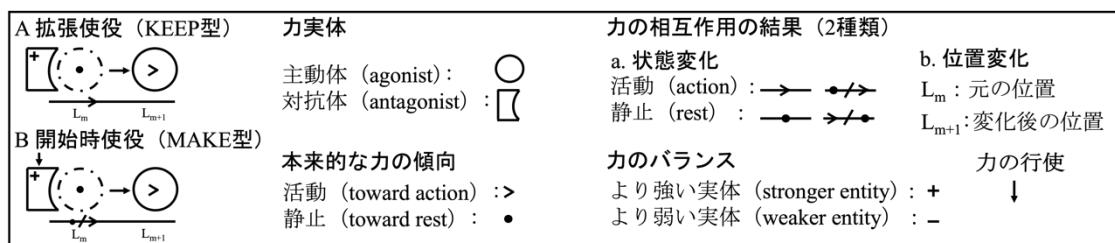
「フライボールは球場から飛び出すことがある。」

- b. A flyball (AGO) cannot sail out of the stadium (ANT) .

「フライボールは球場から飛び出すことはできない。」

(3) の法助動詞 *can* の表す事象では、対抗体である球場（の網）は、主動体であるフライボールの移動に障害を与える。両者の間に対抗した力的関係が見られる。しかし、力の相互作用の結果として、主動体の状態変化が見られず、位置変化しか見られない。Talmy (1985a, 2000a) では、このような力の対抗による位置変化を力動性モデルで表示する方法に関しては言及されていない。また、本研究の考察対象である分離事象は、状態変化と位置変化を統合する複合事象である。このような複合事象を力動性モデルで表示するためには、状態変化だけではなく、位置変化も同時に図式化する必要がある。このため、本研究は、状態変化と位置変化を統合する複合事象に関して、以下の図3-2の改訂版の力動性モデルを提案する。

図3-2 本研究による改訂版の力動性モデルの図式



この改訂版の力動性モデルでは、状態変化と位置変化という2種類の相互作用の結果が存在する。図3-1のTalmyの力動性モデルによって表示される状態変化に加え、時間の推移による位置変化が見られる。位置変化の表示に関して、図3-2では、L<sub>m</sub>は主動体の元の位置を示す。L<sub>m+1</sub>は力の相互作用による変化後の位置を表示する。また、変化後の位置にある主動体の円形には、変化後の力の傾向（活動に向かう傾向か、静止に向かう傾向か）を表示する。

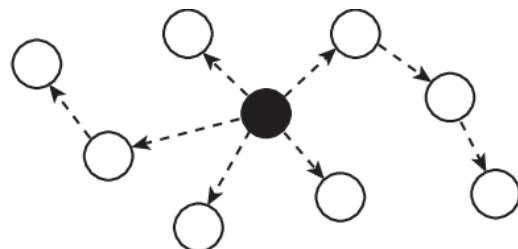
### 3.2 ネットワークモデルと複層的意味空間

次に、本節では、分離動詞の多義構造を可視化する理論的枠組みとして、Langacker (1987, 1991) によるスキーマティック・ネットワークモデルと、田中 (1990) による複層的意味空間を採用する。これらの理論的枠組みを説明する前に、認知言語学における各カテゴリー観とそれぞれの特徴と問題点を概観する。その上で、本研究がネットワークモデルと複層的意味空間を採用する理由を述べる。

多義語のプロトタイプ的意味、周辺的意味、スキーマ的意味など、個々の意味はどのように関連づけカテゴリー化されるについて、認知言語学の立場では、主に 2 つのカテゴリー観が存在する。

1 つ目は、プロトタイプ理論に基づくカテゴリー観（以下、プロトタイプ・カテゴリー観）である。プロトタイプ・カテゴリー観では、ある意味・用法のプロトタイプ性が高い場合、その意味・用法はカテゴリーの中心的な成員となる。反対に、プロトタイプ性が低い場合は、その意味・用法は、カテゴリーの周辺例と位置付けられる。また、プロトタイプ・カテゴリー観に基づき、Lakoff (1987) は「放射状ネットワークモデル (radial (polysemic) network model)」（図 3-3）を提唱している。

図 3-3 放射状ネットワークモデル (Lemmens 2015: 95 による作成)



放射状ネットワークモデルでは、多義語の持つ複数の意味は無秩序に位置するわけではなく、プロトタイプ的意味が中心的な位置を占めており、そこから何らかのつながりや関連付けによって非典型的意味、周辺的意味に意味拡張がなされる。語の意味構造を、同様な必要十分条件を共有する集合として捉える「古典的なカテゴリー観」と比べると、プロトタイプ・カテゴリー観では、プロトタイプ性によって、各意味のカテゴリーへの帰属度が異なることが主張される。また、意味を羅列的に記述する「辞

書的アプローチ」と比べると、プロトタイプ・アプローチは、意味間のつながりや拡張経路を非常に重視している。意味拡張の経路を重要視するプロトタイプ・カテゴリ一観を基本語の辞典開発に応用した研究としては、瀬戸（2007a）、森山（2011）が挙げられる。

一方、プロトタイプ・カテゴリ一観とは異なるもう1つのカテゴリ化の捉え方として、スキーマに基づくカテゴリ一観（以下、スキーマ・カテゴリ一観）が挙げられる。スキーマ・カテゴリ一観では、重要な概念として、個々の意味の共通点のみを抽出し概略しているという「スキーマ」が提唱されている。このカテゴリ一観では、個々の意味から共通するスキーマを抽出し、そのスキーマとの合致度によってカテゴリ一観の成員を判断するというカテゴリ化のプロセスがある。Hayase（1993）によれば、スキーマとの合致度による判断は、前述のプロトタイプ性によるカテゴリへの帰属度判断に比べて、カテゴリの周辺例を考慮しながら文脈に応じたカテゴリの可変性を認めるため、カテゴリ化についてより柔軟に捉えることができる。しかし、プロトタイプ・カテゴリ一観もスキーマ・カテゴリ一観も、意味のカテゴリ化の1つの側面のみを反映している点では共通しており、それぞれに問題点と課題も残している。

表3-1に、2つのカテゴリ一観の特徴と問題点をまとめる。

表3-1 多義性をめぐる2つのカテゴリ一観の特徴と問題点

カテゴリ一観	特徴	問題点
プロトタイプ・カテゴリ一観	プロトタイプ的意味と周辺的意味の拡張関係（水平関係）を重要視する	(i) カテゴリーの可変性に欠けること (ii) プロトタイプ的意味の妥当性
スキーマ・カテゴリ一観	プロトタイプ的意味と周辺的意味の共通性（垂直関係）を重要視する	(i) 適当なスキーマの抽出の難しさ (ii) 中心的意味が認定されないこと

プロトタイプ・カテゴリ一観は、すでに定着したカテゴリ、またはカテゴリの静的な側面を分析するのに有効である。しかし、カテゴリの動的な側面が捉えられず、カテゴリの可変性に欠けるという問題がある。このため、カテゴリの境界や新規的用法、周辺的用法の分析には適さないと言える。また、放射状ネットワークモデルの中心に位置するプロトタイプには、通常、理論的に効率がよく、意味構造の構

成に有益な意味が選ばれるが、このような理論上のプロトタイプが言語使用者の直観におけるプロトタイプと一致するかどうかに関しては、議論の余地がある (Taylor 2003)。一方、スキーマ・カテゴリー観の問題点として、抽象的な個々のスキーマはすべての意味のイメージを総括するものであるのか、いくつかのスキーマが抽出されれば十分のかという疑問が生じる。また、スキーマを共有する個々の意味において、どれが中心的意味であり、どれが周辺的意味であるかという点について、明確な考察がなされていない。

一方、Langacker (1987, 1991) によって「スキーマティック・ネットワークモデル (schematic-network model, SNM)」(図 3-4) が提唱された。SNM は、上記の 2 つのカテゴリー観の問題点を有效地に解消でき、放射状ネットワークモデルよりも、各意味の間の相関関係を明確に示す一方、意味の上下関係を示すことができる点で優位性が認められる。このため、本研究は、SNM というカテゴリー化の捉え方を採用する。

図 3-4 スキーマティック・ネットワークモデル (Langacker 1991: 271)

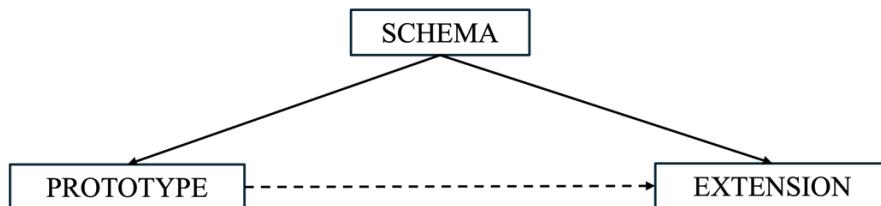


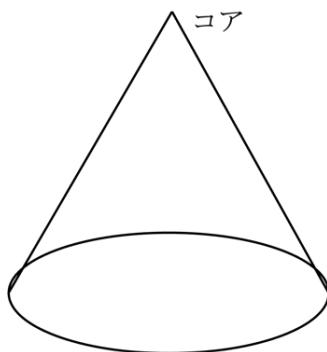
図 3-4 のように、SNM では、抽象的レベルの意味スキーマ (SCHEMA) と具体的レベルの意味スキーマ (PROTOTYPE, EXTENSION) を統合した形で語のカатегор構造が捉えられる。すなわち、異なるレベルの意味スキーマが 1 つの意味構造で捉えられる。これらの意味スキーマはそれぞれの役割を持っており、具体的レベルのスキーマは静的な共時的意味を解釈する役割を果たすのに対し、抽象的レベルのスキーマは動的な通時的意味の拡張を理解する・抑える機能を担当しているとされる (Hayase 2018)。また、これらの意味スキーマの関係性に関して、同じレベルの意味スキーマ (PROTOTYPE, EXTENSION)、異なるレベルの意味スキーマ (SCHEMA と PROTOTYPE, SCHEMA と EXTENSION) は、いずれにおいても相関関係が存在する。この中で、同じレベルの意味スキーマの間には、プロトタイプ・カатегор観に基づく水平関係 (図中で破線によって示したもの) が捉えられるのに対し、異なるレベル

の意味スキーマの間には、スキーマ・カタゴリー観に基づく垂直関係（図中で実線によって示したもの）が捉えられる。

また、個々の意味から共通性を抽出したスキーマは段階性がある概念である。図3-4におけるスキーマ（SCHEMA）は、あくまでプロトタイプ（PROTOTYPE）と拡張事例（EXTENSION）の共通点を統合する「局所的スキーマ」である。一方、各レベルの意味スキーマと概念イメージの共通点を統合する包括的概念として、Langacker (1987) では、「スーパー・スキーマ」という概念が提唱されている。スーパー・スキーマは語の核となる概念であるとともに、文脈を捨象した、語の意味構造において抽象度が最も高いスキーマである。この点に関して、スーパー・スキーマは、田中（1990）によって提唱されていた語の「コア（core）」とかなり類似する概念である<sup>11</sup>（糸山 2001: 51）。

「コア」とは、用例の最大公約数的な意味として、語の意味範囲の全体を捉える概念である。田中（1990）は「コア」という概念を踏まえ、多義語の意味構造を図3-5のような立体的かつ複層的円錐形の意味空間として想定している。語の個々の意味はこの意味空間に均衡的に分布しているわけではなく、それぞれ関連付けながら分布している。これらの意味のうち、「コア」は語の核的意味であり、円錐形の中にある全ての意味の共通点を統合する包括的概念として、円錐形の頂点に位置付けられる。また、「コア」は、抽象度が極めて高い意味スキーマであり、母語話者は通常この概念を意識していないが、円錐形の意味空間全体を統合する重要な役割を担う。

図3-5 円錐形の意味空間（田中 1990: 23）



<sup>11</sup> なお、「コア」の抽出法は、スーパー・スキーマと異なり、「他動詞の場合、X BREAK Y の関係において、X と Y の値を考慮し、そこから共通項を帰納的に引き出す」とされる（田中 1990: 50）。

本研究は、田中（1990）の円錐形の意味空間をさらに具体化し、図3-6のように、多義語の意味空間を3つの概念レベルに分ける。また、各概念レベルの意味と位置づけを規定する。

図3-6 多義語の複層的意味空間

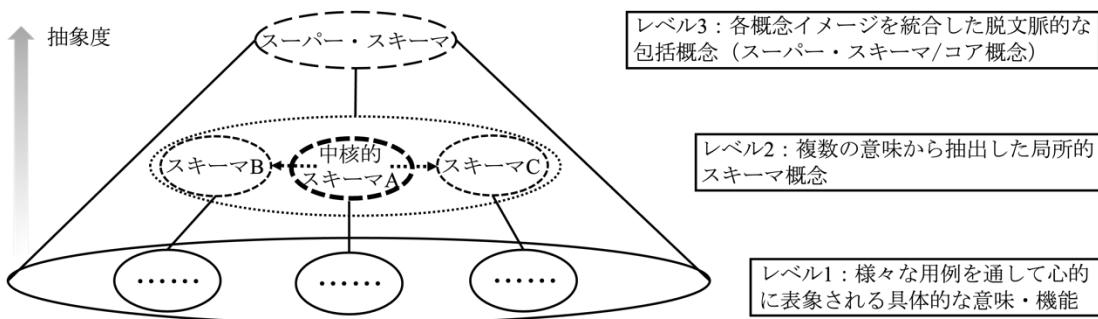


図3-6では、3つの概念レベルが集積されている。下から上に上がるにつれて抽象度が上がり、スキーマの段階性が見られる。概念レベル1は、具体的な意味レベルのことである。語に関する様々な用例を通して心的に表象される意味は、多義語の個々の別義・意味として認定される。いわゆる、複層的意味空間である円錐形の底面にあたる。語の中心義とそこからの拡張的意味はこの概念レベルの意味空間に存在する。レベル2は、スキーマレベルのことである。レベル1の具体的な意味・機能に共通した概念イメージが抽出され、その中でも意味が類似したものがカテゴリー化された結果、概念レベル2の個々の局所的スキーマとなる。これらの局所的スキーマのうち、スキーマAのような中核的なプロトタイプ・カテゴリーと、そこから拡張したスキーマBとCのような、より周辺的なカテゴリーが存在している。概念レベル2は、円錐形の中部にあたる。概念レベル3も同様に、スキーマレベルのことであるが、局所的スキーマではなく、スーパー・スキーマである。概念レベル2における個々の局所的スキーマから、語の意味特徴を維持するのに必要な共通性が抽出され、これが1つの脱文脈的な包括的概念となる。いわゆる複層的意味空間の円錐形の頂点に相当する。

本研究は以降、第4章と第6章で、この3段階の複層的円錐形の意味空間を踏まえ、多義語の各レベルの意味スキーマを同一の複層的な意味空間上に可視化し、分離動詞の多義構造を解明する。

### 3.3 マクロ事象の概念構造と事象統合の類型論

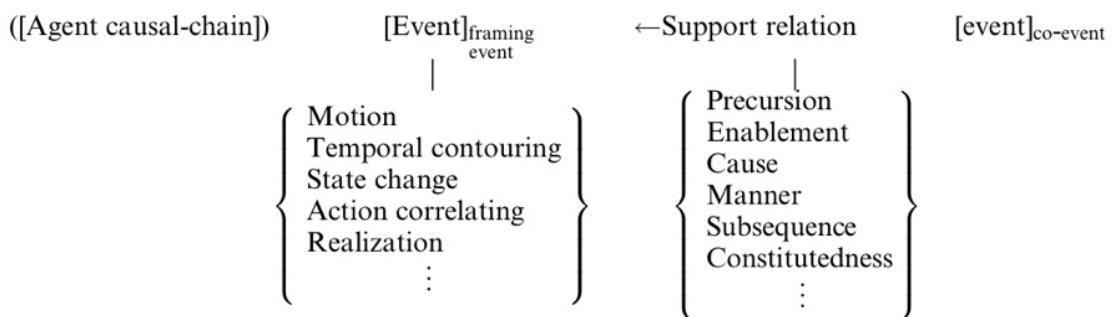
先に触れたように、本研究の考察対象である分離事象は、状態変化と位置変化という2つの下位事象を含む複合的事象である。次に、複合事象のメカニズムを解明するためのTalmy (2000b) のマクロ事象の概念構造について述べる。

Talmy (2000b) は、複数の下位事象を統合して单一の高次事象または複合事象 (complex event) とすることを「事象統合 (event integration)」と定義している。事象統合のプロセスによって、複数の事象が概念的に統合された事象の複合体は、「マクロ事象/マクロ・イベント (macro event)」と呼ばれる。マクロ事象は、(4) のように定義づけられる。また、図 3-7 のような概念構造を持つと考えられる。

- (4) there is a fundamental and recurrent category of complex event that is prone to conceptual integration and representation by a single clause, a type here termed a macro event. (Talmy 2000b: 216)

(複合事象には基本的で頻繁に見られるカテゴリーがあり、それは概念的に統合され单一の節によって表示される傾向がある。そこではそのタイプをマクロ事象と呼ぶ。) (Talmy 2000b: 216, 出水 2012: 31 による訳)

図 3-7 マクロ事象の概念構造 (Talmy 2000b: 221)



- (4) の定義からわかるように、マクロ事象では、本来は異なる節で表現される複数の事象が複合事象として合成され、单一の節で表現される傾向が見られる。図 3-7 のように、マクロ事象は基本的に 2 つの部分から構成される。事象全体の中心的内容と幅を決定する事象は、枠付け事象 (framing event) または主事象と呼ばれる。主事象の構成要素として、「図 (figural entity)」、「地 (ground entity)」、「図が地を活性化するプロ

セス (activating process)」、「図と地の特定の関係付け (particular relationship)」の 4 つが挙げられる。この中で、図と地の特定の関係付けは、主事象における中核的スキマとして、図がどのような方向へ変化するかを表し、事象の経路 (path) とも呼ばれる。一方、マクロ事象における主事象以外の事象は、従属事象 (co-event) または副事象と呼ばれる。主事象と副事象の間に何らかの支持関係という関係付けが存在する。「先行 (Precursion)」、「前提条件 (Enablement)」、「原因 (Cause)」、「様態 (Manner)」、「後行 (Subsequence)」、「構成 (Constitutedness)」などによって支持関係が具現化される。副事象はその支持関係を通して主事象に対する空所補充 (fill in)、敷衍 (elaborate)、追加 (add to)、動機づけ (motivate) という機能を果たすことで、マクロ事象全体を精緻化する。

また、マクロ事象の下位分類には、移動 (Motion)、状態変化 (Change of state)、時間形 (Temporal contouring)、行為相関 (Action correlating)、行為の実現 (Realization) という 5 つの種類が含まれる。この 5 つの種類の事象の中で、Talmy (2000b)において一番分析の焦点となったのは、(5) のような移動と (6) のような状態変化である。

- (5) a. The rock went down the hill, rolling in the process/the while.

「石は坂から落ちたが、途中では転がっていた。」

- b. The rock rolled down the hill.

「石は坂から転がり落ちた。」

- (6) a. The candle went out because something blew on it.

「ろうそくが消えたのは、何かが吹きつけたからだ。」

- b. The candle blew out.

「ろうそくが吹き消された。」

(5a) では、「石が坂から落ちた」事象は主節で、「石が転がった」事象は従属節で表される。それに対し、この 2 つの事象は、(5b) では、この 2 つの事象は、1 つの移動主体の多角的側面・下位事象として、单一の節でマクロ事象として表現されている。「石が坂から落ちた」事象は移動の事実を表し、前置詞 *down* (落ちる) によって主事象を表現する。「石が転がった」事象は移動の様態を表し、動詞 *roll* (転がる) によって副事象を表現する。主事象と副事象の間に、様態という支持関係 (support relation) が捉

えられる。(6a) では、「蝋燭が消えた」事象は主節で、「蝋燭を吹いた」事象は従属節で表現される。(6b) は、この 2 つの節の表す事象が 1 つマクロ事象の下位事象として統合されている。その中で、前置詞 *out* (消える) によって表される「蝋燭が消えた」事象は状態変化の事実を表し、主事象に当たる。動詞 *blow* (吹く) によって表される「蝋燭を吹いた」事象は、変化の原因であり、副事象に当たる。

Talmy (2000b) は、事象統合とマクロ事象の概念構造を踏まえ、「事象統合の類型論 (typology of event integration)」を提案している。どの要素が動詞（語幹）に語彙化されるかという語彙レベルの観点に基づく「語彙化類型論 (typology of lexicalization)」とは異なり、「事象統合の類型論」は、文の構成というレベルの観点から、複数の下位事象を含む高次の複合事象がどのように統合されて单一の節で表現されるか、主事象の中核的スキーマである「経路」がどの形式で表現されるかに注目している。「事象統合の類型論」の観点からは、世界の諸言語は、動詞枠付け言語 (verb-framed language) と付随要素枠付け言語 (satellite-framed language) に二分化される。以下の (7) と (8) を参照されたい。

- (7) a. La botella entró flotando a la cueva, 【スペイン語】

the bottle entered (MOVED-in) floating to the cave

「ボトルは浮きながら洞窟に入った。」

- b. El hueso se salió de su sitio de un tiron.

the bone exited (MOVED-out) from its location from a pull

「骨が引っ張られて元の位置から抜けた。」

- (8) a. The bottle floated into the cave. 【英語】

「ボトルは洞窟の中に漂っていった。」

- b. The bone pulled out of its socket.

「骨が元の位置から外に引き抜かれた。」

動詞枠付け言語は、中核的スキーマである「経路」が動詞によって表現される言語類型である。(7) は、動詞枠付言語に当たるスペイン語の例である。この経路は動詞 *entró*、*se salió* によって表されている。スペイン語のほかに、日本語、フランス語が動詞枠付け言語であると考えられる。それに対し、付随要素枠付け言語は、「経路」が動

詞以外の要素、例えば、不変化詞、接頭辞、接尾辞、複合動詞の後項動詞などで表される。(8) は、付隨要素枠付け言語に当たる英語の用例である。この経路は、不変化詞 *into, out* によって表されており、動詞は動作の様態を表現している。英語と同様に、中国語、ドイツ語も付隨要素枠付け言語として扱われている。

しかし、事象統合の類型論は音声言語のみを考察対象としたものであり、すべての言語データを網羅的に収集した上で導き出されたものであるとは言えない。倪 (2015: 140) によれば、中国手話は、動詞枠付け言語と、付隨要素枠付け言語のどちらにもあてはまらず、中国手話が類型論的にどのような特徴を持つかは明らかにされていない。また、中国手話だけではなく、すべての地域にある手話言語に関して、各要素は文中でどのように言語化されるかに関する研究は管見の限り非常に少ない。次節では、手話言語、特に本研究の対象言語である中国手話の理論的背景について述べる。

### 3.4 手話言語と中国手話

#### 3.4.1 手話言語研究の経緯と自然言語としての位置付け

従来から、理論言語学は、主に音声言語を対象とした研究によって発展された分野であるとされる。近年、手話の言語的位置の確立に伴い、手話言語 (Sign Language) の研究が盛んでおり、言語に「音声」が必ずしも必須な要素とは限らない点が明らかになりつつある。手話言語とは、「目で見る生活様式に基づく文化（ろう文化）」を備えたろう者・難聴者のコミュニティで用いられる視覚言語を指す。長年にわたる言語的・文化的抑圧にもかかわらず、ろう者が集まることができる地域では独自の文法的性質を持つ手話言語が自然に確立し、継承してきた（松岡 2023: 2）。次に、手話が自然言語として確立した手話言語研究の経緯を概観する。

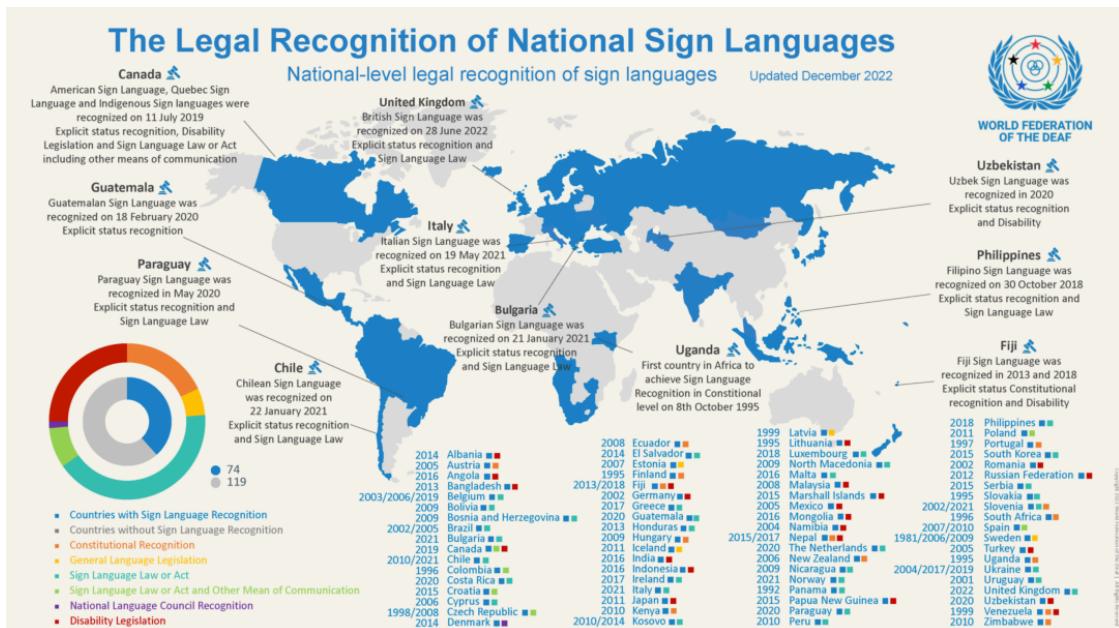
人間の言語は、大まかに分けると、自然言語と人工言語の 2 つがある。そのうち、自然言語とは、話者集団のコミュニケーションによって自然に形成された、一定の文法性を備えた人間の言語である。音声言語と比べると、手話が自然言語として研究される歴史はあまり長くはないと言える。「手話が自然言語であること」という主張について、先行研究には主に 3 つの論拠が挙げられる。

1 つ目の論拠は、言語学の立場では、手話はその地域にある音声言語とは異なる音韻・語彙・文法構造を持つということである。特に、Stokoe et al. (1965) は、アメリカ

手話を対象に、ミニマルペア（mini pairs）の作成を通して、手話には、音声言語の音素のような、弁別性を持つ音韻要素が存在することを明らかにした。これにより、「位置（location）」、「手型（handshape）」、「動き（movement）」という3つの音韻的パラメータ（phonological parameters）が抽出されており、その後に「手のひらの向き」がもう1つの音韻的パラメータとされる立場もある。弁別性を持つ音韻的要素がある点は、手話が聴者の発話に伴うジェスチャー（co-speech gesture）と全く異なる性質を持つと有効に証拠づける。2つ目の論拠は、言語習得の立場では、ろう児が特別な訓練なしに手話を母語として習得できるということである。Senghas（2003）などの先行研究によれば、手話を母語とする乳幼児と音声言語を母語とする乳幼児が言語発達と習得の段階でほぼ一致する点が解明される。そして、3つ目の論拠は、脳科学の立場では、手話が音声言語と類似した脳処理の仕組みを持つということである。堀田・酒井（2007）によれば、人間がジャスチャーとハンドマイムのような動作を表示する際に、右脳で脳処理を行う。音声言語と手話言語という自然言語を用いる際に、左脳で脳処理を行う。また、脳内の言語中枢部であるフローカー野やウェルニッケ野に関して、手話言語が音声言語と一致している特徴が解明される。

以上の3つの研究分野の発展により、現在、手話が自然言語であるという知見が確立されている。しかし、手話がジェスチャーやハンドマイムであるという誤解、手話が同じ地域にある音声言語に従って作られた手指コミュニケーション法と混在して認識されているといった社会的現象が見られる。また、高嶋（2020）によれば、現在、多くの手話言語は危機言語の状態にある。加えて、手話言語の認識度に関して地域に大きな差が存在する。この数十年、手話言語の研究成果が欧米各国を中心に蓄積されている。図3-8のように、2022年度まで世界中74ヶ国が手話の言語的位置を法制化している。しかし、中国手話（Chinese Sign Language）は、法制化の面でも研究の面でもまだ発展の途上にある。中国の社会において、手話が自然言語であるという認識が十分に広がっていない。次節では、主に中国手話の言語学における理論的知見を中心に説明する。

図 3-8 各国の手話言語の法的認知<sup>12</sup>



### 3.4.2 中国手話における CL 表現

本研究では、手話言語の文法的体系に関して、主に、分離事象の語彙カテゴリー化と言語化に関わる「CL (classifier) 表現」という文法的形式を説明する。

世界各国で使用される手話言語の文法的体系には、CL 表現という手話の独特の表現形式が存在する。CL 表現は、「ものの動きや位置、形や大きさなどを手の動きや位置、形に置き換えるものである」と定義される（木村・市田 2014: 26）。この表現形式は、「CL」と名付けられる理由は、音声言語における名詞の形状や意味的なカテゴリーを示す類別詞と類似するためである。CL 表現には、主に「事物全体 CL (object classifier/whole entity classifier) 表現」、「SASS (size-and-shape)」（中国手話言語学において、「形状 CL 表現」とも呼ばれる。本研究は、以降、「形状 CL 表現」という呼び方を採用する）、「操作 CL (handling classifier) 表現」という 3 つの形式パターンがある。

また、各地域の手話言語の CL 表現は必ずしも完全に一致しているとは限らず、その地域の手話話者による事物の特徴の捉え方を示す。ここで、主に中国手話の CL 表現を例に、各 CL 表現の形式の特徴を説明する。

<sup>12</sup> 世界ろうあ連盟 (World Federation of the Deaf) によって作成されている。  
出典：<https://wfdeaf.org/news/the-legal-recognition-of-national-sign-languages/>

まず、「事物全体 CL 表現」とは、人や物の全体によって決められる手型の表現である。「事物全体 CL 表現」は、手話単語と異なっている。以下の (9) を参照されたい。

(9) a.



「車」の手話単語

b.



「車」の事物全体 CL 表現

(9a) は手話単語としての「車」であるのに対し、(9b) は「車」の CL 表現の形式であり、中国手話の「CH」という手型によって表される（中国手話の指文字に関しては、付録 4 を参照されたい）。

また、「事物全体 CL 表現」を動かすことで、物がどのような事態の局面にあるかを表すことができる。

(10) a.



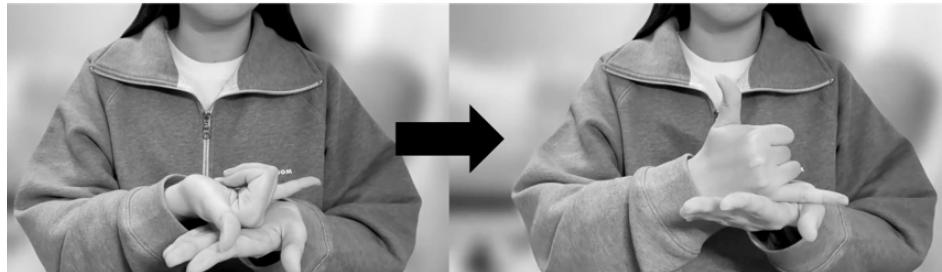
「人が座っている。」

b.



「人が寝ている。」

c.

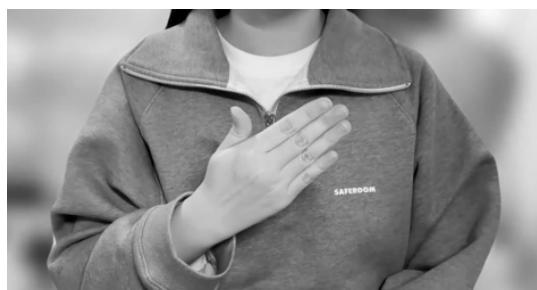


「人が起きている。」

人間の「事物全体 CL 表現」は、中国手話の手型「6」で表示される。(10a) と (10b) は、その手型を異なる様態のように動かすことで、それぞれ「人が座っている」、「人が寝ている」、寝っている状態から座っている状態に変わるという「人が起きている」の局面を表す。

それに対し、「形状 CL 表現」は、事物の形状、大きさ、材質などを示す表現である。例えば、「包丁」と「ナイフ」は視覚的な形状や大きさが異なるため、(11a) と (11b) のように、それぞれ「U」手型と「H」手型で表示されている。

(11) a.



「包丁」の形状 CL 表現

b.



「ナイフ」の形状 CL 表現

また、「事物全体 CL 表現」と異なり、「形状 CL 表現」は物全体の形状的特徴を表すだけではなく、物の部分的特徴を示すことができる。このため、1つの対象は、複数の形状 CL 表現を持つ可能性がある。

(12) a.



「鶏の口」

b.



「鶏の足」

(12) のように、「鶏」の形状 CL 表現は、(12a) の「鶏の口」、(12b) の「鶏の足」のどちらかの形式によって表すことができる。その一方、異なる事物は、同一の形状 CL 表現を共有する可能性もある。例えば、「猫の頭」、「犬の頭」、「うさぎの頭」は、いずれも (13) のように、「T」手型で表示することができる。

(13)



「猫/頭/うさぎの頭」の形状 CL 表現

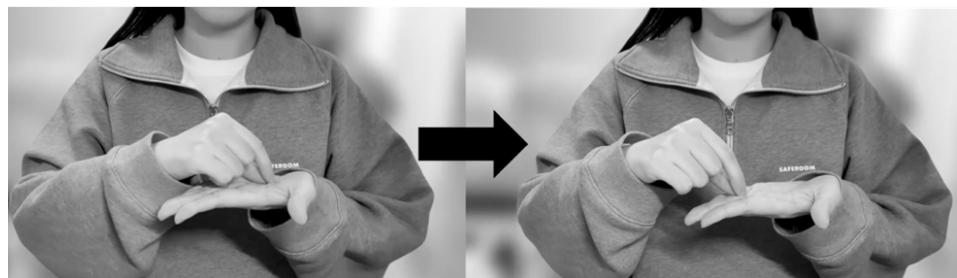
一方、もう 1 つの CL 表現として、「操作 CL 表現」は、動作主体が事物を操作する動作の様態、道具などの情報を示す。「動作 CL 表現」とも呼ばれる。Benedicto and Brentari (2004)、Zwitserlood (2012) などによれば、「操作 CL 表現」が含まれる動詞は、他動詞の性質を持つと考えられる。以下の (14) と (15) を参照されたい。

(14) a.



「ペン」の形状 CL 表現

b.



「ペン」の操作 CL 表現

(14a) は「ペン」の形状 CL 表現であり、「ペン」その物を指す。それに対し、(14b) は、「ペン」の操作 CL 表現であり、動作主体はどのようにペンを使って字を書くという動きを表す。「ペン」の操作 CL 表現には、移動物の「ペン」が語彙化されるため、「字を書く」という事態の言語化に関して、「ペン」の形状 CL 表現を表示する必要がないと考えられる。一方、(15) のように、形状 CL 表現と操作 CL 表現を同時に表示

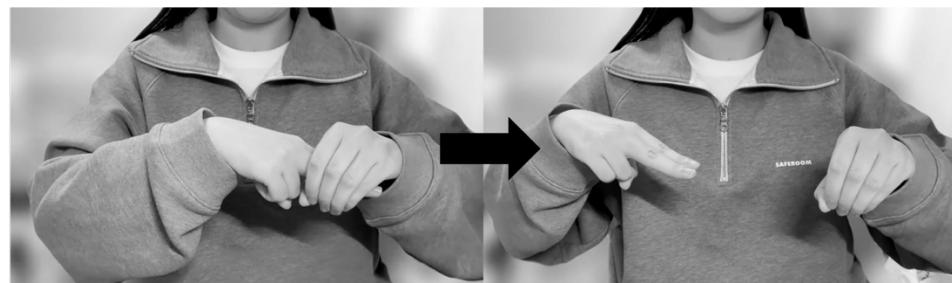
する場合がある。

(15) a.



「ナイフ」の形状 CL 表現

b.



「ナイフ」の操作 CL 表現

(15a) は「ナイフ」の形状 CL 表現であり、「ナイフ」の形状や大きさを示す。(15b) は、「ナイフ」の操作 CL 表現であり、動作主体はどのようにナイフを鞘から取るという動きを表す。このような事態を表現する際に、「ナイフ」の形状 CL 表現という「H」の手型を同時に表示しないと、移動物の対象が明確ではないと考えられる。このため、(15b) では、非利き手で場所/背景の「鞘」を表示し、利き手で移動物/焦点である「ナイフ」の形状 CL 表現を表示し、その形状 CL 表現の手型を動かすことで、「ナイフ」の操作表現が表されている。

以上の通り、本節は、中国手話の 3 つの CL 表現の特徴とそれらが言語化に関する具体的な機能・役割を説明した。第 7 章では、これらの CL 表現は、分離事象の語彙カテゴリー化と言語化に関してどのような役割を果たすのかを分析する。

### 3.5 本章のまとめ

本章は、本研究の理論的枠組みと必要な道具立てを含めた理論的背景を 4 つの節に分けて説明した。

1つ目は、本研究の考察対象全体に関わる、最も重要な理論的枠組み、Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルである。また、本研究は、3.1 節において提示した通り、分離事象の性質について考察するにあたり、改訂版の力動性モデルを提案する。続く第 4 章から第 6 章はいずれも力動性モデルに基づき、各言語における分離動詞と分離事象の力的関係を解明する。

2つ目は、意味構造の可視化に関する理論的枠組み、Langacker (1987, 1991) によって提唱されたスキーマティック・ネットワークモデルと、田中 (1990) によって提唱された多義語の円錐形の意味空間である。本研究は、この円錐形の意味空間を意味の抽象度に応じて 3 つの意味レベルに分けて精緻化した上で、第 4 章と第 6 章は、この複層的意味空間を、多義的分離動詞における各レベルのスキーマの記述と意味構造の可視化に適用する。

3 つ目は、複合事象の事象統合のメカニズムに関する理論的枠組みである、Talmy (2000b) のマクロ事象の概念構造と事象統合の類型論である。第 5 章では、この概念構造を用いて、分離事象における下位事象はどのように関係づけられるかを分析する。

4 つ目として、本研究の対象言語である手話言語、特に中国手話の理論的知見を紹介した。手話が自然言語として認められることの根拠のほか、音声言語とどのような違いがあるか、手話言語に特有の CL 表現とはどのようなものなのかを説明した。これらの手話言語の知見を踏まえ、第 7 章は、音声言語と手話言語に共通する分離事象の類型化のモデルを提案する。

## 第4章 日本語の分離動詞の多義構造研究

### 4.1 はじめに

本章は、日本語の分離動詞「切る」を研究対象として取り上げ、「切る」の各意味・機能およびその多義構造を考察する。

語の多義に関して、糸山（2021）は、意味の自立性<sup>13</sup>と関連性の観点から、多義語を連続的なものと見做し、「単義語寄りの多義語」、「典型的な多義語」、「同音異義語寄りの多義語」という分類を提唱した。この3つのタイプの多義語のうち、「典型的な多義語」は、意味の自立性と意味間の関連性がどちらも強い語である（例：「あがる」）。それに対し、「単義語寄りの多義語」は、各意味の自立性が弱いのに対し、関連性が強い語である（例：「教える」）一方、「同音異義語寄りの多義語」は、自立性の強い複数の意味を有するが、関連性が弱い語である（例：「たずねる」）<sup>14</sup>。「切る」は、複数の意味を持つとともに、個々の意味が強い自立性を有する上で、意味間の関連性も強い動詞であるため、糸山の言う「典型的な多義語」と認められる。

また、従来の研究では、「切る」が分断・破壊事象を表す使役的状態変化動詞として、対象の使役的状態変化のみを表すと捉えられる場合が多い。しかし、後述のように、実際の使用状況において、「切る」は状態変化と位置変化を統合した分離事象を表現することができる。このため、「切る」の意味構造において、分離事象と分断・破壊事象

---

<sup>13</sup> 意味の自立性は定着度と慣習性という観点から捉えられる概念である。自立性が高いとみなされる意味とは、個々の母語話者がよく知っていて、かつ言語共同体において慣習性が高い意味のことである（糸山 2021: 5）。

<sup>14</sup> 糸山（2021: 30–53）は、「単義語寄りの多義語」の例として、「あがる」という動詞が挙げられる。「あがる」は、「舞台にあがる」、「風呂からあがる」、「川の水位があがる」、「火の手があがる」、「中学にあがる」などの意味用法を持つ。これらの意味を表す「あがる」はそれぞれ対応する反義語がある。各意味の自立性と関連性の両方とも認められる。「単義語寄りの多義語」を説明する際に、「教える」という動詞が取り上げられる。「教える」は、「英語/機械の使い方/人生の意味を教える」のような学問・技術・価値観を教授する意味、「名前/電話番号/アドレス/いい店を教える」のような「簡単な情報を相手が知るようにする意味を持つ。しかし、この2つの意味は、<相手が何らかの事柄を知るようにする>というスキーマで共通する。個別の意味の関連性を示すスキーマ的意味は容易に想起でき自立性が高いのに対し、「教える」の2つの個別の意味は自立性が低いものである。「同音異義語寄りの多義語」の例として、「たずねる」は挙げられる。「たずねる」は「わからないところを先生にたずねた（尋ねた）」という質問の意味と、「作家のX氏をホテルにたずねた（訪ねた）」という訪問の意味を持つ。この2つの意味は、<人間がある対象を求めて、その対象が存在すると思われるところに働きかける>というスキーマで共通する。しかし、このスキーマ的意味は想起しにくい一方、2つの個別の意味は容易に想起できる。このため、「たずねる」は各意味の自立性が高く、意味間の関連性が感じられにくい語である。

の境界線が曖昧になり、これら 2 つの事象を包括した形で意味がカテゴリー化される。また、日本語の他の分離動詞に比べて、「切る」は分離事象としての概念化が典型的であり、意味の多義性と使用範囲の広さが際立っている。「切る」と同じような広い意味カテゴリーを持つ語は、他の言語における分離動詞を含めても、観察される例は決して多くはない<sup>15</sup>。

「切る」のように、意味用法が極めて豊かな多義語の各意味がどのようにカテゴリー化されるか、また、動詞「切る」の主語項、目的語項などとの共起制限はどのように解釈されるか、更なる検討が必要である。このため、本章は、課題 1 「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」(1.2 節を参照) に関して、「切る」の個々の意味の関連性と有契性、そして、その類義語(分断・破壊事象のみを表す動詞「割る」、「裂く」)との意味的境界線について考察する。これにより、「切る」の意味カテゴリー化について、カテゴリーの内部、外部の両面から考察を試みる。課題 1 に取り組むにあたってのリサーチクエスチョン (RQ) は以下の通りである。

#### 課題 1: 「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」

RQ1 「切る」の意味はどのようにカテゴリー化されるか。 (4.3 節)

- 1.1 「切る」の意味とスキーマはどのように認定されるか。
- 1.2 複数の意味の相互関係はどのように明示できるか。
- 1.3 力動性モデルに基づいた「切る」の多義構造はどのように解明できるか。

RQ2 認知言語学の理論に基づいた分析の心理的実在性は検証可能か。 (4.4 節)

- 2.1 意味分類の心理的実在性は検証可能か。
- 2.2 意味記述の心理的実在性は検証可能か。
- 2.3 母語話者と学習者における心理的実在性はどのような違いがあるか。

RQ3 「切る」はその類義語の間の使い分けはどのようになされているか。 (4.5 節)

- 3.1 「切る」と「割る」、「裂く・割く」の意味特徴には、どのような違いがあるか。
- 3.2 母語話者と学習者の間で、「切る」と「割る」、「裂く・割く」のコロケー

<sup>15</sup> 洪 (2020: 81) によれば、日本語、中国語、韓国語の各言語において、使用範囲が最も広い「切る」、「자르다 (caluta)」、「切 (qie)」を比べると、日本語の「切る」と韓国語の「자르다 (caluta)」は使用範囲が広く多くの場面で使用されるのに対し、中国語の「切 (qie)」は使用範囲が狭く、事象を細分化する傾向がある。

ションの使用には、どのような違いがあるか。

3.3 母語話者と学習者の間で、「切る」と「割る」、「裂く・割く」の使い分けには、どのような違いがあるか。

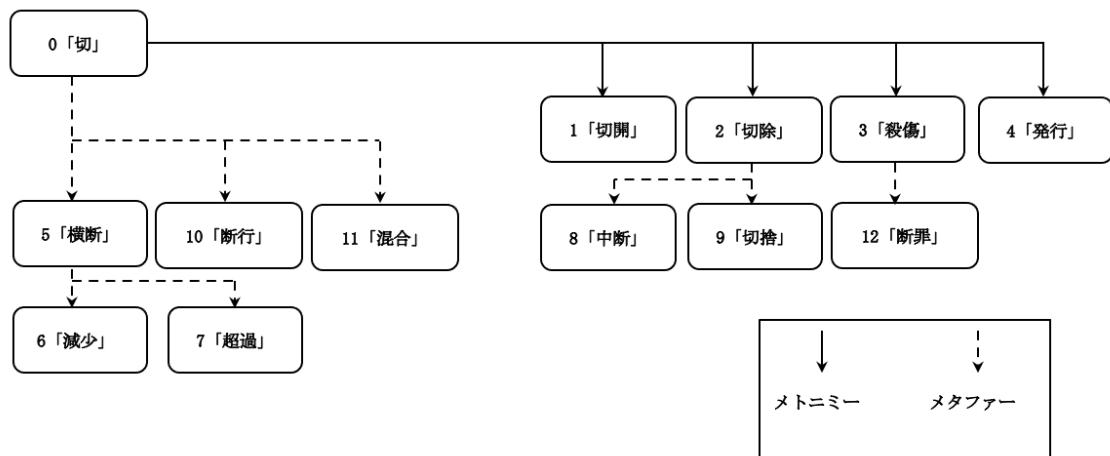
## 4.2 多義性に関する研究をめぐる諸問題と本研究の立場

### 4.2.1 2つのカテゴリー観に基づく「切る」の多義構造分析

先行研究における多義語のカテゴリー化に関する考え方として、プロトタイプ・カテゴリー観とスキーマ・カテゴリー観の2つの立場が挙げられる。以下、本節はこの2つのカテゴリー観に基づく「切る」の多義性に関する先行研究を紹介し、その問題点を述べる。

まず、プロトタイプ・カテゴリー観に関して、森山（2012, 2015）は、個々の意味とその間の拡張経路を非常に詳細に分析し、図4-1の通り、放射状ネットワークモデル（radial (polysemic) network model）に基づいた「切る」の意味構造を提案した。その構造において、「切る」の複数の意味は無秩序に位置するわけではなく、ネットワークの中心的な位置を占めるプロトタイプ的意味（図4-1の意味0「切」）が認定されることを前提に、そこから何らかのメカニズムによって、プロトタイプ性の異なる典型的意味、非典型的意味、周辺的意味に拡張がなされると主張した。

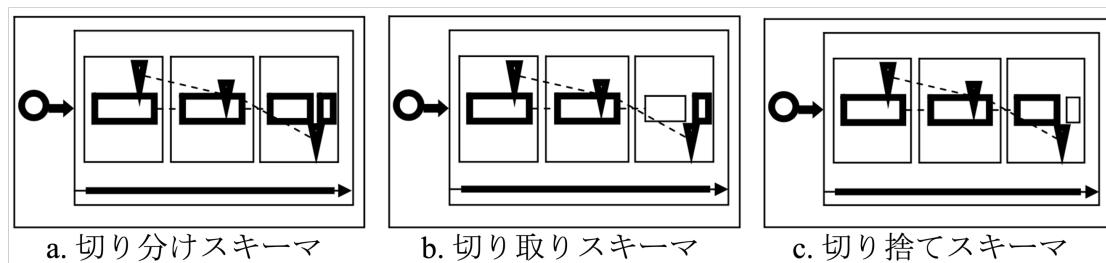
図4-1 「切る」の放射状ネットワークモデル（森山 2015: 152）



一方、栗田（2018）は、スキーマ・カテゴリー化という概念を「切る」の意味分析に

応用している。「切る」の各意味間の類似性に基づき、図4-2の「切り分けスキーマ」、「切り取りスキーマ」、「切り捨てスキーマ」という3つの意味カテゴリーを記述している。このアプローチでは、個々の意味間の関連性よりも、むしろ意味同士が形成するスキーマ間の有機性が重要視される。また、スキーマとの合致度によってカテゴリーの成員を判断するため、より柔軟に語の意味情報を処理することができ、「切る」の周辺的意味に対して、文脈に応じたカテゴリーの変容を許すことになる。

図4-2 「切る」の3つのイメージ・スキーマ（栗田 2018: 157–159を元に作成）



「切る」に関する上述の分析は、森山（2012, 2015）と栗田（2018）のどちらも、さらに検討する余地があると考えられる。特に、2つの問題点が指摘できる。

1つ目は、プロトタイプとスキーマ、どちらのカテゴリー観に基づいて「切る」の多義構造を解明すべきであるかという点である。森山の放射状ネットワークモデルでは、「切る」のカテゴリー境界や周辺的用法の判断の際に可変性を欠き、カテゴリー化の動的側面が捉えられない。一方、栗田のスキーマ的意味記述は、あくまで局所的スキーマであり、「切る」の意味全てを総括できるのか、疑問が生じる。早瀬・堀田（2005）によると、上記の2種類のカテゴリー化は、共に自然言語の合理的記述に不可欠な認知プロセスであり、統合された1つの現象の異なる側面を反映しているとされる。従って、プロトタイプとスキーマの両面から、「切る」の具体的概念と抽象的概念を複合的に位置付けるべきである。

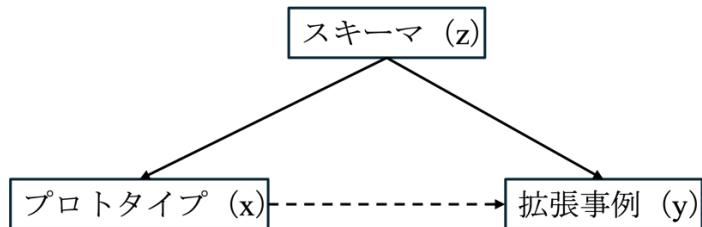
2つ目は、動詞と主語項、目的語項の意味関係が明示化されていないという点である。どちらの先行研究も、動詞の個々の意味がその語彙に内在すると考えて「切る」の多義性について検討しているが、動詞と他の項との関係に十分な注目が払われていない。しかし、動詞は、指示機能に加え、2つの名詞句を意味的に結びつけるという関係機能（relational function）を持つ（田中 1990: 12）。「切る」を軸としそれを取り巻く

主語名詞と目的語名詞の意味的特徴も考察に加えることで、項の意味関係を視野に入れた動詞の意味構造を説明する必要がある。

#### 4.2.2 本研究の立場と力動性モデル

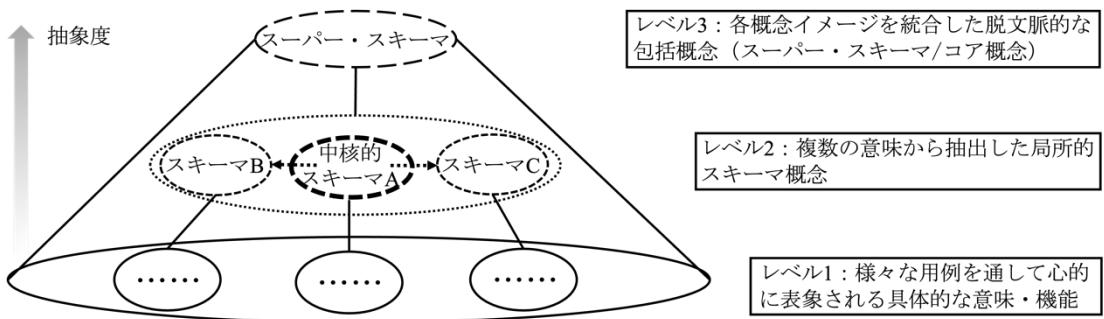
先行研究の問題点を解決するため、本研究は、Langacker (1987, 1991) が提唱した 2 つのカテゴリー観を融合させるスキーマティック・ネットワークモデル (schematic-network model、以下、SNM)、および田中 (1990) の円錐形の意味空間表示法に基づき、「切る」の多義構造を捉える。

図 4-3 スキーマティック・ネットワークモデル (Langacker 1991: 271 を元に作成)



前者の SNM (図 4-3) では、ネットワークにおける各々の節点 ( $x, y, z$ ) が、多義語の自立性を有する意味を表し、節点同士を関係付ける直線は、垂直方向の関係性にあたる「スキーマ関係 (schematicity)」と水平方向の関係性に当たる「拡張関係 (extension)」という 2 つのカテゴリー化関係 (categorizing relationships) を表す。「スキーマ関係」は、比喩の一種であるシネクドキーと類似した性質を持ち、意味間の特殊化または抽象化という関係性を表す。具体的には、一方の意味が他方の意味を詳細化したものであり ( $z \rightarrow x$ )、他方の意味が一方の意味を抽象化したものである ( $x \rightarrow z$ )。この 2 つの意味の指示対象には矛盾が生じない。それに対し、拡張関係は、類似関係を含む。すなわち、一方の意味が何らかの意味特徴において他方の意味に類似している ( $x \rightarrow y$ )。2 つの意味の間に、類似点が存在しているが、指示対象に不一致が存在し、異なる意味として認定される。

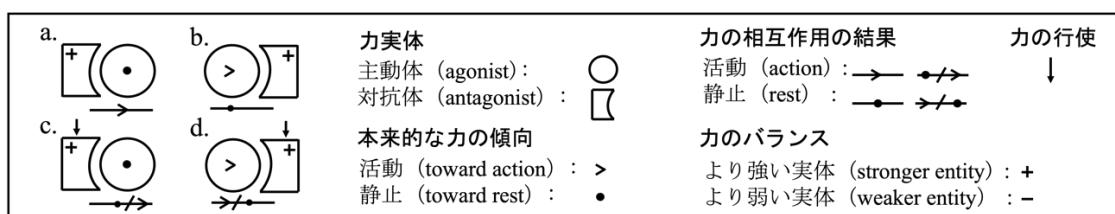
図 4-4 多義語の複層的意味空間（図 3-6 を再掲）



後者の意味空間表示法（図 4-4）では、3 つの概念レベル（意味・機能、局所的スキーマ、スーパー・スキーマ）が集積され、下から上に上がるにつれて抽象度が上がるような、段階的なスキーマ構造として多義構造を示す。意味空間表示法を用いることで、SNM における意味の節点とカテゴリー関係を立体空間でより明確に示すことができる。さらに、糸山（2021）では、SNM の優れた点を継承するとともに、概念理解に必要な背景的知識構造である「フレーム（frame）」を多義語分析に導入している。本章では、「主語名詞+目的語名詞+切る」の構文を想定し、分離動詞「切る」において背景化された主語項と目的語項における力的関係のフレーム的知識に基づいて考察する。その上で、本章では力動性モデルを用いて、「切る」の各レベルのスキーマについて検討する。

力動性（Force Dynamics, Talmy 1985a, 2000a）とは、力という観点から見た個体の相互作用を示したものである。力構造において、2 つの対立した力実体のバランスによって相互作用の結果状態が異なる。本来的に活動か静止の傾向をもつ存在は主動体（agonist）、主動体に対抗する力を加える存在は対抗体（antagonist）と呼ばれる。以下、力動性モデルを図示する。

図 4-5 Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルの図式（図 3-1 を再掲）



- (1) a. The fan (ANT) kept the air (AGO) moving.  
     (扇風機が空気を動かし続けた。)
- b. The brace (ANT) kept the logs (AGO) from rolling down.  
     (留め金が丸太が転がり落ちるのを防いだ。)
- c. The piston (ANT) made the oil (AGO) flow from the tank.  
     (ピストンが油をタンクから流れ出させた。)
- d. The shutoff valve (ANT) stopped the gas (AGO) from flowing out.  
     (遮断バルブがガソリンが流れ出すのを止めた。)

(松本 2003: 60-64)

前章の 3.1 節で既に詳細に紹介したように、動作と動作の結果の生じる時間によつて、力動性モデルは、KEEP 型 (a, b) と MAKE 型 (c, d) という 2 つの基本的なタイプに分けられる。図 4-5 の a, b に当てはまるのは、(1a) と (1b) である。(1a)、(1b) では、主動体、すなわち目的語項 (空気、丸太) に対して、対抗体に当たる主語項 (扇風機、留め金) から継続的に強い力が加わることで、初期傾向と逆の傾向性が保持される。このような KEEP 型の事象は、使役と使役の結果が同時に生じており、拡張使役 (extent causation) と呼ばれる。一方、図 4-5 の c, d に該当する、(1c) (1d) では、対抗体 (ピストン、遮断バルブ) から各主動体 (油、ガソリン) に力が加わり、力が行使される間に、主動体の状態に変化が生じる。MAKE 型の事象は、使役行為をきっかけとした変化のプロセスが生じるため、開始時使役 (onset causation) と呼ばれる。以上の観点から考えると、本研究の考察対象「切る」は、目的語項の状態変化を起こす点において、後者の開始時使役のパターンにあたると考えられる。

上述の力動性モデルを分離動詞「切る」の多義性分析に応用する理由は、次の 2 点である。1 点目は、「切る」が生起する文の構造とそれが表す事態における力的対抗との対応関係を捉えるためである。「切る」が使用される構文では、動作主 (動作・エネルギーを与えるもの) と被動作主 (動作・エネルギーを被るもの) の 2 つの実体が存在し、それぞれを力的対抗関係にある対抗体と主動体として捉えることができる。2 点目として、「切る」という分断・破壊事象には、「力の行使」、「力のバランス (力の強弱関係)」、「力による状態変化」など、力動性モデルにおける力的要素が関与しているためである。このため、「切る」の様々な多義的意味について考察するにあたっては、

力的認知による分析が有効であると考えられる。上記の理由で、本章は力動性モデルに基づき、動詞「切る」を軸とした主語項と目的語項との関係を念頭において考察を進める。

### 4.3 力動性モデルに基づく「切る」の意味分析

次の RQ1 について解明するために、本節は、力動性モデルを「切る」の意味分析に応用する。

RQ1 「切る」の意味はどのようにカテゴリー化されるか。

- 1.1 「切る」の意味とスキーマはどのように認定されるか。
- 1.2 複数の意味の相互関係はどのように明示できるか。
- 1.3 力動性モデルに基づいた「切る」の多義構造はどのように解明できるか。

#### 4.3.1 「切る」の個別義の認定

本研究は、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）の用例に基づき、意味の自立性を考慮した上で、「切る」の意味を分類する。「切る」の意味は、表 4-1 のように、中心義を含めた 16 個の意味に分類できる。

表 4-1 「切る」の個別義・意味とその記述

パターン	意味	意味記述	目的語 (AGO)	主語 (ANT)
外的 統合性	0. 分断義	鋭利な刃物などの道具で、集中した力で一続きのものを分断する。	植物/材料/料理	人・有生物
	1. 開封義	容器を開封する。	容器の口	人・有生物
	2. 切除義	一続きのものの本体から刃物で(身体の)特定部分を離す。	身体部位/患部	人・有生物
	3. 切取義	発行したり、認証を与える。	切符/書類	人・有生物
	4. 殺傷義	身体を刃物などで傷つける。	敵/身体部位	人・有生物
	5. 創造義	一続きのものを分断したり、切り込みを入れたりすることで、新たな物を作り出す。	形/デザイン/穴類	人・有生物
内的 秩序性	6. 混合義	カードを混ぜる。	カード類	人・有生物
	7. 取捨義	分離された不要な部分を捨てる。	液体/組織	人・有生物
	8. 中断義	関係、時間等の線状の抽象物を断つ。	電気/言葉/関係	人・有生物
	9. 批評義	人・社会の精神的側面を批評する。	世相/政治	人・有生物
物理的 抵抗性	10. 横断義	動作を力強く行い、横切る。	自然界の液体/気体	人/動物/船等
	11. 回転義	進行方向を変えたり、回転を与える。	回転装置/回転路線	人・有生物
	12. 際立義	際立つような動作をする(真正慣用句)。	啖呵/見得 <sup>16</sup>	人・有生物
心理的 抵抗性	13. 突破義	基準・基準値を突破する。	数値(認知上の基準値)	速度/時間/金
	14. 完遂義	継続する行為を完遂する。		
	15. 極度義	物事の程度が極度状態に達する。		

これらの意味のうち、「鋭利な刃物などの道具で、集中した力で一続きのものを分断する」ということを表す意味0<分断義>を、「切る」の中心義とする。瀬戸(2007b)では、多義語の中心義を判断するための9つの基準が挙げられている。

<sup>16</sup> ただし、12<際立義>の主動体は目的語項ではなく、目的語項「啖呵/見得」といった際立つ動作を被る被動作主である。

(2) 多義語の中心義を判断する基準

- i 文字通りの意義
- ii 関連する他の意義を理解する上での前提となる
- iii 具体性（身体性）が高い
- iv 認知されやすい
- v 想起されやすい
- vi 用法上の制約を受けにくい
- vii 意義展開の起点
- viii 言語習得の早い段階で獲得される
- ix 使用頻度が高い

(瀬戸 2007b: 31-61)

多義語の中心義は、必ずしも上記のすべての基準を満たすとは限らない。また、どの基準に依拠するかによって、中心義の認定結果は異なる可能性がある。このため、単一の基準ではなく、複数の基準を総合的に考慮した上で、より多くの基準を満たす意味を中心義として認定すべきである。<分断義>は、この 9 つの基準のうち、少なくとも (i-vii) の 7 つの基準を満たすと言える。他の意味と比べると、より多くの基準を満たすものであるため、「切る」の中心義となる。

続いて、各用法についての意味分析を行う前に、これらの 16 の意味を表す「切る」と共起する名詞に関するコーパス調査を通して、意味の分布と頻度を調べた。具体的なデータ調査の手続きとしては、NINJAL-LWP for BCCWJ（以下、NLB）を用いて「名詞 + を + 切る」というコロケーションに該当する頻度 5 以上の項目を抽出し、共起名詞のタイプを考察した<sup>17</sup>。そのうち「もの」、「こと」、「【一般】」など実質的意味が希薄な語を除き、合計 4,744 個を考察対象とした。ここでは、考察対象の中で性質の類似したものを見出し、各頻度を集計した。結果は表 4-2 のとおりである。

---

<sup>17</sup> NINJAL-LWP for BCCWJ の集計方法では、単純動詞と複合動詞を同時に抽出できないため、コーパス調査の部分では、単純動詞の共起名詞のみを対象とし、表 4-2 における<完遂義>と<極度義>の共起名詞は空欄としておくこととする。

表 4-2 各意味パターンの主要な共起名詞のタイプ・構成比 (NLB に基づく)

パターン	意味	共起名詞タイプ
外的統合性 (1,862/39.24%)	0. 分断義 (14.43%)	植物 : 46% (木、枝、竹、樹木) > 材料 : 23% (糸、紙、材料、線) > 料理類 : 20% (肉、野菜、玉ねぎ、豆腐) > その他 (根元、先、頭、角) : 11% +41
	1. 開封義 (4.06%)	容器の口 (封、皮、お腹、シャッター)
	2. 切除義 (4.96%)	切断可能な身体部位 : 97% (髪、毛、爪) > 患部 : 3% (胃)
	3. 切取義 (1.07%)	切符・書類 (領収書、切符、小切手、伝票)
	4. 殺傷義 (13.64%)	敵・意図的 : 74% (人、敵、侍、人形) > 身体部位・非意図的 : 26% (手、指、アキレス腱、額) +28 +49
	5. 創造義 (1.08%)	形・デザイン : 68% (十字) > 穴類 : 22% (ネジ、溝)
内的秩序性 (1,753/36.95%)	6. 混合義 (0.62%)	カード類 (カード、牌)
	7. 取捨義 (4.76%)	液体 : 97% (水気、油、お湯、汁気) > 組織 : 3% (組織)
	8. 中断義 (28.45%)	電気・電気器具 : 71% (電話、電源、接続、電気) > 言語活動 : 14% > 人間関係 : 13% > 時間類 : 2% (期限)
	9. 批評義 (3.12%)	社会関連 (政治、世相、文化)
物理的抵抗性 (902/19.01%)	10. 横断義 (3.03%)	自然界の液体・気体 (風、空、音、波)
	11. 回転義 (3.90%)	回転装置 : 85% (ハンドル、舵、クラッチ、ステアリング) > 回転路線 : 15% (カーブ、旋回)
	12. 際立義 (12.08%)	際立つ動作 (啖呵、(大) 見得、仁義、しら、火蓋、スタート、口火)
心理的抵抗性 (227/4.78%)	13. 突破義 (4.78%)	数値・基準値 (X 円、X 分、X 度、X メートル、X グラム、X 割、X パーセント)
	14. 完遂義	
	15. 極度義	

表 4-2 についてコーパス頻度の観点から 3 点を指摘する。1 点目は、中心義と中核的意味パターンの典型性である。「切る」の意味のうち、最も頻度が高い用法が <中断義> (28.45%) である。その次は中心義となる <分断義> (14.43%) である。松本 (2009) によると、中心義は「概念的中心性」と「機能的中心性」という二種類の中心性を持っており、両者を兼ね備えた意味は典型的な中心義であり、一方の中心性のみを持つ場合は非典型的な中心義であるとされる。ここで、「概念的中心性」とは、言語話者の概念化の観点から見た中心性である。すなわち、「概念的中心性」を持つ中心義とは、

心的辞書の多義語構造において、他の個別義の派生の基盤となり、概念的に最も基本的な意味に当たるような中心義である。これは、瀬戸（2007b）による基準（ii）, (iv), (vii) と一致する。このような定義に照らし合わせると、＜分断義＞は、「概念的中心性」を持っていると言える。一方、「機能的中心性」とは、言語話者の伝達活動の観点から見た中心性である。換言すると、「機能的中心性」を持つ中心性とは、最も頻繁にアクセスする意味に当たる中心義のことである。しかし、最も頻繁にアクセスする意味の捉え方に関して、用法基盤モデルの考え方のような使用頻度の高さによる判別（瀬戸による基準（ix）にあたる）と、語を聞いた際に話者が最初に思いつくかどうかによる判別（瀬戸による基準（v）にあたる）という2つが挙げられる。この2つの判別方法の結果は一致する場合が多いが、ある語や構文が実際に用いられる際の事例の分布と、母語話者に確認したり実際に例文を作ってもらったりした場合に得られる直観の間には、矛盾が生じることもある（早瀬・堀田 2005）。＜分断義＞は、想起されやすい意味であるが、コーパス頻度が一番高い用法ではないため、「機能的中心性」を持つかには疑問が残る。

2点目は、意味パターン間の使用頻度の違いに関する指摘である。意味パターン1と意味パターン2の構成比を合わせると、全体の7割以上に相当することがわかる。つまり、これら2つのパターンは、意味パターン3や意味パターン4と比べ、頻度の上で優勢であり、頻度の分布において極めて不均衡な偏りが見られるということである。Stubbs（2007）は、プロトタイプ性とはまる高頻度性であり、コーパス頻度は用法のプロトタイプ性と拡張性をある程度反映していると指摘している。この指摘に基づくと、コーパス頻度から「切る」の意味拡張の方向をある程度推定できると考えられる。意味パターン1（39.24%）はパターン2（36.95%）の頻度よりやや高く、中心義を含む中核的意味パターンであると見なされる。また、意味パターン1を起点として、意味パターン3（19.01%）が生じる。さらに、意味パターン3から意味パターン4（4.78%）に意味が広がるといった拡張経路が推定できる。

3点目は、個別義間の使用頻度の違いに関する指摘である。構成比が10%以上であるのは、意味パターン1における＜分断義＞（14.43%）と＜殺傷義＞（13.64%）、意味パターン2における＜中断義＞（28.45%）、意味パターン3における＜際立義＞（12.08%）の4つで、これらを合計すると全体の6割以上に相当する。それに対し、パターン1における＜創造義＞（1.08%）とパターン2における＜混合義＞（0.62%）の構成比は

約1%であり、他の語義と比べ共起制約が強いと想定できる。

以上の3点により、「切る」の各意味とそれが帰する意味パターンの頻度的階層性が見られる。

#### 4.3.2 「切る」の意味パターン

力動性モデルの観点から考えると、「切る」の目的語項となる対象は、本来的に特定の安定した状態にあり、その状態は、物の「初期傾向」として捉えられる。それゆえ、「切る」の目的語項を主動体（AGO）とし、目的語項に対立した力を行使する主語項を対抗体（ANT）と考える<sup>18</sup>。本研究は、主動体の初期傾向がどのように言語化されるかに着目した上で、続いて、上述の16個の意味用法の関連性と有契性を探り、「切る」の多義構造について検討する。

##### 4.3.2.1 意味パターン1【外的統合性】

前節で述べたとおり、本研究では、「切る」の中心義（=<分断義>）を、<人が><鋭利な刃物などの道具で><集中した力で><一続きのものを>分断すると認定する。この定義からわかることとして、「切る」の対象は、一続きになっている性質を持ち、統合性（integrity）という安定状態を有する。主動体の初期傾向は物理的な外的性質として表されるため、「切る」の意味パターン1として、この特徴を「外的統合性」と名付ける。その「外的統合性」が一度分断・破壊されると、対象の外観、性質、状態に変化が生じる。以下のBCCWJコーパスの用例と作例によって、意味パターン1に当たる意味の特徴と性質を確認する。

- (3) 熱湯に包丁をつけ、かるく水気を取ってから、一気にケーキを切る。

<分断義>

(塩谷ひろみ著『シンプルな手作りお菓子』, 2004, 596)

- (4) 取り出したナイフでリンゴを切ろうとするぶちこに、うさだは血相を変えたが、ぶちこは譲るつもりはないようだった。 <分断義>

<sup>18</sup> 主動体・対抗体の選択に際しての焦点は、トラジエクター（主語）・ランドマーク（目的語）の選択の際と異なる。力動性において、初期傾向・内在傾向性を有すると判断されるものが主動体であり、それに対立するものが対抗体である。

(菜の花こねこ著 『デ・ジ・キャラットファンタジー』, 2001, 913)

- (5) \*泥 / \*粉砂糖を切る。 (作例)  
(6) 砂糖の塊 / 角砂糖を切る。 (作例)

(3) は、「ケーキ」を幾つかの部分に分けることで、本来の連続体としての状態と性質を失う事態を表す。その結果、全体の安定した静止状態から、各部分が自由に移動できる状態になるという変化が想定される。(4) の「リンゴ」は分断された結果、全体の統合性が破壊され、短時間で変質しやすくなっている、動作行使前の状態からの変化が見られる。一方、(5) の「泥」、「砂糖」は、分断動作を行っても、動作前と比べて量が少なくなるだけで、依然として統合性を保っており、「泥」、「砂糖」全体と認識することが可能である。従って、分断動作後も、状態変化のレベルに達しない。また、変化の基準となる切れ目・裁断面の有無も認識しにくい。これに対して、(6) のように、砂糖が固まった状態である場合、「切る」と共起しやすくなる。これは、塊状になると、視覚による外在的状態では対象の統合的イメージ・力が強くなるためであると考えられる。

次の用例は、分断動作の直後に他の動作が追加されているものである。

- (7) ホテルの部屋に帰って、車のなかで渡された封筒の封を切ると、なかから金字を刻印したダーク・ブルーの東独のパスポートが出てきた。 <開封義>  
(W.T.タイラー著;中野圭二訳 『あるスパイの挫折』, 1989, 933)
- (8) H2 ブロックカーラの潰瘍治癒率は八〇%と高率で、潰瘍で胃を切る人が激減したことは確かです。 <切除義>  
(赤尾周一著 『これで安心胃と十二指腸の病気』, 2003, 493)
- (9) 依頼主に領収書を切る時は、印刷代+デザイン料・雑費を含めた金額を書いたらいいのでしょうか。 <切取義>  
(Yahoo!知恵袋, 2005, ビジネス、経済とお金、企業と経営)
- (10) 高橋与惣右衛門は敵兩人と切結び、猪太夫の眼前に於て敵一人を切る。 <殺傷義>  
(郡義武著 『秋田・庄内戊辰戦争』, 2001)
- (11) そこで床を高くして床面に炉を切ること、つまり高床式住居にすることを考

案した。

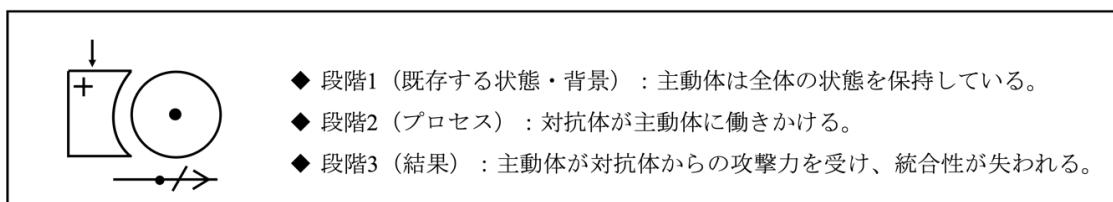
<創造義>

(鳥越憲三郎著『弥生の王国』, 1994, 210)

(7) – (11) の拡張義は、対象への分断動作に引き続き、「開ける」、「除去する」、「利用する」、「傷つける」、「創造する」という後続動作があるため、中心義からメトニミーによる転用が生じたものである。また、「封」が「手紙の封筒」の一部であるように、あるものの一部分が「切る」の対象となることもある。これらの拡張義は、対象の「外的統合性」(部分-全体の関係)が捉えられるため、対象が本来的な静止傾向にあるという性質を持つ中心義と共通し、中心義と同様、パターン1に当たるものである。

意味パターン1の力動性図式は図4-6の通り記述できる。また、上述のように、意味パターン1が表す事象は、次の3段階を成す。

図4-6 意味パターン1【外的統合性】の力動性図式



#### 4.3.2.2 意味パターン2【内的秩序性】

意味パターン1の「外的統合性」の初期傾向と異なり、パターン2の対象には、外から見えない体系や秩序性が存在する。本研究では、「切る」のパターン2の持つ特性を「内的秩序性」と呼ぶこととする。具体的に言えば、パターン2では、物理的分断動作を伴わず、何らかの作業を通して安定した秩序性を変更したり壊したりすることで、外的な変化の有無にかかわらず、本来の状態・機能が喪失されるという特徴が観察される。

(12) 「こんな遊びを日本でもやるのかな」と彼は言いながら、トランプを切って  
テーブルに伏せて置き、上から一枚とて、表を見せた。 <混合義>

(山田度著『多様なる豊かさ』, 1987, 304)

(12) はパターン2の典型的な用例である。「トランプ」は本質的に紙であるが、「紙を切る」<分断義>と異なり、対象の「外的統合性」を分断・破壊する意味ではなく、対象を混ぜるという<混合義>が表される<sup>19</sup>。「トランプ」等のカード類の用途・機能を考えると、人間が意図的に数値やマークをつけ、体系を設けたものであるため、このような対象には一種の「内的秩序性」が存在すると考えられる。その性質により、対象は静止する安定傾向にあると捉えられる。対抗体からの力で秩序性を喪失させることで、主動体の対象が混沌とした無秩序の活動状態になるという変化が想定される。

また、次の(13) – (16)も同様にパターン2に当たる用例である。

(13) 豆腐はキッチンペーパーに包み、電子レンジで30秒加熱して水気を切る。

<切捨義>

(手嶋登志子『虚弱高齢者のための介護予防食テキストブック』, 2004, 498)

(14) コンセントをはずして、無理に電源を切っても、大丈夫ですよ。<中断義>

(Yahoo!知恵袋, 2005, パソコン、周辺機器)

(15) 関係を切るとは言ってくれたものの、同じ会社だし、その上部署まで一緒だし、毎日顔を合わせるみたいです。<中断義>

(Yahoo!知恵袋, 2005, 恋愛相談、人間関係の悩み)

(16) きけば裁判長はキリスト教信者だというが、その心情で一刀両断に日本の文化を斬るのは、やはり心情的な判決だといいたくなる。<批評義>

(秦野章著『何が権力か』, 1984, 304)

(13) では、「水気」が物理的なものであるが、動作主が物理的な分断動作を行う事象ではなく、対象を本来に位置する物体から分離させて取り去るという事象を表す。

(14) の「電源」、(15) の「関係」は、抽象的なものであり、連続する状態によって特定の機能を果たす。抽象的な分断動作行使することで、その機能を中断・喪失させ

---

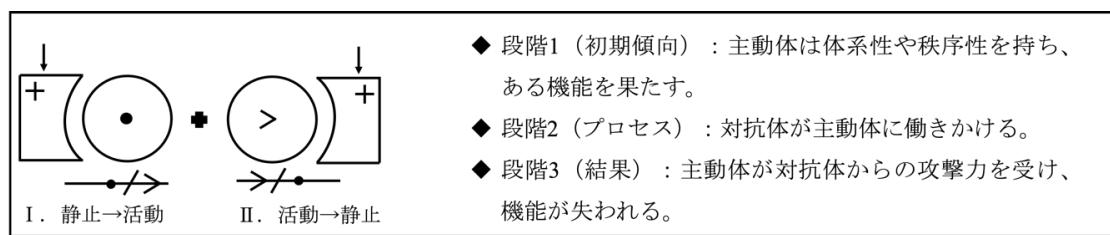
<sup>19</sup> なお、「トランプを切る」、「カードを切る」は対象の「トランプ」、「カード」を分断するという<分断義>を表す場合もある。1つのコロケーションは、複数の意味を表せるというコロケーションレベルの多義現象は、さらに「切る」の多義性が非常に高い特徴を示す。

る事象を表す。これらの意味間の拡張経路に関して、対象が主観的な連続体と見做される点で中心義と類似しており、メタファーにより転用したものである。一方、(16)の＜批評義＞は、鋭利な言葉や文章などで精神的傷害を与えることを意図し、刃物で人間の肉体に傷害を与える＜殺傷義＞から拡張されたものであると考えられる。

上記の用例において、「切る」の対象となっている液体と抽象物は、いずれもパターン1の「外的統合性」では捉えられないものである。しかし、「水気」は豆腐本体に含まれる、あるいは付着している成分であり、「電気」、「関係」、「世相」などは一定の体系や組織で構成され、ある秩序性を有するものであると認められる。このため、これらの意味は＜混合義＞と同様に、意味パターン2の成員と認定することが可能である。だが、状態変化の経路の側面から考えると、意味間において違いが見られる。＜中断義＞の対象「電気」、「関係」などは、内部組織が互いに行き交う形で特定の機能を実現するため、本来的に静止状態ではなく、流動する傾向にあると捉えられる。活動傾向にある電流や関係に対し、強制的に機能を中断させようという目的で、対抗体からの阻止力を適用すると、主動体の状態は＜活動→静止＞と変化する。意味パターン2の他の用法における＜静止→活動＞という方向性の変化と一致しない。

意味パターン2の力動性図式は、図4-7の通りである。また、それが表す事象を同様に以下の3段階でまとめることができる。

図4-7 意味パターン2【内的秩序性】の力動性図式



#### 4.3.2.3 意味パターン3【物理的抵抗性】

意味パターン1とパターン2では、主動体である対象が、対抗体からの衝撃力を受け、何らかの状態変化に達した。意味パターン3に関しては、「切る」の対象は、対抗体からの衝撃を受ける一方、動作への抵抗力が際立つ。以下、まず、複合名詞「水切り」に触れておきたい。石を使った水切り遊びについて、次のような記述がある。

(17) 水切りでもっとも重要なのは石の回転です。回転には、石の軌道と姿勢を安定させる効果があります。我々は、適切な軌道と姿勢、そしてある程度のスピードを与えることで石をうまく跳ねさせようとします。しかし、空気抵抗や水の抵抗によって、跳ねるための条件は崩されてしまいます。風や波があるとさらに安定性が失われます。石のスピードが速ければ速いほど、抵抗力が大きくなります。

([https://www.kawa-asobi.net/stone-skipping/20180213\\_5814](https://www.kawa-asobi.net/stone-skipping/20180213_5814))

(17) から以下の3点が確認できる。1つ目は、石投げが行使される以前において、主動体である「水」は安定した静止状態にある点である。2つ目は、主動体の「水」は対抗体の「石」からの攻撃力を受ける一方、それに反する抵抗力を与えている点である。3つ目は、「水」による抵抗力が「石」による攻撃力より強い場合、「石」はうまく回転し軌道どおり跳ねる一方で、「水」による抵抗力が「石」による攻撃力より弱い場合、「石」の方向が回転せず、「水」の安定した状態が変わる点である。意味パターン3における対象は動作への抵抗性を持つ点で、「水切り」事象に一致するため、その性質を「物理的抵抗性」と名付ける。次に各用例を確認する。

(18) 今は南からの黒潮に乗ってスナメリたちが波を切る。 <横断義>

(ダイビングワールド, 2002, スポーツ)

(19) 一瞬、暗雲の中に白い胸が逆光をうけ白銀に輝いた。と同時に稻妻が鋭く雲を切ってはしった。 <横断義>

(川島民親著『スズメバチの死闘』, 1988)

(20) ?空気を切る。 (作例)

(21) シュンッと空を切る音をたてて小石は飛び、見事、物の怪の後頭部に命中した。 <横断義>

(瀬川貴次著『夜叉姫恋変化』, 1995)

先行研究（森山 2012, 2015、栗田 2018 など）では、<横断義>は中心義からのメタファーによる展開で説明されるが、メタファーのみで解釈すると、(18)「波」、(19)「雲」は、(20)「空気」の場合と容認度が異なることを説明できない。したがって、

「切る」の対象が液体または気体である場合、対象の性質に関する何らかの制限があると想定すべきである。液体や気体という物質は、自由に流動できるため、密度がある程度濃い場合、対象自体に物理的な抵抗力・妨害が見られる。すなわち、「波」や「雲」は密度が濃く、力のイメージが強いため、対抗体の「スナメリ」や「稻妻」からの力に対する「物理的抵抗性」が存在する。対抗体がより集中的な強い力を加えると、主動体の「波」や「雲」が静止状態から活動状態に変わっている。「波」、「雲」、「霧」などはこの理由によって許容され、反対に、密度の濃いイメージが喚起しにくい（すなわち、主動体による力が捉えにくい）「空気」などの対象は、「切る」と共起しにくいことが想定できる。

しかし、実際の使用場面では、文脈によって「空を切る」が容認される用例が多く見られる。力の強さの側面から考えると、(21) のような用例では、勢いと素早いスピード感が感じられるため、鋭利な刃物と同様、動作の様態で力の強さと衝撃が際立つのである。前述の通り、意味パターン3における対象である主動体は、「物理的抵抗性」という初期傾向を持つ。その抵抗力が存在するからこそ、分断動作を実現するための動作主である対抗体による力は、主動体のもつ抵抗力に対抗できる程度の集中した力である必要がある。そのため、(21) のような力の強さと衝撃を際立たせる用例では、「切る」との共起の容認度が上がると考えられる。

一方、(22) は、進行方向を変えたり回転を与えたいたりする＜回転義＞を表し、＜横断義＞における力的関係に類似する。

(22) バスが急ハンドルを切るたびに私の体は激しく左右に引張られた。

＜回転義＞

(高橋克彦著『星の塔』, 1992)

物体は同じ速度と方向を保ち続けようとする物理的な慣性を持っており、外力の作用に対して「物理的抵抗性」を持つと想定できる。このため、(22) の「ハンドル」に加え、運転中の「舵」、「カーブ」などは、「切る」との共起が許容される。また、＜横断義＞と＜回転義＞の間に、気体を勢いよく分断動作を加える結果、回転を与えたいたり進行方向を変えたりすることになるという連続的なシナリオが想定でき、メトニミーによる意味拡張が捉えられる。

また、意味パターン3において、もう1つの意味として、際立つような動作をするという＜際立義＞が存在する。＜際立義＞を表す「切る」のコロケーションは、他の個別義を表すコロケーションと慣用化の程度で異なる。「啖呵を切る」、「(大)見得を切る」、「とんぼを切る」、「しらを切る」、「仁義を切る」、「札びらを切る」、「切り札を切る」といった慣用化の程度が一番高い「真正イディオム・慣用句<sup>20</sup>」である。

「切る」の多義を考察する先行研究では、＜際立義＞を提起したもののが非常に少なく、栗田（2018）では少し言及されたことがある。栗田（2018:171）によれば、「際立つのような動作」（本研究による＜際立義＞）は、「勢いよく押し分けて進む動作」（本研究による＜横断義＞）からメタファーによって写像されるものである。両者は、瞬時性やスピード感を持ち合わせる点で類似している。すなわち、＜際立義＞は、＜横断義＞と同様に、動作の様態で力の強さと衝撃が際立つのである。また、栗田（2018）によって指摘されていないが、＜際立義＞では、同様に物理的抵抗性が捉えられる。しかし、意味パターン3の他の意味と異なり、＜際立義＞を表す真正慣用句は、構成要素である目的語項と動詞を分けて分析できない。動作を被る対象は、目的語項ではない。このため、主動体は目的語項ではなく、際立つような動作が向けられる対象・被動作主である。対抗体は、依然として、主語項の動作主である。次の用例を参照されたい。

- (23) セリ值で喧嘩を売っていることが明白なので、そのニヤニヤしている従兄の顔へ、百子は、渾名で呼んで、タンカを切った。 <際立義>

(青木正美著 『古本屋五十年』, 2004, 24)

- (24) まるで舞台で大見得をでも切っているような声と身振りである。<際立義>

(檀一雄著 『火宅の人』, 1975, 913)

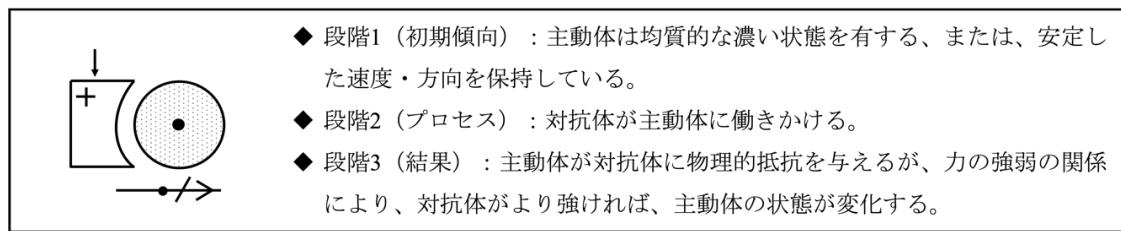
「啖呵を切る」は、動作主は歯切れのいい言葉で相手に勢いよくまくし立てることを

<sup>20</sup> 1.1 節で触れたように、構成要素の組み合わせのみで意味を直接的に類推できない慣用表現は、慣用化の程度によって2つに分かれる。1つは、「首を切る」のような「比喩的イディオム・慣用句」である。もう1つは、「啖呵を切る」、「(大)見得を切る」、「仁義を切る」のような「真正イディオム・慣用句」である。比喩的慣用句では、用法の語源を知らなくても、比喩的関係から意味拡張のプロセスを想定できる。それに対し、真正慣用句は、意味理解に対する語源の重要度、構成要素間における副詞等の挿入可能性という2点で比喩的慣用句と異なる。

表す。(23) の喧嘩の場面では、「啖呵を切る」という動作が向ける「従兄」は、主動体として、話をずっと続いている安定した静止傾向にある。動作主である対抗体「百子」は、「従兄」の意見を反駁するため、主動体に攻撃力を与える。この時、主動体「従兄」は、自分の話を続いている状態であり、対抗体「百子」からの反駁の声に抵抗力を持つと想定できる。主動体「従兄」の抵抗力と対抗するために、対抗体「百子」は、「啖呵を切る」というより力強く、際立つ動作を行わなければならない。その結果、対抗体からの攻撃力は、主動体からの抵抗力よりも強いため、「従兄」は喧嘩を止める。(24) の「(大) 見得を切る」は、歌舞伎で役者が登場時、観客に向けて際立った動作を行ったことを表す。役者が登場前に、観客が主動体として、携帯を見たり友人と話したりするといった舞台以外のところに注意を向けており、安定した静止状態にある。役者が対抗体として、観客の注意を舞台に引こうとしているため、何らかの声や身振りを行い、主動体に攻撃力を行使する。しかし、観客が自分の行為に集中しているため、役者からの声や身振りに一定の抵抗力を持つ。声や身振りが小さいなら、観客の注意を引けない。主動体の他の行為に集中するといった静止傾向を変えるために、対抗体の役者は、勢いよい声や誇張な身振りを行いながら登場する。すなわち、主動体の抵抗力よりも強い力を行使しなければならない。

以上により、図4-8は、意味パターン3の力動性図式を示す。図4-6の意味パターン1の図式の変異形としても捉えられる。なお、意味パターン3の力構造において、円形内の複数の点は、主動体が一定の状態にとどまろうとする抵抗力をもつ性質を示す。

図4-8 意味パターン3【物理的抵抗性】の力動性図式



#### 4.3.2.4 意味パターン4【心理的抵抗性】

上述の3つの意味パターンには、物理的な分断事象以外に、「波を切る」のような抽象的領域における分断事象や、「トランプを切る」のような具体的な分断動作を伴わな

い主観的な分断事象もある。しかし、これらの事象には人間の心理的側面の介入があるかは判断し難い。意味パターン4では、心理的側面が際立ち、話者が行為の達成に対して強い抵抗力を持つと認識・予想する事柄が「切る」の対象となる。その「心理的抵抗性」によって、パターン4は、2つのタイプに分けられる。

タイプ1の「心理的抵抗性」は、話者がある事柄の達成を期待しているものの、その達成は容易でなく、何らかの困難・苦痛を伴う、または長い時間がかかると認識しているものである。一方、タイプ2の「心理的抵抗性」は、事柄の達成を本来的に期待していないものである。まず、タイプ1の用例を検討していく。(25)では、「切る」の対象が数値である場合、基準値より下回るという＜突破義＞を表している。

- (25) けれどもオリンピックの選手が100メートル走で10秒を切ったと聞いても驚きません。 <突破義・タイプ1>

(野口廉三著 『霊性の時代の夜明け』, 2020)

- (26) ようやく、と言ったが、パイフウの抜き撃ちは平均でコンマー秒を切る。 <突破義・タイプ1>

(星野亮著 『異界の森の夢追い人』, 2002, 913)

速度の数値が時間とともに起点から継続的に下降する場合、その下降する軌跡がグラフ上で基準値(=10秒)を示す線を下回り測定値に達し、元の限界を突破する事象が想定される。しかし、「数値を切る」ことは、基準値を下回る意味を表すだけではなく、人間の心理的傾向の介入が見られる。例えば、「100メートル走で9秒99」の成果を達成する前に、「10秒」という壁を人間が意識している。「10秒を切った」は、「10秒を下回った」と比べ、行為を実現した際の目的達成というプラスのニュアンスを伴う。また、＜突破義＞を表す場合、(26)のように、「ようやく/かろうじて/苦労の末」などの副詞と共に起する用例が多く、話者の意志性が強く見られる。すなわち、話者の認識上、主動体である速度値の突破は本来的に期待されているものではあるが、なかなか実現しにくいという初期傾向を持っており、選手の練習時間の推移とともに、最後に事柄の達成が実現するといった、主動体の状態が変わることに関するシナリオが想定される。

一方、(27)と(28)の対象は、どちらも締め切りである「一ヶ月」であるが、(27)

と比べ、(28) の対象が表す事柄は人間にとて望ましくない心理的傾向性が見られる<sup>21</sup>。

- (27) ようやく、誕生日まであと一ヶ月を切りました。 <突破義・タイプ1>  
(作例)
- (28) 日本語能力試験まで残り一ヶ月を切りました。 <突破義・タイプ2>  
(「基本動詞ハンドブック」による用例<sup>22</sup>)
- (29) 所持金が千円を切ってしまった。もう野宿するしかない。  
<突破義・タイプ2>  
(「基本動詞ハンドブック」による用例)
- (30) 日本の食料自給率は 2010 年以降 40%を切っている。  
<突破義・タイプ2>  
(「基本動詞ハンドブック」による用例)

(28) の表す事象には、タイプ 1 の「心理的抵抗性」における、動詞句の描く事柄の成立を望む一方、実際それが起きにくいという心理的葛藤が存在しない。話者の「心理的抵抗性」は「締め切りに到達する」という事象に対する抵抗感と理解できるため、事象達成と事象達成への心理的妨害という対立関係が捉えられる。すなわち、(28) は、タイプ 2 の「心理的抵抗性」に当てはまる。

上述のように、タイプ 1 とタイプ 2 の事象における「心理的抵抗性」が異なるため、分けて記述した方が妥当的であると言えよう。また、意味パターン 4 における 2 つ下位分類は共に、「切る」の対象である事柄に達成しようとする行為に何らかの妨害が存在し、その妨害は意味パターン 3 で見られる物理的な妨害ではなく、人間の心理上・認識上の妨害であると想定できる。なお、意味パターン 4 において、主動体は、「切る」

<sup>21</sup> なお、人間は目的語項の事柄にどのような心理的傾向性を持つかは、文脈によって変わっている。(27) の「誕生日を迎える」は年齢が増える意味で人にとって望ましくない場合もあり、(28) の「試験を挑戦する」は能力が高まる意味で人にとって期待されている場合もある。ここでは、典型的な場合に基づき 2 種類の心理的抵抗性の違いを説明した。

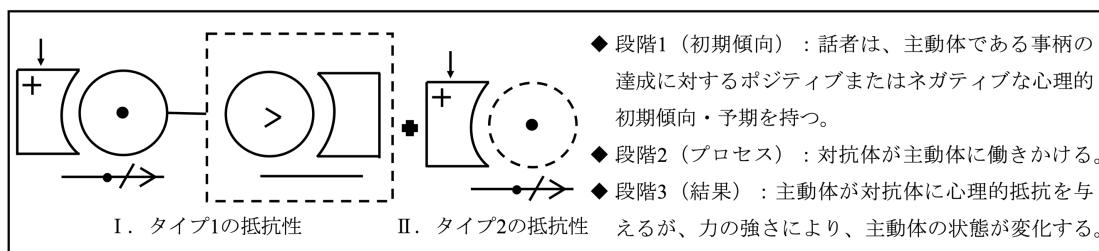
<sup>22</sup> 「基本動詞ハンドブック」は国立国語研究所が作成した、基本動詞の多義的意味の広がりを図解などを用いてわかりやすく解説したオンラインツールである。例文、コロケーションなどの執筆には、国語研の「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」(約 1 億語) や筑波大学の「筑波ウェブコーパス」(約 11 億語) などの、大規模日本語コーパスを積極的に活用した。  
(<https://www2.ninjal.ac.jp/verbhandbook/about.html#products>)

の対象、目的語項で表される事柄である。対抗体の認定に関して、この事象では、「切る」の動作主が主語項と必ずしも一致しない。(27) と (28) のような場合、「誕生日/試験日/本の発売日/委員長の任期/結婚式(の日程)」などの時間表現がガ格主語になる。

(29) の場合、金がガ格主語である。(30) の場合、割合表現がガ格主語である。このため、対抗体は、時間、金、割合などという客観的なものであると認められる。

以上、パターン4の力動性図式を図4-9の通り記述できる。その力構造を踏まえ、パターン4の事象とそれに含まれた力的関係を同様に3段階でまとめた。

図4-9 意味パターン4【心理的抵抗性】の力動性図式



#### 4.3.3 複合動詞への意味拡張

本動詞における力的関係は、複合動詞「V1+切る」の意味にも捉えることができるかどうかを考察すべく、本節では、本動詞と複合動詞の意味的な有契性を見ていく。

李(1997)によると、「V1+切る」は語彙的複合動詞と統語的複合動詞の両方にまたがって存在する中間的複合動詞である。「叩き切る」、「思い切る」のような語彙的複合動詞は、本動詞「切る」の意味をほとんど継承・保持しており、分断・終結の意味を表す(姫野 1999)。一方、「V1+切る」が統語的複合動詞として用いられる際の意味は、本動詞では見当たらない用法である。前項動詞 V1 の意味・性質(継続動詞・瞬間動詞)によって、統語的複合動詞全体の意味は、<完遂義>と<極度義>という2つに分けられる。以下の用例を参照されたい。

(31) みんなで声を出し合い、最後まで全力で走り切ると抱負を力強く話しました。

<完遂義>

(広報紙, 2008, 『広報ひゅうが』)

(32) 疲れ切るまで暗い海を泳いで、それで神さまのところへ行けるならいいじゃ

ないのって、自分に言い聞かせたわ。

<極度義>

(ディーン・R・クーンツ著, 天馬龍行訳『インテンシティ』)

(31) の「走り切る」では、V1「走る」が表す事象の達成は期待されるが、この場合の「走る」事象は、通常、達成するまである程度の時間がかかったり、途中で困難・苦痛を伴ったりする事象である。そのため、(31) は、意味パターン4のタイプ1に当たる。一方、(32) の「疲れ切る」では、V1「疲れる」が表す事柄では、望ましくないという心理的傾向性が見られ、意味パターン4のタイプ2に該当する<sup>23</sup>。

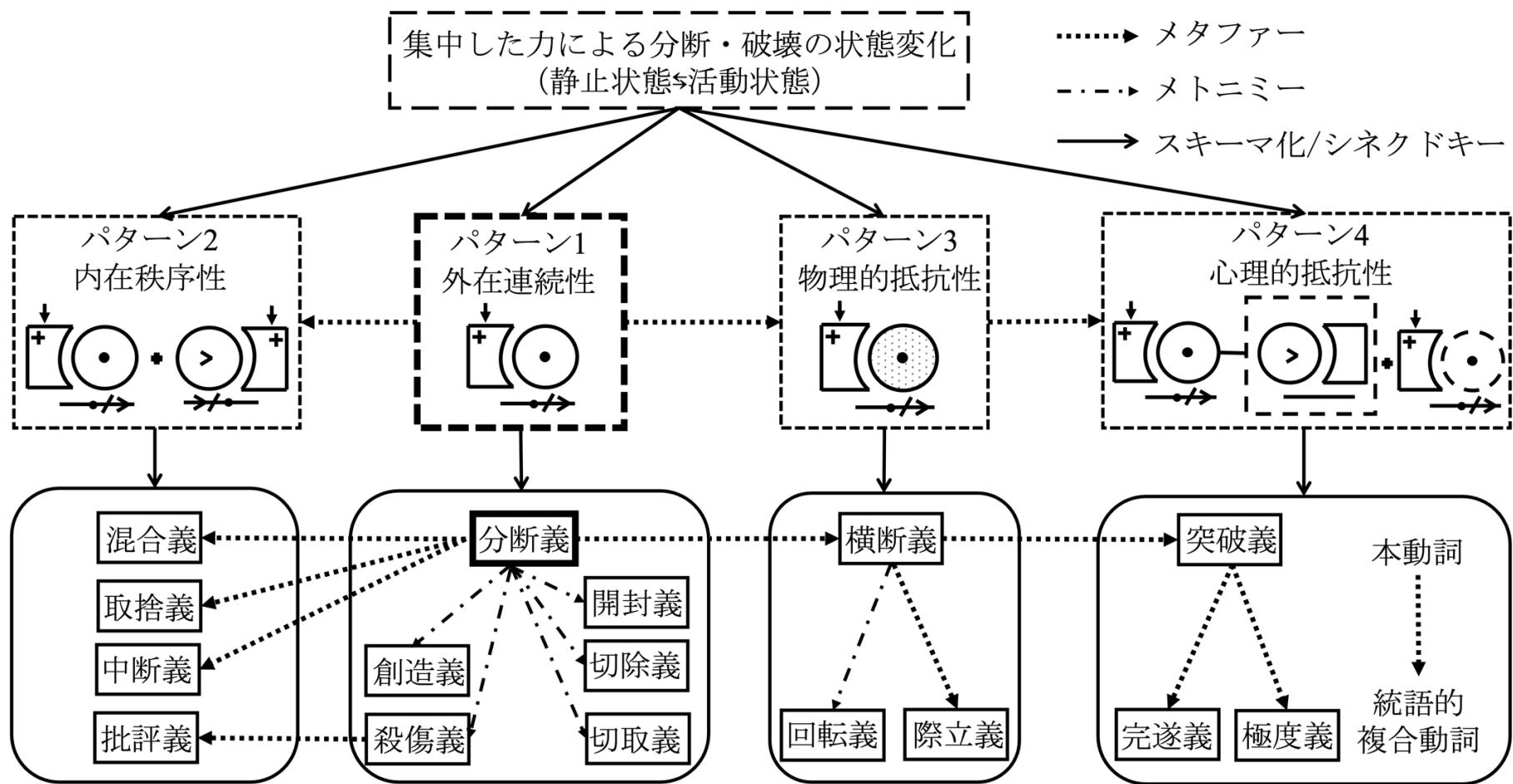
以上、語彙的複合動詞である「V1+切る」は、ほぼ本動詞の意味を保持するため、意味パターン1、2と同様な力構造を有すると想定される。それに対し、統語的複合動詞である「V1+切る」では、「切る」の意味パターン4に動機づけられることで、新しい用法である<完遂義>や<極度義>が生み出されると考えられる。この点に関して、本動詞と複合動詞には、力動性に基づく有契性を窺うことができる。

#### 4.3.4 「切る」の意味構造の解明

力動性に基づく「切る」の各レベルのスキーマを、複層的な意味空間で位置付けると、図4-10のように示すことができる。この多義構造では、レベル1は具体的別義・意味、レベル2は意味パターン（局所的スキーマ）、レベル3はスーパー・スキーマを示すといったように、意味の抽象度が段々高くなる。それぞれのレベル間には、スキーマの段階性が見られる。同じ抽象度を持った各レベルの意味をリンクさせることで、「切る」の意味構造が図4-10のように可視化できる。

<sup>23</sup> 本研究の観察では、<完遂義>と<極度義>のどちらにおいて、パターン4のタイプ1とタイプ2の用例両方が確認されることが分かった。だが、<完遂義>は、タイプ1に当たるものが多く、<極度義>はタイプ2に当たるものが多く出現する傾向が見られる。

図 4-10 力動性モデルに基づく「切る」の多義構造



本研究は、中心義を含む意味パターン 1【外的統合性】を中心的カテゴリーに据える。その上で、力的認知とメタファーの拡張経路によって、レベル 2 局所的スキーマである「切る」の各意味パターンが、どのように結び付けられるかを説明する。

まず、意味パターン 2 への意味拡張のメカニズムを分析する。パターン 1 における物理的な連続体と比べ、意味パターン 2 における「トランプ」、「豆腐の水気」などは、物理的なものではあるが、統合性を保持する連続体とは言えない。また、「電気」、「関係」、「世相」などは、抽象度が高いものである。これらの対象は外在的に連続的な初期傾向が捉え難いが、内在的な体系性と秩序性があるため、主観的な連続体と捉えられることで、意味パターン 1 からメタファーによって拡張されたと考えられる。

次に、意味パターン 3 への意味拡張を検討する。意味パターン 3 では、「波」、「ハンドル」などは物理的なものであるが、中心義と同様な分断・破壊動作を表さない。すなわち、「波を切る」は、勢いやスピード感を備えた「船」が一定の方向で流動する「波」を切り分けるように進む意味を表す。「ハンドルを切る」は、物理的慣性で形成された規定の軌道を分断・破壊するように、進行方向を変えることである。また、意味パターン 3 の対象は、対抗体による攻撃力に対し、例えば「波」であれば密度の濃さによって抵抗性を形成し、「ハンドル」であれば物理的慣性によって抵抗性を形成するなど、いずれも「物理的抵抗性」によって相対的静止状態を保持し、意味パターン 1 の対象が「外的統合性」によって安定した状態にあるのと類似する。それゆえ、意味パターン 1 と意味パターン 3 の間でメタファーによる展開が認められる。

一方、意味パターン 2、3 と異なり、意味パターン 4 は中核的カテゴリーであるパターン 1 からの拡張プロセスが捉えにくい。意味パターン 4 では、意味パターン 3 と同様、ある行為への抵抗性が捉えられるが、波が船の進行に対して与える抵抗とは異なり、話者の心理における事柄達成への抵抗が認められる。物理的領域から心理的領域への拡張により、意味パターン 3 から意味パターン 4 に意味が広がると考えられる。

最後に、これらの意味パターンの概念イメージをすべて総括できる、多義構造における一番上位レベル 3 である「切る」のスーパー・スキーマの内実を検討する。意味パターン 1、2 では、対象の安定した状態（主動体）とその状態への破壊（対抗体）、意味パターン 3、4 では、行為（対抗体）と行為への妨害（主動体）という対立関係が捉えられる。また、妨害が状態の一種であり、破壊が行為の一種であることを勘案す

れば、いずれの意味パターンからも、「集中した力によって対象の初期傾向を何らかの形で分断・破壊し、対象の状態を変える」という共通事象が抽出できる。それゆえ、力動性モデルに基づき、「切る」のスーパー・スキーマを「集中した力による分断・破壊という状態変化（静止状態→活動状態）」と規定しておく。

以上、本節まで、RQ1.1（意味とスキーマの認定）に関しては、意味の自立性と関連性を念頭に15個の別義・意味を抽出した。また、力動性における主動体の初期傾向の顕在によって、4つのパターンに新たに分類するとともに、すべての概念イメージを総括できるスーパー・スキーマを抽出した。RQ1.2（意味の相互関係の明示）に関しては、従来の先行研究が示唆する比喩の動機づけに加え、力構造のパラメータを導入した。RQ1.3（多義構造の仕組みと優位性）に関しては、意味分析の結果に基づき、動詞の項における力的関係を明示し、抽象的スキーマと具体的スキーマを同時に位置付ける、段階性のある複層的な多義構造を明らかにした。

#### 4.4 心理実験による意味構造の検証

次に、本節は、RQ2を解き明かすために、実験的手法を用いて力動性モデルに基づく意味分析の結果を検証する。

RQ2 認知言語学の理論に基づいた分析の心理的実在性は検証可能か。

- 2.1 意味分類の心理的実在性は検証可能か。
- 2.2 意味記述の心理的実在性は検証可能か。
- 2.3 母語話者と学習者における心理的実在性はどのような違いがあるか。

##### 4.4.1 実験目的と実験対象者

これまでの認知言語学的研究における多義語の考察は、収集した用例、および作例と内省判断に基づく質的分析のみを行うものが多く、質的分析をしたのちに統計的・心理的アプローチから検証を行う研究は、必ずしも多くない。認知言語学的な質的意味分析の結果が、数量的な観点から裏付けられるかどうか、また、学習者の持つ意味構造が母語話者とどう異なるかという点は、まだ検討の余地が残されていると言える。このため、本節では、前節まで示した力動性モデルに基づく多義語「切る」の意味分

析の結果が、果たして妥当であるかどうかを心理実験を用いて検証することを目的とする。

#### 4.4.2 実験方法と分析方法

本実験の対象者は、母語話者（以下、JNS）と中国人学習者（以下、CJL）各 30 名である。母語以外の要因がなるべく実験の精度に影響を与えないよう、すべての実験対象者は大学に在籍し言語学を専攻しない者に限定した。また、CJL の日本語レベルを中上級学習者の範囲で一定化させるため、対象とする CJL は日本語能力試験（JLPT）の N1 取得者（120~160 点）であり、かつ、日本での滞在歴が一ヶ月以内である学習者に限定した。

JNS、CJL それぞれに対し、意味分類と意味記述の 2 つの側面から心理実験を行った。実験のデータを収集するにあたって、「切る」の各意味について、それぞれ 2 つの用例を用い、表 4-3 の例文のカードリストを作成した。意味分析との一致性を高めるため、実験用の各意味の用例 a は意味分析で用いた用例を使用した。また、文脈的要素をできるかぎり省略し、「ケーキを切った」のように、用例のコロケーションのみを残した。この場合、1 つの用例に複数の意味が解釈できる可能性が生じるため、対象者が語義を明確に判断できず、妥当性に欠けるという問題点も生じかねない。しかし、この用例設定には、主に以下の 2 つの目的がある。1 点目として、対象者が目的項によって最も喚起しやすい意味を選択できる点で、目的語項の意味特徴によって動詞の各意味を把握しているという本研究の主張の検証に相応しい点である。2 点目として、テストの難易度と時間も実験の精度に影響を与える重要な要素であることを考慮した上で、対象者に多くの負担をかけないように、動詞の目的語項に重点を置き、用例のコロケーションのみを使用した。

表 4-3 類似性判断テストのためのカードリスト

意味	用例	中国語訳
0. 分断義	a. ケーキを切る。	切
	b. 紙を切る。	剪
1. 開封義	a. 封筒の封を切る。	打开、剪开
	b. 袋を切る。	打开
2. 切除義	a. 胃を切る。	切除
	b. 爪を切る。	剪
3. 切取義	a. 領収書を切る。	发行
	b. 小切手を切る。	发行
4. 殺傷義	a. 敵を切る。	杀
	b. 手を切った。	切(到)
5. 創造義	a. 囲炉裏を切る。	修筑
	b. 型紙を切る。	剪出
6. 混合義	a. トランプを切る。	洗
	b. 麻雀を切る。	洗
7. 取捨義	a. 野菜の水気を切る。	去除
	b. 部門を切る。	去除
8. 中断義	a. 電源を切る。	关
	b. 縁を切る。	断绝
9. 批評義	a. 世相を切る。	评论、批评
	b. 政治を切る。	评论、批评
10. 横断義	a. 波を切る。	冲破
	b. 雲を切って飛ぶ。	划破
11. 回転義	a. ハンドルを切る。	使...转弯
	b. 球を切る。	使...转弯
12. 際立義 <sup>24</sup>		
13. 突破義	a. 100メートル走で10秒を切った。	打破
	b. 最低気温は5度を切る見込み。	低于
(統語的複合動詞) 14. 完遂義	a. マラソン大会で最後まで走り切る。	V1+完
	b. 本を読み切った。	V1+完
(統語的複合動詞) 15. 極度義	a. 彼は心身ともに疲れ切った。	V1+极(了)
	b. 部屋は冷え切った。	V1+极(了)
(語彙的複合動詞) 16. 分断・終結 <sup>25</sup>	a. 親の反対を押し切った。	排除
	b. 胸にたまつた悩みを思い切った。	停止

<sup>24</sup> しかし、意味 12 の<際立義>は「真正イディオム・慣用句」で表される。「真正イディオム・慣用句」は他のコロケーションと性質的に異なり、百科事典的知識と文化的語源が意味を理解するため重要である。<際立義>を心理実験の考察の範囲に入れないとする。

<sup>25</sup> 前に触れたように、語彙的複合動詞は、本動詞「切る」の中心義を保持し、<分断・終結>の意味を表し、新たな個別義として認められない。ここでは、心理実験を通して、母語話者と学習者はそれぞれどのように語彙的複合動詞と統語的複合動詞を捉えているかを考察するため、「切る」の個別義の用例以外に、カードリストの 16 で語彙的複合動詞の意味と 2 つの用例をリストしている。

具体的な実験の手順について、まず、意味分類に関して、実験 1 の「類似性判断テスト」を実施した。このテストでは、カード分類法を用いて、表 4-3 の実験対象者に「切る」を含む例文を提示し、「切る」の意味が似ているものをグループに分けるよう指示した。また、グループの数とグループ内のカードの数は自由にして良いことを伝えた。

そして、意味記述に関して、実験 2 の「意味素性評定テスト」を実施した。中本他 (2004) の実験方法に従い、考察対象を区別するのに必要と想定される 5 つの意味素性評定項目・指標を用意し、実験対象者に表 4-3 のカードリストの例文ごとに 5 段階の確信度評定を行うことを求めた。このテストで使用した意味素性評定項目・指標は、コーパス調査と意味分析によって抽出された各パターンの意味的特徴である。以下の表 4-4 のとおりとなる。

表 4-4 意味素性評定項目・指標

指標	側面	具体的な意味素性設定（設問）
指標 1	力の種類	対象に行使した力は物理的力を含む。
指標 2	力行使する道具	鋭利な道具またはそれに相当するもの（スピード感など）の介在がある。
指標 3	力の対抗の強さ	主体からの攻撃力に対し、対象による抵抗感が感じられる。
指標 4	力による状態変化	分断された対象は元の状態に還元できる。
指標 5	力による状態変化	変化点（あるいは切れ目・裁断面など）は予測・判断できる。

上記の 2 つの実験テストから得られたデータに対して、RStudio (ver. 4.0.3) による階層型クラスター分析（ユークリッド距離、ウォード法）を行った<sup>26</sup>。

<sup>26</sup> クラスター分析には、大きく分けて、階層型と非階層型の 2 種類がある。非階層型クラスター分析は大量のデータを処理するのに適しているのに対して、階層型クラスター分析は、個々のデータの非類似度を「距離」として表現し、距離の近いデータ同士をまとめてクラスターを作っていく手法である。具体的には、それぞれのデータがまったくまとめられていない状態から始めて、少数のクラスターを順次作っていき、最終的にすべてのデータを含む大きなクラスターを作り、クラスタリングの結果をデンドログラムの形で可視化する（小林 2017a: 183-203）。本研究は多義語の意味構造を分析する際に、各意味の類似性を距離で可視化するため、階層型クラスター分析を採用した。

#### 4.4.3 結果と考察

##### 4.4.3.1 意味分類に関する検証

まず、実験 1 の類似性判断テストに基づくクラスター分析の結果は図 4-11 と図 4-12 のとおりである。

図 4-11 JNS による類似性判断の結果

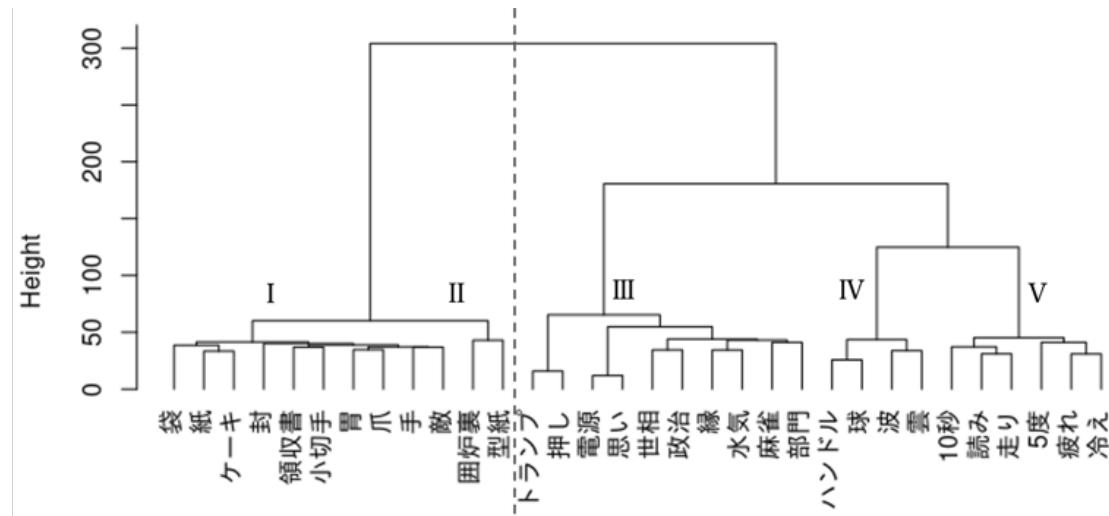


図 4-12 CJL による類似性判断の結果

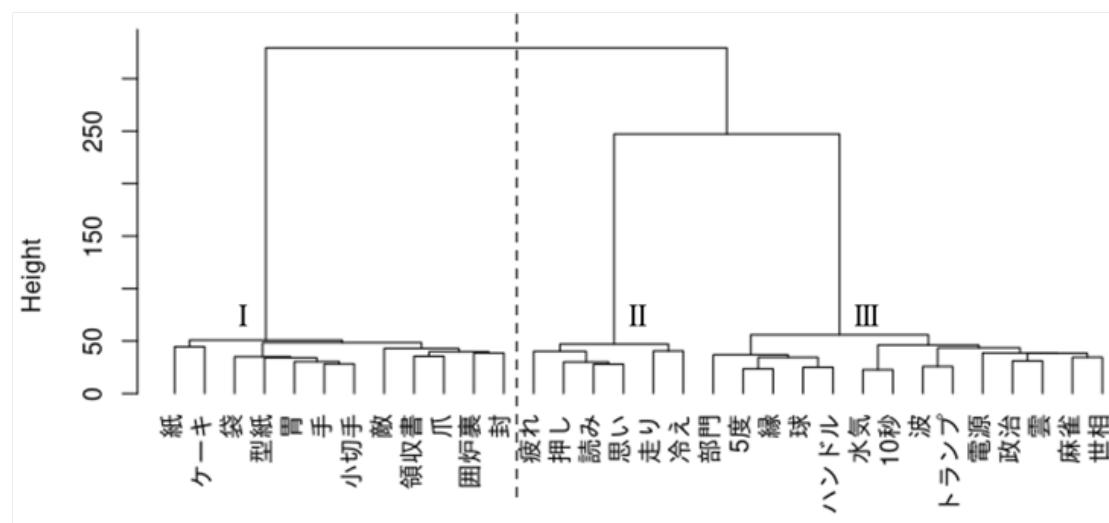


図 4-11 が示す JNS による類似性判断の結果では、最長の定常状態の箇所にカッティングポイントを置くと、大きく 2 群に分かれる。群内のコロケーションの内容を考察

すると、左側の群は「袋」、「紙」、「領収書」、「胃」、「爪」などの目的語項が含まれており、プロトタイプ的概念である分断動作に近い語義のクラスターであると言える。すなわち、中心義と中心義からのメトニミー拡張群である。一方、右側の群は「麻雀」、「雲」、「世相」、「縁」などの目的語項が含まれており、中心義からより離れた拡張義のクラスターであると言える。

さらに、2群の内部構造を分析すると、左側の群では、2つの下位クラスター（図4-11のIとIIを参照）が形成されていることが分かる。クラスターIは＜分断義＞、＜開封義＞、＜切除義＞、＜切取義＞、＜殺傷義＞のコロケーションを含み、＜創造義＞を除いた意味分析のパターン1の外在連續性と対応する。＜創造義＞のコロケーションは独立したクラスターIIを成している。これは、「囲炉裏」や「型紙」が本来的にあるもの全体の部分である点に着目し、パターン1に分類するという本研究の意味分析には合致しないものである。動詞と目的語項の関係から考えると、「ケーキ」が分断動作の対象である場合と異なり、「型紙」や「囲炉裏」は動作の対象ではなく、直接的な対象の「紙」、「床」を分断して得られた結果である。すなわち、＜創造義＞の場合では動作の結果が焦点化され、動作の対象が言語化されない。このため、生産的用法としての＜創造義＞は、他の語義と区別し、別途に記述する必要があると考えられる。また、Levin（1993）によると、John cut {a pattern out of paper / a slice of cake / a key}のように、「切る」の＜創造義＞は英語のcutにも存在している。しかし、このような用法は中国語の分断動作を表す動詞には見当たらない。

そして、右側の群では、3つのクラスター（図4-11のIII、IV、Vを参照）が形成されており、本研究が提示した意味分析で言えば、それぞれ、パターン2の内在秩序性、パターン3の物理抵抗性、パターン4の心理傾向性と一致している。このため、母語話者のクラスター分析の結果は力動性理論に基づいた意味分類の心理的実在性をある程度実証できていると言える。

一方、CJLの結果では、JNSと同様に中心義に近いクラスターと中心義から相対的に離れた拡張義を含むクラスターの2群に分かれた。この点で、上位カテゴリーの区分では母語話者とおおよそ一致していると言える。

しかし、2群の内部構造をさらに分析すると、下位カテゴリーに関して、JNSのカテゴリー化との差も見られる。JNSは目的語項の特徴によるまとまったカテゴリー構造を持っているのに対し、CJLは下位の周辺的な用法ほどカテゴリーが構造化されない

傾向が見られた。まず、左側の群では、<創造義>は独立したクラスターにならない点で母語話者の結果と一致していない。中国語の分断動詞においては、動作結果に焦点を当てた意味用法が基本的に存在しないため、CJL はこの語義を十分に認識していないと考えられる。

右側の群では、JNS においては意味分析のパターンと一致していた 3 つのクラスターは、CJL の場合では同様なパターンが見られず、大きく 2 つの下位クラスター（図 4-12 のクラスターII とIIIを参照）が形成されている。JNS のカテゴリー化では、語彙的複合動詞と統語的複合動詞はそれぞれ図 4-11 のクラスターIIIとクラスターVに分類されたのに対し、CJL においては同一のクラスターになっている。つまり、CJL は本動詞と複合動詞の意味拡張を捉えにくく、それを分けて認識する傾向が見られたと言える。クラスターIIIは「部門」、「期限」、「縁」、「電気」、「政治」、「世相」、「カープ」などの抽象的なものが含まれるが、「球」、「波」、「トランプ」、「麻雀」、「雲」などの具体的なものも見られた。また、「切る」のような分断動作と類似する動作を行う語義とそうでない語義の両方が含まれている。このように、意味分類は全体的にやや混乱しており、カテゴリー化が十分でない傾向が示された。

日本語母語話者と中国人日本語学習者における「切る」の意味構造の相違点をまとめたものが以下の表 4-5 である。

表 4-5 母語話者と学習者における意味構造の相違点

カテゴリー	日本語母語話者 (JNS)		中国人日本語学習者 (CJL)		相違点
上位 カテゴリー	具体的な分断動作 を含む語義群 (中心義+中心義 からのメトニミー 拡張群)	具体的な 分断動作 ではない 語義群	プロトタイプ 的概念に近い 語義群	プロトタイプ から相対的に 離れた拡張義 を含む語義群	ほぼ無し
下位 カテゴリー	パターン 1 (<創造義>なし)	パターン 2 に近い		複合動詞 である語義群	有り
	<創造義>	パターン 3 パターン 4		抽象的語義群	

#### 4.4.3.2 意味記述に関する検証

前述で意味分類の妥当性はある程度検証できたが、日本語母語話者による分類の基準がまだ明確でないため、その分類結果が偶然のものである可能性が残される。次に、

意味分析と類似性判断テストの結果が、本研究の力的認知に基づく意味記述によって再現できるかどうかを検証した。

意味素性評定テストについて、JNS と CJL による結果を図 4-13 と図 4-14 に示す。

図 4-13 JNS による意味素性評定の結果

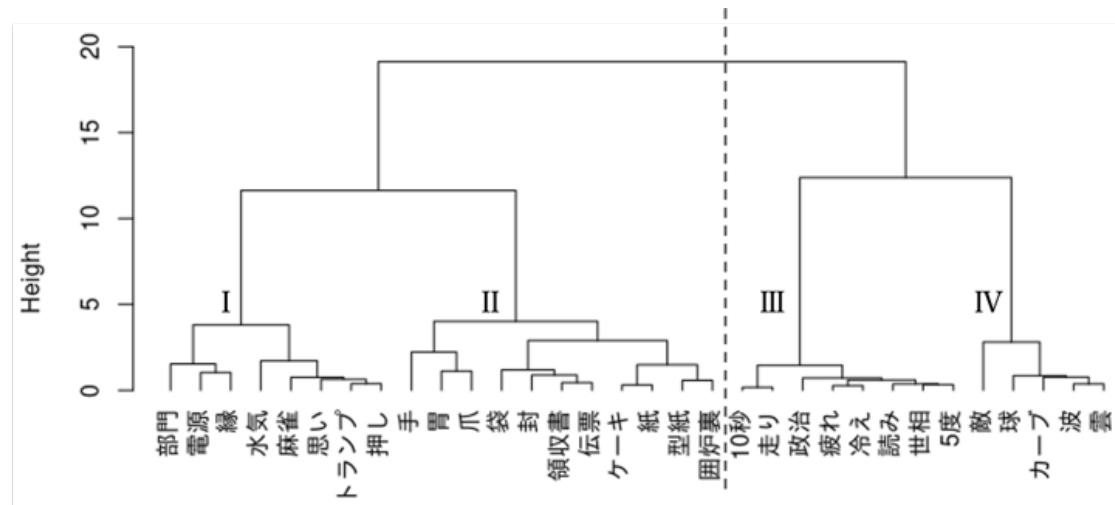
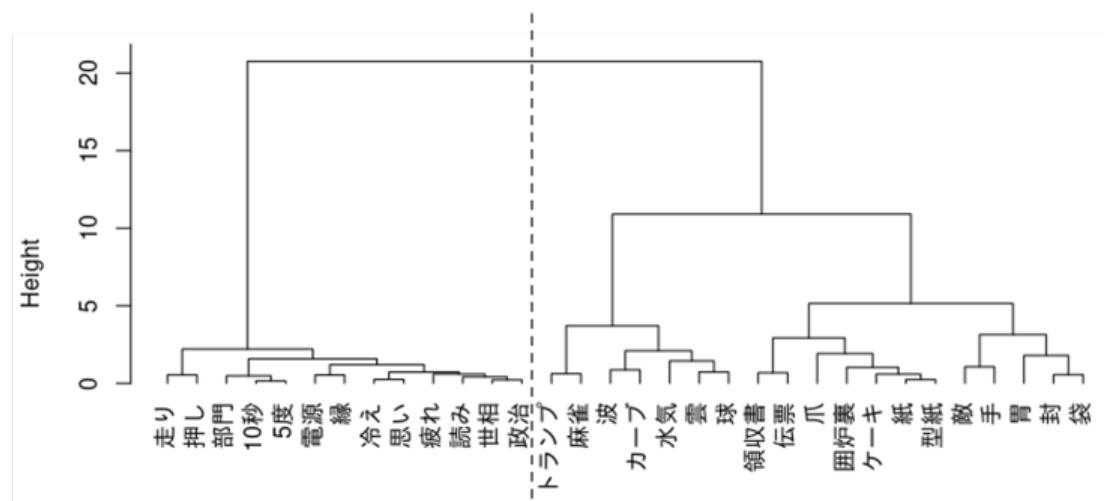


図 4-14 CJL による意味素性評定の結果



JNS の結果は全体的に 4 つのクラスターにカテゴリー化されていた点で一致しており、意味記述の心理的実在性がある程度認められると言える。まず、右側の群は「切る」に関する分断・破壊事象において、力の対抗が強く感じられる動き（「波」、「雲」、「敵」、「球」、「カーブ」、「世相」など動いているモノ）であるのに対し、左側の群は力の対抗はそれほど強く感じられないモノ（「紙」、「伝票」、「袋」、「胃」、「パン」）

など動かないモノ)であると考えられる。また、それぞれの下位分類では、抽象物(図4-13のクラスターIとIIIを参照)と具象物(図4-13のIIとIVを参照)の区分がある程度観察された。しかし、<殺傷義>である「敵」、<批評義>である「政治」「世相」の分類は意味分析と合致しなかった。

一方、CJL の結果では、点線の左側と右側の違いに着目すると、JNS にそれほど強く感じられない抽象性と具象性を最も際立った基準にする傾向が見られた。右群は物理的な一続きのものに関する分断事象（「紙」、「爪」など）に加え、一続きのものを分断するように物理的力を行使する事象（「波」、「カーブ」など）が含まれる。それに対し、左群は「政治」、「縁」、数値、動作（複合動詞の前項）などのように、すべて抽象性が高いものである。このため、学習者はより共起語の表面的な性質（抽象的か、具象的か）に着目して意味を分類する傾向が観察されると言える。以上、意味素性評定テストの結果に基づくカテゴリー化の違いを図 4-15 にまとめる。

図 4-15 母語話者と学習者によるカテゴリー化の違い



#### 4.5 類義関係にある分断・破壊動詞との比較

ここまで述べた節では、力動性に基づく意味分析、コーパス調査、心理実験によって、多義動詞「切る」の意味構造を考察した。しかし、語彙のカテゴリー化を明らかにするために、語の意味構造を解明するだけではなく、類義語と関連語と区別するための語彙カテゴリー化の境界線のあり方（使い分け）を考察し、その語がある事象においてどのように位置づけられるかを明確にする必要がある。

続いて、本節では、RQ3 について、「切る」の意味範囲がどこまで広がっているか、また、類義語「割る」、「裂く・割く」との使い分けがどのように異なるかを分析する。さらに、類義語の使い分けの習得について、学習者における使い分け方が、母語話者のものとどう異なるかを検討する。

RQ3 「切る」はその類義語の間の使い分けはどのようになされているか。

3.1 「切る」と「割る」、「裂く・割く」の意味特徴には、どのような違いがあるか。

3.2 母語話者と学習者の間で、「切る」と「割る」、「裂く・割く」のコロケーションの使用には、どのような違いがあるか。

3.3 母語話者と学習者の間で、「切る」と「割る」、「裂く・割く」の使い分けには、どのような違いがあるか。

#### 4.5.1 調査方法と分析方法

##### 4.5.1.1 実験対象者

本節は、「切る」と類義語「割る」、「裂く・割く」を考察対象として取り上げ、分断・破壊事象を表す動詞の意味範囲とカテゴリー化の境界線のあり方を解明することを目的とする。分断・破壊事象を表す動詞の使用状況を調査するために、日本語母語話者（以下、JNS）と中国人学習者（以下、CJL）各 50 名を実験対象者とした。そのうち、JNS は日本の大学に在籍し、外国語や言語学を専攻していない学部生である（平均年齢 20 歳、SD=1.9）。CJL は、中国の大学に在籍し、日本語を専攻している学部生（平均年齢 21 歳、SD=2.3）である。また、CJL の日本語レベルを一定にするため、対象とする CJL は日本語能力試験（JLPT）の N1 取得者（120~160 点）であり、かつ、日本での留学経験がない学習者に限定した。

##### 4.5.1.2 実験データ

データを収集するために、上述の実験対象者に対して集団ごとに実験 3 の「想起テスト」を行った<sup>27</sup>。対象者には、「切る」、「割る」、「裂く・割く<sup>28</sup>」を使用し、思いつい

<sup>27</sup> 4.4 節の実験 1 「類似性判断テスト」と実験 2 「意味素性評定テスト」は「切る」の例文を実験対象者に提示するものであったため、実験 1 と実験 2 に参加した対象者には「切る」に関する意味や例文がある程度定着していると想定できる。したがって、実験間の相互影響を避けるため、実験 3 の「想起テスト」では、実験 1 とも実験 2 とも異なる実験対象者を採用した。

<sup>28</sup> 本研究は、国立国語研究所が作成した基本動詞ハンドブックによる原則に基づき、「裂く」と「割く」は同一の多義語と見做し、異なる意味を表す場合には字形が異なると仮定する。そのため、実験対象者には「裂く・割く」を用いて例文を書いてもらう際、どちらの字形を使用してもよいと伝えた。

た順にそれぞれ例文を 5 つ書くように求めた。また、動詞の意味を明確に判断できるように、できる限り必要な文脈要素をつけるようにも指示した。このようにして収集した产出文について、主に「N+を+分断・破壊動詞」というコロケーションに焦点を当てて、共起語と共起制限の側面から分析した。次の表 4-6 に実験データの詳細を示す。

表 4-6 実験データのサイズ

	JNS (50 名)			CJL (50 名)		
	Tokens	Types	R <sup>29</sup>	Tokens	Types	R
「N+を分断・破壊動詞」	592/61.51	169/17.56	2.24	448/57.75	93/11.99	1.58
「N+を+切る」	237/24.62	76/7.90	1.59	177/22.82	43/5.54	1.16
「N+を+割る」	176/18.29	55/5.71	1.33	150/19.33	28/3.61	0.82
「N+を+裂く・割く」	179/18.60	38/3.95	0.91	121/15.60	22/2.84	0.72

全体的に、JNS と CJL による「N+を+切る」のコロケーションの異なり語数は、「N+を+割る」と「N+を+裂く・割く」より多いことで共通している。また、語彙の多様性を反映する R 値を見ると、JNS の R 値が CJL より高いという点から、JNS によるコロケーションの豊かさ、すなわち、多様で幅広いコロケーションを使用することがわかる。これに対し、CJL は限られたコロケーションを頻繁に使用する傾向が見られる。

#### 4.5.1.3 分析方法

本研究では、上述の実験データに基づき、まず、RQ3.1 「切る」の類義語との意味特徴の違い」に関して、コア理論（田中 1990）を用いて図式化することで、「切る」と「割る」、「裂く」の境界線のあり方に関する分析を試みる。そして、RQ3.2 「JNS と CJL による分断・破壊事象の共起語の違い」に関して、対応分析の手法<sup>30</sup>を用いて実験デー

<sup>29</sup> Guiraud (1954) による R 値は語彙の多様性を反映する指標である。表 4-6 の R はコロケーションにおける N の語彙多様性である。

R の計算公式は  $R = \frac{\text{Types}}{\sqrt{\text{Tokens}}}$  である。

<sup>30</sup> 対応分析とは、クロス集計表に含まれる複雑な情報を 2 次元の散布図などで分かりやすく可視化するための手法である。データの構造を可視化することで、テキスト間の関係や変数間の関係を直感的に把握することができる（小林 2017b: 169-175）。本稿では、対応分析を用いて、

タを可視化する。さらに、RQ3.1 と RQ3.2 の結果を踏まえ、RQ3.3 の JNS と CJL による分断・破壊動詞の使い分けの違いについて、JNS と CJL にある使い分けの基準を明確にする。その上で、中国語の分断・破壊動詞類との比較を通して、CJL による母語転移のメカニズムを分析する。

#### 4.5.2 「切る」、「割る」、「裂く・割く」の意味特徴と意味領域

##### 4.5.2.1 「切る」、「割る」、「裂く・割く」の意味特徴

「割る」と「裂く・割く」は「切る」と同様、分断・破壊事象を表す動詞ではあるものの、それぞれの意味特徴や共起制限は異なる。RQ3.1 の問題を解明するために、まず実験で収集した JNS のデータから、各動詞のそれぞれ頻度上位 15 項目の共起語（目的語項）を抽出した。結果は表 4-7 のとおりである。

表 4-7 JNS による分断・破壊事象を表す動詞の共起語高頻度リスト

順位	JNS-切る	順位	JNS-割る	順位	JNS-裂く・割く
1	髪	1	皿	1	時間
2	紙	2	式・数字	2	チーズ
3	縁	3	卵	3	紙
4	野菜	4	薪	4	布
5	指	5	西瓜	5	人手
6	電話	6	ガラス	6	仲
7	電源	7	瓦	7	労力
8	トランプ	8	腹	8	魚の腹
9	関係	9	風船	9	雲
10	切符	10	酒	10	空間
11	風	11	定員	11	闇
12	爪	12	割り箸	12	木
13	秒	13	殻	13	関係
14	白	14	食事代	14	小遣い
15	敵	15	煎餅	15	肉

JNS のデータにおける「切る」、「割る」、「裂く・割く」のコロケーションについて、

---

動詞別（「切る」、「割る」、「裂く・割く」）の差と言語使用者（母語話者と中国人学習者）の差を同時に分析することで、母語話者と学習者がこの 3 動詞を使用する際に特徴的に出現する共起名詞を特定する。この結果を踏まえ、母語話者と学習者による 3 動詞の使い分けの違いを分析する。

いずれも 40%以上が動詞の基本義である物理的な分断・破壊を表すものである（表 4-7 の下線は、物理的分断・破壊事象と認定されるコロケーションを示す。）また、「切る」と「割る」の頻度順上位 1 位のコロケーション、および「裂く」の頻度順上位 2 位のコロケーションも物理的な分断・破壊事象を表している。そこで、以下では、まず、各動詞が表す物理的な分断・破壊事象の特徴を比較し考察することとする。

- (33) カッターで紙を切った。 (JNS\_03<sup>31</sup>)  
(34) ハンマーで皿を割る。 (JNS\_16)  
(35) 手でチーズを裂いて少しづつ食べた (JNS\_09)

(33) で用いられるような「切る」は、動作主が対象の 1 点を切れ目と決定し、そこに鋭利な道具を用いて集中した力を行使し、スパッと分断することを表す。このような事象では、道具である「ハサミ」が置かれる箇所に精確な分断が起こるため、分離箇所が予測できる。それに対し、(34) の「割る」という動作の行使には、「ハンマー」などの道具を伴う可能性があるが、道具の介在とその鋭利さは「切る」ほど必要ではない。また、このような事象では、分離箇所の位置と数が判断しにくいため、裁断面がどのような形状になるかといった予測可能性が低く、動作の破壊性が強く感じられる。(35) の「裂く」も同様に動作の破壊性を含意するが、通常は「手」で対象を順次分離することを表す。すなわち、「切る」と「割る」に含意される瞬間的な力の行使とは異なり、「裂く」は漸次的な力の行使が特徴であると言える。

上述のように、分断・破壊事象を表す動詞の意味用法には、一定の関連性と連續性が見られると言えよう。しかし、それぞれのプロファイルされる意味特徴は明らかに異なる。Majid et al. (2008) では、分断・破壊事象の類型化に関して、複数の意味要素が挙げられる。本研究は、Majid et al. (2008) を踏まえ、分断・破壊事象を表す動詞の意味特徴を考察する。特に、「切る」、「割る」、「裂く・割く」の意味特徴に関わる要素を抽出し、力の観点から次の表 4-8 のようにまとめる。

---

<sup>31</sup> 収集したデータに関して、JNS と CJL の実験対象者のグループにそれぞれ番号をつけた。例えば、JNS\_03 は JNS グループの 3 番目の実験対象者による産出文である。

表 4-8 「切る」と類義語の意味特徴

動詞	(A) 力の作用 方式	(B) 力を行使 する道具	(C) 力が作用した 対象	(D) 力による状態変化		
				(D1) 裁断面の 予測可能性	(D2) 状態変化 の過程	(D3) 状態変化 の結果
切る	集中した力で 対象の 1 点・ 線・面を裁断 面として作用	鋭利な道具	硬/軟	高い	分離箇所が 力の行使と 同時生じる	分断性 (cut 系事象)
割る	分散した力で 対象の両端に 加えて作用	鈍器（硬く て重みのある 物）/針形 (細長くて 鋭利な道 具)/手	硬 (優勢) /軟	低い	分離箇所が 力の行使と 同時生じる	破壊性 (break 系・ snap-smash 事象)
裂く	漸進的に力を 加え対象を順 に分離する	手	軟 (優勢) /硬	低い	分離箇所が 順次生じる	破壊性 (break 系・ tear 事象)

表 4-8 を見ると、意味要素 (B) 「力を行使する道具」と意味要素 (C) 「力が作用した対象」に関しては、動詞ごとに違いが見られるが、境界線は極めて曖昧であり、区別は明確ではないと言える。このため、ここでは特に意味要素 (A) 「力の作用方式」と意味要素 (D) 「力による状態変化」の点に着目し、「切る」、「割る」、「裂く・割く」の意味特徴の違いを確認しておく。

(A) 「力の作用方式」に関して、「切る」は、集中した力で対象のある部分を裁断面・切れ目として作用するという特徴を持つ。また、この裁断面・切れ目は、対象の次元によって変わる。例えば、「髪を切る」のような、対象が 1 次元である場合、裁断面・切れ目は、「点状」である。「紙を切る」のような、対象が 2 次元である場合、裁断面・切れ目は、「線状」である。「ケーキを切る」である場合、裁断面・切れ目は、「面状」である。それに対して、「割る」は、「皿/煎餅/割り箸を割る」のように、分散した力を対象の両端に加えることで作用する。すなわち、「割る」の力は対象の特定のある部分に集中するわけではなく、分散的に作用するものである。また、「裂く・割く」は、「手でチーズ/紙/布/を裂く」のように、力を漸次的に対象に加えることで、対象が順次分離するものである。

一方、(D)「力による状態変化」に関しては、さらに3つの下位区分が挙げられる。

(D1)「裁断面・切れ目の予測可能性」について、「切る」に関する事象では、分断された裁断面と切れ目、すなわち状態変化の起点が予測しやすい特徴がある。それに対し、「割る」と「裂く・割く」は、力の行使方向が明確でないため、裁断面と切れ目の位置も比較的予測しにくくなる。(D2)「状態変化の過程」について、「切る」と「割る」は分離箇所が力の行使と同時に生じることで共通しているが、「裂く」は分離箇所が順次生じるという特徴が際立つ。また、(D3)「状態変化の結果」では、「切る」はcut系動詞の性質を持ち、動詞の様態卓立性が高く、動作の分断性のイメージが強いが、「割る」と「裂く」は動作の結果状態に注目するbreak系動詞のグループにより近くなっている、動作による破壊性の特徴がプロファイルされる。

#### 4.5.2.2 「切る」、「割る」、「裂く」の意味領域

文脈を捨象する方向で分析を推し進めると、それぞれの意味特徴の側面が異なるというよりは、むしろ本質的にこれらの動詞のコアまたはスーパースキーマが異なると想定できる。田中(1990)に提唱されたコア理論によれば、意味的有契性を探る際に、方法論的に原義と転義を区別するのではなく、語義を因数分解し、その結果として最大公約数的な意味を抽出すべきであるとされる。これに基づき、cut系動詞である「切る」は「集中した力による対象の状態変化」がコアであると仮定すると、「割る」の方はbreak系動詞としての性質が強く、「分散した力による対象の状態破壊」がコアであると想定できる。また、「裂く」は、状態変化のプロセスが「切る」や「割る」のいずれとも異なり、「漸進した力による対象の順次分離」をコアとしていると言える。

また、本章による「切る」の意味構造分析のように、分断・破壊事象では、動詞を軸とした主語項と目的項の間には力的対抗があると捉えられる。「割る」、「裂く」は同様に分断・破壊事象を表現しており、ある種の力的対抗が存在するはずであると考えられる。上述の各動詞のコアを力動性に基づき示すと、図4-16のようになる。また、それぞれの動詞のコア図式では、際立つ意味的特徴を示す要素を太線で表示する。

図 4-16 分断・破壊事象を表す動詞のコア図式

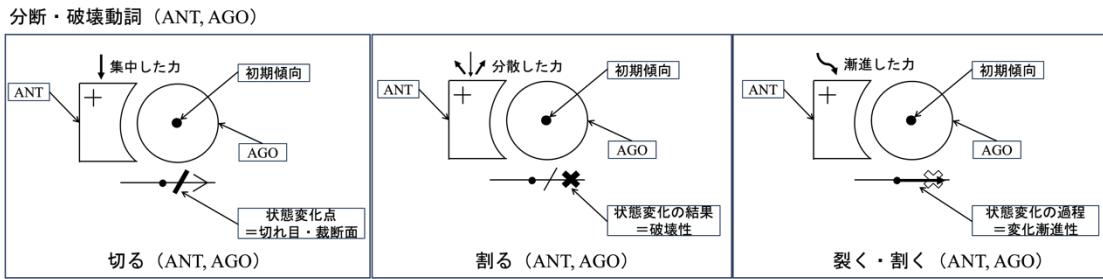
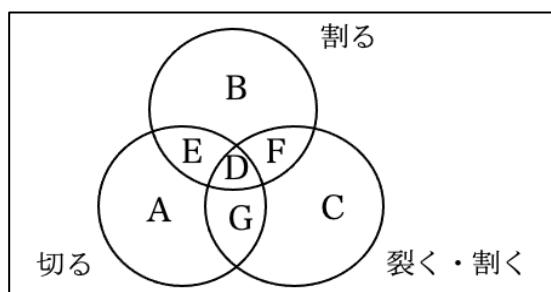


図 4-16 のコア図式から分かるように、「切る」、「割る」、「裂く・割く」はいずれも分断・破壊動作によって対象の状態が変わるという中核的な意味を持つが、それぞれの意味特徴の焦点が互いに異なる。「切る」は、裁断面・切れ目が予測しやすく、状態変化の起点が焦点化される。これに対して、「割る」は分割意識と破損意識が合わさった動作イメージを持つ（松田 2000）。また、「割る」は、この 3 つの動詞の中で破壊性のイメージが最も強い動作であり、状態変化の結果が焦点化される。それに対し、「裂く」は力の行使が漸進的であり、分離箇所も漸進的に変わるという意味特徴を持つ。状態変化のプロセスが焦点化されると考えられる。

また、動詞のコアは意味制御の機能を果たすため、コアが異なれば、同一語と共に起しても異なる側面がプロファイルされ、意味的拡張も異なる方向に起きるとされる（田中 1990）。図 4-17 のように、分断・破壊動詞の意味領域を仮定すると、意味領域 A、B、C はそれぞれの動詞に特有の意味領域である。それぞれの意味領域は、3 つの動詞だけが持っている意味・用法やコロケーションがあり、前述のような各動詞の中核の意味的特徴（コア的意味）を示す。

図 4-17 分断・破壊動詞の意味領域



一方、意味領域 D は、3 つの動詞の共有した意味領域である。意味領域 E は、「切

る」と「割る」の共有した意味領域である。意味領域 F は、「割る」と「裂く・割く」の共有した意味領域である。意味領域 G は、「切る」と「裂く・割く」の共有した意味領域である。以下、意味領域 D から意味領域 G にある動詞の意味的特徴をそれぞれ分析していく。

まず、「切る」、「割る」、「裂く・割く」の三者の共有する意味領域 D を見る。

- (36) a. メスで腹を切る。 (JNS\_26)  
b. 腹を割って話してみよう。 (JNS\_05)  
c. 魚の腹を裂く。 (JNS\_01)

意味領域 Dにおいて、「切る」、「割る」、「裂く」はいずれも (36) のような身体部位語「腹」と共起できる。しかし、(36a) は、手術用のメスを用いて集中した力で切れ目に作用する意味を表すのに対し、(36b) は比喩的イディオムに拡張しており、分散した力を両端に加え、対象を 2 つの部分に分けることを通して、本来表面に見えないものを隠したてせずすべて打ち明けるという慣用的意味を表す。一方、(36c) では、「裂く」は「腹」と生起することができるが、人間の腹ではなく、動物の腹との共起と理解される。それは「裂く」の意味のコアが漸進した力で対象を順次分離することであり、力が瞬間的ではなく、分離箇所が力の行使と同時に生じているわけではないためである。また、動作が手続き的に整頓されていないため、人間の腹との共起は容認されにくいと考えられる。

次に、「切る」と「割る」の両者だけの意味が重なっている意味領域 E では、どのような意味的特徴が見られるかを考察する。

- (37) a. 収容人数の 7割を切る。 (JNS\_33)  
b. 募集人数が定員を割る。 (JNS\_25)
- (38) a. 100 メートル走で10秒を切った。 (JNS\_25)  
b. \*100 メートル走で10秒を割った。 (作例)

意味領域 Eにおいて、「切る」と「割る」は両方とも、数値に関する用法をもつ。(37)のような「人数」、「定員」などの基準/基準値を表す語との共起が容認される。しかし、

「割る」のコアには破壊性というマイナスのイメージが強いため、(38a) のような肯定的評価を表す<突破義>の場合、(38b) のように「割る」を用いることができないという制約が見られる。つまり、「割る」は、意味のコアの制約上、意味拡張が「下回る」の意味にとどまり、「切る」の持つ<突破義>までは拡張されないということが捉えられる。

また、「切る」と「割る」の意味拡張の違いは、下の用例 (39) からも見られる。

- (39) a. 毎回ゲームの前に、トランプを切る。 (JNS\_08)  
b. アルコールをソーダで割って飲む。 (JNS\_01)

(39a) では、「切る」は「トランプ」と共起する場合、<混合義>が生じる。それに対し、(39b) では、「水」と「酒」という異なる物質のものを混合する意味が含意されている。しかし、それが表す意味は、<混合義>だけではなく、一方の物質で他方の物質と混ぜて希釈するという<希釈義>まで広がっている。それは、「割る」のコアには、力が分散的であるという特徴が含まれるためである。この力の分散性という特徴により、分散した力が一枚の「煎餅」の両端に加わり作用する（例：煎餅/割り箸を割る）ように、水が「酒」という異なる物質と混合された後、さらに物質が拡散するというイメージが喚起される。それに対し、集中的な力を特徴とする「切る」は、このようなイメージが喚起されないため、意味の拡張と広がりは<混合義>に止まる。

次に、「割る」と「裂く・割く」の両者だけが共有する意味領域 F について考察する。意味領域 F で表示された箇所に該当する用例として、「割る」と「裂く・割く」の両動詞はともに抽象的な金・費用に関わる「食事代」と共起できるが、異なる意味が表される。

- (40) a. 友達3人で食事代を割った。 (JNS\_43)  
b. 旅行中の食事代などの費用を割く。 (JNS\_43)

(40a) のように、「食事代」が「割る」と共起する場合、「割り勘」、すなわち対象全体を分けて均等に分担する意味を表す。これに対して、(40b) のような「裂く・割く」と共起する場合、所持金の一部を食事代のために残す意味を表す。すなわち、全体から

一部を分離して特定の用途に充てる意味である。このように、同様な共起語と共にしても、「割る」と「裂く・割く」は異なる意味を表す。言い換えれば、意味が異なる方向に拡張していることは、それぞれ「割る」のコアにある「分散性」の特徴と、「裂く・割く」のコアにある「順次分離」の特徴と一致している。

また、次の用例の容認度の違いから、「割る」と「裂く・割く」の意味特徴の違いを確認できる。

- (41) a. 新人の教育に時間を割いた。 (JNS\_01)  
b. \*チームメンバーと時間を割る。 (作例)
- (42) a. 駐車場に必要なスペースを割く。 (JNS\_25)  
b. \*教室のスペースを割る。 (作例)

(41) と (42) では、「裂く・割く」は「時間」、「スペース」と共起できるが、「割る」は「時間」、「スペース」と共起できない。(41a) と (42a) のように、共起語「時間」、「スペース」は「裂く・割く」と共起すると、全体から一部を分離することで、ある用途のために振り分ける意味を表すことができる。しかし、「時間」、「スペース」は抽象的で数えられないものであるため、それを均等に分けることができないため、力の分散性というイメージが喚起されない。従って、(41b) と (42b) のように、「時間」、「スペース」は、「割る」との共起は容認されない。

最後に、意味領域 G では、どのような意味的特徴が見られるかを説明する。「切る」と「割る」の共有する意味領域 D と、「割る」と「裂く・割く」の共有する意味領域 E とも異なり、「切る」と「裂く・割く」の共有する意味領域 G に該当する意味・用法は、拡張的意味・用法ではなく、物理的な分断義である。特に「紙」、「布」という 2 次元のモノに関する分断の場面では、「切る」と「裂く・割く」は動作の様態で違いが見られるが、力の行使による 2 次元の一続きのものの分断・破壊という状態変化で意味が共通している。2 次元の物は「割る」の対象とならないため、「割る」は、「切る」、「裂く・割く」と意味領域 G を共通していないと考えられる。

以上の分析により、共起語の特徴から、「切る」、「割る」、「裂く・割く」という 3 つの分断・破壊動詞では意味のコアが異なることがわかる。「切る」は状態変化の起点が際立つ cut 系動詞であるのに対し、「割る」と「裂く」は break 系動詞の性質が強く、

それぞれ状態変化の結果、状態変化のプロセスが際立つ。動詞のコアは無制限な語義の広がりを抑える方向で、「求心力」を働かせながら作用する。母語話者の頭の中で、コアという抽象度が極めて高い概念に関する意識は希薄であるが、無意識にコアの「求心力」の制限機能に従い、動詞の意味特徴を捉えて使い分けることで、異なる事態を描き出すようになる。

#### 4.5.3 母語話者と学習者による違い

##### 4.5.3.1 共起語の違い

前節では、RQ3.1 「母語話者（JNS）による 3 つの動詞の意味特徴」を分析した。本節では、RQ3.2 「JNS と CJL の間で、分断・破壊事象を表す動詞のコロケーションの使用には、それどどのような違いがあるか」について考察する。特に、CJL における分断・破壊動詞の共起語の使用状況が JNS とどのような違いがあるかを検討する。

まず、JNS と CJL によって産出された「切る」、「割る」、「裂く・割く」との高頻度共起語の上位 15 項目を抽出した。重複した共起語を除外し、合計 61 種を対象とした。

表 4-9 JNS と CJL による分断・破壊事象を表す動詞の共起語高頻度リスト

頻度順位	JNS-切る	CJL-切る	JNS-割る	CJL-割る	JNS-裂く	CJL-裂く
1	髪	野菜	皿	ガラス	時間	紙
2	紙	西瓜	式・数字	時間	チーズ	花
3	縁	紙	卵	茶碗	紙	時間
4	野菜	ケーキ	薪	皿	布	本
5	指	リンゴ	西瓜	人数	人手	糸
6	電話	肉	ガラス	卵	仲	シーツ
7	電源	期限	瓦	紙	労力	パン
8	トランプ	木	腹	胡桃	魚の腹	腹
9	関係	話	風船	式・数字	雲	布
10	切符	縁	酒	ケーキ	空間	関係
11	風	薪	定員	木	闇	饅頭
12	爪	時間	割り箸	腹	木	皮
13	秒	敵	殻	口	関係	感情
14	白	水気	食事代	酒	小遣い	肉
15	敵	パン	煎餅	関係	肉	土地

表 4-9 では、共起語の違いからわかるように、「切る」とその類義語「割る」、「裂く」

との使い分けについて、JNS と CJL におけるカテゴリーの境界線が異なると想定できる。その共起語の違いを可視化するために、以下、「実験対象者+動詞」を第 1 アイテム、産出された共起語を第 2 アイテムとする対応分析を実施し、各共起語の群を特徴づける類義語の使用傾向を検討した。その結果、以下の散布図が得られた。散布図の象限ごとに各動詞の共起語と特徴づけをまとめたものが表 4-10 である。

図 4-18 分断・破壊事象を表す動詞の共起語の対応分析の結果

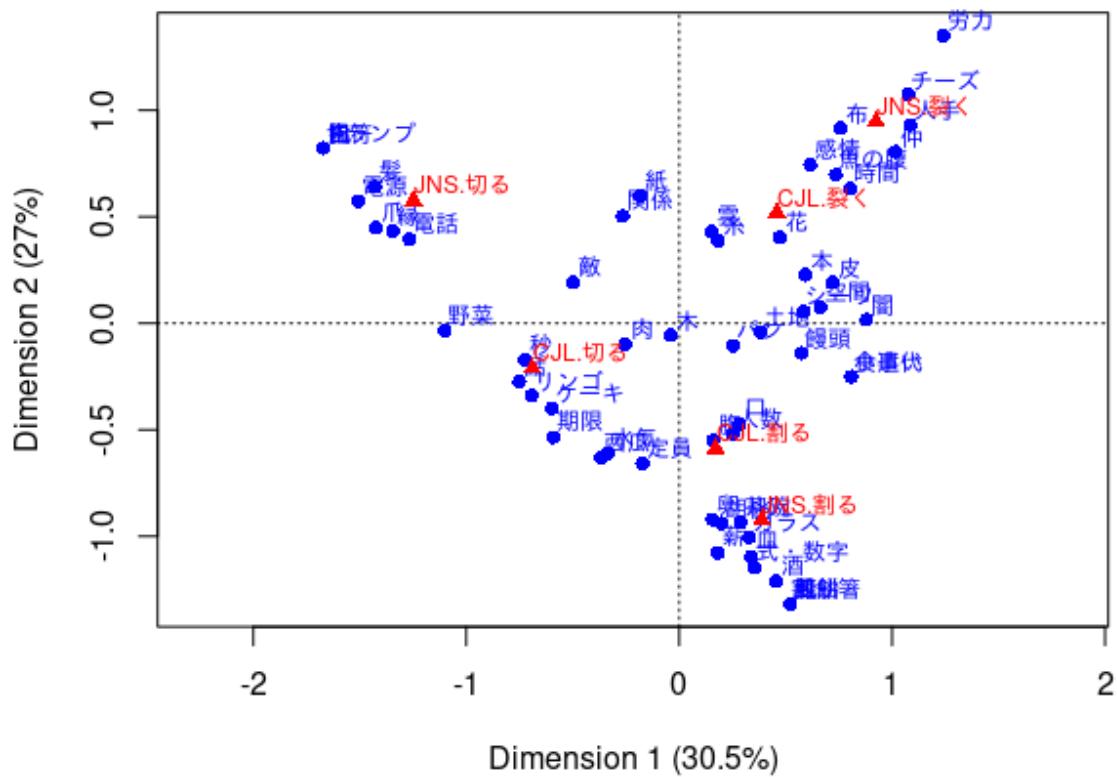


表 4-10 JNS と CJL による分断・破壊動詞の共起語と特徴づけ

区分	実験対象者+動詞	特徴づけ
第1象限	JNS_裂く、CJL_裂く	
JNS_裂く 仲、人手、労力、時間、空間、チーズ、布		抽象物・ある用途に充てる
CJL_裂く 土地、花、皮、本、糸、シーツ、闇、雲		自然物・物質同士の分離
第2象限	JNS_切る	
爪、髪、紙、切符、トランプ、電源、電話、縁、関係、敵		身体部位、機能喪失用法
第3象限	CJL_切る	
肉、野菜、西瓜、リンゴ、ケーキ、秒、期限、定員		調理、基準値内の達成
第4象限	JNS_割る、CJL_割る	
JNS_割る 酒、式・数字、皿、割り箸、薪、風船		道具多様・割り算・希釈
CJL_割る 腹、口、パン、饅頭、人数		手のみ・慣用句

解析の結果として、1次元と2次元の累積寄与率で50%以上が説明されることが確認できる。まず、全体的にJNSとCJLによる動詞の共起語の違いについて、CJLとJNSのデータは、散布図の左右にかたまって分布しているのではなく、動詞別にかたまる傾向が見られる。全体的に言えば、CJLとJNSで産出された共起語に大きな違いはないと言える。ただし、「割る」と「裂く」は、それぞれ第1象限と第4象限に位置する点でCJLとJNSは共通しているが、「切る」に関しては、CJLとJNSによる共起傾向がずれている。

まず、JNSによる動詞「切る」は第2象限に位置する。その中で、JNSを特徴づける共起語として、「爪」、「髪」などの身体部位に関する分断や、「電源」、「電話」など対象の機能を変える用法が多く見られる。それに対し、CJLによる動詞「切る」は第3象限に位置している。CJLによる「切る」の特徴づけとして、「西瓜」、「リンゴ」などの果物、「野菜」、「肉」などの料理場面の分断が多く想起され、数値に関する用法も比較的多い。しかし、ここで1つ注意したいことがある。CJLのデータでは、「期限を切る」の産出頻度がかなり高いが、(43) CJLによって産出された文脈を見ると、(44)のような「本来の期限を設ける<sup>32</sup>」という意味ではなく、期限を過ぎるという＜突破義＞として誤用されているものがほとんどである。そのため、CJLは数値を突破する用法と、時間や数を区切って期限・限度を設ける用法に関する理解が不足していることが示唆される。

- (43) \*あら、宿題の提出期限を切った。どうしよう。 (CJL\_08)  
(44) 期限を切って課題に取り組む。 (JNS\_37)

一方、「割る」と「裂く・割く」に関して、CJLとJNSの間で象限には違いが見られず（「割る」は第4象限に位置する。「裂く・割く」は第1象限に位置する）、多義性の程度がより高い「切る」と比べ、大きな違いは見られない。このため、CJLとJNSにおける「割る」と「裂く・割く」の共起語の使用には、大きな違いはないと言える。しかし、データの分布を詳しく見ると、共起語の特徴の違いが存在することが分かる。

---

<sup>32</sup> 「期限を設ける」という意味は、連続している時間を分断して締め切りを設定する事態を表すと想定できる。本質的に、中心的意味である＜分断義＞に当てはまる。

「裂く・割く」について、JNS の間では、「労力」、「仲」、「人手」、「時間」、「空間」など、抽象的なものの一部分を分離してある用途に充てる意味が多いのに対して、CJL では、自然物など、対象を構成する物質同士の距離を大きくして分離させる意味が多く産出された。

「割る」については、JNS は手で対象を割る以外に「ハンマーで皿を割る」、「針で風船を割った」など道具に関して多様な用法を産出したのに加え、割り算の用法や希釈の意味が多く想起された。一方、CJL の方は「口を割る」、「腹を割る」などの慣用句の想起が多くなったが、そのうちの一部は(45)のように<分断義>としての誤用が見られた。

(45) \*お医者さんは患者の腹を割った。

(CJL\_29)

以上、JNS と CJL における「切る」、「割る」、「裂く・割く」を特徴づける共起語の違いを明らかにした。また、break 系動詞である「割る」、「裂く・割く」と比べて、多義性の程度が高い cut 系動詞である「切る」の方は、CJL と JNS による共起傾向の差が大きいことがわかる。

#### 4.6.3.2 使い分けの違い

本節では、RQ3.1 と RQ3.2 を踏まえ、RQ3.3 「JNS と CJL の間で、分断・破壊事象を表す動詞の使い分けには、どのような違いがあるか」を検討する。

まず、中国語には、日本語の分断・破壊動詞それぞれのプロトタイプ的意味に対応する語が多数存在する。「切る」に相当する語としては、字形が類似した中国語の“切 (qie)”（「野菜を切る」）以外に、“剪 (jian)”（「紙を切る」）、“砍 (kan)”（「木を切る」）など複数の動詞が挙げられる。「割る」、「裂く・割く」について、目的語によって対応する中国語の動詞が異なる。すなわち、中国語には、日本語の「切る」や英語の cut のようなあらゆる場面で使用できる包括的な動詞は存在しない。また、意味の広がりについては、中国語の分断・破壊動詞は意味の範囲が狭く、日本語ほど意味が拡張されていない。すなわち、日本語の「切る」と中国語の“切 (qie)”では意味範囲の差が大きい。また、動詞「割る」と「裂く・割く」に至っては意味が非常に類似する中国語の

動詞は見当たらない。

外国語教育では、「言語転移（linguistic transfer）<sup>33</sup>」という概念が存在する。第一言語を習得した後に、言語学習者は、第二言語を学習する場合、既習の言語と新しい言語の間で音声や形態、意味などが相互に影響を及ぼすことである。また、第一言語と第二言語の特徴が一致する場合、第一言語の特徴をそのまま第二言語に持ち込まれると、「正の転移（positive transfer）」が起きる。反対に、第一言語と第二言語の特徴が異なる場合、第一言語の特徴をそのまま第二言語に持ち込まれると、「負の転移（negative transfer）」が起きる。

上述の通り、中国語の分断・破壊動詞は、プロトタイプ的意味と意味領域について、日本語の分断・破壊動詞と大きな違いが見られる（中国語の分断・破壊動詞の意味は、日本語のものよりも非常に狭い）。このため、中国人学習者は、日本語の分断・破壊動詞を習得する際に、中国語の“切（qie）”の意味用法をそのまま日本語の「切る」に転移させることではない。このため、本研究では、中国人日本語学習者の分断・破壊動詞の習得に関して、語レベルの言語転移は想定しにくいと想定する。事象の語彙カテゴリー化の境界線（使い分け基準）という概念レベルの言語転移が起きると考える。

以下では、母語による転移のメカニズムおよびJNSとCJLによる使い分け基準の違いを検討するため、まず、表4-8の分断・破壊を表す動詞の意味特徴を使い分け基準の観点から、表4-11のように改めて整理する。

---

<sup>33</sup> 言語転移は、母語転移、L1干渉、交差言語的影響という呼び方がある。

表 4-11 分断・破壊動詞の使い分け基準

動詞	【JNS1】 力の作用 方式	【CJL1】 力を行使 する道具	【CJL2】 力が作用した 対象	力による状態変化		
				【JNS2】 裁断面の 予測可能性	【JNS3】 状態変化 の過程	【JNS2】 状態変化 の結果
切る	集中した力で 対象の 1 点・ 線・面を裁断 面として作用	鋭利な道具	硬/軟	高い	分離箇所が 力の行使と 同時生じる	分断性 (cut 系事象)
割る	分散した力で 対象の両端に 加えて作用	鈍器 (硬く て重みのある 物) /針形 (細長くて 鋭利な道 具) /手	硬 (優勢) /軟	低い	分離箇所が 力の行使と 同時生じる	破壊性 (break 系・ snap-smash 事象)
裂く	漸進的に力を 加え対象を順 に分離する	手	軟 (優勢) /硬	低い	分離箇所が 順次生じる	破壊性 (break 系・ tear 事象)

表 4-11 のように、「力の作用方式」、「力を行使する道具」、「力が作用した対象」、「力による状態変化」という 4 つの意味要素のうち、JNSにおいて、特に「力の作用方式」と「力による状態変化」に関する意味特徴の違いが際立つ。また、「力による状態変化」に設定した 3 つのサブパラメータでは、「裁断面・切れ目の予測可能性（状態変化の起点）」と「状態変化の結果」は互いに強く関連するため、同一のパラメータとして見做す。以上、まとめると、JNS による日本語の分断・破壊動詞の使い分け基準は、【JNS1 力の作用方式】、【JNS2 裁断面の予測可能性+状態変化の結果】、【JNS3 状態変化の過程】という 3 つのパラメータによると考えられる。

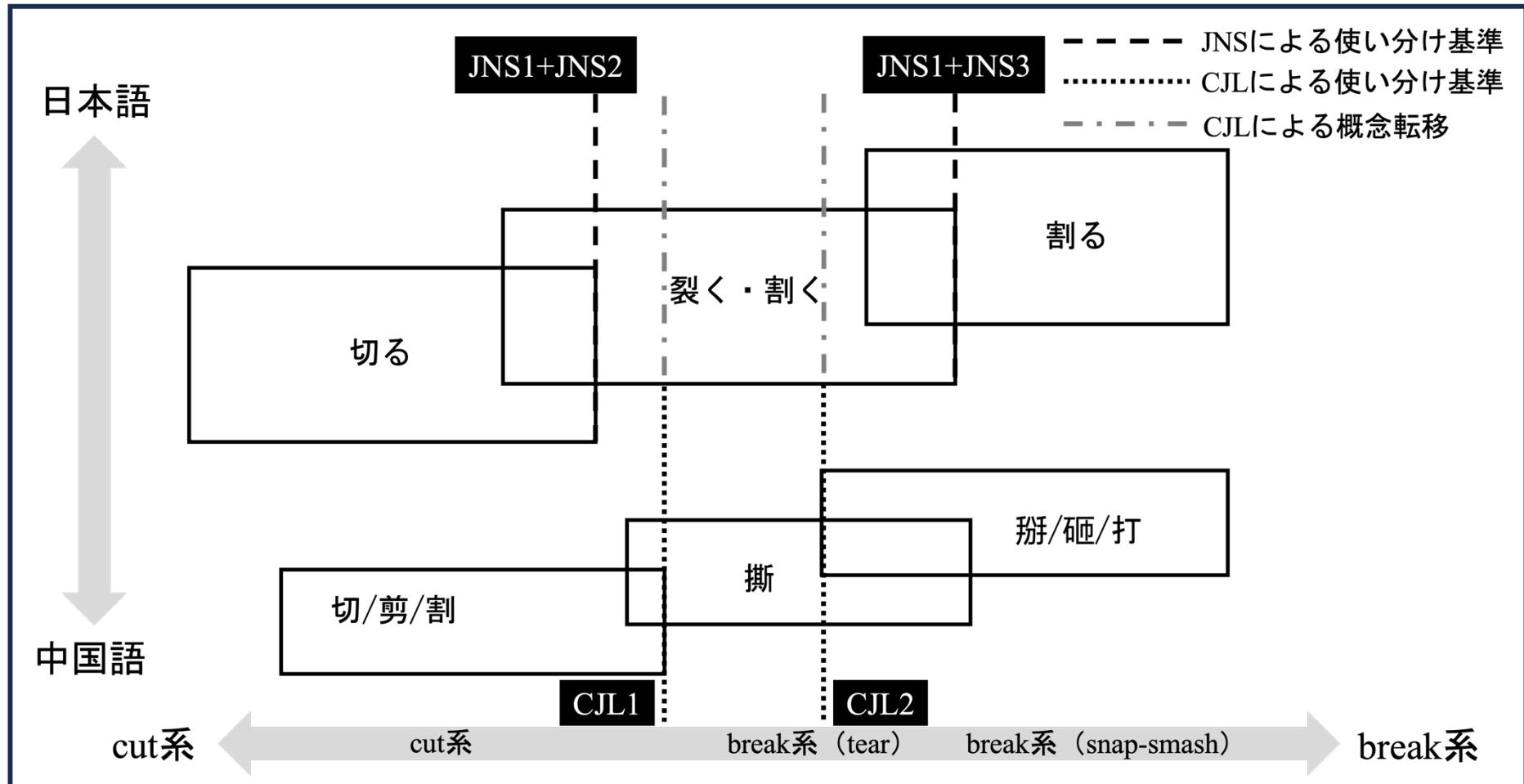
それに対して、CJL の産出例では、「切る」の産出例では、道具を伴う場合が多いが、「割る」と「裂く」の場面では道具項がほとんど生起していない。また、「割る」と「裂く」の動作対象も硬さの点で明確な違いがあることが見られる。つまり、CJL の産出例では、「割る」との共起語には固いものが圧倒的に多いのに対し、「裂く」との共起語には柔らかいものが優勢的に産出されている。このため、学習者においては、「力を行使する道具」と「力が作用した対象」を使い分け基準とする傾向が観察されると言えよう。以上、CJL による日本語の分断・破壊動詞の使い分け基準は、【CJL1 力を行

使する道具】、【CJL2 力が作用した対象】という 2 つのパラメータによると考えられる。

一方、中国語の分断・破壊動詞の使い分けに関しては、Chen (2007) では、中国語の分断・破壊動詞の特徴を分析した際に、「道具とその作用方式」、ならび「被動作主の特徴」を、分断・破壊動詞を区別するための重要な意味要素として抽出した。Chen (2007) の分析では、中国語において、まず道具の介在の有無によって、cut 系動詞類と break 系動詞類を区別した上で、対象の硬さによって snap・smash 事象と tear 事象を使い分けているとされる。すなわち、中国語の分断・破壊動詞の使い分けに関しては、【CJL1 力を行使する道具】、【CJL2 力が作用した対象】という 2 つのパラメータの影響も見られる。中国語の分断・破壊動詞の使い分けは、上記で提案した CJL による日本語の分断・破壊動詞の使い分けと類似している。これによって、CJL は、日本語の分断・破壊動詞を習得する際に、語レベルの言語転移ではなく、むしろ分断・破壊事象の語彙カテゴリー化の境界線（使い分け基準）という概念レベルの言語転移が生じると推測できる。

図 4-19 は、分断破壊事象における日本語動詞類と中国語動詞類それぞれの境界線、および CJL による言語転移のメカニズムを示す。

図 4-19 分断・破壊事象における JNS と CJL による使い分け



以上、図 4-19 のように、JNS と CJL における分断・破壊事象の使い分けの違いを可視化した。JNS の場合では「力の作用方式」+「状態変化」で分断・破壊動詞を使い分けるのに対し、CJL の場合では「道具」と「対象」という使い分け基準が際立つ。CJL による言語転移のメカニズムは語レベルの転移よりも、概念レベルの転移に相応しいことが示唆される。また、図 4-19 に示される概念レベルの言語転移は、CJL による(46) – (48) のような誤用が産出されやすい原因になっていると解釈できる。

- (46) ?斧で薪を切る。 (CJL\_27)  
(47) ?土地を割る。 (CJL\_33)  
(48) \*お医者さんは腹を裂いた。 (CJL\_13)

#### 4.6 本章のまとめ

本章は、課題 1 の「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」に関して、日本語の分離動詞「切る」の意味構造を考察したものである。特に、実証性の高い言語研究の実現を目指すために、力動性に基づいた意味分析、コーパス調査、心理実験という 3 つのアプローチを用いて 1 つの課題を多角的な側面から考察した。以下、提示したリサーチクエスチョンの順に、本章で得られた知見と示唆をまとめる。

RQ1（「切る」の意味カテゴリー化）に関して、力動性モデルに基づき、RQ1.1 の「切る」の包括的概念であるスーパー・スキーマは「集中した力による分断・破壊という状態変化（静止状態から活動状態へ）」であると結論づけた。また、そのスーパー・スキーマは目的語項と文脈によるバリエーションとして、下位レベルのスキーマ（局所的）を抽出できることを主張し、【パターン 1 外的統合性】、【パターン 2 内的秩序性】、【パターン 3 物理的抵抗性】、【パターン 4 心理的抵抗性】という 4 つの意味パターンを立てた。その中で、中心義を含む意味パターン 1 をこれらの 4 パターンの中心に据えた。また、RQ1.2 の語義間の有契性と関連性について、従来の先行研究が示唆するメタファー・メトニミーなどの動機づけに加え、力構造の要素のパラメータを導入し、<力動性+メタファー・メトニミー>の形で関連づけた。最後に、RQ1.3 の「切る」の多義構造の解明について、意味分析の結果に基づき、抽象的スキーマと具

体的スキーマを同時に示し、段階性がある立体的かつ複層的意味構造を可視化した。

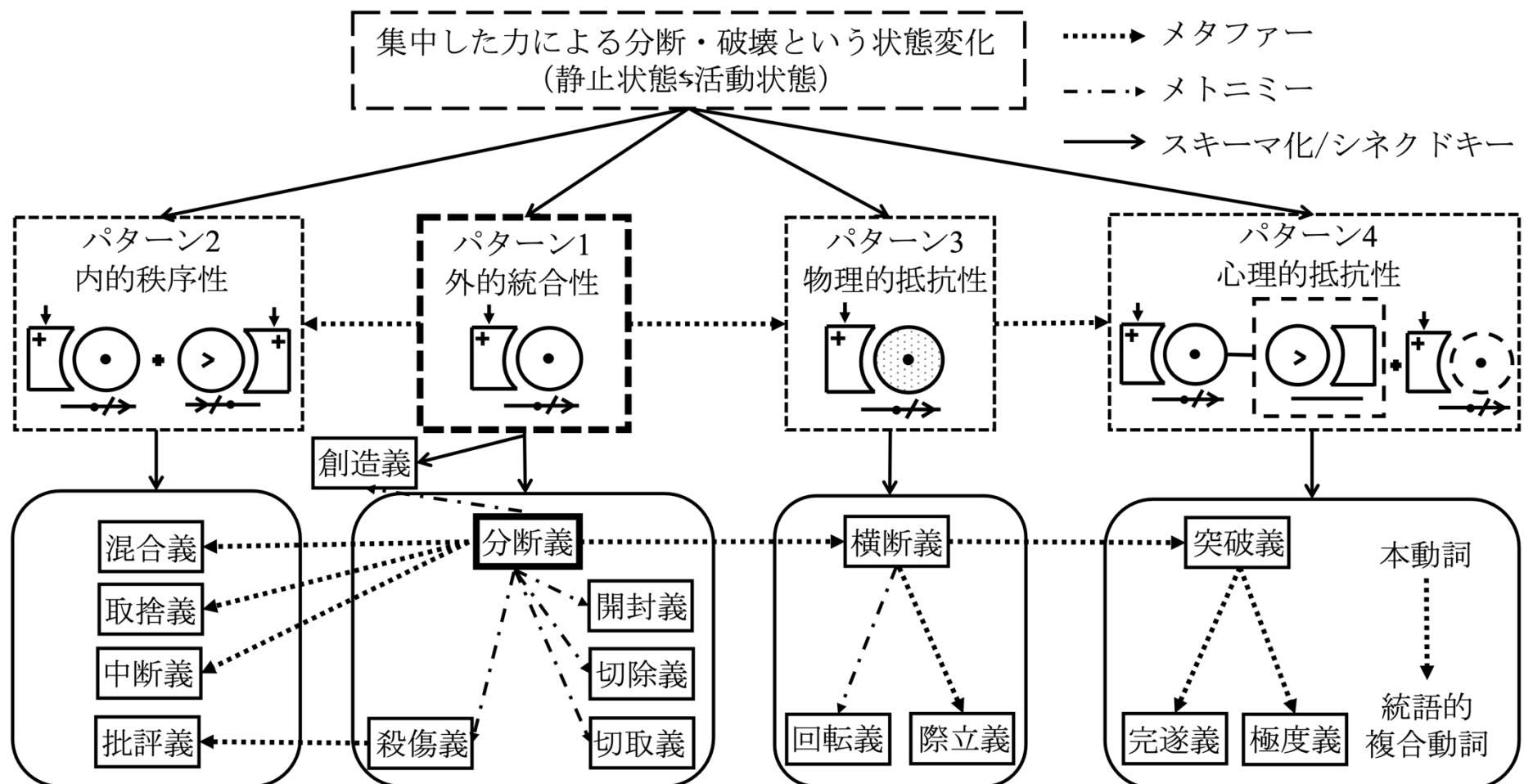
RQ2 (意味構造の心理的実在性) に関して、心理実験的手法を導入して意味分析の結果との比較を行った。RQ2.1 と RQ2.2 について、類似性判断テスト（実験 1）と意味素性評定テスト（実験 2）という心理実験により、意味分類と意味記述の両側面から上述の意味分析の結果を検証した。その結果、意味分析の結果と一致しない点も見られたが、力動性モデルに基づく 4 つの意味パターンのカテゴリー化と同様の傾向が見られたため、意味分析の妥当性と心理的実在性がある程度認められた。また、意味分析と心理実験の結果を総合的にまとめ、「切る」の意味構造を再検討した（文末の図 4-20 を参照）。また、RQ2.3 について、クラスター分析によるカテゴリー化の結果の比較を通して、母語話者と学習者が持つ意味構造には違いが存在することが明らかにされた。上位のカテゴリーでは大方一致しているのに対し、下位のカテゴリーでは以下の差が生じた。すなわち、学習者は (i) 動詞と目的語項の関係をきちんと捉えられないこと、(ii) 本動詞と複合動詞の関連性を捉えられないこと、(iii) 抽象的語義群の捉え方が不明瞭であること、および (iv) 共起語の表面的な性質に着目した意味分類を行う傾向が観察された。

RQ3 (切ると類義語の関連性と使い分け) に関して、コア理論と想起テスト（実験 3）という理論と実験の両側面からの分析を行った。RQ3.1 「切る」と類義語との関連性と境界線について、コア理論を用いて「切る」「割る」「裂く」の意味特徴の違いを示した。「切る」は状態変化の起点が際立つ cut 系動詞であるのに対し、「割る」と「裂く」は break 系動詞の性質が強く、それぞれ状態変化の終点・結果と状態変化のプロセス・過程が際立たされる。この 3 つの分断・破壊動詞は、意味のコアが異なるため、プロファイルされた意味特徴と意味拡張の方向では違いが見られる。また、語の意味のコアが意味制御の機能を果たすことをもとに、トップダウンの形で「円錐形」の頂点から、意味分析における「切る」の意味の可能域である底面を眺める形で「切る」のカテゴリー構造を捉えている。そして、RQ3.2 母語話者と学習者による分断・破壊動詞の共起語の違いについて、想起テスト（実験 3）で収集したデータに基づき、対応分析を用いてその結果を可視化した。その結果、中国人学習者と母語話者による産出例を見ると、多義性がより高い「切る」と比べ、学習者と母語話者による「割る」と「裂く」の共起語には大きな差が存在しないものの、共起語の細かい特徴づけに関して、それぞれ違いが見られた。RQ3.3 母語話者と学習者による分断・破壊動詞の使い分け

の違いについて、母語話者と学習者の頭にある使い分け基準がそれぞれ分析した。その上で、分断・破壊事象の習得において、中国人学習者による言語転移のメカニズムが明らかにされた。すなわち、語レベルの言語転移より、語彙カテゴリー化の境界線（使い分け基準）という概念レベルの言語転移が生じることが示唆される。

以上の 3 つのリサーチクエスチョンの答えに応じて、最後に「切る」の意味構造を図 4-20 に示す。

図 4-20 「切る」の多義構造（コーパス調査・力動性モデル・心理実験に基づく）



分析の結果を踏まえ、本研究による「切る」の意味構造分析の研究意義と理論的優位性を述べる。先行研究による分析と比べても、主に4つ優位性が挙げられる。1つ目は、力動性モデルは、動詞「切る」を軸とし、目的語項と主語項をそれぞれ主動体と対抗体と捉え、項の間における力的関係を明示できるものである。2つ目として、複合動詞「V1+切る」を本動詞と同様な力構造によって分析することで、本動詞と複合動詞における有契性を捉えることができる。3つ目として、「力的認知+比喩」で「切る」の意味を関連づけることで、先行研究において比喩の観点のみで解釈しにくかった用例と共に起制限を説明できるようになる。4つ目として、「切る」のスーパー・スキーマという包括的・核となる概念の抽出を通して、他の分断・破壊動詞との意味的概念的違いも捉えられる。これによって、分断・破壊動詞全体における「切る」の位置付けが明らかにされている。

なお、本章は、「切る」の分断・破壊動詞としての状態変化表現が表す意味・用法を主に論じる。次章から、「切る」は、状態変化と位置変化を統合した分離動詞として使用される場合、どのような意味的・構文的特徴を持つかを考察する。

## 第5章 日本語の分離動詞の意味体系研究

### 5.1 はじめに

動詞「切る」は、状態変化である「分断・破壊事象」と、状態変化と位置変化を統合した「分離事象」の両方を表すことができる。第4章では、「切る」と分断・破壊動詞「割る」、「裂く」との比較を通して、分断・破壊動詞としての「切る」の位置付けを明確にした。一方、本章では、他の分離事象を表す動詞との比較を通して、分離動詞としての「切る」の位置付けを明確にする。また、分離事象と隣接事象との関連性についても検討する。

現代日本語において、「切る」「抜く」のような、対象に力を加えることで分離させるという意味を表す動詞類が存在する。以下の用例が挙げられる。

- (1) a. 夏子が野菜を細かく小さく薄く切った。 (宮腰 2012: 31)
- b. ハンバーグや、お野菜をクッキーの型でかわいく抜いてひとつのお皿にのせれば、見た目もお肉・お野菜もバランスよくとれますよね。  
(Yahoo!知恵袋, 2005, 料理、グルメ、レシピ)
- (2) a. 木から邪魔な枝を切った。 / 木の邪魔な枝を切った。 (作例)
- b. 桜をボトルから抜いた。 / ボトルの桜を抜いた。 (作例)

「切る」、「抜く」は、(1) のように、結果補語を伴うことで対象の使役的な状態変化を表すことができるが、(2) のように、「カラ」格または「ノ」格によって移動の起点を表すことで、「Z (動作主) が X (分離元) から Y (分離物) を引き離す [Z CAUSES Y to MOVE from X] (cf. Goldberg 1995)」という使役的な位置変化を表すこともできる<sup>34</sup>。また、後述するように、(2) は、単一の事象を表しているのではなく、「状態変化」と「位置変化」という2つの下位事象を統合した複合的な事象を表している。

一方、日本語の「空ける」、「片付ける」、「拭う」のような動詞も、(2) と同様に状態変化と位置変化を表すが、(3) のように2つの構文形式をとることができる。

<sup>34</sup> 本章は使役変化事象を表す他動詞に注目して考察を行う。以下では便宜上、「使役的な状態変化」を「状態変化」、「使役的な位置変化」を「位置変化」と呼ぶことにする。

- (3) a. 太郎はグラスから水を空ける。  
(cf. John emptied water from the glass.)  
b. 太郎はグラスを空ける。  
(cf. John emptied the glass of water.)

このような格体制を取りうる動詞は「離脱型壁塗り交替動詞<sup>35</sup>」と呼ばれる(岸本 2001, 川野 2021 など)。

本章では、位置変化と状態変化の2つの事象を統合した複合的な事象を「分離事象」と呼称する。分離事象を表す非交替動詞である「切る」、「抜く」などを、「空ける」などの離脱型壁塗り交替動詞と区別した上で、「分離動詞」として扱う。複合的な分離事象を表す分離動詞のリストとして、(4) のように示される。

- (4) 状態変化と位置変化を統合した事象を表す分離動詞のリスト<sup>36</sup>：  
切る、抜く、落とす、外す、剥がす、剥く、折る、ちぎる、もぐ、削る、剃る、  
刈る、取る、分ける、など

また、分離動詞が生起して分離事象を表す構文を「分離事象構文」と呼ぶことにする。一部の分離動詞は、(2) のように、結果補語と共に起するという状態変化動詞の特徴<sup>37</sup>と、カラ格と共に起するという位置変化動詞の特徴の両方を持つため、典型的な位置変化動詞（「出す」、「置く」など）と典型的な状態変化動詞（「割る」、「破る」<sup>38</sup>など）とも異なる性質を有すると考えられる。

<sup>35</sup> 格体制の交替現象は、場所句が着点となる「壁にペンキを塗る/壁をペンキで塗る」という典型例に因んで、「壁塗り交替」現象と呼ばれる。「離脱型壁塗り交替動詞」が示す(3)のような交替は、壁塗り交替現象の一種である。

<sup>36</sup> ここでは、分離事象を表す単純動詞のみをリストしている。「切り取る」、「切り落とす」、「もぐ取る」などの分離事象を表す複合動詞は、ここでリストしていない。

<sup>37</sup> 「抜く」、「落とす」、「はがす」などの分離動詞は、本来的に使役的位置変化動詞として扱われる場合が多いが、典型的な「出す」や「置く」といった動詞とは異なる特徴を持つ。例えば、「かわいく/薄く/白く/短く/きれいに/汚く」のような結果補語と共に起し、分離物の使役的な位置変化により、分離元が何らかの形状・状態になることを表す。

興味深いのは、各動詞の組み合わせの相性によって、形容詞が様態解釈になる場合と結果解釈になる場合が見られる(例：きれいにシールを剥がした〔様態解釈：剥がす所作がきれい/結果解釈：剥がした結果状態がきれい〕)。結果補語の解釈の曖昧性に関する議論は別稿に譲る。

<sup>38</sup> 「割る」、「破る」などの動詞は、「切る」と異なり、位置変化を伴わない分断・破壊事象のみを表す。このため、典型的な状態変化動詞であると考えられる。

このため、本章は、課題 2「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」(1.2 節を参考) に関して、「切る」をはじめとする日本語の分離動詞がどのような意味体系を持つか、分離事象はどのように位置づけられるかについて明らかにすることを目的とする。具体的に、次の 3 つのリサーチクエスチョンに取り組む。

### 【課題 2 分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け】

- RQ1 現代日本語における分離動詞はどのような意味体系を持つか。 (5.2 節)
- 1.1 日本語の各分離動詞はどのように意味分類できるか。
  - 1.2 それぞれのタイプの分離動詞はどのような特徴を持つか。
- RQ2 分離事象はどのように位置づけられるか。 (5.3 節、5.4 節)
- 2.1 分離事象はどのような特徴を持つか。
  - 2.2 分離事象は、状態変化事象、位置変化事象とどのような関連性を持つか。
- RQ3 認知構文論から考えると、分離事象構文はどのように捉えられるか。 (5.5 節)
- 3.1 分離事象構文の形式と意味はどのように記述すべきか。
  - 3.2 分離事象構文は单一経路制約に違反するか。

以下では、5.2 節で RQ1 に対して、壁塗り交替現象に関わる先行研究を概観した上で、日本語の分離動詞が 2 種類に分けられるという仮説を提案する。続く 5.3 節と 5.4 節では、RQ2 に対して、分離元と分離物の物理的空間関係と、2 つの事象の関連付けに関する 2 種類の分離動詞の違いを示す。5.5 節では、「単一経路制約 (The Unique Path Constraint)」の観点から、分離事象構文が成立する要因と、break 系破壊動詞（「割る」、「破る」、「裂く」など）が同じ構文で使用できない要因を検討する。最後に 5.6 節で、5 章の内容をまとめた。

## 5.2 壁塗り交替現象と本研究の仮説

### 5.2.1 格体制交替の条件と現象

従来の移動表現に関する研究では、移動の着点に焦点を当てたものが多いのに対し、移動の起点に分析の焦点を当てた研究はあまりなされていない。特に、起点に焦点を当てた研究の中で、分離事象を表す自動詞を分析した先行研究に、Benom (2012) と李

(2016, 2019a, 2019b) があるが、本章のように他動詞を扱った研究は管見の限り見られない。

本章による分離動詞の分類基準を提示する前に、分離事象と関連する壁塗り交替現象に関する研究を概観し、本章の議論の問題意識を共有しておきたい。まず、「壁塗り交替 (spray-paint alternation)」現象とは、格体制の交替が関わる現象であり、「場所格交替 (locative alternation)」とも呼ばれる。格体制の交替と認められるためには、動詞が (5) の 2 つの条件を満たす必要がある。

(5) 格体制交替現象の条件

- i 2 種類の格体制をとること。
- ii 2 種類の格体制をとる文がほぼ同一の事象を表すこと。

川野 (2021) は、状態変化動詞文と位置変化動詞文の交替現象として、「付着移入型壁塗り交替」、「離脱型壁塗り交替」、「餅くるみ交替」、「満ち欠け交替」という 4 種類の交替を挙げている。その中で、「付着移入型壁塗り交替」、「餅くるみ交替」は、「X ニ Y ヲ V<sup>39</sup>」と「X ヲ Y デ V」の格体制をとり、「満ち欠け交替」は、「X ニ Y ガ V」と「X ガ Y ニ V」の格体制をとる<sup>40</sup>。それに対し、本章の考察対象である分離事象と類似した事象を表す「離脱型壁塗り交替」では、場所句が起点の役割を担い、カラ格で表示される。つまり、(6) のように、「X カラ Y ヲ V」と「X ヲ V」という 2 つの格体制の間で交替する現象である。

- (6) a. 位置変化 : X カラ Y ヲ V (e.g. グラスから水を空ける)  
b. 状態変化 : X ヲ V (e.g. グラスを空ける)

(川野 2021: 93)

また、川野 (2021) では、交替動詞の共通した特徴として、位置変化動詞文が表す

<sup>39</sup> 5.1 節で述べたように、分離動詞の場合、X と Y はそれぞれ「分離元 (=<背景・場所>)」と「分離物 (=<焦点・移動物>)」と規定されていた。それにに対し、壁塗り交替現象には、分離事象とは異なる事象もあるため、X と Y は分離元と分離物の関係が当てはまらない場合も含まれる。壁塗り交替現象では、X と Y はそれぞれ<場所>と<移動物>を表すとされる。

<sup>40</sup> 「餅くるみ交替」の例として、「桜の葉に餅を包む/餅を桜の葉で包む」がある。「満ち欠け交替」の例として、「彼に積極性が欠けること/彼が積極性に欠けること」がある。

事象が「依存的転移」型の位置変化、状態変化動詞文が表す事象が「総体変化」型の状態変化であると指摘される。一方、非交替動詞は、交替動詞と同様に位置変化と状態変化を表せるが、交替動詞と異なるタイプの位置変化と状態変化事象を表すと主張される。以下、交替動詞と非交替動詞の用例を示しながらそれぞれの位置変化と状態変化の類型の違いを説明する。

例えば、「空ける」、「溢れる」、「片付ける」のような離脱型壁塗り交替動詞を例に取ると、(7) の位置変化動詞文が表す「依存的転移」は、(8) のように記述される。

(7) 離脱型壁塗り交替動詞が表す位置変化

- a. グラスから水を空ける (交替型 : グラスを空ける)
- b. ゴミ箱から紙屑が溢れる (交替型 : ゴミ箱が溢れる)
- c. テーブルから皿を片付ける (交替型 : テーブルを片付ける)

(川野 2021: 101)

(8) 「依存的転移」:

ヲ格句の事物（自動詞の場合はガ格句の事物）の位置変化のあり方が、カラ格句の事物の埋まり具合の観点から規定される。例えば、容器の空間に占める事物の割合が 0 になるまで事物を外に位置変化させる（「空ける」、「空く」、「空っぽだ」の場合）。または、容器の容量を超えた分の事物が外に位置変化する（「溢れる」の場合）。あるいは、空間的美観に影響を及ぼすようなやり方で対象をそこから位置変化させる（「片付ける」、「片付く」の場合）。

(川野 2021: 101–102)

それに対し、非交替動詞としての位置変化動詞「出す」、「落ちる」、「どかす」は、

(9) の位置変化動詞文のように、「非依存的転移」型の位置変化を表すと主張されている。「非依存的転移」に関して、川野（2021）は（10）のように記述している。

(9) 非交替動詞が表す位置変化

- a. グラスから水を出す (交替型 : #グラスを出す)
- b. ゴミ箱から紙屑が落ちる (交替形 : #ゴミ箱が落ちる)

c. テーブルから皿をどかす (交替形:#テーブルをどかす)

(川野 2021: 102)

(10) 「非依存的転移」:

「依存的転移」に対比する概念である。対象であるヲ格句の事物の位置変化のあり方が、カラ格句の事物に依存していない。「出す」、「落ちる」、「どかす」等の動詞が表す位置変化には、それぞれの「位置変化のあり方」があるが、それらは「対象が場所に対してどのようなあり方でそこから位置変化するか」というような依存的なあり方ではない。

(川野 2021: 102–103)

(9) の非交替動詞の位置変化動詞文を (7) の交替動詞と比べると、「出す」の場合、場所の容量に対してどのくらいの水が外に出るのかという指定がない（一部が出るのでも良いし、全部が出るのでも良い）。「落ちる」の場合、外に落ちる紙屑は必ずしもゴミ箱の容量を超えた分であるとは限らず、紙屑の位置変化のあり方に、ゴミ箱の容量が関わらない。「どかす」の場合、皿の位置変化のあり方には、空間の美観が関わらない。すなわち、移動物の位置変化のあり方が場所の容量や美観などの性質に依存するかどうかという点で、「依存的転移」と「非依存的転移」には違いが見られる。

一方、状態変化に関して、(11) のように、交替動詞が参与する状態変化動詞文が表す「総体変化」は、(12) のように記述される。

(11) 離脱型壁塗り交替動詞が表す状態変化

a. グラスを空ける (交替形: グラスから～を空ける)

b. ゴミ箱が溢れる (交替形: ゴミ箱から～が溢れる)

c. テーブルを片付ける (交替形: テーブルから～を片付ける)

(川野 2021: 103)

(12) 「総体変化」:

対象であるヲ格句の事物（自動詞の場合はガ格句の事物）の埋まり具合の変化である。例えば、容器の埋まり具合が 0 パーセントになる（「空ける」、「空く」、「空っぽだ」の場合）。または、容器の埋まり具合が 100 パーセントを超

える（「溢れる」の場合）。あるいは、伴っていた事物が除去されることで空間全体の美観が変化する（「片付ける」、「片付く」の場合）。

（川野 2021: 103–104）

また、非交替動詞のうち、状態変化動詞である「割る」、「潰れる」、「たたむ」を例に、

- (13) のように、非交替動詞が表す状態変化は「自体変化」型であると主張される。  
「自体変化」に関する記述は、(14) の通りである。

(13) 非交替動詞が表す状態変化

- a. グラスを割る (交替型: \*グラスから～を割る。)
- b. ゴミ箱が潰れる (交替型: \*ゴミ箱から～が潰れる。)
- c. テーブルをたたむ (交替型: \*テーブルから～をたたむ。)

（川野 2021: 104）

(14) 「自体変化」:

「総体変化」に対比する概念である。「割る」、「潰れる」、「たたむ」等の動詞が表す状態変化は、対象そのものに生じる変化である。対象の形や大きさが変化することを表している。

（川野 2021: 104–105）

(13) の非交替動詞の状態変化動詞文を (11) の交替動詞と比較すると、(11a) と (13a) の対象は、同様に「グラス」であるが、「空ける」という動作の前後でグラスの大きさや形、その他の属性が変わっていない。「割る」という動作の前後でグラスが断片になるという形状的変化が生じる。(11b) と (13b) の対象は、同様に「ゴミ箱」であるが、「溢れる」は、「ゴミ箱」の埋まり具合の変化を表すのに対し、「潰れる」は、「ゴミ箱」自体の形状的変化を表す。(11c) と (13c) も同様、「片付ける」という動作の前後で、「テーブル」の空間全体の美観に関わる総体変化が生じており、「たたむ」という動作の前後で、「テーブル」自体の形状と大きさが変化する。

本章の考察対象である分離動詞という動詞類は、同様に位置変化と状態変化事象を表すことができるが、「離脱型壁塗り交替」のような格体制の交替を示さない。

- (15) a. 太郎は水田から水を抜いた。/ 太郎は壁から汚れを落とした。  
       b. \*太郎は水田を抜いた。/\*太郎は壁を落とした。
- (16) a. 太郎は木から邪魔な枝を切った。/ 太郎は手帳から紙をちぎった。  
       b. 太郎は木を切った。/太郎は手帳をちぎった。

(作例)

(15) では、「X カラ Y ヲ V (位置変化)」という構文形式しかとれず、「X ヲ V (状態変化)」の構文形式が成立しない。従って、(5i) の条件を満たさない<sup>41</sup>。一方、(16) では、「X カラ Y ヲ V (位置変化)」と「X ヲ V (状態変化)」の両方をとることができ。しかし、(16a) は分離元全体からその一部を引き離す事象を表すのに対し、(16b) は、分離元そのものに力を加えることで、分離元をいくつかの部分に分ける事象を表している。そのため、(5ii) の同一の事象の条件に当てはまらない。従って、本章の考察対象である「抜く」、「切る」のような分離動詞は、川野 (2021) の言う非交替動詞である。

ただし、「空ける」、「溢れる」、「片付ける」のような離脱型壁塗り交替動詞が表す意味と比較するだけでは、分離動詞の詳細な意味を明らかにしたことにはならない。以下では、各分離動詞が離脱型壁塗り交替動詞と意味的にどのように異なり、どのような類型の事象を表すか、更に検討する。

### 5.2.2 現代日本語の2種類の分離動詞に関する仮説

本章は、壁塗り交替動詞の格体制との比較に基づき、日本語の分離動詞には、(17) のように、「位置変化型」と「状態変化型」の2種類があるという新たな仮説<sup>42</sup>を提案する。

<sup>41</sup> 離脱型壁塗り交替の場合、日本語には、英語の *of/off* のように分離を表す格成分がなく、状態変化の構文形式で分離物が明示されないため、メトニミー現象と判別しにくいケースが見られる (cf. 「シャンパンを抜く/シャンパンからコルクを抜く」など)。本章は、松本 (1997) と川野 (2021) と同様の立場から、「抜く」、「落とす」、「はがす」などの動詞を非交替動詞として扱い、「シャンパンを抜く」は、「シャンパン」という語がシャンパンについているコルクへ指示を横滑りさせるメトニミー現象であると捉えている。

<sup>42</sup> しかし、構文的特徴だけで全ての分離動詞をいくつかのタイプに分類することが非常に難しい。例えば、「剃る」、「削る」のような、意味的に分離元の状態変化と分離物の位置変化を表すが、この2種類の分離動詞の構文的特徴のどちらにも当てはまらない動詞がある。これらの動詞はどのように分類できるか、またはそれぞれ仮説に提示された2種類の分離動詞のどちらにより近く位置付けられるかについて、第7章の実験的研究で検討する。

(17) 現代日本語の2種類の分離動詞に関する仮説

- a. 「位置変化型分離動詞」((5i) 2種類の格体制の条件を満たさない)

定義：本来的に位置変化動詞であるが、分離元の状態変化を表すこともできる。ただし、状態変化を表す「XをV」型の構文形式が成立しない。

例：抜く、落とす、はがす、など

- b. 「状態変化型分離動詞」((5ii) 意味の同一性の条件を満たさない)

定義：本来的に状態変化動詞であるが、分離物の位置変化を表すこともできる。ただし、「XをV」と「XからYをV」が表す事象が対応しない。

例：切る、ちぎる、折る、など

以下、分離元と分離物における空間的関係と、状態変化事象と位置変化事象の関係付けの側面から、それぞれの特徴を考察する。

### 5.3 分離事象における分離元と分離物の空間的関係

#### 5.3.1 コーパス調査

##### 5.3.1.1 調査方法とデータの収集

本節では、分離動詞が表す「Z(動作主)がX(分離元)からY(分離物)を引き離す」という分離事象の意味的特性を、XとYの間の空間的関係のあり方から考察する。

空間的関係の言語化について、徳永他(2004)は空間的関係を表す日本語の空間名詞表現「XのY(Xは参照物、Yは空間名詞)」にアノテーションを付けた際に、参照物の一部である位置を指す「部分型」、参照物から離れた位置を指す「分離型」という2つのタイプを抽出した。例えば、「机の端」は机の一部を指し、「部分型」の例と見なされる。それに対し、「机の近く」は机から離れたある位置を指し示し、「分離型」の例となる。このような空間名詞表現に関する分類の考え方を採用すると、空間的関係を分類する1つの基準は、焦点と背景が統合しているどうかというものであると考えられる。焦点と背景が統合している場合、「部分型」の空間的関係として表現される。焦点と背景が統合していない場合、「分離型」の空間的関係として表現される。

分離事象構文の特徴を考えると、ノ格/カラ格で移動の起点であるX(分離元)が表

示されている。分離動作の前に、X と Y（分離物）は、統合される関係にあり、「部分型」の空間的関係に当てはまる。このため、Y がどのように X と統合されているのかによって、分離事象における X と Y の空間的関係を 3 つのパターンに分ける。（18）に Y の X に対する空間的関係のパターンの詳細を示す。

(18) 分離元と分離物の空間的関係の分類

a. 「表面-付着物」タイプ（Y が X についている）：

単なる付着（汚れ、メイク）、密着した付着（塗装、ペンキ）、  
Y が X の付属物（ボタン、指輪）

b. 「容器-中身」タイプ（Y が X の内部にある）：

気体・液体が容器に内包（空気、水）、固体が容器に収納（刀、剣）

c. 「全体-部分」タイプ（Y が X の一部である）：

Y が X の主要な構成部分（枝、花びら）、  
Y が X の表面を構成（髪、表皮）

その上で、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』検索ツールである「NINJAL-LWP for BCCWJ（以下、NLB）」を用いて分離動詞の用例を収集し、考察を行う。具体的な調査手順として、本章の仮説で位置変化型分離動詞とされる「抜く」、「落とす」、「はがす」、状態変化型分離動詞とされる「切る」、「ちぎる」、「折る」をキーワードとして検索し、「N を V」のコロケーションに注目して考察する。

以上の手順で得られたコロケーションのタイプ（合計 2,966 種類）から、物理的な分離事象<sup>43</sup>を抽出した。その上で、該当するカラ格・ノ格名詞（X）、ヲ格名詞（Y）の特徴に基づき分類した。各空間的関係パターンの種類数と割合を表 5-1 に示す。

<sup>43</sup> 本章では物理的な分離事象に考察を限定し、「毒氣を抜く」のような抽象的な分離事象を表す慣用句、および「階段の上から空き缶を落とす」のような、状態変化を伴わず、位置変化のみを表す单一事象表現や「野菜を細かく切る」のような、位置変化を伴わず、状態変化のみを表す单一事象表現は扱わない。

表 5-1 日本語の各分離動詞における分離元と分離物の空間的関係 (NLBに基づく)

	位置変化型分離動詞			状態変化型分離動詞		
	抜く	落とす	はがす	切る	ちぎる	折る
表面-付着物	57 (50.8%)	86 (68.3%)	73 (90.1%)	3 (4.5%)	0%	0%
容器-中身	35 (31.3%)	23 (18.2%)	0%	0%	0%	0%
全体-部分	20 (17.9%)	17 (13.5%)	8 (9.9%)	64 (95.5%)	23 (100%)	18 (100%)

表 5-1 からわかるように、位置変化型分離動詞「抜く」、「落とす」、「はがす」では、(18a) 「表面-付着物」の関係にあたるもの（例：ボトルから栓を抜く）が最も多く、次に(18b) 「容器-中身」の関係（例：ボトルから水を抜く）も多数見られるが、最も少ないのは(18c) 「全体-部分」（例：芝生から雑草を抜く）の関係であった。一方、状態変化型分離動詞「切る」、「ちぎる」、「折る」では、「水/水気/水分を切る」を除き、他の用例は、全て(18c) 「全体-部分」の空間的関係にあたることが明らかとなった。

### 5.3.1.2 位置変化型分離動詞における空間的関係

以下、用例を具体的に考察する。まず、位置変化型分離動詞における X と Y の空間的関係を見る。「抜く」、「落とす」、「はがす」という 3 つの動詞は、位置変化と状態変化を被るモノの種類と特徴が多様である。その中で、「表面-付着物」の空間的関係の成立する用例は一番頻度が高く、最も優勢である（それぞれ 50.8%、68.3%、90.1%）。次の(19) を参照されたい。

- (19) a. 水となじむ乳化剤や可溶化剤がクレンジングオイルには配合されているから、白く濁ったオイルとお化粧を肌から落とすのさ。

(Yahoo!知恵袋, 2005, コスメ、美容)

- b. 仕上げ剤が軟化したらただちに除去器のスイッチを切り、装飾用スクレーバーを使って木材から塗料をはがす。

(アルバート・ジャクソン, デヴィッド・デイ著『木工技術シリーズ』, 2005, 583)

- (20) 信長が池の水を抜こうとしたところ、三割ぐらい減るだけで、あとは全く水嵩

が減らない。

(津本陽著『歴史に学ぶ』, 2003, 914)

(19a) では、位置変化（表面から外へ）を被る対象 Y は、ヲ格名詞「オイルと化粧」であり、状態変化（清潔になる）を被る対象 X は、カラ格名詞「肌」である。液体である「オイルと化粧」が「肌」に塗られ、「肌」の表面に付着している状況にある。(19b) では、位置変化（表面から外へ）を被る対象 Y は、ヲ格名詞「塗料」であり、状態変化（まだらになる）を被る対象 X は、カラ格名詞「木材」である。ここでの「塗料」と「木材」との密着度は (19a) の「オイルと化粧」と「肌」よりも高く、単純に付いているというより、「塗料」が「木材」に緊密に付着している。なお、モノ同士の密着度・統合性は異なるものの、(19a) と (19b) における X と Y は、どちらも「表面-付着物」の関係に当たると見える。それに対し、(20) において、位置変化（内部から外へ）を被る対象 Y は、「水」であり、状態変化（涸れる）を被る対象 X は、「池」である。ここでの「水」は、「池」についているものではなく、容器である「池」の中にある中身である。従って、(20) における X と Y は「容器-中身」の関係にあたる。

一方、位置変化型分離動詞では、X と Y が「全体-部分」の関係が成り立つ用例が少なかった（「抜く」、「落とす」、「はがす」それぞれの該当例の割合は 17.9%、13.5%、9.9% であった）。(21) に、コーパスからの用例を挙げる。

- (21) a. 夜になり、羅生門の楼で寝ようと上がってみると、一人の老婆が死人の髪を抜いていた。 (国語総合, 2006, 高)  
b. アマテラス・建スサノオ…手足の爪をはがされ、大巫女王・将軍の地位を逐わされて出雲へ追放されました。

(中西信伍著『神代卷の現代語訳』, 1992, 210)

また、位置変化型分離動詞の用例において、「全体-部分」の関係が意味的にあまり優勢でないことは、(22) の作例からも分かる。

- (22) a. ?太郎は頭から髪を抜いた。 / ?太郎は手から爪をはがした。  
b. 太郎は（頭の）髪を抜いた。 / 太郎は手の爪をはがした。 (作例)

(22a) のように、位置変化を被る「髪」、「爪」と、状態変化を被る「頭」、「手」は、「全体-部分」の関係であるが、「X から Y を V」という形式で使用すると不自然さが生じる。そのかわりに、(22b) のように、「全体-部分」の関係を言語化する場合は、カラ格より、ノ格の方が好まれる傾向にある。

以上から、位置変化型分離動詞では、状態変化を被る X と位置変化を被る Y の関係に関して、「表面-付着物」と「容器-中身」の空間的関係が、「全体-部分」の空間的関係よりも優勢であると分かった。

また、この空間的関係の傾向は、「空ける」、「溢れる」、「片付ける」のような離脱型壁塗り交替動詞の場合とかなり並行的であると同時に、一部に違いも見られる。

- (23) a. ゴミ箱から紙屑が溢れている。 / ゴミ箱が溢れている。 (川野 2021: 93)  
b. \*森から邪魔な木を {空ける/片付ける}。 / \*森を {空ける/片付ける}。  
(作例)  
c. テーブルから皿を片付ける。 / テーブルを片付ける。 (川野 2021: 101)

交替動詞では、位置変化型分離動詞と同様、(23a) のように、「容器-中身」の関係が容認されるが、(23b) のように、「全体-部分」の関係は成立しにくい。この点で、位置変化型分離動詞の振る舞いと類似する。一方、(23c) の位置変化を被る「皿」は、状態変化を被る「テーブル」に接触したモノである。位置変化分離動詞の場合、例えば前述の (19b) 「木材から塗料をはがす」における「木材」に付着した「塗料」という「表面-付着物」の関係と、空間的位置で類似しているものの、X と Y の間に密着関係が成立しない (例: \*木製机からさざくれを片付けた)。すなわち、離脱型壁塗り交替動詞では、相互に分離可能な接触関係にあるモノ同士への行為を表す点で、位置変化型分離動詞とは異なるのである。

### 5.3.1.3 状態変化型分離動詞における空間的関係

次に、状態変化型分離動詞が表す X と Y の空間的関係を見る。「切る」、「ちぎる」、「折る」では、状態変化を被る X と位置変化を被る Y は、基本的に「全体-部分」の

関係にある（それぞれの動詞の用例に占める割合は、95.5%、100%、100%）と確認できる。以下の用例（24）を参照されたい。

- (24) a. 天然林から木を切る場合も、すべてを切ってしまうのではなく、切る木を選んだり、切り方を工夫したりするなどの配慮が必要です。

(Google 用例<sup>44</sup>)

- b. 手帳から紙を数枚ちぎった。/ 花から花びらを数枚ちぎった。

(岩崎 1981: 29)

- c. あの桂の枝を折り、髪に飾してもろともに、この井に写す水鏡。

(石本隆一ほか (編) 1987 『日本文芸鑑賞事典』, 910)

(24a)において、位置変化（天然林から取り出す）を被るYは、ヲ格名詞「木」であり、状態変化（木が少なくなるという量的な変化）を被るXは、カラ格名詞「天然林」である。「木」は「天然林」の構成部分であるため、(24a) のXとYは「全体-部分」の関係にある。(24b)において、位置変化（手帳/花から取り出す）を被るYは、「紙」と「花びら」であり、状態変化（手帳が薄くなる/花が枯れる）を被るXは、それぞれ「手帳」と「花」である。「紙」は「手帳」の固有の部分であり、「花びら」は「花」の主要な構成部分である。従って、(24b)においても、XとYは「全体-部分」の関係にある。(24c)において、位置変化（桂から取り出す）を被るYは、ヲ格名詞「枝」であり、状態変化（部分的な形態変化）を被るXはノ格名詞「桂」であるため、この場合もXとYは同様に「全体-部分」の関係にある。

また、コーパスの用例から見ると、状態変化型分離動詞では、XとYの関係を言語化する際に、カラ格が使用される用例数が少ない（合計18例、割合1.9%）。それは、事物の「全体-部分」という関係が際立つ場合、YからXを推測できるためだと考えられる。特定の発話意図がない場合、話者が起点を示すカラ格とXを省略する、またはノ格でXをマークする傾向が見られる。

状態変化型分離動詞では、「全体-部分」の空間的関係が優勢であるとわかった。前に述べたように、この空間的関係の傾向は、「空ける」、「溢れる」、「片付ける」のよう

---

<sup>44</sup> <https://www.rinya.maff.go.jp/kanto/joetu/invitation/QandA.html> (2023年9月19日確認)

な離脱型壁塗り交替動詞の場合とは対照的に、離脱型壁塗り交替動詞では、「全体-部分」の空間的関係が許されないのである。

以上、位置変化型分離動詞、状態変化型分離動詞、離脱型壁塗り交替動詞の格体制と空間的関係の優勢順を分析した。それぞれの動詞に許される空間的関係を次の表 5-2 にまとめた。

表 5-2 2種類の分離動詞と離脱型壁塗り交替動詞における空間的関係

	位置変化型 分離動詞	状態変化型 分離動詞	離脱型壁塗り 交替動詞
X と Y の 空間的関係	表面-付着物（密着関係） 容器-中身 全体-部分	全体-部分	表面-接触物（接触関係） 容器-中身

### 5.3.2 力動性に基づく2種類の分離動詞の一体性

以上により、位置変化型と状態変化型分離動詞に関して、それぞれの分離元と分離物において優勢である空間的関係が明らかになった。次に、力動性の観点から、この2種類の分離事象において、X と Y の空間的関係がどのように捉えられるかを述べる。

本章で提示した「表面-付着物」、「容器-中身」、「全体-部分」という3つの空間的関係のパターンは、Y が X に統合されるあり方を分類したものであるが、これらの関係は、X と Y が接する密着度において異なっていると考えられる。この点に関して、桃内（2004）は、Heine（1997）による所有関係の範疇と角田（1991）による「所有傾斜」の概念に基づいて、各種の所有関係を図 5-1 のように、物理的密着度と心理的密着度という2つの軸で位置付けている。

図 5-1 所有関係の密着度（桃内 2004: 139）

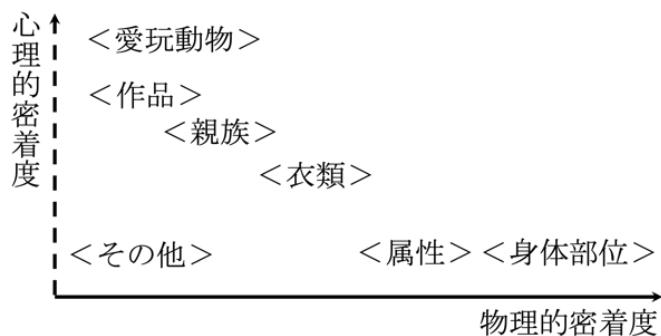
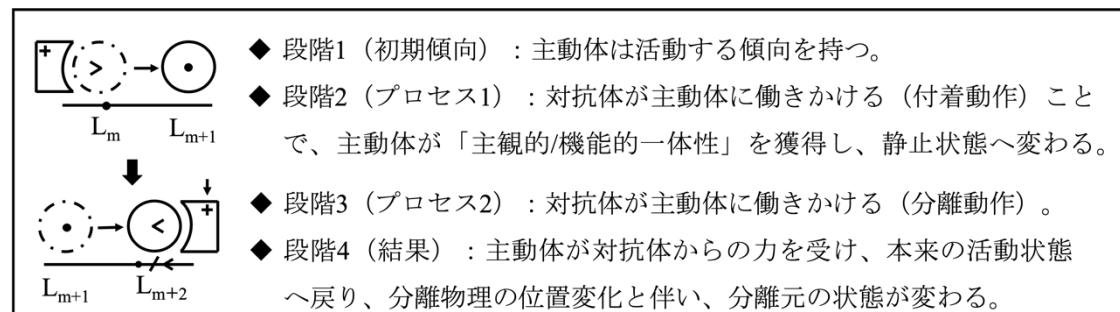


図 5-1 の所有関係の中で、分離元と分離物の空間的関係に該当するのは、<身体部位>、<属性>、<衣類>である。物理的密着度が最も高い<身体部位>は、有生物に限らず、無生物の固有の部分 (inherent parts of items) を含み、本章の「全体-部分」の関係と一致する。心理的密着度がより高い<衣類>は所有者の固有の部分ではなく、本章の「表面-付着物」、「容器-中身」の関係と類似する。分離元と分離物の初期の位置関係を考えると、X と Y は本来的に一体ではなく、空間 (例: 水と水田)、形状 (例: 指輪と指)、機能 (例: プラグとコンセント) の上で何らかのつながりを持ち、認識主体は主観的にこれら 2 つのものが一体化したものと捉えている。すなわち、「表面-付着物」、「容器-中身」にあたるもの同士の一体性には、主観的な特徴が見られる。また、「全体-部分」の関係にあたるもの同士は、形状的な関係で統合されるのに対し、「表面-付着物」、「容器-中身」の関係にあたるもの同士は、機能的な関係で統合されるのである。このため、本章では、「全体-部分」にあたる X と Y は「物理的一体性」を有し、「表面-付着物」、「容器-中身」にあたる X と Y は「主観的/機能的一体性」を有すると規定する。

第 3 章で提示した位置変化と状態変化を同時に表示できる改訂版の力動性モデルの図式 (図 3-2 を参照) に基づき、上記の 2 種類の一体性により、位置変化型分離動詞と状態変化型分離動詞が表す出来事を異なる初期傾向を持つ力動性モデルとして表示できる。まず、位置変化型分離動詞が表す事象に対して、以下の力動性の図式を与えることができる。

図 5-2 「抜く」をはじめとする位置変化型分離動詞の力動性図式



(25) を例にすると、図 5-2 の図式は、以下のように説明される。

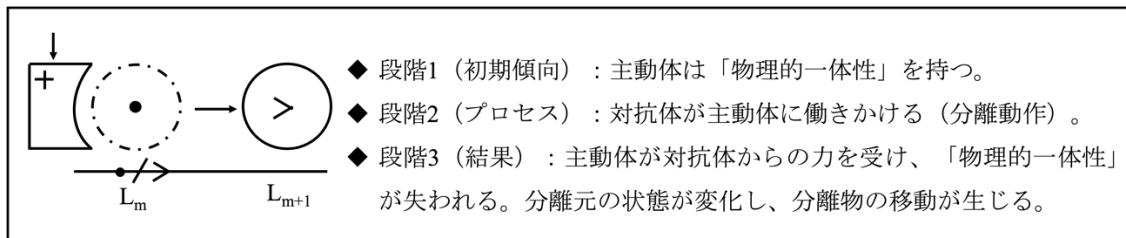
- (25) ボトルから栓を抜くというよりも栓からボトルを外すという感じでボトルを左右にひねりながら下方に抜く。

(Yahoo!知恵袋, 2005, 料理、グルメ、レシピ)

分離元「ボトル」と分離物「栓」は本来的に別物であり、それぞれを自由に位置変化させることができる。このため、ヲ格名詞の分離物「栓」を主動体として見なし、主動体は本来的に活動傾向にあると捉えられる。ガ格名詞（文中で出現しない場合がある）動作主である対抗体は、主動体に力を加え、「栓」を「ボトル」に付着や固定させることで、「栓」の自由移動の活動傾向を阻止させる。これにより、主動体は活動傾向から静止傾向に変わる。認知主体は、主観的に「栓」と「ボトル」は一体化しているように捉えている。これが「主観的/機能的一体性」である。そして、主動体はボトルを使用する場合、主動体に力を加え、「栓」を「ボトル」から引き離す。主動体は「主観的/機能的一体性」が喪失され、本来の活動傾向に回復する。その結果、分離物「栓」の位置変化が生じており、分離元「ボトル」も「栓」がついていない状態に変わる。また、(25) の下線部から、もう 1 つの現象として、分離事象における「図地転換」が見られる。「ボトルから栓を抜く」では、「ボトル」を分離元とし、「栓」を分離物としている。「栓からボトルを外す」では、「栓」を分離元とし、「ボトル」を分離物としている。動作主体がどのような力の行使の仕方で分離動作を行うか、また認識主体が対象のどちらの部分に焦点を当てるかによって、分離元と分離物の言語化の結果が異なっている。

一方、状態変化型分離動詞の力動性モデルとして、図 5-3 を提案する。

図 5-3 「切る」をはじめとする状態変化型分離動詞の力動性図式



- (26) 自宅などの敷地内にある桜の木が病気にかかっていたら、その枝を切り、駆除にご協力ください。

(市報べっぷ, 2008, 大分県)

(26) を例に図 5-3 を説明すると、分離元「木」と分離物「枝」は全体-部分の関係にあり、本来的に一続きのものであり、いわゆる、「物理的一体性」を備える。このため、ヲ格名詞の分離物「枝」を主動体とみなされる。この主動体は本来的に静止傾向にある。(文中で出現しない場合もあるが) 動作主ガ格名詞が表す対抗体は、主動体に力を加え、「枝」を「木」から取り除く。主動体は「物理的一体性」が喪失され、静止傾向から活動傾向に変わる。その結果、分離物「枝」の位置変化に伴い、分離元「木」の部分的な形状の状態変化も生じる。

ここで、状態変化型分離動詞としての「切る」の力動性モデル(図 5-3)を、第4章で提案した分断・破壊動詞として「切る」の力動性モデル(図 5-4)と比較すると、特に段階3の結果に関して違いが見られる。

図 5-4 「切る」の中核的意味「分断・破壊事象」における力動性図式

(図 4-6 を再掲)

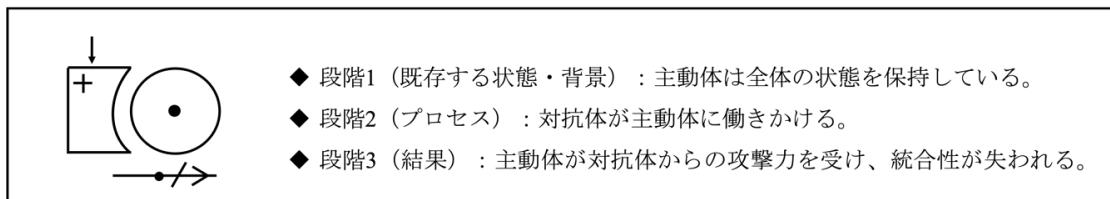


図 5-4 のように、分断・破壊動詞としての「切る」における力動性モデルでは、単一の状態変化事象のみが含まれる。一方、状態変化型分離動詞としての「切る」における力動性モデルでは、図 5-3 の段階3「結果」において、分離元の状態変化と分離物の位置変化の2つの変化結果が含まれる。これによって、図 5-3 の状態変化型分離動詞の力動性モデルは、図 5-4 が示すような状態変化動詞の力動性モデルによってさらに拡張されるモデルであると考えられる。すなわち、状態変化事象を基盤とし、そこから位置変化事象が生じる（この点に関して、次節で詳述する）。

以上、分離事象における状態変化型の空間的関係は「物理的一体性」の傾向を示し、位置変化型の空間的関係は「主観的/機能的一体性」の傾向を示すことがわかる。この2種類の空間的関係により、それぞれの分離動詞の持つ力動性のモデルは異なっている。交替動詞の場合、一体性を有しない「皿」と「テーブル」のような関係も可能であ

るのに対し、2種類の分離動詞の表す事象においては、分離元と分離物が一定の「空間的一体性」があるという意味的制約により、一方の変化が他方の変化に影響を与え、2つの下位事象が運動すると考えられる。次節では、分離事象に含まれる状態変化事象と位置変化事象が、どのように運動するかを明らかにする。

## 5.4 分離事象における位置変化と状態変化の関係付け

### 5.4.1 位置変化と状態変化を統合した複合事象の概念構造

これまで述べてきたように、壁塗り交替現象と本研究の考察対象である分離事象は、位置変化と状態変化の2つの下位事象を統合した複合事象、いわゆる Talmy (2000b) の言うマクロ事象に近いと言える。Talmy (2000b) が提案する図 5-5 のようなマクロ事象の概念構造を踏まえ、2つの下位事象が1つのマクロ事象に統合されると、一方の事象が主事象 (framing-event) となり、他方の事象が副事象 (co-event) となると仮定する。

図 5-5 マクロ事象の概念構造 (Talmy 2000b: 221, 図 3-7 を再掲)

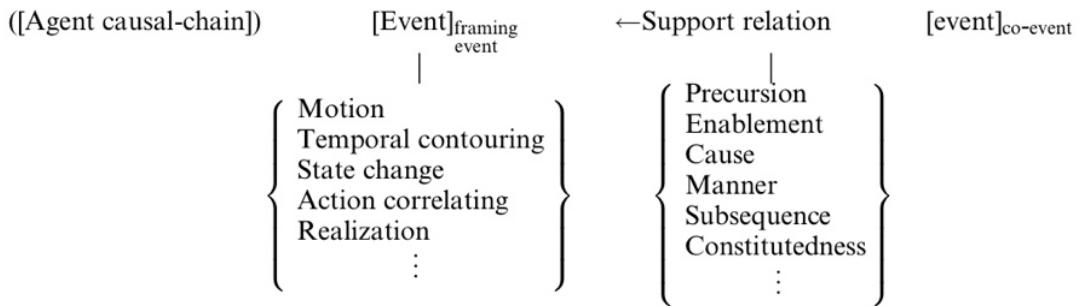


図 5-5 の概念構造において、主事象は複合事象全体の幅と内実を決定し、副事象は主事象に付帯的な情報を補充する関係にある。また、2つの下位事象は、何らかの関係で結びつけられるが、Talmy は副事象がどのように主事象に情報を補充するかに注目し、支持関係 (Support relation) で両事象の関係付けを捉えている。それに対し、本章は、主事象がどのように副事象に影響を及ぼすかに注目して、両事象の関係付けを捉えている。従って、本節では、マクロ事象の概念構造を一部修正して援用し、分離事象における主事象と副事象の関係付けを考察する。

前節では、壁塗り交替動詞と2種類の分離動詞におけるXとYの可能な空間的関係の違いを論じた。この空間的関係の違いによって、交替動詞と分離動詞の表す「Xの状態変化」と「Yの位置変化」という2つの下位事象の関係付けでは、何らかの違いがあると考えている。

このため、位置変化型と状態変化型それぞれの分離動詞の表す事象の分析を行う前に、以下、先に「空ける」、「溢れる」、「片付ける」という離脱型壁塗り交替動詞の表す位置変化と状態変化の関係付けを見る。

- (27) a. グラスから水を空ける。 / グラスを空ける。  
b. ゴミ箱から紙屑が溢れる。 / ゴミ箱が溢れる。  
c. テーブルから皿を片付ける。 / テーブルを片付ける。

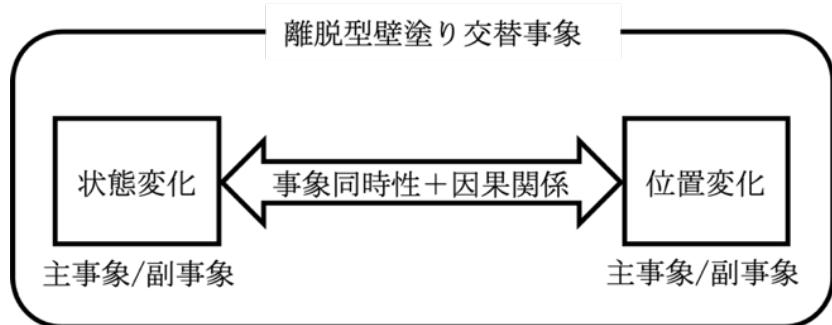
(川野 2021: 103)

(27a) では、水をグラスという容器から外へ位置変化させることに伴い、グラスの埋まり具合がゼロになるという状態変化が生じる。(27b) も同様の事態を表す。(27c) では、皿をテーブルから他の場所に移動させることに伴い、テーブルという空間の見た目に影響を与え、テーブルが清潔になるという状態変化が生じる。すなわち、離脱型壁塗り交替現象においては、位置変化と状態変化が同時に生じるという「事象同時性」が見られる。

さらに、この「事象同時性」に加え、一方の変化が、他方の変化の起因・原因となるという「因果関係」が想定される。例えば、テーブルから皿を移動させることは、同時にテーブルの状態変化を引き起こす。このように、Yの位置変化が常にXの状態変化を引き起こす、または、Xの状態変化がYの位置変化を伴うというように、2つの変化事象がそれぞれ因果関係における原因と結果として捉えられる。

本章の複合事象の概念構造に従い、離脱型壁塗り交替事象の概念構造は、図 5-6 のように示すことができる。

図 5-6 離脱型壁塗り交替事象の概念構造



壁塗り離脱交替事象では、状態変化と位置変化のどちらも、より顕在的な主事象となることが可能である。認識主体による主・副事象の交替に合わせて、言語化に際して、状態変化と位置変化の格体制も交替している。また、時間的関係である「事象同時性」と、論理的関係である「因果関係」という2つの関係付けによって、主事象が副事象と連動すると考えられる。同様の複合事象の概念構造は、川野（2021）の言う「離脱型壁塗り交替」だけではなく、「付着移入型壁塗り交替」、「餅くるみ交替」、「満ち欠け交替」にも見られる。

次に、位置変化と状態変化の関係付けが、分離事象においてどのようなあり方をしているかを考察する。

#### 5.4.2 位置変化型分離事象における関係付け

まず、位置変化型分離事象における位置変化と状態変化の関係付けを見る。

- (28) a. 注射器の中身が空になると、エディは血管から針を抜いた。

(週刊ポスト, 2003, 一般)

- b. 郵パックシールの有効期限が切れて、古い台紙からシールをはがして新しい台紙に貼ってしまった (...)

(Yahoo!知恵袋, 2005, Yahoo!オークション)

時間的関係付けに関して、(28a) は「血管に刺さった注射の針を血管から外へ移す」という位置変化に伴い、「血管に異物がなくなり正常な状態に戻る」という状態変化が

生じる事態を表す。位置変化と状態変化のどちらか一方が先に生じるのではなく、両事象が同時に進行しているものとして捉えられる。また、論理的関係づけに関して、「針」の位置変化の結果として、「血管」の状態に変化が生じる、または、血管を正常状態に回復させるために、針を取り出す動作を行うと解釈できるため、両事象の間に因果関係が成立することが分かる。(28b) では、シールを古い台紙から新しい台紙へ移動させると同時に、台紙の表面にシールがなくなるという分離元の空間的美観に関する状態変化が生じる。また、「シール」の位置変化が「台紙」の状態変化の原因となるという因果関係が成立する。すなわち、位置変化型分離事象の概念構造では、変化を被るモノ同士の空間的関係 ((28a) 「容器-中身」と (28b) 「表面-付着物」) が異なるにもかかわらず、離脱型壁塗り交替事象と同様、「事象同時性」と「因果関係」という2種類の関係づけが成立している。

しかし、時間的関係を示す「事象同時性」に関して、次の(29)の反例となるようなものが挙げられる。

- (29) a. 血管から針を抜いて、正常な状態に戻した。  
b. \*血管を正常な状態に戻して、針を抜いた。 (作例)

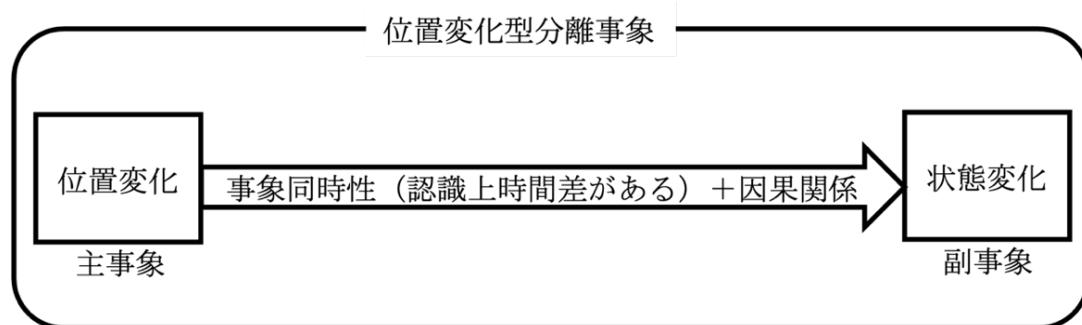
状態変化と位置変化を2つの動詞を用いて表す場合、(29a)のように、「針を抜いた」が先に出現し、「正常状態に戻した」が後続するのは可能であるが、(29b)のように、「正常状態に戻した」が先行し、「針を抜いた」が後続すると、非文となる。先に説明したように、位置変化型分離事象は、分離元の状態と分離物の位置が同時に変化して、最後に分離の結果に至るという場面が多く存在する。しかし、(29a)と(29b)の容認度の違いを見ると、認識主体は、位置変化型分離事象を認識している際に、より際立つ位置変化事象を先に認識し、際立ちが比較的低い状態変化事象を後に認識するという認識の差がある。このため、位置変化型分離事象における時間的関係をより正確に記述すると、「事象同時性（ただし、認識上時間差がある）」となる。

また、状態変化と位置変化における因果関係が存在することに着目することで、位置変化型分離動詞の表す状態変化が、交替動詞と同様に、付帯的変化の特徴を示すことを捉えることができる。これは、川野（2021）の言う「総体変化」型の状態変化にあたる。つまり、分離動作の前後で、(28)の分離元「血管」、「台紙」自体の形状、大き

さなどの属性が変化するのではない。分離元を1つの空間としてみなし、分離元とそこに存在する分離物で構成される空間全体の変化を表す。分離物「針」、「シール」の位置変化によって、分離元「血管」、「台紙」という空間の総体的な変化が生じる。例えば、(28a)は、「血管」という3次元の空間では、「針」という異物が存在しなくなり、正常な状態に変わる。(28b)は、「台紙」という2次元の空間では、「シール」というものが存在しなくなり、空間全体の美観が改善される。

以上により、位置変化が分離動詞の事象統合のメカニズムにあたり、際立ちが比較的高い位置変化を主事象、際立ちが比較的低い状態変化を副事象として位置付けるべきだと考えられる。このような主事象と副事象の構成によって、位置変化型分離動詞は交替動詞と異なり、「XからYをV」という位置変化型の構文形式をとることができるのでに対し、「XをV」という状態変化型の構文形式をとることができないという格体制を持っている。以下の図5-7は、位置変化型分離事象の概念構造を示す。

図5-7 位置変化型分離事象の概念構造



#### 5.4.3 状態変化型分離事象における関係付け

次に、(30)が示すような、状態変化型分離事象における2つの事象の関係付けを考察する。

- (30) a. 森から木を切った後に、大きな窯に入れて数週間かけて乾燥させます。

(Google用例<sup>45)</sup>

<sup>45</sup> <https://www.kosodate-sekkei.co.jp/blog/20200912-2/> (2023年9月19日確認)

- b. 手帳から紙をちぎった。

(岩崎 1981: 28)

まず、時間的関係づけの側面を考察する。(30a) では、力を加えて全体である「森」と部分である「木」との一体性を分断するという状態変化が生じてから、「木」を「森」から外へ取り出すという位置変化が生じると想定される。(30b) では、「紙」を直接的に移動させるわけではなく、全体である「手帳」と部分である「紙」との一体性を分断するという状態変化が完結した後に、「手帳」から「紙」を離すという位置変化の発生が可能になる。すなわち、状態変化型分離事象では、一方の変化が他方の変化と同時に進行するという位置変化型分離事象の概念構造における「事象同時性」が想定しにくい。

- (31) a. 手帳から紙をちぎって、紙をとった。

- b. \*手帳から紙をとって、紙をちぎった。

(作例)

(31) のように、状態変化と位置変化をそれぞれ 2 つの動詞を用いて表す場合、(31a) では、状態変化を表す動詞「ちぎる」の後に、位置変化を表す動詞「とる」を用いて、「紙をちぎりとる」という事態を表している。それに対し、(31b) では、位置変化を表す動詞「とる」の後に、状態変化を表す動詞「ちぎる」を用いることは、論理的に矛盾した解釈となるため容認されない。この事実からも、状態変化型分離事象において、手帳の部分的な状態変化が完結した後に、その部分である紙の位置変化が生じるという時間的な前後関係が成立していることが分かる。また、上記で提示した位置変化型分離事象における「事象同時性（認識上時間差がある）」という時間的関係と異なり、状態変化型分離事象では、事実上も認識上も、状態変化が位置変化に先行する。

また、この「前後関係」の特徴をより詳細に記述すると、状態変化型分離動詞の表す事象の概念構造において、2 つの変化事象の間に、他の事象が挿入できず、状態事象の直後に位置変化事象が生じるという「緊密な時間的隣接性」が成立すると考えられる。次の (32) でこの性質を示す。

- (32) a. 木を半分に切る。/ 木から邪魔な枝を切る。

- b. 紙をビリビリにちぎる。/ 手帳から紙をちぎる。

c. 枝を二つに折る。/ 枝から花を折る。

(作例)

(32a) の「木を半分に切る」では、本来的に状態変化動詞である「切る」を用いて、動作主が力を加えることで一続きのものである「木」を 2 つの部分に分断させ、これによって「木」が物理的連続体の性質を失うというような、単一の状態変化事象を表す。これに対し、「木から邪魔な枝を切る」では、分断動作によって、「木」と「枝」の一体性が失われるという状態変化に引き続く形で、木から一部分である「邪魔な枝」が除去されるという位置変化が生じている。すなわち、2 つの変化事象は、緊密な時間的隣接性が存在することにより、連続的なシナリオとして捉えられ、途中で動作主が動作と変化を止めて、道具や容器を探すといった、他の事象が介在することは想定しにくい。(32b) で、「紙をちぎる」は、「ちぎる」のプロトタイプ的意味として、「紙」のような対象に力を加え、細かく分断することで、「紙」が細かな断片になるという状態変化を表す。「切る」のプロトタイプ的意味と同様、位置変化事象としての特徴が前景化されていない。これに対し、「手帳から紙をちぎる」の場合、全体である「手帳」と部分である「紙」との連続性が失われるという状態変化の直後に、「紙」が取れるという位置変化が生じている。すなわち、分断動作と移動動作は慣習的に行われるという連続的な動作として捉えられる。(32c) 「折る」の表す事象も同様な概念構造を有すると考えられる。以上により、状態変化型分離動詞の表す事象の概念構造では、位置変化を含意しない単一の状態変化事象が中核的主事象であると考えられる。しかし、カラ格が生じることで、位置変化の側面が顕在化し、2 つの事象の間に緊密な時間的隣接性が含意され、位置変化を内在する状態変化型分離事象を表すことが可能になる。

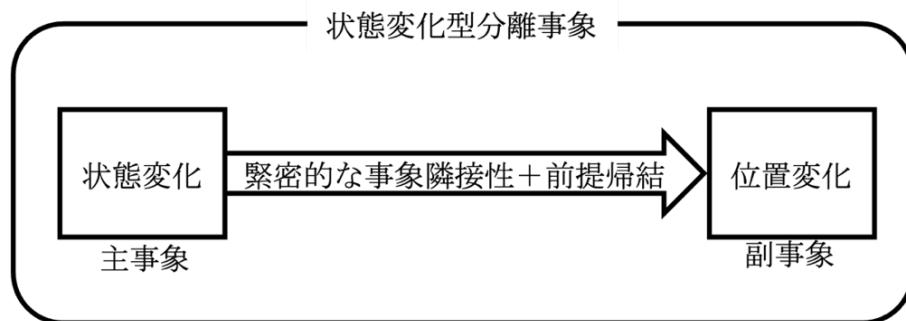
論理的関係づけに関して、位置変化型と状態変化型では違いも見られる。ここで注意したいのは、状態変化型分離事象構文における「カラ」格は、位置変化型分離事象構文における「カラ」格の役割と異なる可能性があるという点である。位置変化型分離事象では、位置変化が主事象であるため、分離物の位置変化が必然的に存在すると考えられることで、動詞は移動の事実を表し、「カラ」格は移動の起点を示す。一方、状態変化型分離事象において、例えば、(32c) の「枝から花を折った」では、状態変化事象の直後に、分離物の位置変化が生じる解釈も、直後に生じない解釈も容認される

(例：「枝から花を折り、後でかごに入れた」<sup>46</sup>)。この場合の「カラ」格は、分離元をマークした上で、後続事象である分離元から分離物を取り除くという動作の傾向を表示すると考えられる。

また、状態変化型分離事象における状態変化の発生は、位置変化に依存しないため、付帯的変化の特徴を持っていない。その状態変化は、川野（2021）の言う「自体変化」型にあたる。例えば、節の冒頭の用例（30）では、分離元は、分離物の元に存在する空間・場所だけではなく、分離動作の前後で、分離元「森」、「手帳」自体の形状や大きさという一体性が失われる。（30a）では、分離物「木」の位置変化に伴い、分離元「森」の部分的形態変化が生じる。（30b）では、分離物「紙」の位置変化に伴い、分離元「手帳」の厚み・大きさといった属性に変化が生じる。

以上、主事象と副事象の構成に関して、状態変化型分離事象では、先行する状態変化を主事象、後続する位置変化を副事象と位置付けた上で、両事象には必然的な因果関係の連鎖が成立せず、むしろ、状態変化事象の完結が位置変化事象の発生の「前提条件」（状態変化が完結しないと、位置変化が生じない）と捉えられるような論理的関係づけが見られる。図5-8で状態変化型分離事象の概念構造を示す。

図5-8 状態変化型分離事象の概念構造



#### 5.4.4 事象関係づけのまとめ

本節では、時間的関係づけと論理的関係づけという2つの関係づけの側面から、分離事象における事象統合のメカニズムを検討した。表5-3でまとめる。

<sup>46</sup> しかし、対応する自動詞「折れる」は、「?枝から花が折れた」のように、カラ格と共に起しにくい。このように、他動詞である分離動詞の力的関係は、そのまま自動詞が表す事象に当てはまらない。分離動詞の自動詞と他動詞の非対称性は、今後の課題とする。

表 5-3 2種類の分離事象と離脱型壁塗り交替動詞の事象における下位事象の関係づけ

	位置変化型 分離事象	状態変化型 分離事象	離脱型壁塗り 交替動詞の事象
主事象→副事象	位置変化→状態変化	状態変化→位置変化	構文形式に依る
事象間の時間的 関係づけ	事象同時性 (認識上時間差がある)	緊密的な事象隣接性	事象同時性
事象間の論理的 関係づけ	因果関係	前提帰結	因果関係

2種類の分離事象のどちらにおいても、2つの下位事象は一定の「時間的関係」と「論理的関係」があることによって連動している点で共通する一方、それぞれの関係づけの類型が異なる。位置変化型分離事象では、主事象である位置変化と副事象である状態変化が同時に発生し、必然な因果関係の連鎖で両事象が繋がっている。それに対し、状態変化型分離事象では、主事象である状態変化の直後に、副事象である位置変化事象が生じるという連続的なシナリオが成立するが。論理的関係による両事象の結びつきは強固でない。状態変化の発生を前提とし、位置変化の発生が可能になるという必然性がやや弱い前提関係の連鎖で両事象が結びついていると考えられる。

## 5.5 単一経路制約から見た分離事象構文の成立条件

### 5.5.1 分離事象構文と単一経路制約の定義

本節は、5.3 節と 5.4 節で明らかにした分離動詞と分離事象の意味的特徴を踏まえ、单一経路制約 (The Unique Path Constraint) (Goldberg 1991, 1995) の観点から、なぜ分離動詞があるもの X (分離元) からあるもの Y (分離物) を引き離すという状態変化と位置変化を統合した複合事象を表すのかについて考察する。特に、(33) の分離事象構文が成立する条件を考察する。

#### (33) 分離事象構文

形式 : Z (動作主) が X (分離元) から Y (分離物) を V (分離動詞)

意味 : Z の使役動作によって、X の状態変化と Y の位置変化が生じる。

(33) の分離事象構文をみると、单一節内に状態変化と位置変化という 2 つの事象が共起する点で、Goldberg (1991, 1995) の提案した单一経路の制約に一見違反しているように見える。以下に、单一経路制約の定義を述べる。

(34) 単一経路制約 (The Unique Path Constraint)

項 X が物体を指している場合、单一の節内で X について叙述する独立した経路が複数あってはならない。この单一経路の概念は、次の二つの事柄を論理的に含意する。

- (i) 任意の時間 t において、X が二つの異なる場所に移動すると叙述することはできない。
- (ii) その移動は、单一の場面内における一つの経路をたどるものでなくてはならない。

(Goldberg 1991:368, 1995: 82; 河上他 (訳) 2001: 111 による日本語訳)

まず、单一経路制約の事柄 (i) について、(35) を参照されたい。

(35) a. \*Sam sailed into the kitchen into the garden. (位置変化+位置変化)

b. \*He wiped the table dry clean. (状態変化+状態変化)

(Goldberg 1991: 368-370)

(35a) では、2 つの経路句が出現し、2 つの異なる場所に移動するのは、現実的に解釈不可能であるとともに、单一の節内で表現されることも容認不可能である。また、

(35b) では、2 つの結果補語が現れる。wipe という動作の前後で、対象 table は乾いたとともに、清潔になるという 2 つの状態変化は、現実的に解釈可能であるが、单一の節内で表現されることは容認不可能である。

单一経路制約の事柄 (ii) について、(36) と (37) を参照されたい。

(36) a. Sam kicked Bill out of the room. (位置変化)

b. Sam kicked Bill black and blue. (状態変化)

(37) Sam kicked Bill black and blue out of the room. (状態変化+位置変化)

(Goldberg 1991: 368-370)

- (36a) は経路句を伴うことで、*out of the room* という位置変化を表す。(36b) は結果補語を伴うことで、*black and blue* という状態変化を表す。1つの節では、位置変化か状態変化という1つの変化を表すため、容認可能であると判断される。それに対し、(37) は経路句と結果補語を伴うことで、1つの節では、位置変化と状態変化の2つの変化が現れるため、容認不可能であると判断される。

以上は、単一経路制約に関する2つの事柄である。この2つの事柄のうち、特に後者の事柄 (ii) に関して、先行研究では (38) と (39) のような反例をよく挙げて单一経路制約の妥当性について議論している。

- (38) a. The cook cracked the eggs into the glass.  
b. The cook sliced the mushroom into the bowl.

(Levin and Rappaport Hovav 1995: 60)

- (39) a. The waiter cleared the table off. (Levin and Sells 2009: 319)  
b. The sun melted the chocolate onto the carpet. (Goldberg and Jackendoff 2004: 551)

(38) は、使役状態変化動詞 *crack*, *slice* が、*into* という経路句を伴う使役移動構文で使用された用例である。これらの用例は状態変化動詞を伴うため、状態変化を表す一方、*into* という経路句を伴う使役移動構文で使用されるため、位置変化も表す。従つて、単一経路制約への反例となるが、容認可能と判断される。(39) も同様に、状態変化と位置変化の複数の変化が現れるが、容認可能な用例である。

先行研究では、これらの反例を解釈するため、Matsumoto (2006) による「单一展開制約 (The Single Development Constraint)」、岩田 (2010) による「translational motion をモデルとしない状態変化」、Yasuhara (2013) による「固定された移動 (anchored motion)」、鈴木 (2013) による非選択目的語を伴う結果構文の制約などの複数の代案が出された。この中で、貝森 (2018) は Talmy の事象統合の観点を踏まえ、事象統合の制約の代案を提案している。その内実は、本章の分析で提案する分離事象の3つの性質と一致する (後述)。このため、本章では、この事象統合の制約を参照し、状態変化と位置変化を統合する分離事象構文の成立条件を述べる。

## 5.5.2 2種類の分離動詞が分離事象構文に参与する特徴

### 5.5.2.1 位置変化分離動詞が分離事象構文に参与する特徴

分離事象構文の成立条件を分析する前に、分離事象構文の特徴を考察する。本章で主張したように、日本語において、「抜く」、「落とす」、「はがす」のような位置変化型分離動詞と、「切る」、「折る」、「ちぎる」のような状態変化型分離動詞が存在している。以下では、分離事象構文に参与する動詞の特徴について、状態変化型分離動詞と位置変化型分離動詞を分けて検討する。

まず、位置変化型分離動詞が分離事象構文に参与する特徴を分析する。位置変化型分離動詞「抜く」、「落とす」、「はがす」などは、本質的に使役移動動詞であるが、意味的特徴と構文的特徴で、一般的な使役移動動詞と異なる振舞いが見られる。以下の使役動詞「出す」、「置く」との比較の用例を参照されたい。

- (40) a. \*栓をボトルからテーブルに抜く。  
b. シールをきれいに/汚くはがす。
- (41) a. ビールを冷蔵庫から食卓に出す。  
b. #シールをきれいに/汚く置く。 (作例)

意味的特徴について、(40) の位置変化型分離動詞が参与する構文は、分離物（栓、シール）の位置変化と、分離元（ボトル）の状態変化の 2 つの事態を表す。それに対し、(41) の使役位置変化文は、移動物の使役移動の 1 つの事態を表す。つまり、「ビール」、「シール」の位置変化を表すことが可能であるが、「冷蔵庫」または「食卓」の状態変化を表すことが不可能である。

また、構文的振る舞いについて、(40a) では、分離物「栓」を分離元「ボトル」から取り外し、二格句である着点「テーブル」という場所に位置変化させるのは、現実的に解釈可能である。しかし、位置変化型分離動詞「抜く」は、二格句との共起は容認されない。それに対し、(41a) の「出す」が参与する位置変化文では、移動物「ビール」を元に位置する場所「冷蔵庫」から、別の場所「食卓」に位置変化させると解釈される。二格句である着点「食卓」との共起は容認される。(40b) では、分離物「シ

ル」を取り外したことで、分離元（文中出現しないが、例えば、「テーブル」）がきれいになる/汚くなるという結果状態が変わると解釈できる。それに対し、使役移動動詞は形容詞・結果補語との共起は容認されないが、(41b) のように、使役移動動詞「置く」が「きれいに/汚く」などの形容詞との共起は、特定の解釈の下で問題なく容認可能であると判断される。しかし、置いたシールの配置がきれい/汚い、または、使役動作「置く」の様態がきれい/上手であるという意味で解釈可能である。シールの位置変化によって、場所がきれい/汚いという状態変化が生じるという解釈は不可能である。すなわち、(41b) の形容詞「きれいに/汚く」は結果補語ではなく、結果解釈よりも、様態解釈になると判断される。

このため、位置変化型分離動詞「抜く」、「落とす」、「はがす」などは、本質的に使役移動動詞であるが、二格と共にできず、また結果補語と共にできる点で、典型的な使役移動動詞「置く」、「出す」と異なっており、非典型的な使役移動動詞であると考えられる。また、位置変化型分離動詞が参与する分離事象構文は、状態変化と位置変化の2つの事態（付帯変化を伴う使役移動事象）を表す点で、使役移動構文一般に見られる意味的特徴（位置変化のみを表す）と異なる。その一方、非典型的な使役移動動詞（本質的に使役移動動詞）を伴うことで、使役移動構文一般に見られる構文的特徴（経路の起点を表す「カラ」格との共起）は問題なく容認可能であると判断される。

#### 5.5.2.2 状態変化分離動詞が分離事象構文に参与する特徴

次に、状態変化分離動詞が分離事象構文に参与する特徴を分析する。状態変化型分離動詞「切る」、「折る」、「ちぎる」の中核的意味（プロトタイプ）として、分断・破壊事象という状態変化を表す。また、5.4節で述べたように、状態変化型分離動詞の表す事象では、状態変化が主事象であり、位置変化が副事象である。この分析では、状態変化型分離動詞が使役状態変化動詞である（ただし、「割る」、「破る」と比べると、分離物の位置変化を表す点で、非典型的な使役状態変化動詞の性質が見られる）。(42)は、状態変化動詞が分離事象構文に参与する用例である。

- (42) a. 木から邪魔な枝を切った。 (作例)  
b. 手帳から紙をちぎった。 (= (30b))

(42) のように、「切る」、「ちぎる」という使役状態変化動詞は、「カラ」格のような経路句と共に起するという言語事実が見られる。この事実は、先行研究で挙げられた(43)と(44)の用例と同様、Goldberg (1991, 1995) が規定した「単一経路制約」に違反しているように見える。

- (43) a. The cook cracked the eggs into the glass.  
b. The cook sliced the mushroom into the bowl. (= (38))
- (44) a. The waiter cleared the table off.  
b. The sun melted the chocolate onto the carpet. (= (39))

この点に関して、本章では、続いて「カラ」格と共に起できない「割る」、「破る」などの破壊動詞との比較を通して、状態変化型分離動詞「切る」、「折る」、「ちぎる」が分離事象構文に参与する条件と要因を検討する。

### 5.5.3 分離事象の3つ一体性の制約と提案

前述の通り、単一経路制約への反例を解釈するための代案の中で、貝森 (2018) の事象統合の制約の代案は、本章の5.3節と5.4節で分析した分離事象の「空間的関係」、「時間的関係」、「論理的関係」と記述的に類似している。以下は、貝森 (2018) の事象統合の制約の代案である。

#### (45) 事象統合の制約の代案

状態変化事象と位置変化事象が单一の事象として解釈される（事象統合）場合、单一の節で複数の変化事象を表すことは容認される。事象統合は、以下の3つの制約が課される。

- a. 物理的統合の制約：状態変化と位置変化を受けるそれぞれのモノの間に  
は、一定の物理的一体性がなければならない。

(=本章による「空間的一体性」<sup>47</sup> )

- b. 時空的/慣習的統合の制約：同一空間において、一方の変化がもう一方の変化と同時に、もしくは一方の変化がもう一方の変化に直接引き続く形で生じていなければならない。もしくは、2つの変化を併せて1つの慣習的シナリオであると見なせなければならない。

(=本章による「時間的一体性」)

- c. 事象関係付けの制約：状態変化と位置変化は、〔原因-結果〕もしくは〔前提条件〕の関係で結び付けられていなければならない。

(=本章による「論理的一体性」)

(貝森 2018: 15-16、対応関係は筆者による)

貝森（2018）は、(45) の3つの制約をすべて満たすならば、2つの事象が单一の事象として統合されやすくなることを指摘した。この代案に従えば、状態変化型分離動詞の表す事象は、「空間的一体性」、「時間的一体性」、「論理的一体性」という3つの特性を持つため、分離事象構文での使用が容認可能となると想定できる。一方、「割る」、「破る」などの破壊動詞は3つの特性を持たないため、同様な構文で使用することが容認不可能となると考えられる。(46) として記述される状態変化型分離事象構文において、分離事象の3つの一体性がどのように関わるのかを検討する。

#### (46) 状態変化型分離事象構文

形式：Z（動作主）がX（分離元）からY（分離物）をV（状態変化型分離動詞）

意味：Zの使役動作によって、Xの状態変化とYの位置変化が生じる。

##### 5.5.3.1 空間的一体性の制約

まず、「空間的一体性」の制約について分析する。5.3節で述べたように、状態変化型分離事象では、分離元と分離物の空間的関係は、「全体-部分」の関係であり、物理

<sup>47</sup> ここで用語に関して注意したい。貝森（2018）による「物理的一体性」は、「表面-付着物」、「容器-中身」、「全体-部分」の3つの関係を含み、本章における「空間的一体性」の内実と一致している。なお、本章では、「空間的一体性」を「物理的一体性」と「主観的/機能的一体性」の2つに細分し、「物理的一体性」は「全体-部分」を指し、「主観的一体性」は「表面-付着物」、「容器-中身」を指す。

的一体性の特徴を持つ。

(47) a. 木から邪魔な枝を切った。 (= (42a))

b. \*かごから枝を切った。 (作例)

(48) a. 手帳から紙をちぎった。 (= (30b))

b. \*机から紙をちぎった。 (作例)

(47a) では、状態変化を被る分離元は「木」である。位置変化を被る分離物は「枝」、すなわち「木」の一部分である。「木」と「枝」は、「全体-部分」の関係にあたるため、物理的一体性を持つ。それに対し、(47b) では、カラ格「かご」とヲ格「枝」は、「全体-部分」の関係に当てはまらない。切られた「枝」は「かご」に位置することで、「容器-中身」の関係にあたる。物理的一体性が成立しないため、(47b) は容認されない。

(48a) でも同様に、状態変化を被る分離元「手帳」が、位置変化を被る分離物「紙」と「全体-部分」の関係にあたる。物理的一体性があるため、容認される。それに対し、

(48b) では、「机」と「紙」は「全体-部分」の関係ではなく、「表面-接触物」の関係にあたる。(48b) は、状態変化型分離動詞の表す事象に必要となる物理的一体性が成立しないため、容認不可能と判断される。

また、以下の (49) のような「破壊動詞」を伴う構文も同じ要因で、容認されない。

(49) a. \*机から花瓶を割る。 (作例)

b. \*テーブルから紙を破る。 (作例)

(49) では、破壊動詞「割る」、「破る」という動作の前後で、ヲ格名詞「花瓶」、「紙」自体の形状、大きさ、一体性が変わる。状態変化型分離動詞「切る」、「ちぎる」と同様に、「自体変化」型の状態変化を表す。動作の前後で、ヲ格名詞は、1つの物の異なる形態となる（例えば、花瓶全体と花瓶の断片、紙全体と破れた紙）。(49a) のカラ格「机」とヲ格「花瓶」、(49b) のカラ格「テーブル」とヲ格「紙」は、「表面-接触物」の関係にあたる。「全体-部分」の関係による物理的一体性を満たさないため、容認不可能となる。

### 5.5.3.2 時間的一体性の制約

次に、「時間的一体性」の制約について分析する。5.4 節で述べたように、状態変化型分離事象構文では、状態変化と位置変化の時間的関係付けに関して、状態変化が先行し、位置変化が後続する。また、状態変化と位置変化の間に「緊密な事象隣接性」が見られる。すなわち、状態変化に直接引き続き生じる形で、位置変化が生じている。このため、状態変化型分離動詞が参与する構文が成立するなら、容認可能な解釈と容認不可能な解釈がある。

- (50) a. 木から邪魔な枝を切った。 (= (42a))  
b. 手帳から紙をちぎった。 (= (30b))

(50a) の容認可能な解釈は、「木が分断される」という状態変化が生じた直後に、「邪魔な枝がそのまま落ちる」という位置変化が生じる解釈である。容認不可能な解釈としては、「木が分断される」という状態変化が生じ、その後「切られた邪魔な枝をまとめてかごに入れて、他の場所に移動させる」という位置変化が生じることである。(50b) の容認可能な解釈としては、「手帳の一体性が変化する」という状態変化が生じた後、「紙をそのまま移動させる」という位置変化が生じることである。容認不可能な解釈は、「手帳の一体性が変わる」という状態変化が生じ、その後「断片の紙をまとめて他の場所に移動させる」という位置変化が生じる解釈である。

以上のように、(50) の容認可能な解釈においてである状況を表す際に、分離事象構文という単一の節で表現されるのは可能である。不可能な解釈である状況を表す際に、単一の節ではなく、2つの節を分けて表現される必要がある。

### 5.5.3.3 論理的一体性の制約

最後に、「論理的一体性」の制約について分析する。

- (51) a. \*卵から殻を割った。 (作例)  
b. \*手帳から紙を破った。 (作例)  
(52) a. 木から邪魔な枝を切った。 (= (42a))

b. 手帳から紙をちぎった。

(= (30b))

(51) では、分離元「卵」と分離物「殻」、分離元「手帳」と分離物「紙」は、「全体—部分」の関係による「物理的一体性」の制約を満たすが、依然として容認不可能であると判断される。これは、「論理的一体性」を満たさないため容認されない例である。

「割る」、「破る」という破壊動詞の表す事象は、4章で述べた分断・破壊事象全体に、*break* 系事象に位置付けられる。「切る」が表す *cut* 系事象と比べると、裁断面・切れ目の予測可能性の点で違いが見られる。

「切る」は、状態変化型分離動詞として使用される場合であっても、分断・破壊動詞として使用される場合であっても、動作主は力を加えて対象を分断・分離することで、裁断面・切れ目の予測可能性が高く、それが表す事象において、分断性のイメージが際立つ。分離元の一部分が分断されるという状態変化は、分離物の位置変化の前提となり、事象の概念構造で、2つの事象を連動させる論理的関係づけが見られる。このため、状態変化と位置変化の2つの事象が統合されることが想定できる。(52) のような状態変化型分離動詞に伴う分離事象構文が成立する。

一方、破壊動詞「割る」、「破る」が表す事象は、裁断面の位置と断片の数に関する予測可能性が低く、破壊のイメージが際立つ。状態変化と位置変化の間に、両事象を連動させる論理的一体性が成立しない。このため、(51) のように、構文が成立しないのである<sup>48</sup>。

#### 5.5.4 本節のまとめ

以上、本節では、単一経路制約とその代案である事象統合の制約の観点から、分離事象構文の成立条件を考察してきた。まとめると、(53) のようになる<sup>49</sup>。

<sup>48</sup> ところが、He broke some grapes off the branch. (鈴木 2013: 114)、The cook cracked the eggs into the glass. (Levin and Rappaport Hovav 1995: 61) のように、英語の破壊動詞 *break*、*crack* は状態変化と位置変化を統合した事象を表す単文で使用できる。この点に関して、英語の *break* 類動詞は、意味構造や事象関連性のメカニズムで、「割る」、「破る」などと完全に一致するわけではないため、構文上の容認度が異なると考えられる。本章ではこの違いについて深く立ち入らないこととする。

<sup>49</sup> 既に述べたように、2種類の分離動詞は両方ともに結果補語と共に可能である。すなわち、「木の邪魔な枝を短く切る」、「本に付いたシールを汚く剥がす」といったように、「Z (動作主) が (X (分離元) の) Y (分離物) を結果補語 V (分離動詞)」という構文形式をとることができる。状態変化型分離動詞は本質的に使役状態変化動詞であるため、結果補語との共起が

### (53) 分離事象構文の成立条件

形式 : Z (動作主) が X (分離元) から Y (分離物) を V (分離動詞)

意味 : Z の使役動作によって、X の状態変化と Y の位置変化が生じる。

- i V=位置変化型分離動詞（非典型的使役移動動詞）である場合、問題なく構文が成立できる。
- ii V=状態変化型分離動詞（非典型的使役変化動詞）である場合、事象統合の制約が必要である。文の表す事象が「空間的一体性」、「時間的一体性」、「論理的一体性」という 3 つの性質を全て満たすならば、構文が成立する。

## 5.6 本章のまとめ

本章は、課題 2 「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」に関して、コーパス調査に基づき、現代日本語の分離動詞の意味分類に関する新たな仮説を提案した。以下、リサーチクエスチョンを提示した順に、本章の結果をまとめる。

RQ1（日本語の分離動詞の分類）に関して、離脱型壁塗り交替動詞との比較を通して、現代日本語には、「位置変化型分離動詞」と「状態変化型分離動詞」の 2 種類の分離動詞があるという仮説を提案した。各分離動詞の特徴として、位置変化型分離動詞は、格体制交替の条件 (i) 「2 種類の格体制をとること」に反するのに対し、状態変化型分離動詞は、格体制交替の条件 (ii) 「2 種類の格体制をとる文がほぼ同一の事象を表すこと」に違反し、交替が成立しない。

この仮説を踏まえ、次に、RQ2（分離事象の位置付け）に関して、分離元と分離物の空間的関係、および両事象の関係付けという側面から、交替現象との比較を通して、2 種類の分離動詞の表す分離事象の特徴を明らかにした。位置変化型分離事象における空間的関係には、「主観的/機能的一体性」の特性が際立つ。状態変化型分離事象における空間的関係には、「物理的一体性」の特性が示される。それに対し、離脱型壁塗り交替動詞の表す事象では、このような空間的一体性は必要ではない。そして、両事象の関係付けとして、位置変化型分離事象では、交替動詞と同様に、「事象同時性（認識上

---

問題ないと想定できる。しかし、位置変化型分離動詞は本質的に使役位置変化動詞であるが、なぜ結果補語と共に起できるか、さらに検討する必要がある。分離事象構文の形式のバリエーションについては、今後の課題とする。

時間差がある)」と「因果関係」が成立するのに対し、状態変化型分離事象では、「緊密的な事象隣接性」と「前提帰結」が成立する。また、分離事象は、状態変化事象と位置変化事象の中間に位置付けられる。特に、状態変化型分離事象では、状態変化が主事象であり、位置変化が副事象となり、位置変化型分離事象では、位置変化が主事象であり、状態変化が副事象となる。離脱型壁塗り交替現象では、主事象と副事象が交替できるのに対し、分離事象では両者が交替できない点で異なっている。

以上により、「空間的一体性」、「時間的一体性」、「論理的一体性」という3つの分離事象の特性を明らかにした。最後に、RQ3（分離事象構文の捉え方）に関して、本章は、単一経路制約とその代案の観点から、類義関係にある破壊動詞との比較を行った。

また、単一経路制約に反する日本語の状態変化型分離事象構文の事例を示し、その成立要因として、分離事象が「空間的一体性」、「時間的一体性」、「論理的一体性」という3つの一体性の特性を持つため、単文で状態変化と位置変化を1つの複合事象に統合できるのだと主張した。表5-4は、2種類の分離動詞、関連した動詞類である離脱型壁塗り交替動詞、破壊動詞の特徴を示している。

表5-4 2種類の分離動詞の特徴と関連動詞類との比較

動詞類	離脱型壁塗り 交替動詞	位置変化型 分離動詞	状態変化型 分離動詞	破壊 動詞
	空ける、 片付ける、拭う	抜く、落とす、 はがす	切る、ちぎる、 折る	割る、破る 裂く
格体制 交替	○(交替関係)	*	*(多義関係)	*
	グラスを空ける。	*水田を抜く。	木を切る。	卵を割る
	グラスから水を 空ける。	水田から水を 抜く。	木から邪魔な枝を 切る。	*卵から殻を 割る。
状態変化類型	総体変化	総体変化	自体変化	自体変化
位置変化類型	依存的転移	非依存的転移	非依存的転移	*
空間的 一体性	一体性がなくても 可能	主観的/ 機能的一体性	物理的一体性	物理的一体性
時間的 一体性	事象同時性	事象同時性 (認識上時間差が ある)	緊密な事象隣接性	前後関係
論理的 一体性	因果関係	因果関係	前提関係	*

また、本章は、破壊動詞との比較で状態変化型分離動詞がカラ格と共にできる要因を検討したが、典型的な使役移動動詞「出す」、「置く」などとの比較により、位置変化型分離動詞が結果補語と共にできる要因や、結果補語の特徴と共に起制約を詳しく考察していない。また、2種類の分離動詞における状態変化の類型を明らかにしたが、位置変化の類型はどのような特徴を持つかをさらに検討する必要がある。これらは今後の課題としたい。さらに、他動詞である分離動詞と自動詞である分離動詞に関する意味体系の違いとその原因も、今後の課題とする。

## 第6章 中国語の分離動詞との対照研究

### 6.1 はじめに

第4章と第5章は、それぞれ課題1「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」と課題2「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」(1.2節を参照)に関して、日本語の分離動詞に関する現象について考察した。特に、力動性に基づいて日本語の分離動詞の意味カテゴリー化と言語化について考察した。一方、本章は、中国語の分離動詞を考察対象として取り上げ、力動性モデルを日本語以外の分離動詞に応用し、各言語における分離動詞と分離事象の一般的な性質を明らかにする。

動作主体が対象に力を加えることで対象の一部を分離させるという「分離事象」に関して、以下、(1) はコーパスから抽出した日本語の用例である。また、(1) を中国語に訳すと、(2) のようになる<sup>50</sup>。

- (1) a. ビールの栓をポンッと抜いた。 (清水哲男詩集, 1997)

- b. ダニやアブラムシの被害のある枝を切るとよい。

(趣味の園芸(NHKテレビ放送テキスト), 2005, レジャー/趣味)

- (2) a. 碎的一声拔掉了啤酒的瓶塞。

*pēng-de-yī-sheng bá-diào le píjiǔ de píng sāi*  
bang-sound pull-out PRT<sub>cs</sub> beer GEN cork

- b. 最好把受螨虫和蚜虫蚕食的枝条剪掉。

*zuihǎo bǎ shòu mǎnchóng hé yáchóng cánshí de*  
had better OM suffer mites and aphids erode GEN  
*zhītiáo jiǎn-diào*  
branches cut-off

分離事象では、「(Z (動作主)<sup>51</sup>が X (分離元) から Y (分離物) を分離する」というフレームを抽出できる。このフレームには、「Xの状態変化」と「Yの位置変化」と

<sup>50</sup> (1) はBCCWJコーパスから抽出した日本語の用例である。(2) はそれぞれ、筆者による中国語訳である。

<sup>51</sup> 動作主が文中で出現しない場合も多く見られる。

いう 2 つの下位事象が含まれる。(1) のように、日本語では、動詞に動作の結果が含意されるため、「切る」、「抜く」などの単純動詞で 2 つの下位事象を含む分離事象を表すことができる。それに対し、(2) のように、中国語では、分離事象のような複合的事象を表す場合、一番よく使用されているのは複合動詞 “V 掉 (diao)” である<sup>52</sup>。本動詞の “掉” は、「物が上から下へ落ちる」という下降移動の意味、「物全体の一部を分離させる」という分離の意味の両方を表すことができるため、単独では必ずしも複合的な分離事象を表すとは限らない。複合動詞 “V 掉” の構成における、前項動詞 V1 は動作動詞であり、主体の動作を表す。また、後項動詞 V2 “掉” は対象となる X (分離元) と Y (分離物) それぞれの変化を示す。これによって、“V 掉” は、X の状態変化と Y の位置変化の両方を含む分離事象という中核的意味を持つ。

本章は、中国語の分離動詞 “V 掉” を考察対象として、課題 1 「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」と課題 2 「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」について総合的に検討する。以下の 3 つのリサーチクエスチョンに取り組む。

【課題 1 分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明】 (RQ1, RQ3)

【課題 2 分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け】 (RQ2, RQ3)

RQ1 “V 掉” はどのような意味・機能と結合制限を持つか。 (6.3 節)

1.1 “V 掉” はどのような意味・機能を持つか。

1.2 “V 掉” の各意味・機能はどのような結合制限を持つか。

1.3 力動性モデルに基づいた “V 掉” の多義構造はどのように解明できるか。

RQ2 “V 掉” は “V 下”、“V 落” とどのような点で異なるか。 (6.4 節)

2.1 下降移動を表す本動詞 “掉” は、“下”、“落” とどのような点で異なるか。

2.2 複合動詞 “V 掉” は、“V 下”、“V 落” とどのような点で異なるか。

RQ3 日本語と中国語の分離動詞にはどのような類似点と相違点があるか。 (6.5 節)

<sup>52</sup> Chen (2007: 275) は中国語の単純動詞 “切 (qie)” の用例を挙げている。

(i) 他切了绳子。

Tā	qiē	le	shénzǐ.
He	cut (with single blade)	PFV	rope
‘He did cutting at the rope.’			

この用例では、単純動詞 “切 (qie)” は、行為の結果 “断 (duan, 断つ)” を含意しないことが指摘された。

3.1 日本語と中国語の分離動詞にはどのような類似点があるか。

3.2 日本語と中国語の分離動詞にはどのような相違点があるか。

本章の構成は次のとおりである。6.2 節で中国語の分離動詞“掉”と“V掉”に関する先行研究を概観し、その問題点と未解決の課題を指摘する。その上で、6.3 節では、RQ1 について、本章の立場について触れた上で、それに基づく“V掉”的意味パターンを抽出する。また、力動性モデルはどのように分離動詞“V掉”的意味分析に応用できるかを検討する。加えて、“V掉”的どのような意味特徴を持つか、また、“V掉”的各意味パターンはどのような認知メカニズムに基づいて拡張されるかを明らかにする。続く 6.4 節では、RQ2 について、他の下降移動義を表す動詞“V下”、“V落”との比較を通して、分離事象の特徴と位置付けを明示化する。6.5 節では、RQ3 について、中国語と日本語の分離動詞の比較を通して、両者の相違点と類似点を導き出す。加えて、両言語の分離動詞の共通性を踏まえ、新たな動詞クラス「力学動詞」の提案を検討する。最後に 6.6 節で本章の結論を述べる。

## 6.2 “掉”と“V掉”的意味分析に関する先行研究

本動詞“掉”と複合動詞“V掉”的先行研究においては、動詞の意味とその文法化に注目したものが多く見られる。

まず、本動詞“掉”については、歴史的意味拡張の観点から考察した先行研究がいくつか挙げられる。Chen (2014)、王 (2014) などによれば、“掉”という動詞は、商・周・秦・漢までの「上古時代」に初めて出現した。古代中国語の“掉”は、「(ボートを漕ぐ様態のように、) 体が前後に揺れて動く」という典型的な意味として単独で使用されていたことが指摘されている。(3) と (4) のような用例が中国語の古典文献で見られる。

(3) 尾大不掉 (《左傳・昭公十一年》)

wěi dà bù diào

tail big not shake/move

「尾が大きすぎて動けない。」

(4) 捉尾而逃。 (《淮南子・卷七》)

*dǎo*      *wěi* *ér*      *táo*  
shake/wag    tail    while    escape

「尾を振りながら逃げる。」

(3) は、本来は「その動物は尾が大きくて動けない」という意味を表すが、「組織が大きく、コントロールできない」という慣用的意味に拡張している。(4) は、本来的意味として、動物が逃げる際の様態を表し、慣用的意味として、人間が責任を逃れる場合に使用される。現代中国語に至っても、(3) と (4) は慣用句として広範に使用される。しかし、「揺れて動く」という本来の意味は、現代中国語では、本動詞“掉”的典型的意味として保持されていない。その代わりに、「物が上から下へ落ちる」という下降移動義と、「物全体の一部が分離する」という分離義が、現代中国語で広く使用されている。

共時的意味拡張の観点から“掉”を考察した研究として、刘 (2007) は、本動詞“掉”的意味について、[+自然力] [+位置変化] [+方向づけ (上から下)] と記述している。(5) は“掉”的典型的な用例である。

(5) a. 笔掉了，快捡起来。 (刘 2007: 134)

*bǐ* *dǎo* *le*,      *kuài*      *jiǎn-qǐ-lái*  
pen fall PRT<sub>cs</sub>    quickly pick-up-VEN  
「ペンが落ちた、早く拾って。」

b. 一夜之间，银杏叶全掉了。 (刘 2007: 133)

*yī-yè-zhījiān*, *yínxìng* *yè*      *quán*      *dǎo* *le*  
overnight    ginkgo    leaves    completely    fall PRT<sub>cs</sub>  
「一晩で、銀杏の葉が全部落ちた。」

上記の 2 文はどちらも物理的な自然力の影響による、物の上から下への位置変化を表す。(5a) では、対象 (ペン) の移動は、元に位置する場所 (例えば、テーブル) に何の変化も起こさない。(5b) では、対象 (葉) の位置変化によって、銀杏の木の外観にも、著しい状態変化が生じる。すなわち、(5a) の“掉”は、単純な位置変化事象を表

すのに対し、(5b) の “掉” は、位置変化と状態変化の両方を含む分離事象を表す。

また、朴 (2000) は《現代漢語辞典》に基づき、本動詞 “掉” は、(6) のような「無くす、失う」の意味を持つと指摘した。

- (6) 钱包掉了。 (作例)

*qiánbāo diào le*

wallet be lost PRT<sub>cs</sub>

「財布を無くした。」

(6) は、財布の位置変化を表すというよりも、主体には財布の所有権がなくなるという状態変化を表す。しかし、このような状態変化事象を表す用法に関しては、地域差が存在し、必ずしも一般的に容認されているとは言えない<sup>53</sup>。これらの用例から、現代中国語の “掉” は、「上から下へ移動する」という位置変化、「物全体の一部が分離する」という分離事象の 2 つの主要な意味・用法を持つことが確認できる。

一方、複合動詞 “V 掉” について、刘 (2007) は、“V 掉” の意味を “掉<sub>1</sub>” 「客体離脱」、“掉<sub>2</sub>” 「客体消失」、“掉<sub>3</sub>” 「行為の完遂/状態の実現」という 3 つの意味パターンに分類した。以下の用例を参照されたい。

- (7) 家珍脱掉了旗袍。 (刘 2007: 134)

*Jiā Zhēn tuō-diào le qípáo*

Jia Zhen take off PRT<sub>cs</sub> cheongsam

「家珍はチーパオを脱いだ。」

- (8) 黑板上的字我全擦掉了。 (刘 2007: 134)

*hēibǎn-shàng de zì wǒ quán cā-diào le*

blackboard-in GEN words I completely wipe-off PRT<sub>cs</sub>

「黒板の上の文字を全部消した。」

<sup>53</sup> 筆者のインフォーマントによると、(6) のような用法は中国の北方地域では、あまり広く認識されていない用法である。

- (9) 他答应母亲 2006 年一定要把房子买掉, 把婚结掉, 把孩子生掉。

(刘 2007: 135)

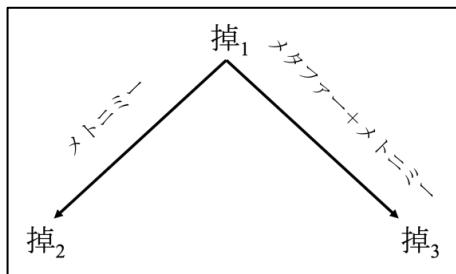
*tā dāyìng mǔqīn 2006-nián yīdìng yào bǎ fángzǐ  
he promise mother 2006 year certainly will/would OM house  
mǎi-diào, bǎ hūn jié-diào, bǎ háizǐ  
buy-PRT<sub>cs</sub>(completely finished) OM marriage get married-PRT<sub>cs</sub> OM child  
shēng-diào  
give birth-PRT<sub>cs</sub>*

「彼は母親に 2006 年には部屋の購入、結婚、出産をすると約束した。」

(7) は、“掉<sub>1</sub>”「客体離脱」に当たる用例である。“脱（脱ぐ）”という動作の前後で、対象（チーパオ）は、主体（家珍）から離脱し、他の場所に留まるようになる。すなわち、“掉<sub>1</sub>”「客体離脱」の表す事象は、起点と着点の両方を持つ位置変化である。(8) は、“掉<sub>2</sub>”「客体消失」に当たる用例である。“擦（拭く）”という動作の前後で、対象（字）は、黒板という場所から消失し、存在しなくなる。このため、“掉<sub>2</sub>”「客体消失」の表す事象では、移動の起点のみが捉えられる。対象がどこに移動するかという着点は含意されない。(9) は、“掉<sub>3</sub>”「行為の完遂/状態の実現」に当たる用例である。この文にある 3 つの動詞句、“把房子买掉”、“把婚结掉”、“把孩子生掉”はそれぞれ「部屋の購入」、「結婚」、「出産」という動作の完遂・完了を表す。この意味パターンでは、“V 掉”は前項動詞の表す動作・事態の完遂を表す。動作完了時の着点要素を含意し、変化が始まる際の起点要素を含意しないという特徴がある。以上の通り、刘（2007）は、“V 掉”を 3 つの意味パターンに分類するに際し、“V 掉”的表す事象が起点と着点のどちらを含意するという点に着目した。

また、この 3 つの意味パターンの相互関係について、刘（2007）は、“掉<sub>2</sub>”「客体消失」と “掉<sub>3</sub>”「行為の完遂/状態の実現」は、“掉<sub>1</sub>”「客体離脱」から、メタファーーやメトニミーによって拡張された意味用法であると主張した。

図 6-1 “V 掉”の意味拡張のプロセス（刈 2007: 138 をもとに作成）



刈（2007）の分析から分かることは次の2点である。1つは、上述の通り、“V掉”的表す事象は、起点と着点のどちらを含意するかによって、3つの意味パターンに分かれるということである。もう1つは、“掉<sub>1</sub>”「客体離脱」と比べると、“掉<sub>2</sub>”「客体消失」と“掉<sub>3</sub>”「行為の完遂/状態の実現」は、位置変化を含意せず、対象または事態の状態変化を表す意味用法に当たる。しかし、後者の2つの意味パターンは、意味・機能と結合制限でどのような違いがあるか、文法化の程度に違いがあるかについて、刈（2007）のような「起点」と「着点」の概念のみによる記述では十分に考察されていない。

一方、丸尾（2017）は、複合動詞“V 掉”を意味パターン1「移動」、意味パターン2「結果」、意味パターン3「完了」という3つの意味パターンに分類した。特に、意味パターン3「完了」に当てはまる<完遂義>に分析の焦点を当て、結果補語“～掉”における表現意図を考察した。次の(10)と(11)の用例が挙げられる。

- (10) 可是张先生夫妇保有他们家乡的传统思想，以为女孩子到二十岁就老了，过二十岁，还没嫁掉只能进古物陈列所供人凭吊了。 (钱钟书《围城》，41)

kěshì zhāngxiānshēng fūfù bǎoyōu tāmén jiāxiāng de  
but Mr. Zhang couple retain they hometown GEN  
chuántǒng sīxiǎng, yǐwèi nǚháizǐ dào èrshí-suì jiù  
tradition thinking think (mistakenly) girl until twenty years old already  
lǎo-le, guò èrshí-suì, háiméi jià-diào zhī néng  
old-PRT<sub>cs</sub> over twenty years old not yet marry-PRT<sub>cs</sub> only have to  
jìn gǔwù chénlièsuō gong rén píngdiào le.  
enter antiques exhibition hall for people mourn PART

「しかし、張さん夫妻には自分たちの故郷の伝統的な思想があり、女性は20歳になるともう老けたと見なされ、20歳を過ぎても嫁いでいないと、古物展示所に入れられ、人々の哀れみを受けるしかないと思っていた。」

- (11) ?他虽然是三年级的学生，但是他已经学掉了四年级的内容。（丸尾 2017: 51）

tā suīrán shì sān-niánjí de xuésheng, dànshì tā yǐjīng  
he although is third grade GEN student but he already  
xué-diào le sì-niánjí de nèiróng  
learn-PRT<sub>cs</sub> PART fourth-grade GEN content

「彼は3年生だが、もう4年生の内容を学んでしまった。」

(10) では、前項動詞V1“嫁（嫁ぐ）”の表す行為は、動作主にとって心理的負担がある行為である。後項動詞V2“掉”との結合を通して、行為の完遂を表すとともに、発話主体が動作主の心理的負担を意識していることが反映されている。Bybee et al. (1994)によれば、完成相を示すマーカー（completive mark）は完了相（perfect）と異なり、文法化の度合いが低く、動詞本来の意味的特徴が保持される。<完遂義>を表す“V掉”は、完了助詞“了（le, た）”と同様に行為/事態の完遂を表すアスペクト的機能を持つ。結合制限の側面を考えると、“了（le, た）”はほとんどの動詞に後続でき、完了相（perfect）を表す。一方、“V掉”は、語彙本来の意味的特徴の制限により、全ての動詞と自由に結合できるわけではなく、完成相を示すマーカーとして認められる（李 1990, 董 2017など）。また、認識的態度の側面に関して、完了助詞“了”は、“V掉”的ような心理的負担を伝達できない点で両者の違いが捉えられる。

また、(11)は、動作主が積極的に「学ぶ」という動作の意図を読み取ることができ、動作主には心理的負担が存在しない事態を表す。このような場面に関して、“V掉”を使用すると容認度が低い。

丸尾（2017）の分析における、一番重要な指摘は、話者が相手に急かされて仕方なく何かをするという、話者が受けた心理的負担を表すために、“V掉”を用いる傾向があるということである。しかし、“V掉”に含意される心理的負担という心的態度はどのように生じるか、この心的態度は<完遂義>以外の意味・用法においても認められるものであるか、丸尾（2017）では詳しく検討されていない。

以上の先行研究の指摘と問題点を踏まえ、本章では、本動詞“掉”と複合動詞“V

掉”の意味・機能を改めて整理し、各意味・機能の表す事象とそれぞれの意味的特徴を考察する。また、“V掉”的意味・機能は、どのような認識メカニズムに基づいて拡張しているか、この認識メカニズムを基盤とした“V掉”はどのような意味構造を持つかを検討する。

### 6.3 力動性モデルに基づく“V掉”的意味分析

#### 6.3.1 力動性モデルの“V掉”への応用

本研究は、日本語の分離動詞「切る」、「抜く」などと同様に、中国語の分離動詞“V掉”的表す事象には「力的関係」が存在すると主張する。第4章と第5章では、力動性モデルを現代日本語の2種類の分離動詞に応用して、それぞれの力的関係のパターンを分析した。次のRQ1を答えるため、本章では、日本語の分析の際と同様の理論的枠組みに基づいた力動性モデルを用いて、“V掉”的各意味・機能を体系的に説明する。

RQ1 “V掉”的どのような意味・機能と結合制限を持つか。

- 1.1 “V掉”的どのような意味・機能を持つか。
- 1.2 “V掉”的各意味・機能はどのような結合制限を持つか。
- 1.3 力動性モデルに基づいた“V掉”的多義構造はどのように解明できるか。

第3章で力動性に関する理論的枠組みについて言及した際にも述べたように、Talmy (1985a, 2000a) で提案された力動性モデル（図6-2）は、力の相互作用の結果である状態変化のみに注目するものであり、位置変化を表示していない。状態変化と位置変化を統合する複合的事象を表す場合、力の相互作用の結果として生じる「状態変化」と「位置変化」の両方を力動性モデルの図式に表示する必要がある。このため、本研究の考察対象である「分離事象」に関して、以下の改訂版の力動性モデル（図6-3）を採用する<sup>54</sup>。

---

<sup>54</sup> Talmyの力動性と本研究による改訂版の図式に関する説明の詳細は、3.1節を参照されたい。

図 6-2 Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルの図式（図 3-1 を再掲）

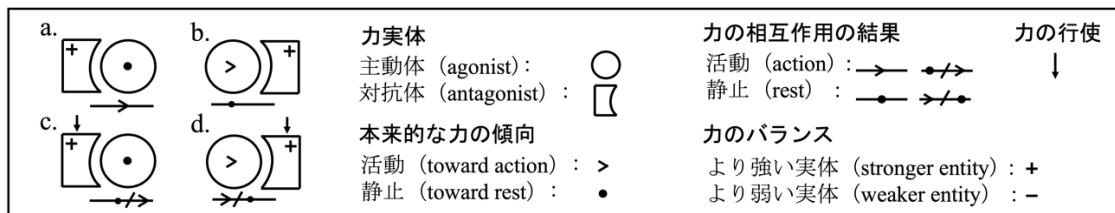
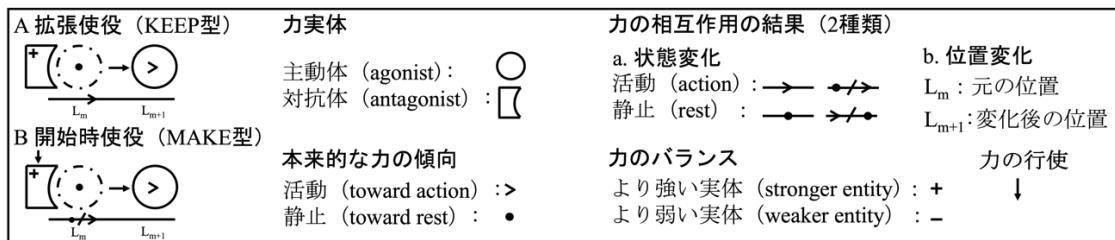


図 6-3 本研究による改訂版の力動性モデルの図式（図 3-2 を再掲）



以下、図 6-3 の力動性モデルに基づき、“V 掉” の各意味・機能およびその間の相互関係を分析する。

### 6.3.2 “V 掉” の意味パターン

#### 6.3.2.1 意味分類

本章は、“V 掉” の中核的意味パターンを判断する際、松本 (2009) による「概念的中心性」と「機能的中心性」の 2 つの基準を採用する。第 4 章で触れたように、「概念的中心性」とは、言語話者の概念化の観点から見た中心性である。すなわち、「概念的中心性」という観点に基づくと、心的辞書の多義語構造において、他の個別義の派生の基盤となり、概念的に最も基本的な意味がカテゴリー構造の中心に据えられる。一方、「機能的中心性」とは、言語話者の伝達活動の観点から見た中心性である。この観点に基づくと、最も頻繁にアクセスする意味がカテゴリー構造の中心に据えられる。この 2 つの基準に照らし合わせて考えると、先行研究で提起された“V 掉”的各意味・機能のうち、状態変化と位置変化を統合した「分離事象」を表す意味は、一番アクセスしやすい物理的な意味用法ではあり、他の意味・機能の基盤となる用法でもあるため、この意味を“V 掉”的意味パターンと位置付けるべきである。以下、この意味パターンを意味パターン 1 「分離事象型」と呼ぶこととする。

また、本章は、“V掉”が表す事象の類型に着目して意味・機能の分類を行った。状態変化と位置変化のどちらが前景化されるかによって、“V掉”的意味・機能を4つの意味パターンに分類した。表6-1は、各意味パターンにおける、前項動詞V1の動詞類型および“V掉”全体の表す事象類型を示す。

表6-1 複合動詞“V掉”的4つの意味パターン

意味パターン	動詞類型	事象類型		文法化
		状態変化	位置変化	
パターン1 分離事象型	使役変化動詞(剪(切る)、割(刈る)、剥(剥く)) 使役移動動詞(脱(脱ぐ)、拔(抜く)、卸(外す))	○	○	低
	自律移動動詞(走(歩く/離れる)、跑(走る)、溜(滑る/こつそり逃げる)、逃(逃げる)、飞(飛ぶ)) 使役移動動詞(放(逃す)、扔(投げる)、丢(捨てる))	×	○	
パターン3 消滅事象型	消耗・消失動詞 (烧(焼く)、拆(解体させる)、吃(食べる)、删(削除する)、除(駆除する))	○	×	
パターン4 完遂・極度型	授受動詞(送(送る)、卖(売る)、还(返す)、赔(損する)) 心理動詞(忘(忘れる)、戒(やめる)、忽略(無視する)) 変化動詞・形容詞(输(負ける)、死(死ぬ)、疯(狂う)、烂(腐る)、臭(臭くなる)、冷(冷める))	○	×	高

また、本研究は北京語言大学コーパスセンター(BLCU Corpus Center)による現代中国語コーパス(以下、BCCコーパス)に基づき、各意味パターンにあたる“V掉”的意味・機能を考察する。(12) – (15)は、BCCコーパスから抽出した用例である。

表6-1が示すように、この4つの意味パターンの中で、中核的な意味パターン1【分離事象型】は、状態変化と位置変化の両方の変化を含む。

(12) 机器把甜菜翻起来，立即就把叶子切掉放在一边，把菜根放到了另一边。

((人民日报) 1952)

jīqi      bǎ    tián cài      fān-qǐlái, lìjí      jiù    bǎ    yèzǐ      qiè-diào  
machine OM sugar beet      turn-over immediately then OM leaves cut-off  
fang zài yībiān,    bǎ    cài gēn    fang dào le      lìng-yībiān.  
put at/in one side OM beetroot put to PRTcs the other side

「機械は甜菜をひっくり返し、すぐに葉を切り落として片側に置き、根をもう一方に置いた。」

(12) では、動作主“机器（機械）”、分離元“甜菜（甜菜）”、分離物“叶子（葉）”の3つのパラメータ（事象の参与者）が存在する。動作主が、対象に力を行使することで、分離元の状態変化（部分的形狀変化）が生じるとともに、分離物の位置変化（片側に置く）が生じる。分離元と分離物の空間的関係および前項動詞V1の表す動作の特徴によって、意味パターン1の「分離事象型」には、使役変化動詞（例えば、“剪（切る）”、“割（刈る）”、“剥（剥く）”）と“～掉”的結合によって表される「状態変化型分離事象」と、使役移動動詞（例えば、“脱（脱ぐ）”、“拔（抜く）”、“卸（外す）”）と“～掉”的結合によって表される「位置変化型分離事象」の2種類がある（2種類の分離事象の違いに関しては後述する）。

それに対し、意味パターン2「単純移動型」、意味パターン3「消滅事象型」、意味パターン4「完遂・極度型」は、位置変化と状態変化のどちらか一方のみが前景化されるものである。その中で、意味パターン2の「単純移動型」は、位置変化のみを含み、状態変化を含まない。前項動詞V1は、“走（歩く）”、“跑（走る）”, “溜（滑る/こっそり逃げる）”, “逃（逃げる）”, “飞（飛ぶ）”のような自律移動動詞と、“放（逃す）”、“扔（投げる）”、“丢（捨てる）”のような使役移動動詞である。(13)は意味パターン2に当てはまる用例である。

(13) 要能象个小鸟似的振翅飞掉该多好! (老舍《鼓书艺人》)

yào néng xiàng gè xiǎo-niǎoside zhèn-chì fēi-diào  
if only be able to like CLF little-bird as if flap-wings fly-away  
gāi-duō-hǎo  
how-wonderful (it would be)

「小鳥のように羽ばたいて飛び去ることができたら、どんなに素晴らしいだろう！」

移動主体“小鸟（鳥）”は、V1“飞（飛ぶ）”という様態・方式で移動し、V2“掉”は「移動主体が離れる」という位置変化の結果を表す。

意味パターン3の「消滅事象型」は、状態変化のみを含み、位置変化を含まない。前項動詞は、“烧（焼く）”、“拆（解体する）”、“吃（食べる）”、“删（削除する）”、“除（駆除する）”のような消耗・消失動詞である。

(14) 一只青蛙一年至少要吃掉1.5万只害虫。 (《人民日报》2002)

yī zhī qīngwā yī-nián zhìshǎo yào chī-diào 1.5wàn  
one CLF frog one year at least need to eat-completely disappear 15,000  
zhī hàichóng  
CLF pest

「カエルは一年に少なくとも1万5000匹の害虫を食べなければならぬ。」

(14) では、動作主“青蛙（蛙）”が、V1“吃（食べる）”の表す動作を行うことによって、対象“害虫（害虫）”の数量が減少し、最終的に15,000匹が消失して存在しなくなる。すなわち、対象の状態変化が生じる。

意味パターン4の「完遂・極度型」は、意味パターン3の「消滅事象型」と同様に、位置変化のみを含み、状態変化を含まないものである。次の(15)は意味パターン4の用例である。

(15) 之前公牛队表现不佳已是三连败，并且在最近13战中输掉11场。

(《都市快讯》2023)

zhīqián gōngniú-duì biǎoxiàn bùjiā yǐ shì sān-lián-bài,  
before Bulls-team perform poor already is three-consecutive-losses  
bìngqie zài zuìjìn 13 zhàn zhōng shū-diào 11 chǎng  
and in recent 13 games in lose-PRT<sub>cs</sub>(implying finality)

「ブルズチームは過去のパフォーマンスが良くない状態すでに3連敗、さらに最近13試合で11試合で負けてしまった。」

(15) では、V2“掉”は、主体“公牛队（ブルズチーム）”によるV1“输（負ける）”という行為の完遂を表す。負けずに対抗する状態から徹底的に負ける状態に変わるという行為/極度の完遂は、1つの状態変化として捉えられる。また、意味パターン4の

“掉”は動詞だけではなく、“烂（腐る）”、“臭（臭くなる）”、“冷（冷める）”といった変化形容詞との共起も可能である。その場合、形容詞が表す状態が極限に達することを表現する。意味パターン3と意味パターン4は、状態変化が前景化される点で共通しているが、文法化の程度においては違いが見られる。先行研究では、意味パターン3と意味パターン4を区別して記述しているが、どのような違いがあるかが明確に指摘されていない。本研究では、以下3点の違いを挙げている。

1つ目は、意味の希薄化である。意味パターン3は、意味パターン1と意味パターン2と同様に、V2 “掉” が実質的意味を継承・保持しており、結果補語として、動作動詞V1によってもたらされる結果を示す。意味パターン1の “掉” は、分離（分離物が離脱し、分離元の形状・外観・属性が変わる）の結果を表し、意味パターン2の “掉” は、移動（本来の位置から離れる）の結果を表し、意味パターン3の “掉” は、消失（減少する/消える）の結果を表す。それに対し、意味パターン4では、V2 “掉” は本来的な実質的意味を喪失し、特定の結果を表示しない。文法的なアスペクト的意味へ拡張し、V1の表す行為の完遂または状態の実現を表す。

2つ目は、キャンセル構文をとる可能性である。意味パターン3では、V1は主体の動作を表し、“掉”はその動作によって起こる可能性のある事柄を示す。このため、“掉”という結果はキャンセルできる。それに対し、意味パターン4では、“掉”はV1の行為がキャンセルできない完遂状態を表す。以下の(16)を参照されたい。

- (16) a. 吃了蛋糕，但蛋糕太大了，没吃掉。 (作例)

*chī-le*                            *dàngāo, dàn dàngāo tài dà le, méi*  
 eat (with aspect particle)    cake    but cake    too big PART    not  
*chī-diào*  
*eat-completely disappear*

「ケーキを食べたけど、ケーキが大きすぎて、食べきれなかった。」

- b. \*输了比赛，但对手太弱了，没输掉。 (作例)

*shū-le*                            *bǐsài, dàn duìshǒu tài ruò le, méi*  
 lose (with aspect particle)    match    but opponent too weak PART    not  
*shū-diào*  
*lose-PRTcs*

「試合に負けたけど、相手が弱すぎて、負けはしなかった。」

(16a) は V1 “吃（食べる）” の結果がキャンセルできるのに対し、(16b) は V1 “輸（負ける）” の結果がキャンセルできないことがわかる。ただし、“送（送る）”、“卖（売る）”、“还（返す）”、“赔（損する）” といった物の授受関係を含意する動詞 V1 として使用される際には、意味パターン 3 と意味パターン 4 の両方の性質を示す。具体的には、これらの動詞が使用される際には、構文的側面に着目すると、意味パターン 3 と同様に、キャンセル文を取ることができる一方、意味の希薄化の側面に着目すると、意味パターン 4 と同様に、動作の特定の結果ではなく、行為の完遂を表す。これらの動詞は、意味パターン 3 と意味パターン 4 の両方の特徴を持つため、2 つの意味パターンの文法化の中間段階にあると考えられる。なお、本研究は、事象類型に注目し、これらの用法を意味パターン 4 に位置付ける。このことから、文法化の程度の差異は、各意味パターンの間においてのみ見られるのではなく、意味パターン 4 の中においても見られると言える。

3 つ目は心的態度を伝達する機能である。丸尾 (2017: 53) は、“V 掉” には心理的負担が含意されることを指摘した。しかし、この心理的負担は全ての意味パターンから読み取れるわけではない。意味パターン 3 では、(特別な場合を除き) 通常、発話主体の心的態度を含意しないが、意味パターン 4 では、行為の完遂を表すと同時に、その完遂に関する何らかの心理的抵抗性が捉えられる。この点は、それぞれ対応する日本語訳からも確認できる。意味パターン 4 の “V 掉” は、日本語に訳すと、「～てしまう」で表現される場合が多い。

次に、力動性モデルに基づき、各意味パターンの特徴を詳細に説明する。

### 6.3.2.2 意味パターン 1【分離事象型】

前述したように、現代中国語の本動詞 “掉” の典型的意味は、[+自然力] [+位置変化] [+方向づけ（上から下）] (�� 2007: 134) である。換言すると、本動詞 “掉” は、自然力の作用による、物の上から下への位置変化を表す。この自然力は、動作主の参与がなく、单一的な方向の力であると想定できる。それに対し、複合動詞 “V 掉” は複数の事象参与者（パラメータ）が関与するため、事象に含意される力的関係は、

单方向の力ではなく、多方向で相互に作用する力であると想定できる。本節は、力動性モデルを用いて、中核的な意味パターン1「分離事象型」における力的関係を説明する前に、意味パターン1における空間的関係を考察する。

意味パターン1を表す“V掉”には、使役移動動詞と“～掉”的結合によって表される「位置変化型分離動詞」、使役変化動詞と“～掉”的結合によって表される「状態変化型分離動詞」の2つがある。この2種類の分離動詞が表す分離事象において、分離元と分離物がどのような空間的関係を持つかについて検討する。第5章で述べたように、分離事象における空間的関係は、背景にあたる分離元(X)と焦点にあたる分離物(Y)とが本来的に何らかの形で統合する「部分型」の関係性である。また、その統合の形式を大きく分けると、「表面-付着物」、「容器-中身」、「全体-部分」の3つが挙げられる。

以下、BCCコーパスに基づき、分離事象における各空間的関係の割合を調査した。コーパス調査の手続きとして、まず、BCCコーパスを用いて、“V掉”を検索し、合計2,565種(タイプ数)が得られた。そして、この中から、分離事象を表す“V掉”に着目し、「位置変化型分離動詞」と「状態変化型分離動詞」それぞれについて、使用頻度に基づいて、上位の3つを選択した。具体的には、「位置変化型分離動詞」からは、“脱(脱ぐ)掉”(4,897例)、“拔(抜く)掉”(2,432例)、“卸(外す)掉”(708例)、「状態変化型分離動詞」からは、“剪(切る)掉”(2396例)、“割(刈る)掉”(1108例)、“剥(剥く)掉”(528例)という計6つの動詞の用例を選択した。これらの用例から、ランダムに各200例ずつ抽出した。また、抽出された用例に関して、物理的な分離事象を表す用例のみを分析対象とし、分離物がどのように分離元に結合されているかを考察した。各動詞の表す分離事象における空間的関係を、表6-2に示す。

表6-2 中国語の各分離動詞における分離元と分離物の空間的関係(BCCに基づく)

	位置変化型分離動詞 (使役移動動詞+掉)			状態変化型分離動詞 (使役変化動詞+掉)		
	脱(脱ぐ)掉	拔(抜く)掉	卸(外す)掉	剪(切る)掉	割(刈る)掉	剥(剥く)掉
表面-付着物	152 (100%)	89 (68.5%)	77 (100%)	0%	0%	21 (15.3%)
容器-中身	0%	5 (3.8%)	0%	0%	0%	0%
全体-部分	0%	36 (27.7%)	0 (9.9%)	164 (100%)	78 (100%)	116 (84.7%)

表 6-2 からわかるように、位置変化型分離動詞の表す事象では、「表面-付着物」という空間的関係が、どの動詞の用例でも最も優勢である。一方、状態変化型分離動詞の場合は、いずれの動詞の用例においても、「全体-部分」が最も優勢である。また、位置変化型分離動詞と状態変化型分離動詞の表す事象の共通点としては、「容器-中身」の空間的関係が少ないことが挙げられる。

次に、2種類の分離事象における優勢な空間的関係に基づき、それぞれの力動性のパターンを分析する。次の(17)は、状態変化型分離事象に当てはまる用例である。

(17) 许先生（…）检查着房中所有的花草。看一看叶子是不是黃了，该剪的剪掉。

(萧红《鲁迅先生记》)

xǔ-xiānshēng                jiǎnchá-zhe                fāng-zhōng    suǒyǒu    de  
 Xu (a respectful title)    check (progressive aspect)   room-in      all      GEN  
 huācǎo,                        kàn-yī-kàn    yèzǐ        shì-bùshì      huáng-le,  
 flowers and plants take-a-look    leaves    is-or-is not    yellow (with aspect particle)  
 gāi                jiǎn de                jiǎn-diào  
 should    cut   PART    cut-off

「許先生（…）は部屋の中のすべての花や草をチェックしている。葉っぱが黄色くなっていないか見て、剪定するべきものは切り取る。」

図 6-4 “V 掉” の意味パターン1【状態変化型分離事象】の力動性図式

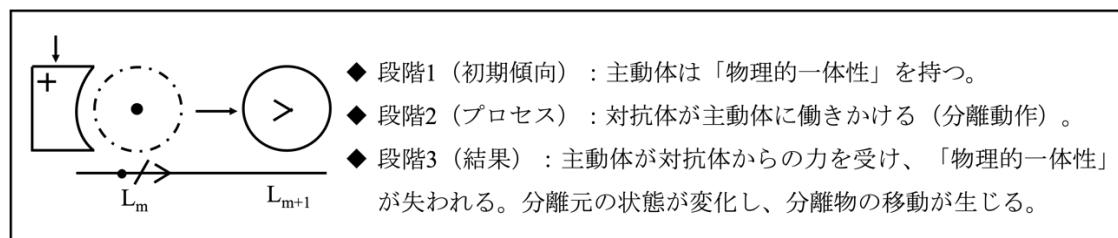


図 6-4 の状態変化型分離事象の力動性モデルは、動作主の使役行為が変化のきっかけとなるため、MAKE型事象の開始時使役 (onset causation) に当たる。(17)では、分離元 X “花草（花や植物）” と分離物 Y “叶子（葉）” は「全体-部分」の空間的関係に当たる。この空間的関係にあたる X と Y は本来的に一体性を持つ。本研究は、このタ

イプの一体性を「物理的一体性」と称する。目的語項である分離物（葉）は主動体として、「物理的一体性」によって、本来的に静止傾向にあった。主語項である動作主 Z（許先生）は対抗体として、主動体に分離動作の力を行使した。主動体が対抗体からの力を受けたことによって、「物理的一体性」が失われ、初期傾向が静止傾向から活動傾向へ変わる。具体的に言えば、“剪（切る）”という分離動作の前後で、分離元 X の状態が変化する（黄色い葉がなくなり、綺麗になる）。それに伴い、分離物 Y の位置変化が生じる（黄色い葉が切り捨てられる）。また、状態変化型分離事象では、前項動詞 V1 は使役変化動詞であるため、分離元の状態変化がより焦点化される主事象となり、分離物の位置変化が後続する副事象となる。事象に含意される「物理的一体性」によって、力動性モデルでは主事象と副事象が連動している。

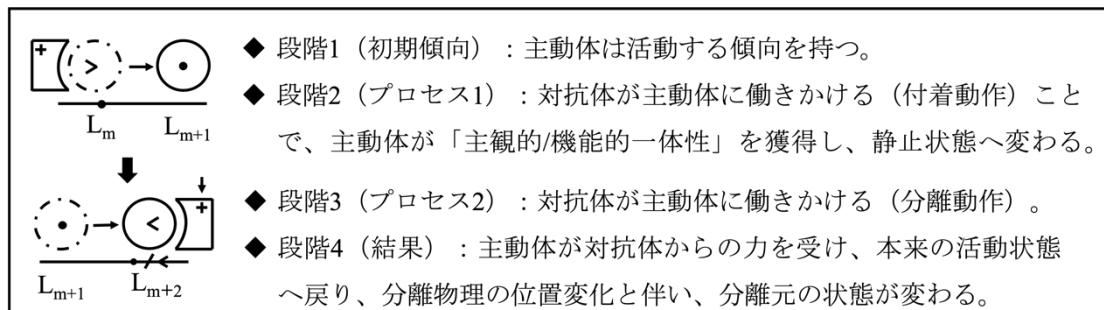
一方、次の（18）は、位置変化型分離事象に当てはまる用例である。

(18) 门板和门框上满是钉子眼，可门栓却拔掉了。 (高行健《一个人的圣经》)

ménbǎn        hé    ménkuàng-shàng    mǎn        shì    dīngzǐ-yǎn,    kě    ménshuān  
door panel     and   door frame-on     full of    is    nail-holes    but   door bolt  
què    bá-diào        le  
yet    pulled-off      PRTcs

「扉の板と枠には釘の穴がいっぱいだったが、扉のかんぬきは抜かれていた。」

図 6-5 “V 掉” の意味パターン1【位置変化型分離事象】の力動性図式



位置変化型分離事象の力動性モデルは、KEEP 型事象の拡張使役 (extent causation) と MAKE 型の事象の開始時使役 (onset causation) という 2 つの行為連鎖の図式から構成される。図 6-5 の上側の図式は、背景的事象を示しており、使役と使役の変化が同

時に生じ、主動体の状態を保持するという KEEP 型の事象に当たる。(18) を例に説明すると、分離元 X “門板（扉の板）”、“門枠（扉の枠）” と分離物 Y “門栓（扉のかんぬき）” の初期的な位置関係は、「全体-部分」の関係ではなく、「表面-付着物」の関係に当たる。このため、「物理的一体性」というタイプの一体性が捉えられない。目的語項である分離物 Y（扉のかんぬき）が主動体であり、その初期傾向は自由に移動できるという活動傾向として示される。主語項である動作主 Z（文中では出現していない）は、対抗体として、主動体に力を行使することで、Y を X に付着・固定させる。「表面-付着物」の空間的関係にあたる X と Y は、主観的/機能的に一体化しているように見える。本研究は、このタイプの一体性を「主観的/機能的一体性」と称する。「主観的/機能的一体性」の獲得によって、主動体は活動傾向から静止傾向に変わる。

それに対し、図 6-5 の下側の図式は、分離事象を示す。動作主の使役動作は変化結果を起こすため、MAKE 型事象に当たる。動作主である対抗体が主動体に物理的な力によって働きかけ、“拔（抜く）” という分離動作を行う。その結果、主動体が対抗体から強い力を受け、「主観的・機能的一体性」が失われ、静止傾向から初期の活動傾向へ戻る。具体的に言えば、“拔（抜く）” という分離動作によって、分離物の移動（扉のかんぬきが抜かれる）に伴い、分離元 X の状態が変化する（扉の板と枠が施錠されていない状態になった）。また、位置変化型分離事象では、前項動詞 V1 は使役移動動詞であるため、分離物の位置変化がより焦点化される主事象となり、分離元の状態変化が副事象となる。「主観的/機能的一体性」によって、力動性モデルでは主事象と副事象が連動している。

以上を総合すると、中核的な意味パターン 1 「分離事象型」は、状態変化型分離事象と位置変化型分離事象という 2 種類の力動性モデルを持っていると言える。この 2 つのモデルでは、複合動詞 “V 掉” が 1 つの軸として、初期傾向を持つ目的語項の分離物 (Y) と、対立した力を行使する主語項の動作主 (Z)、および空間的一体性をもつ場所項に相当する分離元 (X) という三者における力的関係が成立する。

“V 掉” の意味パターン 2 から意味パターン 4 は、中核的意味パターン 1 における「状態変化型分離事象」の力動性モデル、「位置変化型分離事象」の力動性モデルのどちらから拡張したものであり、状態変化と位置変化のうちの一方のみが前景化される。次に、意味パターン 2 から意味パターン 4 では、どのような力的関係が示されるかを考察し、意味パターンの相互関係を検討し、“V 掉” の意味構造を解明する。

### 6.3.2.3 意味パターン2【単純移動型】

意味パターン2の「単純移動型」は、意味パターン1の「位置変化型分離事象」の力動性モデルを継承し拡張したものであり、位置変化のみを表す。

- (19) 有一天，它捉住了三只小猪。（…）小黑猪很聪明，它乘狼不备，没命地逃掉。

(《人民日报》1959)

yōuyìtiān, tā zhuō-zhù-le sān zhī xiǎozhū. xiǎohēizhū  
one day, it catch-up-PRT<sub>cs</sub> three CLF piglets little black pig  
hěn cōngmíng, tā chéng láng bùbèi, méimìng-dì táo-diào  
very smart it take advantage of wolfunprepared desperately run-away  
「ある日、彼（狼）は三匹の子豚を捕まえた。（…）黒い子豚はとても賢く、狼が油断している隙に、必死に逃げ去った。」

- (20) 如果你早告诉我、我就不会让他跑掉。 (莫言『四十一炮』)

rúguō nǐ zǎo gàosù wǒ, wǒ jiù bù huì rang tā pǎo-diào  
if you earlier tell me I then not would let/allow him run-away  
「早めに教えてくれれば、彼を逃さなかつたのに。」

(19) と (20) のように、意味パターン1と異なり、意味パターン2では、前項動詞V1は、“逃（逃げる）”、“跑（走る）”のような自律移動動詞であり、これらの動詞と“～掉”的結合によって構成される“V掉”は自動詞である。意味パターン2の“V掉”が表す事象では、動作主と被動作主のペアではなく、移動主体とその移動に妨害を与えるものという2つのパラメータ（事象参与者）が存在する。この場合、意味パターン2の力動性モデルにおける主動体は、目的語項ではなく、主語項の移動主体である。対抗体は主動体の移動に妨害を与えるものである。また、意味パターン2は、「位置変化型分離事象」の力動性モデルを継承し、図6-6のように、2つの行為連鎖が見られる。

図 6-6 意味パターン 2【単純移動型】の力動性図式

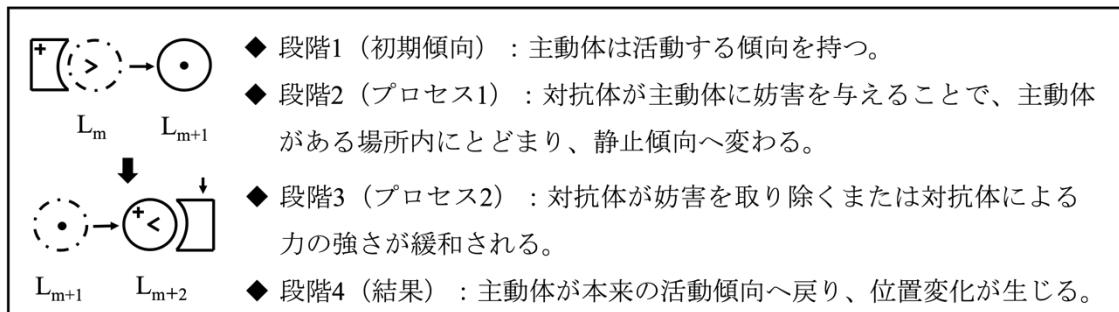


図 6-6 の図式では、上側は背景事象を示す。(19) では、主動体“小黒猪（黒い子豚）”は本来的に自由に移動できる活動傾向にある。対抗体“狼（オオカミ）”は主動体を“捉（捕まえる）”という動作によって働きかけ、主動体の移動のプロセスに何らかの妨害を与える。その結果、主動体が対抗体からの力を受け、自由に移動できず、ある場所に止まる。初期傾向は活動傾向から静止傾向へ変わる。そして、図 6-6 の図式の下側は、移動事象を示す。主動体（黒い子豚）が、対抗体（オオカミ）が油断している隙に、必死に逃げ去ったということは、対抗体の力が緩和され、主動体の力が強くなるという力のバランスの変化を示す。その結果、力の相互作用により、主動体は静止傾向から、初期的な活動傾向へ戻る。すなわち、黒い子豚は移動の妨害を取り除き、逃げて離れるという位置変化の結果に至る。また、BCC コーパスの用例を観察すると、“偷偷地（こっそり）”、“伺机（チャンスを掴んで）”などという、何らかの手段で移動の妨害を除去する意味を表す副詞と共に起する傾向が見られる。

以上のような意味パターン 2「単純移動型」の力動性モデルを踏まえると、意味パターン 2 の “V 掉” は、(21) – (23) のような、英語の移動の困難を含意する way 構文と類似する意味・機能を持つことが分かる。

- (21) I fought/elbowed/forced my way through the suffocating crowd.
- (22) They'd smashed their way through the back of the house.
- (23) I cut my way through the fence with wire cutters.

(岩田 2024: 15-16)

岩田（2024）は力動性の観点から way 構文の特徴を分析した。(21) – (23) の way 構

文が表す事象では、主動体である移動主体は、移動の経路において、対抗体からの妨害に遭遇し、順調に移動することができない状態になる。主動体の初期傾向は、活動傾向から静止傾向へ変わる。しかし、移動主体は動詞 fight/elbow/force/smash/cut という手段で妨害を取り除き、静止傾向から初期の活動傾向へ戻り、経路上を前進できるようになる。このように考えると、意味パターン 2「単純移動型」は力的関係の点で way 構文と類似している。

一方、意味パターン 2 では、使役移動動詞 “放（逃す）”、“扔（投げる）”、“丢（捨てる）” も “～掉” と結合可能である。

- (24) 詹姆斯・奥杜邦从小热爱鸟类，据说小时候曾经把家里笼中的金丝雀放掉。

James·Audubon    cóng-xiǎo        rè-ài niǎolèi, jùshuō        xiāoshíhòu

James Audubon    from-childhood love birds    it is said that when(hewas)a child

céngjīng bǎ jiā-lǐ long-zhōng de jīnsīquè fàng-diào

once    OM home-at cage-in    GEN    canary    release-free

「ジェームズ・オーデュボンは子どもの頃から鳥類を愛していて、子どもの頃、家の鳥かごからカナリアを放したと言われている。」

(24) では、目的語項（カナリア）は主動体であり、本来的に自由に移動できる活動傾向にある。主語項（ジェームズ・オーデュボン）が対抗体として、主動体に力を行使し、主動体の自由移動に障害を与えることで、主動体は活動傾向から静止傾向へ変わる。そして、対抗体は、主動体に“放（逃す/放す）”という使役移動動作を行し、対抗体による力が緩和される。これによって、主動体が本来の活動傾向に戻る。すなわち、意味パターン 2 では、V1 が使役移動動詞の場合と自律移動動詞の場合、主動体と対抗体にあたる項が異なるが、事象における力的関係は一致している。

以上をまとめると、意味パターン 2「単純移動型」は、意味パターン 1 の「位置変化型分離事象」の力動性モデルを継承したものである。この力動性モデルでは、主に移動主体と移動主体の移動に妨害を与えるものという 2 つのパラメータ（事象参与者）が存在する。移動主体が主動体であり、その初期傾向は活動傾向である。移動主体の移動に妨害を与えるものは、対抗体であり、主動体に対抗した力を加える。しかし、位置変化と状態変化を統合する意味パターン 1「分離事象型」と比べ、意味パターン 2

は、文法化によって、移動主体の位置変化のみが前景化し、状態変化事象が希薄化される。

#### 6.3.2.4 意味パターン3【消滅事象型】

次に、意味パターン3の「消滅事象型」を考察する。意味パターン3は、意味パターン1の「状態変化型分離事象」の力動性モデルを継承し拡張したものであり、状態変化のみを表す。

- (25) 花了几代人心血建造的塔房就这样一把火烧掉了。

<i>huā-le</i>	<i>jiǔdàirén</i>	<i>xīnxiě</i>	<i>jiànzhào</i>	<i>de</i>
spend (with aspect particle)	several generations	effort	build	PART
<i>tǎfáng</i>	<i>jiù zhèyàng</i>	<i>yīnbāihuǒ shāo-diào</i>	<i>le</i>	
tower house	just in this way	a fire	burn-down	PRT <sub>cs</sub>

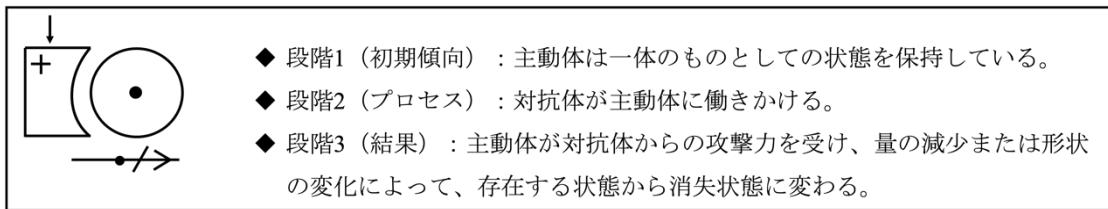
「何世代もかけて建てられたタワーは、こうして一瞬で火によって焼失してしまった。」

- (26) 他慢慢地、一口一口地喝掉了碗里的汤药。

「彼はゆっくりと、一口一口お椀の中の薬湯を飲み干した。」

- (25) と (26) のように、意味パターン 3 では、前項動詞 V1 は、“焼（焼く）”、“喝（飲む）”のような消失・消耗動詞である。“V 掉”が表す事象では、目的語である対象と主語に当たる動作主という 2 つのパラメータ（事象参与者）が存在する。意味パターン 3 の力動性モデルでは、主動体が目的語項であり、対抗体が主語項である。図 6-7 で意味パターン 3 の力動性図式を示す。

図 6-7 意味パターン3【消滅事象型】の力動性図式



(25) と (26) はいずれも、意味パターン3「消滅事象型」に当てはまる用例であるが、消滅事象の特徴において違いが見られ、それぞれ「瞬時型消滅事象」と「漸進型消滅事象」にあたる。

(25) は「瞬時型消滅事象」を表す。この例では、目的語項“塔房（タワー）”が主動体である。この主動体は、本来的に一体のものであり、安定した形状/属性を持っており、その初期傾向は静止傾向として示される。主語項である動作主（文中では出現していない）は対抗体として、“焼（焼く）”という動作によって主動体に力を行使する。その結果、主動体が一体化しているという静止傾向から、形状的変化へ向かうという活動傾向に変わる。そして消滅状態に到達し、瞬時の状態変化が捉えられる。張・趙 (2024: 88) が指摘しているように、このような「瞬時型消滅事象」は、“一十助数詞”（例：(25) “一把火（一瞬の火/一束の火）”）、瞬時時間性を表す副詞（例：“立刻（すぐ）”）と共に起しやすい。

一方、(26) は「漸進型消滅事象」を表す。目的語項“湯药（薬湯）”は、主動体として、本来的に一定の量を保持し、安定した静止傾向にある。主語項である動作主（彼）は対抗体として、主動体に力を行使し、“喝（飲む）”という動作によって働きかける。その結果、主動体（薬湯）の量が減少し、安定した量を持つという静止傾向から、量の減少へ向かうという活動傾向に変わる。そして、行為の進行によって最終的に消滅状態に至る。張・趙 (2024: 89) によれば、「漸進型消滅事象」は、「瞬時型消滅事象」と区別され、進行形を表す“正在”との結合が可能である。

以上の通り、意味パターン3「消滅事象型」は、意味パターン1の「状態変化型分離事象」の力動性モデルを継承したものであることがわかる。この力動性モデルでは、目的語項と主語項はそれぞれ主動体と対抗体と見なされ、その間に力的関係が存在している。しかし、位置変化と状態変化を統合する意味パターン1と比べて、意味パ

ーン3では、状態変化が前景化され、位置変化の意味が希薄化される<sup>55</sup>。

### 6.3.2.5 意味パターン4【完遂・極度型】

最後に、意味パターン4の「完遂・極度型」を考察する。意味パターン4は、意味パターン3と同様、意味パターン1の「状態変化型分離事象」の力動性モデルを継承し拡張したものであり、状態変化のみを表す。しかし、意味パターン3における物理的な対象の状態変化と比べ、意味パターン4は、事態/行為の完遂または状態が極限に至ることという抽象的な状態変化を表す。

- (27) 经过反复的思考后、他决定把澳大利亚公司的先进设备卖掉10台。

(《人民日报》2003)

jīngguò fānfù-de sīkǎo         hòu, tā juédìng bǎ àodàliyà gōngsī de  
through repeated consideration after he decide OM Australia company GEN  
xiānjìn shèbèi         mài-diào         10 tái  
advanced equipment sell-PRT<sub>es</sub> ten CLF

「熟慮の末、彼はオーストラリア企業の先進的な設備のうち、10台を売って  
しまうことを決定した。」

- (28) 抽了16年烟的王锡田硬是咬着牙把烟戒掉了。

(《人民日报》1993)

chōu le         16 nián yān de         wángxītián         yìngshì         yǎo-zhe  
smoke-PRTas 16 years cigarette PART Wangxitian stubbornly bite-PRTco  
yá         bǎ yān         jiè-diào         le  
teeth OM cigarette quit-PRT<sub>es</sub> PART

「16年間喫煙していた王锡田は、歯を食いしばってタバコをやめてしまった。」

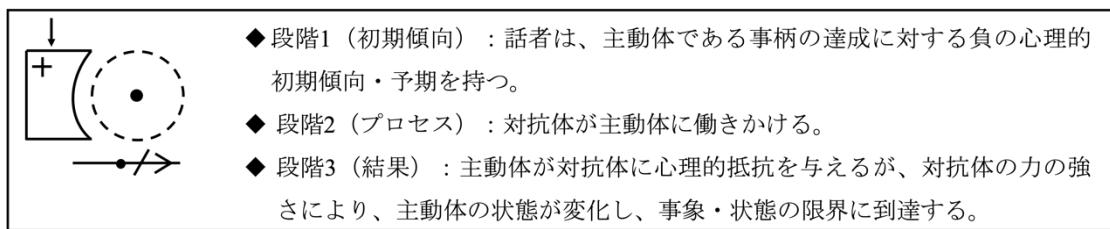
- (27) の前項動詞V1は、“卖（売る）”という授受関係を含意する動作動詞である。

- (28) の前項動詞V1は、“戒（やめる）”という人間の心理状態に関わる動詞である。

<sup>55</sup> 意味パターン3では、(26)のような食物の消滅を意味する“喝掉”が表す事象は、食物の移動を含むという捉え方がある。しかし、その移動は、単に「漸進型消滅事象」を実現するための1つの手段であり、“～掉”によって表されるV1の行為の結果ではない。すなわち、意味パターン3の“～掉”では、V1の行為による消滅という状態変化の結果が際立ち、位置変化の意味はほとんど希薄化される。

後項動詞 V2 “掉”は、具体的な結果変化ではなく、V1 の表す行為・動作の完遂を表す。また、意味パターン 4 の “V 掉” は、アスペクト的意味を表す際に、話者の消極的な心的態度を伝達する。このため、意味パターン 4 の力動性モデルでは、心理的側面が際立ち、主動体は目的語項ではなく、話者または動作主が行為の達成に対して消極的な心理的初期傾向を持つ事柄である。対抗体は、主語項ではなく、行為の達成を推進する現実的要因である。図 6-8 は意味パターン 4 の力動性モデルを示す。主動体による力は心理的領域の力であるため、意味パターン 3 「消滅事象型」と区別し、破線の円形で主動体を表示する。

図 6-8 意味パターン 4【完遂・極度型】の力動性図式



(27) では、動作主（彼）は、本来的に「先進的な設備を売る」という事態の達成に対する心理的抵抗性を持ち、消極的心的態度が示される。このため、主動体の初期傾向は、静止傾向であると捉えられる。会社の倒産などの現実的要因は対抗体として、主動体に対抗する力を加え、主動体は、「先進的な設備を売る」の事態を達成しなければならない状態になる。対抗体の力は主動体の力よりも強いため、動作主は、「先進的な設備を売る」という事態を消極的に推進する。最後に、主動体は、静止傾向から活動傾向へ変化し、状態変化が生じる。すなわち、「先進的な設備を売る」という事態が徹底的に達成される。

(28) では、動作主（王錫田）は 16 年間「タバコを吸う」という習慣を継続している。本来的に「タバコをやめる」という行為の達成に心理的抵抗性を持ち、その行為の達成を期待していない。この事柄が主動体に当たり、この主動体の初期傾向は、静止傾向であると捉えられる。しかし、健康上の問題などの現実的要因によって、「タバコをやめる」という行為の達成が必要となる。この現実的要因が対抗体として、主動体に力を働きかける。動作主（王錫田）は「タバコをやめる」という行為に心理的抵抗性があるが、現実的要因という対抗体の力は、主動体の力よりも強い。力の相互作

用により、動作主は気の進まない状態ではありながらも、消極的に行行為の達成を推進しなければならなくなる。その結果、主動体は、静止傾向から活動傾向へ変わり、状態変化が生じる。すなわち、「タバコをやめる」という行為が完遂され、事態の限界・終結点に到達する。

以上の(27)と(28)の“V掉”的意味機能は、中国語における他の完成相を示すマーカー（例：“V下（xia、降りる/下がる）”）と比べ、「消極的完遂」という特徴が見られる（後の6.4節で詳細に述べる）。この「消極的完遂」という特徴によって、(29)のような、動作主が積極的に事柄の完遂に参与する場合、“V掉”を使用すると不自然さが生じる。

- (29) ?他虽然是三年级的学生，但是他已经学掉了四年级的内容。 (= (11))

tā suīrán shì sān-niánjí de xuésheng, dànshì tā yǐjīng  
he although is third grade GEN student but he already  
xué-diào le sì-niánjí de nèiróng  
learn-PRT<sub>cs</sub> PART fourth-grade GEN content

「彼は3年生だが、もう4年生の内容を学んでしまった。」

動作主が3年生だが、4年生の内容を学ぶという事柄に関して、話者が積極的心的態度を持ち、事柄の完遂を期待している。動作主も積極的に事柄の達成を推進している。この場合、主動体である事柄の達成に対する積極的な心理的初期傾向と、動作主が積極的に事柄の遂行に参与するという2つの力が存在するが、この2つの力は対抗しているものではなく、同一の方向に向かう力である。このため、(29)の表す事象は、図6-8の意味パターン4「完遂・極度型」の力動性モデルに当てはまらない。(29)に含意される力的関係は、意味パターン4の“V掉”における対抗した力的関係とそれが生じるため、“V掉”的使用が許されない。

加えて、意味パターン4では、変化動詞・形容詞が“～掉”との共起することが可能である。

- (30) 由于销售渠道不畅，经常有许多干鲜海货滞销或烂掉。 (《福建日报》1984)

yóuyú xiāoshòu quédào bù-chàng, jīngcháng yǒu xǐduō

due to sales channel not smooth frequently there is/exist many  
gānxiān hǎihuò zhìxiāo huò làn-diào  
dried and fresh seafood unsellable or rot-PRT<sub>es</sub>

「販売ルートがスムーズでないため、しばしば多くの乾物や生鮮海産物が売れ残ってしまったたり、腐ってしまったたりする。」

(30) では、「多くの乾物や生鮮海産物が売れ残る」という状態は、期待されない状態であり、静止傾向にあると捉えられる。しかし、時間の推移という客観的な要因は対抗体として、主動体に力を加える。主動体が対抗体からのより強い力を受け、静止傾向から活動傾向に変わり、最後にその状態が極限に至る。

以上の通り、意味パターン4「完遂・極度型」では、心理的抵抗性が際立ち、主動体は、動作主（または発話主体）が行為の達成/状態の極度化に対して消極的な心理的初期傾向を持つ事柄である。対抗体は行為の達成/状態の極度化を推進する現実的要因などの客観的なものである。主動体と対抗体による力の相互作用によって、意味パターン4「完遂・極度型」は、単純な完遂用法ではなく、話者の心的態度を伝達する機能を持つ。また、意味パターン4は、意味の希薄化だけではなく、結合制限の点で、意味パターン1から意味パターン3と比べて、文法化的程度が最も進んでいる段階にあると考えられる。次節では、各意味パターンにおける“V掉”的結合制限と傾向を検討する。

### 6.3.3 “V掉”的結合制限・傾向

本節は、各意味パターンでは、“V掉”はどのような結合制限と傾向を持つかを検討する。

意味パターン1「分離事象型」では、前項動詞V1は、使役移動動詞と使役変化動詞の2つに分類される。本動詞“掉”は、「上から下へ移動する」という移動義、「物全体の一部が分離する」という分離義を表す。複合動詞“V掉”は本動詞の意味を継承し、“～掉”と結合される動作動詞V1の意味に制限が課される。

表 6-3 意味パターン 1 の結合制限・傾向 (BCC に基づく)

分離義を表す V1	頻度	付着義を表す V1	頻度
脱 (脱ぐ) 掉	4,897	#穿 (着る) 掉 (cf. 穿上)	15
拔 (抜く) 掉	2,432	*插 (挿す) 掉 (cf. 插上)	0
卸 (外す) 掉	708	*装 (設置する) 掉 (cf. 装上)	0
剪 (切る) 掉	2,396	#粘 (貼り付ける) 掉 (cf. 粘上)	32
割 (刈る) 掉	1,108	*缝 (縫い合わせる) 掉 (cf. 缝上)	0
剥 (剥く) 掉	528	*贴 (貼る) 掉 (cf. 贴上)	0

表 6-3 のように、意味パターン 1 では、使役移動動詞と使役変化動詞という 2 種類の V1 は、どちらも動作主が対象に物理的な力を加え、対象を元の場所から引き離すという分離動作を表す。その反対の動作、すなわち、物を新たな場所に付着・固定させるという付着動作を表す動詞は、“～掉”との結合が容認されず、“～上 (shang, 上)”と結合されやすくなる。

意味パターン 2 「単純事象型」では、前項動詞 V1 には、自律移動動詞と使役移動動詞の両方が使用可能である。自律移動動詞の場合、V2 “掉” は移動主体が離れるという結果を表す。使役移動動詞の場合、V2 “掉” は、移動物が動作主から遠ざかるという結果を示す。これによって、意味パターン 2 における V1 は移動物が動作主の領域から遠ざかるという「遠心型」の移動動詞であることが分かる。移動物が動作主の領域へ向かうという「求心型」の移動動詞とは結合できない。また、この 2 種類の動詞はどちらも移動様態動詞である。意味パターン 2 の “V 掉” は、移動の妨害を除去して移動する意味を含意する。このため、V1 の表す移動の様態は、何らかの手段で妨害を取り除くという様態・方式であると考えられる。

表 6-4 意味パターン 2 の結合制限・傾向 (BCC に基づく)

遠心型 (妨害除去の様態を含意する) V1	頻度	求心型 (妨害除去の様態を含意しない) V1	頻度
走 (歩く/離れる) 掉	1,989	*来 (来る) 掉 (cf. 来到)	0
放 (逃す/放す) 掉	1,319	*捉 (捕まえる) 掉 (cf. 捉住)	0
跑 (走る) 掉	2,791	*爬 (這う) 掉 (cf. 爬走)	0
飞 (飛ぶ) 掉	254	*跳 (跳ねる) 掉 (cf. 跳走)	0
溜 (滑る) 掉	734	*登 (登る) 掉 (cf. 登上)	0

表 6-4 のように、“走 (歩く/離れる)”、“放 (逃す/放す)” という遠心型動詞は “～

掉”と結合できるのに対し、“来（来る）”、“捉（捕まえる）”という求心型動詞は“～掉”と結合できない。“跑（走る）”、“飞（飛ぶ）”のような速いスピードで移動の様態を表す動詞、“溜（滑る）”のような妨害を避けてこっそり移動する様態を表す動詞は、“～掉”と結合できる。それに対し、単なる移動の様態を表し、妨害を取り除く意味を含意しない動詞“爬（這う）”、“跳（跳ねる）”、“登（登る）”は“掉”と結合できない。

意味パターン3「消滅事象型」では、前項動詞V1は、消失・消耗の行為を表す動詞である。“掉”は単独で使用される際に、物全体の一部が離脱する意味を表すことができる。意味パターン3は、この“掉”的意味をもとに、どのような種類の変化を起こすかに応じた形での意味拡張が見られる。具体的には、変化の方向性によって、複合動詞“V掉”が数量の変化を表す際には、量の減少結果へと意味が拡張している。形状の変化を表す際には、形状の破壊結果へと意味が拡張される。このような変化結果と合致させるため、V1にも同様な変化方向を含意する必要がある。

表 6-5 意味パターン3の結合制限・傾向（BCCに基づく）

存在→非存在を表す 消失・消耗動詞 V1	頻度	非存在→存在を表す 生産動詞 V1	頻度
焼（焼く）掉	3,211	*建（立てる）掉 (cf. 建立)	0
拆（解体させる）掉	2,339	*装（設置する）掉 (cf. 存下)	0
吃（食べる）掉	10,166	*生产（生産する）掉 (cf. 生产出)	0
删（削除する）掉	4,357	*写（書く）掉 (cf. 写上)	0
清除（駆除する）掉	404	*保留（保留する）掉 (cf. 保留下)	0

表 6-5 のように、物の量が減少しつつ、または形状が変化しつつ、存在しなくなるという変化方向を含意する消失・消耗動詞は“掉”と結合できる。これに対して、物が存在しない状態から、物が生産され、増加するという変化方向を含意する生産動詞は“掉”と結合できない。また、このような変化の方向性は、意味パターン3の力動性モデルの「静止傾向→活動傾向」という力的変化の方向性と一致している。すなわち、主動体は本来的に安定している量・形状を持つ存在であり、静止傾向にある。対抗体の力の行使によって、主動体の量が減少し、または形状が変わるという形式で、静止傾向から活動傾向へ変化する。

最後に、意味パターン4「完遂・極度型」では、V1は動作動詞ではなく、行為の結

果を含意する動詞である。V2 “掉” はその行為の結果が完遂される意味を表す。複合動詞 “V 掉” は、本動詞に含意される「本来の位置から離脱する」という方向性を継承するため、V1 もこのような方向性の変化を表す動詞でなければならないという結合制限がある。

表 6-6 意味パターン 4 の結合制限・傾向（遠心型動詞 V1, BCC に基づく）

遠心型動詞 V1	頻度	求心型動詞 V2	頻度
卖（売る）掉	6,250	?买（買う）掉 (cf. 买到)	92
送（送る）掉	524	#收（受ける）掉 (cf. 收到)	9
赔（損する）掉	78	?赚（得する）掉 (cf. 賺到)	1
还（返す）掉	448	?借（借りる）掉 (cf. 借出)	5
忘（忘れる）掉	9,819	*记（覚える）掉 (cf. 记住)	0

このため、表 6-6 のように、話者の領域から遠ざかる意味を表す「遠心型」動詞 “卖（売る）”、“送（送る）”、“赔（損する）”、“还（返す）”、“忘（忘れる）” は、“～掉” と結合できる。話者の領域に向かう意味を表す「求心型」動詞 “买（買う）”、“收（受ける）”、“赚（得する）”、“借（借りる）”、“记（覚える）” は、“～掉” と結合しにくい<sup>56</sup>。

また、意味パターン 4 では、前項動詞 V1 が人間や物事の状態を表す動詞・形容詞である場合、V2 “掉” はその状態が極限に至ることを表す。また、先に分析したように、複合動詞 “V 掉” は、完遂・極度の意味機能を表す際に、話者が V1 の表す事柄に対する心理的抵抗性を持っているという心的態度を伝達する。

表 6-7 意味パターン 4 の結合制限・傾向（消極的感情を表す V1, BCC に基づく）

消極的感情を表す V1	頻度	積極的感情を表す V1	頻度
疯（狂う）掉	2,968	*冷静（落ち着く）掉 (cf. 冷静下来)	0
输（負ける）掉	2,329	?赢（勝つ）掉 (cf. 赢下)	12
冷（冷める）掉	304	*热（暑くなる）掉 (cf. 热起来)	0
坏（壊れる）掉	2,967	*好（よくなる）掉 (cf. 好转)	0
死（死ぬ）掉	6,495	*活（生きる）掉 (cf. 活下去)	0

表 6-7 のように、消極的感情を含意する動詞・形容詞 “疯（狂う）”、“输（負ける）”、“冷（冷める）”、“坏（壊れる）”、“死（死ぬ）” は、“～掉” と自然に結合される。それ

<sup>56</sup> なお、“把（ba）”構文で使用されると、求心型動詞と“～掉”的結合の容認度が高くなる。

に対し、積極的感情を含意する動詞・形容詞“冷静（落ち着く）”、“贏（勝つ）”、“热（暑くなる）”、“好（優れる）”、“活（生きる）”は、“～掉”と感情の方向性でそれが生じるため、特定の文脈がなければ“～掉”との結合が許されない。

以上、4つの意味パターンにおける“V掉”的結合制限・傾向を分析した。これらの結合傾向の共通性として、主に2つの傾向が挙げられる。はじめに、位置変化の方向性に関して、話者の位置から遠ざかるという「遠心型」動詞に偏る傾向が捉えられる。次に、感情の方向性に関しては、移動が困難であることを含意する移動様態動詞と、消極的感情を表す動詞・形容詞に偏る傾向が捉えられる。

### 6.3.4 “V掉”的意味構造の解明

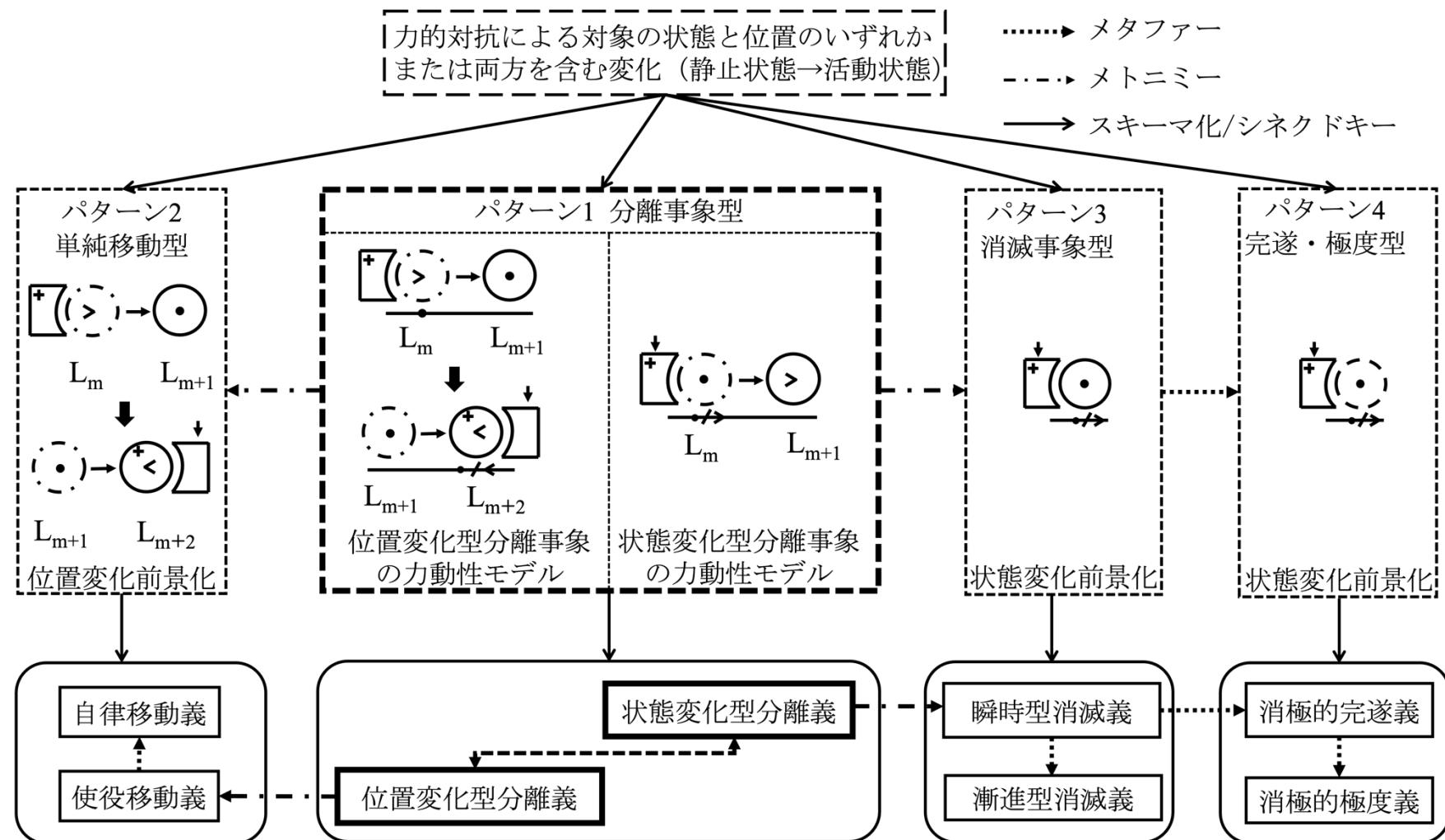
以上の力動性モデルに基づく考察により、“V掉”的意味・機能が4つの意味パターンに分類された。この4つの意味パターンは、意味・機能の面で共通点を持った局所的スキーマとして抽出され、図6-9のような複層的意味構造に位置付けられる。

この複層的意味構造には、3つの意味レベルが存在し、それぞれの間に意味スキーマの段階性が見られる。“V掉”的意味パターンは、意味空間の中間にあるレベル2に据えられる。一方、各意味パターンを構成する個々の具体的な意味・機能<sup>57</sup>は、意味が特定化されるレベル1にある。さらに、各意味パターン（局所的スキーマ）の共通性として抽出されるスーパー・スキーマは、意味が一番抽象化されるレベル3にある。

---

<sup>57</sup> レベル2の意味パターン的意味と区別するため、レベル1の具体的意味を「状態変化型分離義」、「位置変化型分離義」、「自律移動義」、「使役移動義」、「瞬時型消滅義」、「漸進型消滅義」、「完遂義」、「極度義」として記述している。

図 6-9 力動性モデルに基づく“V掉”の意味構造



まず、レベル2の意味パターン間の相互関係を説明する。本研究は、位置変化と状態変化の両方を統合する意味パターン1「分離事象型」を“V掉”の中核的カテゴリーに据える。この中核的カテゴリーには、「位置変化型分離事象」と「状態変化型分離事象」という2種類の力動性モデルがある。この中で、「位置変化型分離事象」の力動性モデルでは、位置変化が主事象、状態変化が副事象である。「状態変化型分離事象」の力動性モデルでは、状態変化が主事象、位置変化が副事象である。それぞれの力動性モデルに基づき、“V掉”的各意味パターンは2つの方向へと拡張している。

意味パターン2「単純移動型」は、意味パターン1における「位置変化型分離事象」の力動性モデルを継承し拡張したものである。パターン2は、位置変化事象の前景化によって、パターン1における複合的な分離事象の1つの側面を継承し、位置変化という单一事象を表す。一方、意味パターン3「消滅事象型」は、「状態変化型分離事象」の力動性モデルを継承し拡張したものである。その拡張プロセスでは、状態変化の前景化によって、パターン3は、パターン2と同様に1つの側面のみを継承し、状態変化という单一事象を表す。すなわち、パターン2とパターン3の表す事象は、パターン1の分離事象と、事象構成の側面で、「全体-部分」の関係にある。メトニミーによるパターン間の意味拡張が捉えられる。

さらに、意味パターン3「消滅事象型」から意味パターン4「完遂・極度型」へと意味が拡張される。意味パターン4は、意味パターン3と同様に、「状態変化型分離事象」の力動性モデルを継承したものであるが、それぞれ含意される力的関係は異なる領域に属する。パターン3では、対抗体が主動体に物理的力を行使した結果、主動体の形狀的変化や数量的減少が起り、消滅状態に至る。すなわち、パターン3の“V掉”的表す対象の消滅は、物理的領域における力の対抗によって生じる変化結果に当たる。それに対し、意味パターン4では、主動体は、発話主体または動作主が心理的抵抗性を持つ行為/状態である。対抗体は、行為の達成や状態が極限に至ることを促進する現実的要因/時間という客観的な物事である。力の相互作用によって、行為が完遂されたり、状態が極限に至ったりする。すなわち、パターン4の“V掉”的表す行為の達成や、極限に至った状態は、心理的領域における力的関係に基づいて生じる。この2つの意味パターンは、力の対抗による事態の進行という点で類似しており、パターン3からパターン4へのメタファーによる意味拡張が捉えられる。

次に、各意味パターンのカテゴリーにある下位の具体的意味・機能の相互関係を述べる。中核的な意味パターン1では、「状態変化型分離義」と「位置変化型分離義」という2つの意味がある。この2つの意味は、分離動作の特徴と、分離元と分離物の空間的関係という点で違いが見られるが、力の対抗によって本来は一体であった物の一部が離脱するという変化結果において類似している。本研究は、この2つの意味は並行して存在し、両方とも中核的意味であると位置付ける。

意味パターン2における具体的意味として、「自律移動義」と「使役移動義」の2つがある。その拡張関係について見ると、パターン2の「使役移動義」とパターン1の「位置変化型分離義」との間に時間的に隣接関係が捉えられる。すなわち、動作主が力を行使して主観的/機能的に一体化した物の一部を分離するという事態が先行し、物を他の場所に移動させるという事態が後続する。そして、このような時間的隣接性に基づくメトニミーによる拡張がなされる。また、意味パターン2内では、「自律移動義」と「使役移動義」は、移動主体/移動物が何らかの移動の妨害に遭遇し、力の対抗を通して妨害を取り除き自由に移動できるようになるという移動のプロセスにおいて類似している。したがって、この両者の間には、メタファーの拡張関係が捉えられる。

意味パターン3では、「瞬時型消滅義」と「漸進型消滅義」は、事態の時間的特徴において違いが見られるが、力の対抗による消滅結果において類似している。また、この2つの意味が表す消滅結果は、意味パターン1の「状態変化型分離義」が表す事態と時間的に連続している。動作主の力を通して、物理的に一体化した物全体の一部が分離されてから、消耗/消滅へ向かうという行為連鎖が想定できる。また、事態進行の特徴を考えると、「瞬時型消滅義」は「状態変化型分離義」に含意される変化の瞬間性を保持しているため、「状態変化型分離義」からメトニミーによって「瞬時型消滅義」へ、さらにメタファーによって「漸進型消滅義」へ意味が広がっていると考えられる。

意味パターン4における個別義として、「消極的完遂義」と「消極的極度義」という2つが抽出できる。パターン4の「消極的完遂義」は、パターン3の「漸進型消滅義」と行為の完遂の点で類似している。「漸進型消滅義」は消耗/消滅行為による変化を表す。動作主は対象に消耗/消滅動作を継続して行使し、対象の形状的破壊/量的減少という変化のプロセスによって、最後に行行為が完遂される。このため、両者の間にメタファーによる意味拡張が捉えられる。また、「消極的完遂義」の表す行為の完遂と「消極的極度義」の表す極限に至った状態は、同様に事態の終結点としてみなされる。それ

に加え、両者は消極的心的態度を伝達する点でも共通している。これによって、「漸進型消滅義」の転用によるものと考えられる「消極的完遂義」は、「消極的極度義」へと意味がさらに拡張される。

最後に、レベル 2 の意味パターンに共通している包括概念として、局所的スキーマと上下のスキーマ関係に当たるレベル 3 にある「スーパー・スキーマ」的意味を説明する。“V 掉” の 4 つの意味パターンでは、力的関係が捉えられる。主動体と対抗体という対抗した力実体の相互作用によって、状態変化と位置変化のうちの一方の変化、または両方の変化が生じる。いずれの意味パターンからも、「力的対抗によって、対象の初期傾向を何らかの形で変化させることで、対象の状態か位置の変化結果が生じる」という共通事象が抽出できる。それゆえ、力動性モデルに基づき、“V 掉” のスーパー・スキーマを「力的対抗による対象の位置と状態のいずれかまたは両方の変化（静止状態→活動状態）」と規定しておく。

以上のように、“V 掉” の各意味・機能の拡張関係とスキーマ関係を踏まえ、各レベルの意味スキーマをリンクさせることで、“V 掉” の意味構造が明らかになった。

また、本節の考察の結果をまとめると、以下の通りである。RQ1.1 (“V 掉” の意味・機能) に関して、“V 掉” の表す事象類型と文法化の程度に着目し、各意味・機能を 4 つの意味パターンに分類した。力動性モデルに基づき、各意味パターンにおける力的関係を解明した。RQ1.2 (“V 掉” の結合制限) に関して、力的関係によって、“V 掉” には一定の結合制限・傾向が課される。各意味パターンにおける “V 掉” の結合制限・傾向の共通性を抽出し、「遠心型」の動詞と消極的感情を含意する動詞と結合する傾向があることを指摘した。RQ1.3 (“V 掉” の多義構造) に関して、本研究は、“V 掉” の多義構造を 4 章の「切る」の多義構造と同様に、段階性のある複層的意味空間として可視化する。先行研究による意味分析と比べると、本研究は、意味パターンだけではなく、パターン内の意味のバリエーション（具体的な意味・機能）、各意味パターンが共通している包括概念（スーパー・スキーマ）を 1 つの意味構造の中に位置付けることで、“V 掉” の意味の段階性と、意味間の関連性や有契性がさらに明確になった。

## 6.4 中国語の“V下”、“V落”との比較

前節で触れたように、本動詞“掉”は「上から下へ落ちる」という下降移動の意味を持っている。中国語では、ほかに下降移動を表す動詞には、“下 (xia、降りる/下がる)”、“落 (luo、落ちる)”などが挙げられる。これらも“掉”と同様、複合動詞の後項動詞へと意味が拡張している。本節では、次の RQ2 について、“下”、“落”とその複合動詞“V下”、“V落”と比べて、“掉”と“V掉”はどのような特徴を持つか、また、なぜこれらの間に違いが生じるかについて、考察する。

RQ2 “V掉”は“V下”、“V落”とどのような点で異なるか。

- 2.1 下降移動を表す本動詞“掉”は、“下”、“落”とどのような点で異なるか。
- 2.2 複合動詞“V掉”は、“V下”、“V落”とどのような点で異なるか。

### 6.4.1 本動詞“掉”、“下”、“落”の違い

まず、本動詞“掉”、“下”、“落”的意味と使用状況について考察する。本動詞“下”と“落”は、“掉”と同様に、主体が上から下に移動するという位置変化、すなわち、下降移動の意味を表す。(31) – (33) では、移動主体は“雨”であり、“掉”、“下”、“落”的三者はいずれも雨が降っている気候現象を表す。

- (31) 全国各地普遍下雨, 大部地区旱象已除。 (《人民日报》1950)  
「全国的に雨が降り、ほとんどの地域で干ばつは解消した。」
- (32) 济南飞雪, 广州落雨。 (《人民日报》1997)  
「济南では雪が舞い、広州では雨が降る。」
- (33) 时浓时淡的烟岚飘然于上, 不一会掉雨点了。 (《人民日报》1987)  
「濃くなったり淡くなったりする霧が、ふわりと立ち上がり、まもなく雨が降り始めた。」

これらの気候現象の場面では、三者の使用には大きな違いが存在しない。また、“雨”的他に、“雪”、“冰雹（雹）”なども移動主体になることができる。しかし、気候現象以外の下降移動の場面に関して、三者が使用可能な文脈と移動主体には、明確な違い

が見られる。この中で、“下”は、人間の意志を伴う下降移動を表す。例えば、人が山や坂、階段の上の場所から下の場所に移動する場面（例：“下山（山を下る）”、“下坡（坂を降りる）”、“下樓（階段を降りる）”、“下台（舞台から降りる）”）、飛行機、船、自動車などの乗り物から降りる場面（例：“下飞机（飛行機を降りる）”、“下船（船を降りる）”、“下车（車を降りる）”）に関して、“下”は使用されているのに対し、“落”は使用できない。また、“掉”は、(34) のように、坂や自転車の上から下に移動する事態に用いられるが、使用される文脈が異なる。

(34) 他从坡上/车上掉了下来，摔伤了。 (作例)

「彼は坂道/自転車から落ちて、怪我をした。」

(34) では、移動主体が意図的に移動したのではなく、不注意で上から落ちて、怪我をするという消極的結果になった。すなわち、主体が人間である場合、“掉”は、主体の意志を伴わない移動を表しており、消極的結果状態を表す文脈で使用される傾向がある。

一方、“落”の主体は、一般的に、重量がほぼ感じられない軽いものである（例：“花”、“鸟（鳥）”、“灰尘（埃）”）。または、(35) のように、主体には一定の重量があるものの、軽やかさのある様態で移動する場面で使用される。

(35) 经过 20 多分钟的努力，终于成功地将飞机{落/\*掉/\*下}在了跑道上。

(《人民日报》2003)

「20 分以上の努力の末、飛行機はついに滑走路に着陸することに成功した。」

(35) における移動主体は“飞机（飛行機）”であり、その重量は非常に大きい。しかし、正常に運転されている飛行機は、「鳥が枝に止まる」のように、軽やかな様態で穏やかに着陸していると想定できる。また、その着陸という位置変化によって、着点の地面の状態には、何らの変化も生じていない。これにより、安全に着陸する飛行機は軽いものであると認識されており、“落”は使用可能であるが、“掉”、“下”は使用できない。それに対し、(36) のように、飛行機の着陸が、着点の場所に大きな影響を与える場面では、“落”が使用できず、“掉”は使用されている。

(36) 起先大家还以为石油厂着火了，后来才知道是飞机{掉/\*落/\*下}下来了。

(《文汇报》2022)

「最初は石油工場が燃えていると思ったが、やがて飛行機が墜落しているのだと気づいた。」

(36) は飛行機がコントロールされない状態で地面に墜落する事態を表す。飛行機自体の重量と急速な位置変化は、火災を引き起こし、着点に消極的な状態変化を起こす。また、飛行機のような重いものだけではなく、“筆（ペン）”のような軽いものの下降移動の場面も、“掉”を使用することが可能である。

(37) 筆{掉/\*落/\*下}在地面上，摔坏了。 (作例)

「ペンが地面に落ちて、壊れた。」

(37) では、ペンが不注意で（机から）地面に落ちたという描写がなされている。軽いものの移動であるため、その移動によって、着点の場所には変化が生じない。しかし、移動主体が壊れるという消極的な状態変化が生じる。このような場面では、“掉”を用いることは可能だが、“落”、“下”は用いられない。すなわち、“掉”の表す下降移動は、意志を伴わないことと、主体の位置変化に（主体または場所の）消極的な状態変化が伴うことという2つの特徴が見られる。

以上により、本動詞“掉”、“下”、“落”的表す下降移動の特徴を表6-8にまとめる。

表6-8 “掉”、“下”、“落”的表す下降移動の特徴

動詞	場面の特徴	移動主体
掉	意志を伴わない移動であり、また主体の位置変化に消極的な状態変化が伴う。	ペン、（墜落する）飛行機
下	人間の強い意志性を伴う移動である。	人間
落	主体は軽いものまたは軽やかな様態で移動するものである。	花、鳥、埃、（着陸する）飛行機

#### 6.4.2 複合動詞 “V 掉”、“V 下”、“V 落” の違い

次に、複合動詞である “V 掉”、“V 下”、“V 落” の意味と使用状況を見る。BCC ワーパスを用いて “V 掉”、“V 下”、“V 落” を検索し、それぞれの前項動詞の特徴と結合制限を分析する。表 6-9 は、“V 掉”、“V 下”、“V 落” それぞれの前項動詞の頻度上位 20 語を示す。

表 6-9 “V 掉”、“V 下”、“V 落” の前項動詞の頻度上位 20 語 (BCC に基づく)

	V 掉	頻度	V 下	頻度	V 落	頻度
1	死 (死ぬ)	6,481	停 (止まる)	30,194	滑 (滑る)	4,803
2	卖 (売る)	6,248	走 (歩く)	17,619	抓 (掴む)	4,167
3	脱 (脱ぐ)	4,897	写 (書く)	14,571	滚 (転ぶ)	2,417
4	删 (削る)	4,358	掉 (落ちる)	13,383	滴 (滴る)	1,657
5	打 (打つ)	3,236	拿 (取る)	13,036	飞 (飛ぶ)	979
6	疯 (狂う)	2,963	跳 (跳ぶ)	11,695	摔 (転倒する)	718
7	跑 (走る)	2,790	垂 (垂れる)	11,533	吹 (吹く)	587
8	剪 (切る)	2,394	接 (受け取る)	9,823	翻 (めくる)	449
9	输 (負ける)	2,330	活 (生きる)	9,044	撒 (こぼす)	439
10	换 (換える)	2,099	生 (生む)	8,816	扫 (片付ける)	347
11	戒 (戒める)	2,033	买 (買う)	8,231	跳 (跳ぶ)	279
12	走 (歩く)	1,987	取 (取る)	6,914	斩 (切る)	230
13	拿 (取る)	1,841	拍 (打つ)	6,275	劈 (切る)	223
14	花 (使う)	1,758	蹲 (しゃがむ)	5,947	泻 (流れる)	202
15	挂 (掛ける)	1,656	吃 (食べる)	5,611	挑 (挑戦する)	184
16	坏 (壊れる)	1,593	喝 (飲む)	5,448	推 (押す)	179
17	放 (逃す)	1,320	退 (返す)	5,425	拍 (打つ)	175
18	撕 (ちぎる)	1,314	立 (立つ)	5,149	抛 (投げる)	164
19	喝 (飲む)	1,205	呑 (呑む)	4,822	冲 (流す)	136
20	推 (押す)	1,191	拉 (引く)	4,612	撞 (撞く)	135

表 6-9 を見ると、この三者は、分離事象を表せることで共通している。しかし、文法化の程度と意味的特徴に関して違いが見られる。

三者の中で、文法化の程度が最も低いのは “V 落” である。後項動詞 “落” は結果補語として、前項動詞の表す動作の結果のみを示す。“V 落” の前項動詞には、自律移動の様態動詞（例：“滑 (滑る)”、“滚 (転ぶ)”、“滴 (滴る)”、“飞 (飛ぶ)”、“摔 (転倒する)”、“跳 (跳ぶ)”、“泻 (流れる)”)、使役移動の様態動詞（例：“抓 (掴む)”、“吹 (吹く)”、“翻 (めくる)”、“撒 (こぼす)”、“扫 (片付ける)”、“推 (押す)”、“拍

(打つ)”、“抛(投げる)”、“冲(流す)”、“撞(撞く)”）、分離動詞（例：“斩(切る)”、“劈(切る)”）がある。また、複合動詞“V落”は、本動詞“落”的意味と特徴を継承しており、移動主体は、「花」、「水」、「埃」、「鳥」などの軽い自然物や動物である。特に、(38)のような自然現象の場面で頻繁に使用される。

- (38) a. 窗外滴水喃喃自语，这是融雪滴落的声音。（帕斯捷尔纳克《日瓦戈医生》）  
「窓のしづくがつぶやき、雪解け水が滴り落ちる音がした。」
- b. 可怜的花瓣被海风吹飞，飞落下深沉的海里。（郭沫若《喀尔美萝姑娘》）  
「哀れな花びらは海風に吹かれ、深海へと舞い落ちる。」
- c. 门窗终是实锁着，灰尘也是不能轻易飞落进来呢。（阎连科《受活》）  
「ドアや窓は施錠されているので、埃は簡単に落ちてこない。」
- d. 性质恶劣的潮气濡湿了树枝、濡湿了小鸟的翅膀和脚，许多小鸟滑落下来。  
(川端康成《一只胳膊》)  
「酷い湿気が枝を濡らし、鳥の翼や足を湿らせ、多くの鳥が滑り落ちた。」

また、(38)のような用例からも窺える通り、(38)で使用されているような前項動詞は、“落”と結合すると、書き言葉、特に物事の細かい動作様態を描く文学作品に出現在する傾向があり、日常生活の話し言葉としてあまり使用されていない。すなわち、“V落”では、特定の文体的特徴が見られる。

一方、“V掉”、“V下”的文法化の程度は“V落”より高く、方向補語（例：“跳(下に跳ぶ)”、“走下(下に歩く)”）、結果補語（例：“吃下(食べ終わる)”、“脱掉(脱ぎ捨てる)”）としての意味・機能だけではなく、完遂・極度を表す意味・機能まで拡張している。しかし、“了(le)”という過去態/完了態を表示するテンス・アスペクト助詞と比べると、“V掉”、“V下”は完全に助詞化の機能までは文法化されておらず、「半文法化的助詞」または「完成相を示すマーカー(completive marker)」と見なされる（李1990, 董2017など）<sup>58</sup>。これにより、“V掉”、“V下”は、動詞本来の意味が完全に希薄化されておらず、一定の意味特徴が保持されている。また、この意味特徴は、複合

<sup>58</sup> Bybee et al. (1994: 57-61)によると、完成相を示すマーカーは2つの特徴を持つ。1つは、ある動作が完遂されることを表すことである。もう1つは、文法化の程度に関して、過去体と完了体の助詞と比べて、完遂体マーカーは、文法化の程度がやや低く、語彙の本来の意味をある程度保持しているということである。

動詞の無制限の生産を抑える方向で、求心力を働かせながら作用する。このため、“V掉”、“V下”は、過去態の助詞“了 (le)”のように、全ての動詞の後に用いられるわけではなく、動詞に含意される意味特徴に合わせた結合制限が課される。

表 6-9 の “V掉” と “V下” の前項動詞の動詞タイプを見ると、両者は、授受関係を表す動作動詞、心理状態に関わる動詞、変化動詞の 3 つの種類と結合することで共通している。しかし、それぞれの動詞タイプに関して、“V掉” と “V下” の結合制限には違いが見られる。まず、授受関係を含意する動作動詞に関して、“V掉” はものが話者の領域から遠ざかるという喪失義を含意する「遠心型」動詞と結合する傾向があるのに対し、“V下” はものが話者の領域に入るという取得義を含意する「求心型」動詞と結合する傾向が見られる。

- (39) a. 卖{掉/\*下}房子 / 买{\*掉/下}房子  
「部屋を売る / 部屋を買う」
- b. 删{掉/\*下}名字 / 写{#掉/下}名字  
「名前を削除する / 名前を書く」
- c. 打{掉/\*下}孩子 / 生{\*掉/下}孩子<sup>59</sup>  
「妊娠を中絶する / 子どもを産む」

(39a) のように、部屋の所有権の売買をめぐる描写において、“～掉” は、部屋の所有権の喪失を表す遠心型動詞“卖 (売る)” と結合するのに対し、“～下” は、部屋の所有権の取得を表す求心型動詞“买 (買う)” と結合する。(39b) では、“～掉” は、既存の文字の消失という事態を表す遠心型動詞“删 (削除する)” と結合するのに対し、“～下” は、新しい文字の出現という事態を表す求心型動詞“写 (書く)” と結合する。(39c) は、対象が子どもである場合の例を示しており、“～掉” は、生命の消失の事態を表す動詞“打 (墮す)” と結合する。反対に、“～下” は、新しい生命の誕生の事態を表す動詞“生 (産む)” と結合する。

では、なぜこのような正反対な結合制限があるのだろうか。本研究は、“V掉” と “V

<sup>59</sup> 「子どもを産む」という事態に関して、“生 (産む)” と “～掉”的結合による “生掉” は容認されないが、“把 (ba)” 構文との共起による “把孩子生掉” は、容認度が高くなる。本研究では、“把 (ba)” 構文で生起する文法化・構文化の現象について詳細な議論は行わず、他稿に譲るものとする。

下”の中核的意味と意味構造に含意される関係性が異なるため、完遂・極度の意味を表す場合、異なる前項動詞との結合傾向が生じると考える。

6.3 節で触れたように、“V 掉”の中核的意味パターンは、状態変化と位置変化を統合する「分離事象型」である。この意味パターンでは、物理的な力学的関係が含意される。また、各意味パターンではこの力学的関係が保持されており、力的認知に基づき拡張されている。特に、意味パターン 4 の「完遂・極度型」は、物理的領域の力的関係から、心理的領域の力的関係に拡張されるものである。この意味パターンの“V 掉”的表す事象では、発話主体または動作主は動作/行為の完遂を希望していないが、現実的要因によってその動作・行為の完遂を推進しなければならないという力の対抗が含意される。すなわち、完遂・極度の意味を表す“V 掉”は、力的関係に基づき拡張されるため、物の分離・消滅の意味を継承し、前項動詞は(39)の“卖(売る)”、“删(削除する)”、“打(墮す)”という喪失義を含意する「遠心型」動詞を選好する。

“V 下”は同様に分離事象を表すことができるが、その中核的意味は、分離事象義ではなく、下降移動の位置変化義であると考えられる。また、“V 下”の中核的意味では、「上-下」という相対的な空間的関係が含意される。「上-下」の空間的関係に基づく概念メタファーの観点から、上に位置するものは達成されない目標であると認識され、下の所に位置するものは、所有権を持つ・取得するものであると認識される。また、動作/行為を完遂することは、物の所有権を取得する事態と類似し、メタファーによって取得義から完遂義へと意味が拡張されている。このため、完遂・極度の意味を表す“V 下”は、物の所有権の取得の意味特徴を継承し、前項動詞は(39)の“买(買う)”、“写(書く)”、“生(産む)”のような取得義を含意する「求心型」動詞を選好する。

一方、心理状態に関わる動詞と変化動詞に関して、“V 掉”は消極的感情を表す動詞(例：“死(死ぬ)”、“输(負ける)”)と結合する傾向があるのに対し、“V 下”は積極的感情を表す動詞(例：“活(生きる)”、“贏(勝つ)”)と結合する傾向が見られる。このような結合制限という要因も、“V 掉”と“V 下”の中核的意味と含意される関係性に関わる。物事の分離・消滅事象では、破損という消極的感情が伴っている。“V 掉”的完遂・極度の意味は、力的関係に基づき、分離・消滅事象から拡張されるため、消極的感情の意味的特徴を保持し、前項動詞は消極的感情を含意する動詞を選好する傾向がある。それに対し、“V 下”的表す完遂義は、上下の空間的関係に基づき、物の所

有権を占める・取得する事態から拡張される。物事を完遂するという事態には、積極的意味が含意される。この意味的特徴によって、“V 下”の前項動詞は、積極的感情を含意する動詞を選好する傾向がある。

本節の分析の結果に基づき、“V 掉”、“V 下”、“V 落”的違いを表 6-10 のようにまとめる。

表 6-10 “V 掉”、“V 下”、“V 落”的違い

動詞	文法化の特徴	結合制限
V 掉	力的関係に基づき、分離事象と消滅事象から完遂・極度の意味・機能に拡張される。	喪失義を含意する「遠心型」動作動詞；消極的感情を含意する心理状態に関わる動詞、変化動詞・形容詞
V 下	「上-下」の空間的関係に基づき、物の所有権を取得する事態から完遂・極度の意味・機能に拡張される。	取得義を含意する「求心型」動作動詞；積極的感情を含意する心理状態に関わる動詞、変化動詞
V 落	文法化的程度が低く、自然現象の下降移動の結果補語として使用される。書き言葉、特に文学作品での使用という文体的特徴がある。	自然物の自律移動を表す様態動詞；自然物の使役移動の様態動詞（少数）

## 6.5 日本語の分離動詞との比較および「力学動詞」の提案

6.3 節と 6.4 節は、RQ1 の “V 掉” の意味・機能と結合制限、RQ2 の「中国語の他の下降移動を表す動詞との比較」に関する考察を行ったが、本節は、それらを踏まえ、次の RQ3 について検討する。特に、日本語の分離動詞「切る」、「抜く」との比較を通して、“V 掉” にはどのような特徴があるか、日本語と中国語の分離動詞にはどのような類似点と相違点があるかについて考察を進める。加えて、日本語と中国語の分離動詞の共通点に基づき、「力学動詞」という新たな動詞クラスを提案する。

RQ3 日本語と中国語の分離動詞にはどのような類似点と相違点があるか。

3.1 日本語と中国語の分離動詞にはどのような類似点があるか。

3.2 日本語と中国語の分離動詞にはどのような相違点があるか。

### 6.5.1 空間的関係から見た日本語と中国語の分離動詞の類似点と相違点

日本語の「切る」、「抜く」などの単純動詞、中国語の複合動詞“V 掉”は、分離元の状態変化と分離物の位置変化を統合した分離事象を表すことができる。以下、まず、分離元と分離物の物理的空間関係の側面から、日本語と中国語の分離動詞の類似点と相違点を分析する。

第5章の5.3節と本章の6.3節では、それぞれ日本語と中国語の典型的な分離動詞の表す事象における物理的空間関係を明らかにした。以下、各空間的関係の割合を再掲する。

表 6-11 日本語の各分離動詞における分離元と分離物の空間的関係（NLBに基づく、

表 5-1 を再掲）

	位置変化型分離動詞			状態変化型分離動詞		
	抜く	落とす	はがす	切る	ちぎる	折る
表面-付着物	57 (50.8%)	86 (68.3%)	73 (90.1%)	3 (4.5%)	0%	0%
容器-中身	35 (31.3%)	23 (18.2%)	0%	0%	0%	0%
全体-部分	20 (17.9%)	17 (13.5%)	8 (9.9%)	64 (95.5%)	23 (100%)	18 (100%)

表 6-12 中国語の各分離動詞における分離元と分離物の空間的関係（BCCに基づく、

表 6-2 を再掲）

	位置変化型分離動詞 (使役移動動詞+掉)			状態変化型分離動詞 (使役変化動詞+掉)		
	脱(脱ぐ)掉	拔(抜く)掉	卸(外す)掉	剪(切る)掉	割(刈る)掉	剥(剥く)掉
表面-付着物	152 (100%)	89 (68.5%)	77 (100%)	0%	0%	21 (15.3%)
容器-中身	0%	5 (3.8%)	0%	0%	0%	0%
全体-部分	0%	36 (27.7%)	0 (9.9%)	164 (100%)	78 (100%)	116 (84.7%)

表 6-11 と表 6-12 のように、日本語と中国語の分離動詞の表す事象には、「表面-付着物」、「容器-中身」、「全体-部分」という 3 つのタイプの空間的関係が存在する。また、各タイプの空間的関係の割合に関して、位置変化型分離動詞の表す事象では、「表面-

付着物」の空間的関係が一番優勢であり、「全体-部分」の関係が少ない。状態変化型分離動詞の表す事象では、「全体-部分」の空間的関係が一番優勢であり、「容器-中身」の関係が少ないという点で両言語が共通している。ただし、日本語の位置変化型分離動詞の表す事象では、「容器-中身」の関係にあたる用例（例えば、「空気/水/刀/剣/電池を抜く」）も多く見られる。中国語の位置変化型分離動詞の表す事象では、“拔掉卡/电池（カード/電池を抜く）”以外には、「容器-中身」の関係にあたる用例があまり見られない。

中国語の分離事象の言語化に関して、“V 掉”は一番汎用性がある分離動詞であり、位置変化型分離事象と状態変化型分離事象の両方を表現することができる。しかし、「容器-中身」の関係にあたる分離事象を表す際には、分離物の離脱の結果だけを含意し、分離物がどのような経路で移動するかを特定化しない“V 掉”ではなく、内から外へという移動の方向づけを明確に指定する“V 出 (chu, 出る)”が用いられる傾向がある。すなわち、中国語では、分離事象における「表面-付着物」と「全体-部分」の関係は、“V 掉”によって言語化される。一方、「容器-中身」の関係は、“V 出”によって言語化される。このことから、中国語の母語話者は、「容器-中身」の空間的関係は、他の関係と区別し認識する傾向があると考えられる。その上で、さらに、「表面-付着物」と「全体-部分」の関係を分けてカテゴリー化させており、それぞれ“使役移動動詞+掉”、“使役変化動詞+掉”で言語化される。

一方、日本語において、分離事象の空間的関係に関する言語化に際し、「表面-付着物」と「容器-中身」は「主観的/機能的一体性」を有する点で類似しており、どちらも位置変化型分離動詞によって言語化される。「全体-部分」は「物理的一体性」を有するものとして捉えられ、「表面-付着物」、「容器-中身」と区別した上で、状態変化型分離動詞によって表現される傾向がある。

以上、日本語と中国語の分離動詞の物理的空間関係のカテゴリー化と言語化に関する類似点と相違点をまとめると、表 6-13 の通りである。

表 6-13 空間関係のカテゴリー化と言語化に関する日本語と中国語の分離動詞の相違

	容器-中身	表面-付着物	全体-部分
日本語	位置変化型分離動詞 (抜く、落とす、はがす)		状態変化型分離動詞 (切る、折る、ちぎる)
中国語	V 出	V 掉	
		位置変化型分離動詞 (使役移動動詞+掉)	状態変化型分離動詞 (使役変化動詞+掉)

### 6.5.2 意味の文法化から見た日本語と中国語の分離動詞の類似点と相違点

次に、意味・機能の文法化の側面から、日本語の「切る」、「抜く」と中国語の“V 掉”を例に、両言語の分離動詞の類似点と相違点を考察する。

文法化の段階性に基づいて考えると、3つの類似性が捉えられる。1つ目として、本動詞の「切る」、「抜く」、“掉” はいずれも、力による物理的な分離事象という典型的な意味を持つ。すなわち、文法化の開始点、初期段階では意味が一致している。2つ目として、三者では、力的認知に基づく意味拡張のメカニズムが捉えられる。これにより、動詞の各意味パターンにおいて、主動体と対抗体による力的関係が存在しており、力動性に基づく意味スキーマを可視化することができる。すなわち、意味拡張のプロセス、文法化の中間段階では、力的関係に関する共通性が捉えられる。そして、3つ目として、三者は、最終的に完遂・極度というアスペクト的意味・機能へと拡張している。また、それに伴い、話者による何らかの心的態度/認識モダリティの意味が生じる。すなわち、文法化の最終段階では意味・機能が共通している。Bybee et al. (1994) は、世界の 76 の言語におけるテンス・アスペクトを示す言語要素を対象として考察した結果、類型論的に異なる 30 以上の言語が完成相を示すマーカー (completive mark) を持つが、これらの文法マーカーは各言語の類型的特徴に応じた機能を持っており、完全に一致するとは限らないことが明らかになった。次に、「V 切る」、「V 抜く」、“V 掉” の表す完遂・極度的意味にはどのような違いがあるかを検討する。

本節では、コーパス調査に基づき三者の表す完遂・極度の意味の使用状況を確認する。調査にあたっては、「V 切る」、「V 抜く」に関して、BCCWJ コーパスを用いて検索した。検索したデータのうち、「焼き切る」、「引き抜く」のような分断義を表す語彙

的複合動詞を除外した。“V 掉”に関して、BCC コーパスを用いて検索し、完遂・極度の意味に当たるデータを抽出した。以下の表 6-14 に 3 つの語それぞれの前項動詞の頻度上位 20 語を示す。

表 6-14 完遂・極度を表す「V 切る」、「V 抜く」、“V 掉”的前項動詞の頻度上位 20 語  
(BCCWJ と BCC に基づく)

	V 切る	頻度	V 抜く	頻度	V 掉	頻度
1	する	954	生きる	359	死 (死ぬ)	6,481
2	数える	342	勝つ	167	卖 (売る)	6,248
3	なる	326	考える	110	瘋 (狂う)	2,963
4	使う	312	守る	97	輸 (負ける)	2,330
5	疲れる	311	戦う	74	戒 (戒める)	2,033
6	やる	296	振る	68	花 (使う)	1,758
7	耐える	201	遣る	59	坏 (壊れる)	1,593
8	分かる	190	耐える	48	喝 (飲む)	1,205
9	押さえる	183	知る	42	推 (押す)	1,191
10	逃げる	172	苦しむ	24	烂 (潰れる)	1,173
11	食べる	170	磨く	20	解決 (解決する)	1,144
12	のぼる	155	鍛える	19	断 (断つ)	1,136
13	澄む	149	する	17	灭 (絶やす)	865
14	冷える	131	苛める	14	処理 (処理する)	812
15	待つ	128	走る	14	退 (返す)	764
16	堪える	127	惚れる	13	呑 (呑む)	739
17	出す	102	頑張る	13	垮 (倒れる)	732
18	隠す	100	投げる	10	爆 (爆発する)	700
19	捨てる	99	こだわる	8	浪费 (無駄にする)	672
20	締める	97	悩む	7	消灭 (絶やす)	648

表 6-14 の「V 切る」の前項動詞を見ると、動作動詞（例：「数える」、「使う」、「やる」、「押さえる」、「逃げる」、「食べる」、「のぼる」、「待つ」、「出す」、「隠す」、「捨てる」、「締める」）、変化動詞（例：「なる」、「澄む」、「冷える」）、そして心理状態に関わる動詞（例：「疲れる」、「耐える」、「堪える」、「分かる」）という 3 つの動詞タイプに分かれる。そのうち、動作動詞が前項動詞である場合、動作・行為を完遂したという完遂義を表す。変化動詞や心理状態に関わる動詞が前項動詞である場合、変化の状態また

は人間の心理的状態が極限に至るという意味を表す。また、動詞に含意される感情や心的態度について見ると、積極的感情、消極的感情、中立的感情のいずれも見られる。例えば、変化動詞の場合、「澄む」のように、「濁りがなく、水が清くなるさま」という通常期待されている良い状態へ変化する場合があり、「冷える」のように、「気温や温度が下がって冷たいと感じられるさま」という通常期待されていない状態へ変化する場合もある。また、「なる」のように、特定の感情の傾向を示さない中立的な場合も存在する。本節では、特に、特定の感情を示す場合について議論する。

本研究では、4章で「切る」の多義性を分析した際に、統語的複合動詞として使用される「完遂義」、「極度義」を意味パターン4「心理的抵抗性」に分類した。人間の心理的側面の介入がある意味パターン4「心理的抵抗性」には、2つの下位タイプが存在する。タイプ1の「心理的抵抗性」は、話者がある事柄の達成を期待しているものの、その達成は容易でなく、何らかの困難・苦痛を伴う、または長い時間がかかると認識しているものである。それに対し、タイプ2の「心理的抵抗性」は、事柄の達成を本来的に期待していないものである。言い換えれば、この2つの心理的抵抗性によって伝達されている話者の心的態度が異なっている。タイプ1の場合、積極的・心的態度を表出しているのに対し、タイプ2の場合、消極的・心的態度を伝達している。加えて、前項動詞が動作動詞の場合、積極的な感情が含意される用例が多く、変化動詞と心理状態動詞の場合、消極的な感情が含意される用例が多く見られる。以下の(40)と(41)を見てみよう。

- (40) 日本語訳は、字が細かくて長い上に、あまり分かりやすい文章とも言えず、読むのに結構根気のいる本です。にもかかわらず、何とか、最後まで読みきり、それから一〇年以上が経過した今日まで、私の座右の書のひとつでありつづけています。

(斎藤正彦著『老人病院：青梅慶友病院のこころとからだのトータルケア』、2002)

- (41) 人間と動物は、こうして体と体をつけあい、暖めあって寝たが、体は骨の髓まで冷えきったままだった。

(ギ・ド・モーパッサン著、高山 鉄男訳『モーパッサン短篇選』、2002)

- (40) では、前項動詞「読む」が表す事象の完成は期待されている。しかし、動作主に

とて、この本の日本語訳は字が細かく長く、文章が分かりにくく、全ての内容を読み終わるという事象は簡単に達成できず、行為を完遂するまである程度の時間や集中力が必要になる。動作主は行為の完遂時に、この本から新たな知識を得るだけではなく、ようやく期待されている目的を達成したという成功感・達成感が感じられる。これにより、話者の積極的な心的態度が伝達されている。一方、(41)では、前項動詞「冷える」が表す体温が冷たくなる状態は期待されていないものである。「～切る」との結合によって、この期待されていない状態は程度が高まり、最終的に極限に至ることを表す。これにより、消極的な心的態度が伝達される。

以上の通り、複合動詞「V 切る」が完遂・極度の意味を表す際に、同時に伝達している心的態度は、積極的感情と消極的感情の両方が可能であると考える。

次に、「V 抜く」の使用状況を確認する。表 6-14 を見ると、「抜く」の前項動詞には、動作動詞（例：「守る」、「戦う」、「振る」、「遣る」、「磨く」、「鍛える」、「苛める」、「走る」、「投げる」）、心理状態に関わる動詞（例：「生きる」、「勝つ」、「考える」、「耐える」、「知る」、「苦しむ」、「惚れる」、「頑張る」、「こだわる」、「悩む」）という 2 つの動詞タイプがある。これらの前項動詞の特徴として、「V 抜く」と結合する動作動詞は、「戦う」、「磨く」、「鍛える」、「走る」のように、動作主の強い意志を含意するという特徴を持つ。「V 抜く」と結合する心理状態に関わる動詞は、「生きる」、「考える」、「耐える」、「頑張る」、「悩む」のように、動詞の表す状態に動作主の努力や思考のプロセスが関与しており、同様に強い意志を伴うという特徴が見られる。それに対し、「V 切る」と結合できる「待つ」、「咳く」のような動作主の意志が強く表れない動作動詞（「待ちきる」、「咳きる」）と、「疲れる」、「死ぬ」のような心理状態に関わる動詞（「疲れきる」、「死にきる」）は、「V 抜く」と結合できない。また、「V 切る」と結合できる「なる」、「冷える」、「澄む」、「乾く」という変化動詞（「なり切る」、「冷え切る」、「澄み切る」、「乾き切る」）は、動作主の意志を伴わず、ものの自律的変化を表す動詞であり、「V 抜く」の前項動詞ではあまり見られない。

では、「V 抜く」の前項動詞の持つ強い意志の表出という特徴はどのようなものであるか。以下、前項動詞が「走る」である用例をもとに、「V 抜く」と「V 切る」の意味的特徴の違いを確認する。

(42) ビードも落ちてリムバンドもちぎれてタイヤの外に出ている状態でまつた

く定まらないなか出来るかぎりのペースで走りぬきました。その結果 26 位でした！！パンクでリタイヤしたらいだーも数人いました。

(Yahoo! ブログ, 2008)

(43) 小僧、後でたっぷり可愛がってやるからちゃんとゴールまで走りきれよ。

(斎藤純著 『銀輪の覇者』, 2004)

「走り抜く」と「走り切る」は、動作主が全力で「走る」動作を完遂する意味で共通している。しかし、両者は注意を向ける焦点が異なっている。(42) では、動作主は「走る」動作を完遂するまでに、途中「ビードが落ちた」、「リムバンドがちぎれた」など、様々な困難に直面した。動作主は不利な状況に負けず、前向きに困難な状況に向き合い、それを克服し、自分を不利な状況から完全に分離させるまで「走る」行為を完遂する。すなわち、「走り抜く」の場合、強い意志の表出という特徴は、動作主が困難を克服しようと努力する様子によって表される。そして、動作主が全力で困難を克服し不利な状況から分離するプロセスに焦点をあてる。一方、(43) では、動作主は「走る」行為を達成するまでの間に、途中困難に遭遇したこともある。しかし、「走り切る」の場合、最終的にゴールに到達する時点、すなわち、動作を完遂する終結点に焦点を当てる。これにより、文中で動作主が「走る」行為を完遂する時の達成感が伴っている。「走り切る」と「走り抜く」は、同様に積極的な心的態度を伝達しているが、「走り切る」の積極的な心的態度は、行為完遂時の達成感によって伝達されるのに対し、「走り抜く」の積極的な心的態度では、不利な状況に負けず前向きに困難を克服するプロセスによって伝達されている。

次に、(44) の「悩みぬく」の用例を見る。

(44) それは子どもが、お母さんやお父さんとの毎日の暮らしの中で、くり返し実感させられ、悩みぬいた末にたどり着いた結論なのです。

(渡辺久子著 『子どもを伸ばすお母さんのふしぎな力』, 1996)

前項動詞「悩む」は、人間が期待していない心理的状態である。しかし、「悩みぬく」は、単に「悩む」という状態が極限に至ることを表すわけではない。動作主は「悩む」状態を極めており、悩んでいる問題を解決するための結論を求めるこによって、自

分を極度の状態から分離させるというプロセスが想定できる。このため、「悩みぬく」の用例からも、「走りぬく」と同様に、困難の克服から得られた肯定的評価または積極的な心的態度が読み取れる。

また、栗田（2018）は、BCCWJ コーパスを用いて「生きぬく」と「考えぬる」と共起しやすい副詞を検索した。結果、「生き抜く」と共起できる副詞として、「逞しく」（13例）、「強く」（6例）、「精一杯」（5例）、「必死に」（2例）、「懸命に」（2例）、「一筋」（2例）、「きちんと」（2例）、「力強く」（1例）、「毅然に」（1例）、「前向きに」（1）、「ひたすら」（1）などが見られた。「考え抜く」との共起の副詞には、「よく」（4例）、「深く」（2例）、「徹底的に」（1例）、「とことん」（1例）、「十分に」（1例）、「真剣に」（1例）、「真面目に」（1例）、「必死になって」（1例）、「きちんと」（1例）、「じっくり」（1例）、「周到に」（1例）などがある。これらの副詞の意味的特徴は、動作主が不利な状況に前向きに対応し、真剣に困難さを克服する態度を表す副詞であるということである。これらの副詞との共起から、「V 抜く」によって伝達されている心的態度は積極的感情に偏ることが確認できる。

以上により、日本語の分離動詞「切る」、「抜く」は、統語的複合動詞として使用される場合、「V 切る」は、積極的感情と消極的感情の両方の心的態度を伝達できるが、「V 抜く」は、積極的感情を表すことに偏る傾向が見られる。次に、中国語の分離動詞“V 掉”は完遂・極度の意味を表す際に、どのような心的態度を伝達しているかを検討する。

表 6-14 の“V 掉”の前項動詞をみると、動作動詞（例：“卖（売る）”、“戒（戒める）”、“花（使う）”、“喝（飲む）”、“推（押す）”、“解决（解決する）”、“灭（絶やす）”、“处理（処理する）”、“退（返す）”）、変化動詞・形容詞（例：“坏（壊れる）”、“烂（潰れる）”、“断（断つ）”）と心理状態に関わる動詞（例：“死（死ぬ）”、“疯（狂う）”、“输（負ける）”）という 3 つの動詞タイプがある。そのうち、“V 掉”と結合できる動作動詞は、授受関係を含意する動作動詞に限られる。“守（守る）”、“等（待つ）”といった対象の授受関係を表さない動作動詞は、“V 掉”の前項動詞にならない（cf. 「守り抜く」、「待ちきる」）。また、“跑（走る）”、“逃（逃げる）”のような授受関係を含意しない、移動動作動詞は、“V 掉”と結合できるが、完遂・極度の意味に当てはまらない（cf. 「走り切る」、「走り抜く」、「逃げきる」）。また、それらの動詞の表す授受関係の指向性を考えると、“卖（売る）”、“花（使う）”、“喝（飲む）”、“退（返す）”といった、物

が動作主の領域から遠ざかるという方向に当たる遠心型動詞に偏る。次の(45)と(46)の用例を参照されたい。

- (45) 关键是要在调理休整中，找到病根子，戒掉坏习惯。(《人民日报海外版》2013)

guānjiàn shì yào zài tiáolǐxiūzhěng zhōng, zhǎo-dào bìnggēnzi,  
key is need to during adjustment during find-out cause of illness  
jiè-diào huài xíguàn  
quit-PRT<sub>es</sub> bad habit

「重要なのは、コンディショニングブレイクの間に、病気の根本的な原因を見つけ、悪い習慣を断ち切ることである。」

- (46) 更重要的是让学生们养成‘以史为鉴’的思维，从历史和经典中汲取能够为我所用的力量。 (《人民日报》2017)

gèng zhòngyào-de shì rang xuéshēng-ményang-chéng ‘yǐshǐwéijiàn’  
more important is make student-PL cultivate-into learn from history  
de sīwéi, cóng lishi hé jīngdiǎn zhōng jíqǔ nénggòu  
PART way of thinking from history and classics in absorb can  
wèi wǒ suǒ-yòng de lìliáng  
for me be used PART strength

「さらに重要なのは、学生たちに「歴史から学ぶ」という考え方を身につけさせ、歴史や古典から自分の役に立つ力を引き出すことだ。」

(45) では、前項動詞は“戒（やめる）”であり、動作の対象となるのは、「悪い習慣」である。悪い習慣を動作主の領域から分離させて遠ざかるという行為には、話者による否定的評価または消極的な心的態度が自然に生じる。反対に、(46) の前項動詞“养（培う）”という動作の対象は、一般的に「良い習慣」である。動作主が良い習慣を培う行為には、話者による肯定的評価または積極的な心的態度が伴う。しかし、このような積極的な心的態度を含意する「养/培养（培う）」という動作は、“～掉”と結合できず、新たな物事の形成・産出という意味を表す“～成（～なる）”との結合が見られる。

また、前項動詞が特定の感情を含意しない動作動詞である場合、“V掉”も消極的感

(47) 有的科研人员为了交出办公室，被迫将自己积累多年的研究资料当成废纸卖掉。

(《人民日报》2000)

yǒude kēyánrén yuán wèile jiao-chū bàngōngshì, bèipò jiāng  
some researchers in order to hand-over office be forcedOM  
zìjǐ jīlèi duōnián-de yánjiū zīliào dāngchéngfèizhī mài-diào  
oneself accumulate many years' research data treat as waste sell-PRT<sub>es</sub>

「研究者の中には、事務所を引き渡すために、長年かけて蓄積してきた研究資料を紙くずのように売り払わざるを得なかった人もいる。」

(48) 仅墨西哥城两处最大的鲜花市场 10 日就卖出1.8 万吨鲜花。(《人民日报》1993)

jǐn mòxīgē-chéng liǎngchù zuì-dà de xiān huā shìchǎng 10rì  
jiù mài-chū 1.8wàn-dūn xiān huā  
only Mexico-City two places largest GEN flower market 10days  
already sell-out 18,000 tons flower

「メキシコシティの 2 つの最大の花市場だけで、10 日間で 18,000 トンの花が売れた。」

(47) では、前項動詞“卖（売る）”は、中立的感情を示す動詞であり、特定の感情の傾向が捉えられない。しかし、(47) と (48) を比べると、(47) では、“卖”が“～掉”と結合すると、動作主は、消極的に「売る」という動作を遂行したこと、そしてその動作が徹底的に完遂されたことに焦点が当てられ、動作の結果をキャンセルすることができなくなる。そして、物事の損失が際立ち、動作主が落胆している様子が表される。(48) では、“卖”と“～出（chu, 出る）”の結合による“卖出”は、販売している商品の数量や金額と共に起している。動作主が、積極的に「売る」という動作を遂行したことによって、新たな価値が得られたという結果に焦点が当てられる。これを踏まえると、“卖出”が積極的な感情を含意する一方で、“卖掉”は、消極的感情を伝達すると言える。

一方、前項動詞が変化動詞・形容詞や心理状態に関わる動詞である場合、本章の 6.3.3 節でも触れたように、動詞が含意する感情の特徴を見ると、“坏（壊れる）”、“烂（潰れる）”、“断（断つ）”、“死（死ぬ）”、“疯（狂う）”、“输（負ける）”といった否定的評価

や消極的感情を表すものが多い。それに対し、“好（優れる）”、“活（生きる）”、“贏（勝つ）”といった積極的感情を表すものが見られない。また、“忘（忘れる）”のような意志性が弱い（意志が特に存在していない、または、意志通りに動作を制御することができていない）心理状態に関わる動詞は“～掉”と結合できる。それに対し、“记（覚える）”のような意志性が強い（動作主の意志を伴う行為である、または、行為に何らかの目的が存在している）心理状態に関わる動詞は“～掉”との結合が困難である。

(49) と (50) の用例を参照されたい。

(49) 不能说起来重要，做起来次要，忙起来忘掉。 (《科技文献》)

bùnéng        shuō-qǐlái        zhòngyào,zuò-qǐlái cìyào,        máng-qǐlái  
should not     talk-ASP        important act-ASP secondary    be occupied with-ASP  
wàng-diào  
forget-PRT<sub>es</sub>

「重要だと言ったり、二の次にやったり、忙しくなると忘れててしまうようなことがあってはならない。」

(50) 一般人可记住 7 位电话号码，而优秀软件人员可能记住15 位以上数字。

(《人民日报》2000)

yībānrén        kě jì-zhù        7wèi diànhuà hào mǎ, ér        yōuxiù  
ordinary people    can remember-retain    7-digit phone number    while    excellent  
ruǎnjiàn rényuán        kěnéng jìzhù        15wèi yǐshàng        shùzì  
software personnel    possibly remember-retain    7-digit    more than    number

「普通の人が 7 桁の電話番号を覚えているのに対し、優秀なソフトウェアの専門家は 15 桁以上の数字を覚えているかもしれない。」

(49) の“忘（忘れる）”は動作主の意志を伴わない動詞であり、仕事を忘れるという行為は、動作主の意志に反する、予期されていない行為である。これにより、不都合や損失が生じる。それに対し、(50) “记（覚える）”は動作主の意志が伴う動詞であり、動作主は短期記憶の能力を鍛え、普通の人よりも多くの数字を覚える行為を達成する。このことは、話者に肯定的に評価される行為と考えられる。このため、“记”は“～掉”と結合できず、期待される状態を保持することを意味する“～住（zhu, 止まる）”と結

合しやすい。

以上の分析により、“V掉”は消極的心的態度を伝達することが明らかになった。また、消極的心的態度は3つの種類がある。1つ目は、動作の対象が、「悪い習慣」のような消極的なものである場合である。または、“死（死ぬ）”、“疯（狂う）”のような消極的感情を含意する状態である（(45)を参照）。2つ目は、動作主はその行為の完遂を期待していないが、圧力によって消極的に行行為の達成を進めることである（(47)を参照）。3つ目は、“忘（忘れる）”のように、行為の完遂は動作主の意志に反し、不都合や損失が生じることである（(49)を参照）。

以上により、意味の文法化の側面から、日本語の分離動詞「切る」、「抜く」と中国語の分離動詞“V掉”的比較を通して、これらの類似点と相違点が明確になった。具体的には、意味の文法化の段階では三者は類似しているが、文法化の程度が一番高い完遂・極度の意味で違いが生じる。特に、前項動詞の意味的特徴、伝達可能な心的態度に関する相違点が際立つ。表6-15に三者において伝達可能な心的態度をまとめる。

表6-15 完遂・極度を表す「V切る」、「V抜く」、「V掉」における可能な心的態度

	V切る	V抜く	V掉
積極	○	○	×
消極	○	×	○
中立	○	○	△ <sup>60</sup>

### 6.5.3 「力学動詞」という動詞クラスの提案

以上、空間的関係と意味の文法化から日本語と中国語の分離動詞を考察した。両言語の分離動詞は、(i) 意味構造という観点において、力的関係と力的認知が含意されること、そして、(ii) 意味拡張に関しては、動作主からの力によって物を分断/分離するという物理的な意味から、途中何らかの拡張プロセスを経て、最終的に完遂・極度を表すアスペクト的意味へと拡張されること、(iii) 特定の心的態度を伝達できること、という3点で共通している。本節は、これらの共通点に基づき、以下、「力学動詞」と

<sup>60</sup> 話者は行為の達成に関する心理的压力や負担を伝達する場合、“V掉”を使用する傾向が見られる。このため、完遂・極度の意味を表す“V掉”的用例では、一般的に、消極的心的態度が伴われる。中立的感情を含意する“V掉”的用例が全く存在しないとは言えないが、「V切る」と「V抜く」と比べて、比較的少ない。このため、ここで△で記述する。

いう、従来の動詞の分類では提唱されてこなかった概念を導入し、空間的関係と力学的関係の違いを説明した上で、分離動詞を新たな動詞クラスとして位置付けることを提案する。

仲本（1998, 2013, 2014）は、「強い」、「弱い」という力的関係を含意する日本語の形容詞を「力学形容詞」と定義している。そして、「鋭い/鈍い」、「きつい/ゆるい」、「厳しい/優しい」など攻撃力を表す形容詞（「主体形容詞」）と、「かたい/やわらかい/もろい」、「重い/軽い」など抵抗力を表す形容詞（「対象形容詞」）という2種類に分類した。

また、同様な立場に基づく個別の力学形容詞に関する研究として、糸山（1994）、新地（1997）、仲本（2013）などが挙げられる。これらの研究はいずれも力的観点から、形容詞の意味を分析している。例えば、糸山（1994）は、「かたい」の中心義を「(加えられる何らかの) 力に対して抵抗感を感じさせるさま」としている。新地（1997）は、「重い」の中心義を「重力による上から下への力がかかっている」という内在的意味と、「ものを動かす時に動かしにくい」という関係的意味の2つの側面から捉えている。仲本（2013）は、「きつい」の中心義を「ある対象がある主体を締め付けるさま」と定義している。

本研究では、仲本と同様な立場を踏まえ、日本語の「切る」、「抜く」や、中国語の“V 掉”という分離動詞は、人間の知覚による力的認知に基づく「力学動詞」の1つの種類であると捉える。これらの動詞の表す事象は、人間が日常生活で参与している基本的な活動である。人間が物に攻撃力を加える一方、物からの抵抗力を受ける。力の相互作用の下に、物事には分断/分離や破壊などの状態変化と位置変化が生じる。

まず、力学動詞に含意される「力学的関係」と、人間の知覚的認知に関わるもう1つの関係性である「空間的関係」を説明する。表6-16にこの2つの関係性の詳細と、それぞれの関係性に基づく動詞の語例を示す。

表 6-16 「力学的関係」と「空間的関係」の詳細

	必須の関係参与者	関係の種類	日本語の動詞例	中国語の動詞例
力学的関係	主動体（目的語項） 対抗体（主語項）	<物理的な力> <社会力学的な力> <認識的な力>	切る、 抜く	V 掉
空間的関係	焦点（主語項/目的語項） 背景（場所項）	<静的な場所・位置の関係> <動的な移動関係>	上げる、 下げる	V 上、 V 下 <sup>61</sup>

表 6-16 に示される日本語の動詞「切る」、「抜く」、「上げる」、「下げる」、中国語の動詞 “V 掉”、“V 上 (shang, 上げる)”、“V 下 (xia, 下げる)” は、いずれも文法化によって、完遂・極度というアスペクト的意味・機能へと拡張している。しかし、意味拡張の際に、どのような関係性に基づいて意味拡張が起きているかという点で異なっており、それぞれを力学的関係に基づく力学動詞、空間的関係に基づく移動動詞と定義する。

力学的関係に基づく「切る」、「抜く」、“V 掉” に関して、目的語項と主語項をそれぞれ主動体 (agonist, AGO)、対抗体 (antagonist, ANT) の 2 つの力実体として捉える。目的語項となる対象の相対的空間位置を示す場所項は、力的関係において必須のものではない。このため、力学動詞には、力学的関係と空間的関係の両方が含まれる場合 ((51a) の分離動詞としての「切る」) もあるが、力学的関係だけが含まれる場合 ((51b) の分断・破壊動詞としての「切る」) もある。

- (51) a. 太郎 (ANT) は木から邪魔な枝 (AGO) を切った。 (力学的関係 + 空間的関係)  
b. 船 (ANT) が波 (AGO) を切った。 (力学的関係)

また、この 2 つの力実体間の力のバランスにおいて、対抗体の力が主動体の力よりも強い場合、主動体の状態は、静止傾向から活動傾向へ、または活動傾向から静止傾向へ、ある時点で初期傾向が逆の傾向性へと変化する。すなわち、力が対抗する事態

<sup>61</sup> 中国語の “V 掉”、“V 上”、“V 下” も本動詞 “掉”、“上”、“下” の意味を継承し、文法化によって完遂・極度の意味に拡張している。しかし、本動詞 “掉”、“上”、“下” は自動詞の用法のみを持つ。そこで、日本語の他動詞「切る」、「抜く」、「上げる」、「下げる」と対応させるため、中国語の動詞例として、他動詞として使用される複合動詞 “V 掉”、“V 上”、“V 下” を表に提示している。

では、初期傾向の変化の起点・開始点は、変化の着点・終着点よりも認識度が高い。これによって、場所項が文中で出現する場合、「起点」要素は共起可能であるが、「着点」要素は出現不可能である。(52) – (54) を参照されたい。

- (52) a. 太郎 (ANT) は木から邪魔な枝 (AGO) を切った。

b. \*太郎 (ANT) は籠に邪魔な枝 (AGO) を切った。

- (53) a. 太郎 (ANT) はボトルから栓 (AGO) を抜いた。

b. \*太郎 (ANT) はテーブルに栓 (AGO) を抜いた。

- (54) a. 张三 (ANT) 从树上剪掉多余的树枝 (AGO)。

*zhāngsān      cóng      shù-shàng      jiǎn-diào duōyú      de      shùzīhī*  
Zhangsan      from      tree-on      cut-off    extra      PART      branch

「太郎は木から邪魔な枝を切った。」

- b. \*张三 (ANT) 剪掉多余的树枝 (AGO) 到篮子里。

*zhāngsān      jiǎn-diào duōyú      de      shùzīhī      dào lánzǐ      lǐ*  
Zhangsan      cut-off    extra      PART      branch    into basket    inside

「太郎は籠に邪魔な枝を切った。」

(52) – (54) のように、起点を示す日本語の「カラ」格、中国語の“从 (cong, から)”を文中で加えることができるが、着点を示す日本語の「ニ」格、中国語の“到 (dao, に)”を加えると非文になる。

また、力的関係における主動体と対抗体による力は、上記の用例に示すく物理的な力 (physical forces) > (例: 「髪を切る/抜く」、“剪掉头发 (髪を切る)”) だけではなく、<社会力学的な力 (sociophysical forces) > (例: 「手を切る/抜く」、“把婚结掉 (結婚してしまう)”)、<認識的な力 (epistemic forces) > (例: 「走り切る/走り抜く」、“戒掉吸烟 (喫煙をやめてしまう)”) も見られる。「V 切る」、「V 抜く」、“V 掉” の表す完遂・極度的意味は、いずれも力学的関係に基づき、物理的な力による対抗から、社会力学的な力による対抗へ拡張され、さらに認識的な力による対抗へと拡張されていった結果として得られた意味である。

一方、空間的関係に基づく「上げる」、「下げる」、“V 上”、“V 下”においては、目的語項/主語項、場所項をそれぞれ焦点 (figure)、背景 (ground) として捉える。使役移

動/対象移動の場面では、目的語項の移動物が焦点である。自律移動/主体移動の場面では、主語項の移動主体が焦点である。すなわち、空間的関係において、場所項が必須であるのに加え、目的語項と主語項のどちらか一方も必須である。また、空間的関係の種類として、<静的な場所・位置の関係>（例：X（焦点）がY（背景）の上/下/右/左/内外に位置する）と<動的な移動関係>（例：X（焦点）がY（背景）から/に/を移動する）がある。力学的関係と異なり、場所項は、起点要素だけではなく、着点要素、経路要素としても文中で示される。このように、全ての空間的関係を含意する移動動詞は、文法化によって、完遂・極度的意味まで意味が拡張するのではない。日本語と中国語において、「上げる」、「下げる」、“V上”、“V下”などの「上下」の空間的関係を含意する移動動詞は、両言語に共通する上下の概念メタファー（表6-17を参照）に基づき、実質的な移動義から、アスペクト的意味・機能への拡張がなされる。

表 6-17 上下の概念メタファーの目標領域となる概念（山梨 2000: 169）

<上>	増	良	幸	理性	支配	繁栄	尊大
<下>	減	悪	不幸	感情	被支配	没落	謙虚

以上の通り、力学的関係に基づく力学動詞と空間的関係に基づく移動動詞の相違点を明らかにした。本研究は、力学的認知に基づいて規定される「力学動詞」を(55)のように、意味と構文的な側面から記述する。

### (55) 力学動詞

意味： 人間の知覚による力的認知に基づく動詞である。これらの動詞の意味構造では、力的関係が含意されており、意味の拡張においてもその力的関係が保持される。

構文： 日本語の場合、「<主語項/動作主体>ガ<目的語項/対象>ヲ<力学動詞>」という基本的構文形式を持つ。表現によって、「カラ」格で場所項/背景を表示することも可能である。「ニ」格で場所項を示すことができない。

中国語の場合、「<主語項/動作主体><力学動詞><目的語項/対象>」か「<主語項/動作主体>把<目的語項/対象><力学動詞>」と

いう基本的構文形式を持つ。表現によって、“从 (cong, から)” で場所項/背景を表示することも可能である。“到 (dao, に)” で場所項を示すことができない。

なお、本研究の分離動詞と分断・破壊動詞は、「力学動詞」という動詞クラスにある 2 つの下位タイプとして位置付けられる。分離動詞と分断・破壊動詞の表す事象以外にも、物理世界においては様々な力的認知に関わる事象が存在すると考えられる。今後、「力学動詞」に分類可能な他の動詞類の考察、異なるタイプの力学動詞の間の関連性と相違点に関する分析を通して、さらに「力学動詞」という新たな動詞クラスの確立を深めるために、有効な論拠を提示する。

## 6.6 本章のまとめ

本章では、中国語の分離動詞 “V 掉” を考察対象として、課題 1 「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」と課題 2 「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」をめぐって分析した。以下、冒頭で提示したリサーチクエスチョンの順に本章の内容をまとめる。

RQ1 「“V 掉” の意味・機能と結合制限」に関して、共時的意味拡張の視点から、“V 掉” の各意味・機能を考察した。特に、第 4 章と第 5 章の日本語の分離動詞の分析に採用された力動性モデルを用いて、“V 掉” の 4 つの意味パターンにおける力的関係を明らかにした。パターン 1 「分離事象型」は中核的意味パターンであり、このパターンには、状態変化型分離事象と位置変化型分離事象という 2 種類の力動性モデルが存在する。そこから “V 掉” は 2 つの方向への意味拡張が生じている。位置変化型分離事象の力動性モデルに基づき、位置変化が前景化され、パターン 1 「分離事象型」からパターン 2 「単純移動型」へと意味が広がっている。状態変化型分離事象の力動性モデルに基づき、状態変化が前景化され、パターン 1 「分離事象型」からパターン 3 「消滅事象型」へと拡張している。さらに、「物事の消滅は事態の完遂」という概念メタファーによって、パターン 3 「消滅事象型」から、パターン 4 「完遂・極度型」へと拡張がなされる。また、“V 掉” の結合制限に関して、4 つの意味パターンでは、求心型動詞よりも遠心型動詞と結合しやすく、積極的な感情を表す動詞よりも消極的な感情を表す

動詞と結合しやすいという 2 つの共通した傾向が見られる。

RQ2 「中国語の “V 下”、“V 落” との比較」については、コーパス用例に基づき、分離動詞 “V 掉” に関して、“V 下”、“V 落” との比較を行い、意味的特徴の違いを明確にした。分離動詞 “V 掉” では、力学的関係は動詞の意味構造における重要な役割を果たし、意味の概念化と文法化に影響していることが明らかとなった。それに対し、“V 下”、“V 落” では、力的関係に基づく意味拡張が見られないことを明らかにした。

RQ3 「中国語と日本語の分離動詞における類似点と相違点」に関して、空間的関係と意味の文法化という 2 つの側面から、日本語の「切る」、「抜く」と中国語の “V 掉” を比較し、類似点と相違点を明らかにした。空間的関係については、位置変化型分離動詞の表す事象では、「表面-付着物」の関係が優勢であり、状態変化型分離動詞の表す事象では、「全体-部分」の関係が優勢であるという点で両言語が共通している。しかし、空間的関係のカテゴリー化と言語化において違いが見られる。中国語では、「容器-中身」の関係は、他の空間的関係と区別し認識されており、汎用性がある “V 掉” ではなく、“V 出” によって表される。一方、意味の文法化に関しては、両言語の分離動詞は、文法化の段階において類似しているが、文法化の程度が一番高い完遂・極度的意味では、結合制限や心的態度において異なっている。また、両言語における分離動詞の共通点に基づき、「力学動詞」という新たな動詞クラスを提案した。空間的関係と力学的関係の詳細を述べた上で、空間的関係に基づく移動動詞（「上げる」、「下げる」、「V 上」、「V 下」）と力学的関係に基づく力学動詞（「切る」、「抜く」、「V 掉」）の違いを明確にした。これによって、分離動詞を、力学的認知に基づいて規定される力学動詞として位置付ける必要性を提示した。

本章までの日本語と中国語の分離動詞と分離事象の空間的関係に関する分析結果を踏まえ、次章では、実験的研究を通して、分離動詞の特徴と分離事象の類型について考察を進める。

## 第7章 分離事象の語彙カテゴリー化の実験的研究

### 7.1 はじめに

本研究では、日本語の分離動詞・分離事象の特徴と本質を総合的に明らかにするため、日本語だけではなく、他の言語との対照研究が必要であると考える。第6章では、中国語の分離動詞“V掉”を意味論・構文論の観点から考察し、力動性理論に基づき、それが表す分離事象の言語モデル化を行うとともに、中国語と日本語の分離動詞の類似点と相違点を考察した。一方、本章は、実験的手法を用いて、これまでの理論的分析の合理性・妥当性を検証するとともに、分離事象の実態を類型論的視点から掘り下げる。

言語研究においては、異なる言語の類似点と相違点という言語類型論における問い合わせ、様々な分析の観点が見られる。本研究では、言語を人間の世界の捉え方の反映と考える認知言語学の枠組みを採用する。特に、量的分析と実験的手法を取り入れた実験認知言語学的アプローチを採用する。認知言語学の初期の研究では、研究者の内省分析に基づく研究が長年主流であったが、客觀性の点でしばしば問題が指摘されてきた。一方、2000年代以降、国際的な研究の場において、「量的転回（quantitative turn）」と呼ばれる統計的手法や実験的手法を重視する流れが生まれた。しかし、日本国内では、量的分析と実験的手法を用いた認知言語学的研究は依然として少ないのが現状である。このため、理論的な面だけではなく、数量的・実験的手法との相互補完によって、体系的に収集されたデータに基づいた客觀的検証の発展が期待される。

認知言語学の観点では、人間が外部世界の物事をどのように捉えるかに関して、使用する言語の特性が反映されていると考える。特に、特定の事象を描く言語表現に着目すると、言語間で興味深い差異があることが指摘されている。一方、人間の一般的な認知能力と知覚システムはどの言語の話者も共通していると仮定されるため、諸言語において、世界の捉え方を言語化する際に、何らかの共通点が存在すると考えられる。

類似した特徴を持つもの同士に着目し、それがどのように表現されるかに応じて言語を類型化していく際、類型化の仕方にいくつかの観点があることが知られている。例えば、後にイベント統合の類型論（Talmy 2000b）へと発展する Leonard Talmy の研

究、その初期の研究である移動事象に関する語彙化類型論の研究 (Talmy 1985b) などが挙げられる。Talmy の研究では、移動事象の構成要素として、移動の事実 (Movement) を含めて、移動物/焦点 (Figure)、参照物/背景 (Ground)、移動物と参照物との位置関係を規定する経路 (Path)、様態 (Manner)、原因 (Cause) という 6 つの要素が関わるとされている。この 6 つの要素は、必ずしも文中ですべて出現することは限らない。また、言語によって、各要素が文中で出現する位置と頻度が異なる。Talmy (1985b) の語彙化類型論では、これらの要素のうち、どの要素が動詞 (主動詞) に語彙化されるかという観点から、各言語の移動表現を比較し、世界の諸言語を 3 つのパターンに分類できるという主張がなされている。

1 つ目は、経路が動詞に語彙化されるタイプの言語である。日本語、スペイン語などには、このパターンが典型的に見られる（下線部は動詞の位置を示す）。

(1)	ボトルは	浮かびながら	洞窟	から	<u>出た。</u>
	焦点	様態	背景	経路	<u>移動 (経路)</u>
(2)	La botella	<u>sali</u>	(de	la cueva)	flotando.
	the bottle	go.out	from	the cave	floating
	焦点	<u>移動 (経路)</u>	経路	背景	様態/原因

移動物（ボトル）が、参照物（洞窟）の外へ移動するという事象を表す際に、日本語では（1）の「出る」、スペイン語では（2）の“sali (go out)”という「内から外へ」という経路を含意する動詞が用いられる。

2 つ目の語彙化のパターンは、様態が動詞に語彙化されるタイプである。英語、中国語<sup>62</sup>などにはこのパターンが顕著に存在する。

(3)	The bottle	<u>floated</u>	out (of the cave).
	焦点	<u>移動 (様態)</u>	経路 背景
(4)	玻璃瓶 从 洞穴 中	<u>飘了</u>	出来。
	bottle from cave in	float	out

<sup>62</sup> 中国語には、経路動詞も多数存在するため、典型的な様態言語ではないという観点もある (Lamarre 2017: 99)。

焦点 経路 背景 移動（様態） 経路

(3) では、移動物（ボトル）の移動の様態が動詞“float”の意味に含まれる。「内から外へ」という移動の経路は、動詞ではなく、不変化詞“out”によって表示される。また、

(4) のように、中国語では、同様に、動詞“飘（浮かぶ）”は、移動と移動の様態要素のみを含意し、経路要素は、方向補語“出来（外へ）”によって表示される。

この 2 つの語彙化パターンは、述語の動詞部が移動事実と移動の経路要素を表すのか、移動事実と移動の様態要素を表すのかによって、「経路言語」、「様態言語」と呼ばれる。また、上記の「経路言語」と「様態言語」という 2 つの語彙化パターンのほかに、もう 1 つのパターン、すなわち、移動物/焦点が動詞に語彙化されるタイプの言語も存在する。このパターンを示す言語は、「焦点言語」と呼ばれる。「経路言語」と「様態言語」のパターンと比べると、「焦点言語」のパターンにあたる言語はかなり少ないが、アツゲウィ語（北カリフォルニア、ホカ語族）などにこの特徴が見られる（松本 2017: 4）。(5) はアツゲウィ語における移動物の情報を含む動詞語幹である。動詞語幹に方向を表す接尾辞などがついて動詞が形成されることを示している。

- (5) a. -lup- <小さく、丸く、光る物体が動く>  
 b. -cap- <ぬるぬるした固まり状の物体が動く>  
 c. -qput- <粉々の乾いた土が動く>

また、本章で扱う手話言語に関して、世界各地域で使用される手話は、基本的に「焦点言語」にあたると考えられる（倪 2015, 李・吳 2021 など）。以下、(6) に中国手話の例を示す。

- (6) a.



「(人が) 歩く」

b.



「(猫が) 歩く」

c.



「(鶏が) 歩く」

(6) は、いずれも有生物の「歩く」という移動の様態を表す。(6a) – (6c) の移動主体はそれぞれ人間、猫、鶏である。それらの移動主体の様態を表現する際に、異なる動詞が用いられており、移動物/焦点の特徴を示す。例えば、(6a) の人間は両足で立って歩いているため、二本の指を立てる手型を動かすことによって、人間の移動を表現する。(6b) の猫は両足の肉球で歩いているため、両手の指を下に向けて、交互に前へ動かし、猫の足踏みの動作をする。(6c) では、鶏の足の特徴を示すために、三本の指を揃えて伸ばし、両手を交互に動かし鶏が歩く動作を表現する。このように、中国手話では、移動する動きとともに、出来事の焦点である動きの主体を表すのである。

また、次の名詞と動詞の転換操作という現象からも、中国手話の「焦点言語」としての特徴がうかがえる。

(7)

a.



「飛行機」



「(飛行機が) 飛ぶ」

(7a) は、中国手話の名詞「飛行機」の手型である。(7b) では、「飛行機」の手型を「下から上へ/利き手から非利き手」という経路に沿って動かすことで、飛行機の移動の軌跡を表し、「(飛行機が) 飛ぶ」という動詞の形へ転換する。すなわち、飛行機の移動を表す動詞に移動物/焦点が語彙化される。この場合、移動主体を別の語彙で表示する必要がない。

本章は、課題3「分離動詞と分離事象の類型の提案」(1.2節を参照)に関して、Talmy (1985b) の語彙化類型論の観点と実験的手法を統合したアプローチから比較・対照を行い、日本語と他の言語の相違点と類似点を考察する。分離事象の全体像と言語ごとの個別性を類型論的観点から明らかにし、分離事象の性質に関する一般化を提示する。このため、語彙化類型論におけるパターン1の「経路言語」にあたる日本語、パターン2の「様態言語」にあたる中国語、そして、パターン3の「焦点言語」にあたる中国手話を考察対象とする。また、本章の目的は、特定の言語においてどのような動詞が存在するか、あるいはどのような文が文法的なのかを明らかにすることではない。話者がどのような場面でどのような動詞を実際に使用するか、それらの動詞はどのような基準で区別され、カテゴリー化されるかに明らかにすることである。いわゆる、分離事象の語彙カテゴリー化の問題に関して、人間言語に共通する特徴（普遍性）と各言語の変異の幅（多様性）を明らかにすることを目的とする。

次節では、先行研究を概観した上で、本章は、課題3「分離動詞と分離事象の類型の提案」に際して、どのようなリサーチクエスチョンを設定するかを具体的に述べる。

## 7.2 先行研究と課題

本節では、理論上の課題と方法論上の課題を分けて、先行研究を概観する。

### 7.2.1 事象の語彙カテゴリー化に関する類型論的研究

まず、理論上の課題に関して、数量的手法を取り入れた認知言語学における類型論的研究については、先に述べた Talmy の類型論を発端として、空間移動事象、いわゆる位置変化の言語表現に関する研究が盛んに行われてきた（松本 2017, 古賀 2017, 吉成ら 2020 など）。例えば、位置変化を構成する要素は文中でどのような形で、あるいはどのような頻度で表されるか。各言語の移動表現において、様態動詞と経路動詞はどれくらいの割合を占めるかなどという課題に関心が寄せられてきた。それに対し、状態変化の言語表現については、移動表現との関連でしばしば取り上げられてきたが、状態変化表現の類型論的性質の解明はまだ包括的に行われていない（ただし、松本・氏家（2024）のコーパスに基づく状態変化表現に関する数量的研究があり、本章ではこの研究も参照する）。

また、状態変化表現を類型論的観点から考察した研究においては、「力の行使による一続きのものの性質を喪失させる」という分断・破壊事象（*cutting and breaking events*）を対象とする研究が比較的多く見られる（Majid et al. 2007, Majid et al. 2008 など）。これらの研究では、Majid らの研究グループによって、28 言語を対象とした実験が行われた。彼らは、分断・破壊事象を映したビデオ映像を実験対象者に見せてそれらを言語化してもらい、使われた動詞の共通性に基づいてクラスター分析を行った。

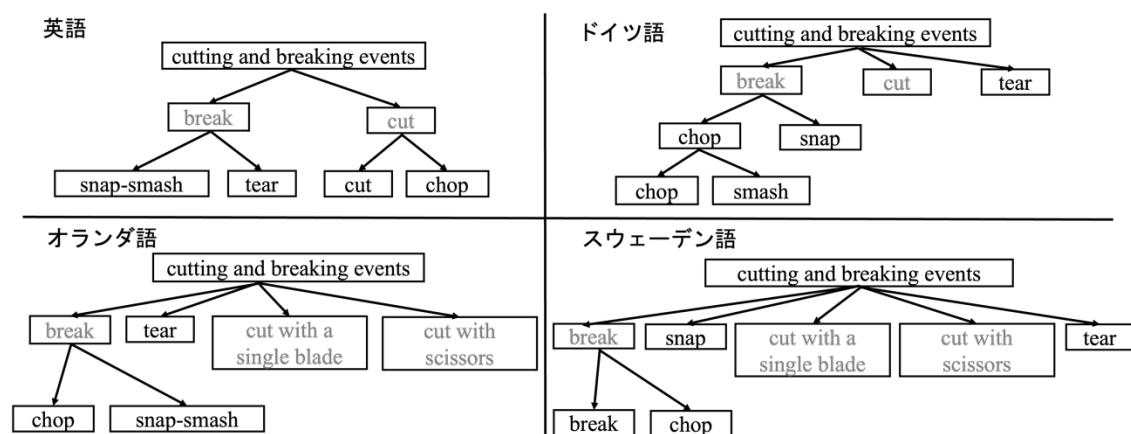
実験の結果として、分断・破壊事象の語彙カテゴリー化の基準に関して、「裁断面の予測可能性（*the predictability of the locus of separation*）」という通言語的な語彙カテゴリー化の基準が提示された。具体的には、上位のカテゴリーでは、裁断面の予測可能性が高い「切る（*cut*）」系事象と裁断面の予測可能性が低い「割る（*break*）」系事象というカテゴリーに分かれることが 28 言語で共通しているという結果が得られた。ただし、Majid et al. (2008) によると、「裁断面の予測可能性」のような上位のカテゴリー化の基準では、通常、抽象度が相対的に高いものであるため、明確な線引きができない。どのような場面で裁断面の予測可能性が高く、どのような場面で裁断面の予測可能性が低いかは、程度の問題である。

一方で、下位のカテゴリーでは、言語間の多様性が捉えられる。例えば、Majid et al. (2007) は、ゲルマン語系に属する英語、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語という 4 言語を、分断・破壊事象を表す表現を対象として比較した。図 7-1 のように、これらの同じ語系に属する言語であっても、分断・破壊事象の語彙カテゴリー化に

して違いが見られる。例えば、*tear* タイプに相当する表現は、英語では *break* 系事象の下位タイプとしてカテゴリー化されるが、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語では、*cut* 系事象と *break* 系事象と並行してカテゴリー化される事象である。*chop* タイプに相当する表現は、英語において、*cut* 系事象の下位タイプに位置付けられるが、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語においては、*break* 系事象の下位タイプとしてカテゴリー化される。また、上位のカテゴリーである *cut* 系事象に関しては、英語とドイツ語では、それが細分化される傾向がないのに対し、オランダ語、スウェーデン語では、*cut* 系事象は、道具の刃の数によってカテゴリーが細分化されているという点で相違点が捉えられる。

図 7-1 ゲルマン語系の 4 言語の分断・破壊事象の語彙カテゴリー化

(Majid et al. 2007 をもとに作成)



一方、従来の研究では、分離事象のような位置変化と状態変化を統合した事象を対象とする対照研究は管見の限り少ないが、李 (2019b) による日本語と中国語の分離動詞に関する対照的研究、松本 (1997) による英語と日本語の状態変化を付帯する移動動詞に関する対照的分析などが挙げられる。しかし、これらの研究は、単一言語の個別的特徴または、言語の対照的な性質に分析の焦点を当てており、言語間における分離事象の類型論的性質に触れてはいない。上述の分断・破壊事象の研究のように、分離事象においても、通言語的な語彙カテゴリー化の基準がどのようなものであるかについて、更なる検討が必要である。

### 7.2.2 数量的手法を用いた認知類型論的研究

方法論上の課題に関して、認知類型論に関する数量的研究では、主にコーパスと実験という2種類のアプローチ<sup>63</sup>が採用される。コーパス調査と実験的手法は、理論的分析が抱える実証性の低さという弱点を補完する一方、それぞれの手法には、方法論上の利点と課題が存在する。

コーパス調査の利点として、考察対象である事象表現に関する幅広い場面と、その言語化の状況を総合的に調査できるという点が挙げられる。特に、均衡性がある大規模コーパス<sup>64</sup>を使用した場合、特定の事象の描写に偏らないデータの収集を行うことができる（松本 2021: 100）。一方、コーパス調査には、課題や限界もある。1つ目は、どのようなキーワードを検索するかによって、得られる結果の傾向が異なる可能性が高いということである。特定の事象を調査する際に、事前に検索語のリストを決める必要がある。よって、本研究で考察する分離事象を表す動詞の語彙レパートリー（分離動詞の典型性と多様性）も、コーパス調査の手法では考察できない。2つ目は、言語間の直接的な比較・対照が難しいことである。言語間の類似点と相違点に関するコーパス調査を行う際に、対照コーパスまたは翻訳コーパスがよく用いられる。しかし、翻訳というものは、性質上、必ずしも訳文の目標言語の特徴と言語化の傾向を忠実に示しているとは限らない。よって、翻訳コーパスにおける原文の言語表現と訳文の言語表現を直接的に比較するのは、データの忠実性の点で妥当性に欠ける。

一方、実験的手法に関して、この手法特有の利点と強みとして、コーパス調査よりも、特定の事象に関する言語間の相違点と類似点を容易に比較することができる点が挙げられる。特に、ビデオ映像を実験対象者に見せてデータを収集する「ビデオ発話実験」は、特定の状況の描写を実験という状況の中で実験対象者から引き出すことができる。特定の事象表現が各言語の話者によってどのように表現されるかを調査するのに相応しい手法である。しかし、実験的手法も、課題や限界が存在する。特に、実験題材の代表性が保証しにくいという問題が指摘される。例えば、ビデオ発話実験を

<sup>63</sup> コーパスと実験の他に、Frog Storyという、絵本を提示し、その内容を実験対象者に説明してもらうという研究手法も多く使用される。なお、絵本を利用する手法も、実験的手法の1つに位置付けられる。

<sup>64</sup> 均衡性がある大規模コーパスとは、ある言語の特徴の調査のために、その言語の多様性を可能な限り忠実に反映するよう、バランスを保ちながらサンプルを収集して構築される大規模の言語資源である。日本語では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）、英語では、COBUILD や BNC などが挙げられる。

実施する場合、ビデオ映像の数とそれが表す事象のタイプが一定の範囲に限られる。あらゆる事象表現を網羅的に調査するのは現実的には不可能である。このため、実験的手法を採用する場合、実験題材の取捨選択に関する基準が厳密に求められる。とはいえ、ビデオ発話実験は、統一した実験的枠組みで言語データを明確に収集できるという利点があり、近年、特定の事象に関する類型論的研究では広範に使用されている。

ビデオ発話実験を採用した先行研究のうち、主要なものとして次の 6 つが挙げられる。Majid et al. (2008) や洪 (2020)、網井 (2013) は、本研究の対象である分離事象と関連する分断・破壊事象を対象としているものである。秋田他 (2010)、松本 (2021) は移動事象を対象としている。佐治他 (2010) は、「持つ」や「抱える」が表すような、モノを持つ動作を考察対象としている。また、この 6 つの先行研究のうち、Majid et al. (2008)、洪 (2020)、秋田他 (2010)、松本 (2021) は、各言語の母語話者の言語使用における類似点と相違点、すなわち、言語間の普遍性と多様性を明らかにすることを目的としている。一方、網井 (2013)、佐治他 (2010) は、第二言語学習者の語彙カテゴリー化は母語話者のものと比較してどのような違いがあるかを考察している。各先行研究の考察内容を表 7-1 にまとめた。

表 7-1 ビデオ発話実験を用いた先行研究の考察内容

	考察対象	研究目的
Majid et al. (2008)	分断・破壊事象	言語間の普遍性と多様性
洪 (2020)	分断・破壊事象	言語間の普遍性と多様性
網井 (2013)	分断・破壊事象	母語話者と学習者の違い
秋田他 (2010)	移動事象	言語間の普遍性と多様性
松本 (2021)	移動事象	言語間の普遍性と多様性
佐治他 (2010)	モノを持つ動作	母語話者と学習者の違い

本章では、先行研究と同様なビデオ発話実験という心理言語学的手法を用いて、統一した実験的枠組みで、日本語と他の言語における分離事象の語彙カテゴリー化のあり方を考察する。

### 7.2.3 研究課題

本章では、課題 3 の「分離動詞と分離事象の類型の提案」に関して、日本語、中国

語、中国手話の3つの言語を対象とするビデオ発話実験を通して、日本語と他の言語の分離事象の共通性と多様性を考察する。具体的に、以下の3つのリサーチクエスチョンに取り組む。

### 課題3: 「分離動詞と分離事象の類型の提案」

RQ1 日本語、中国語、中国手話において、分離動詞の語彙レパートリーはそれぞれどのような特徴を持つか。 (7.5.1節)

1.1 3つの言語における分離動詞はどのような典型性を持つか。

1.2 3つの言語における分離動詞はどのような多様性を持つか。

RQ2 日本語、中国語、中国手話において、分離事象の語彙カテゴリー化に関する基準には、どのような相違点と類似点があるのか。 (7.5.2節)

2.1 3つの言語における語彙カテゴリー化の基準には、どのような相違点があるのか。

2.2 3つの言語における語彙カテゴリー化の基準には、どのような類似点があるのか。

RQ3 日本語、中国語、中国手話において、分離事象の語彙カテゴリー化の認知プロセスには、どのような相違点と類似点があるか。 (7.5.3節)

3.1 3つの言語における認知プロセスには、どのような相違点があるのか。

3.2 3つの言語における認知プロセスには、どのような類似点があるのか。

## 7.3 研究方法

### 7.3.1 実験題材

本研究では、分離事象を「Z（動作主）がX（分離元）からY（分離物）を引き離す」という、Xの状態変化とYの位置変化を統合した複合的な事象として定義し、分離事象を表す動詞類に注目する。はじめに、ビデオ発話実験を用いて分離事象の語彙カテゴリー化を考察するにあたって設けた、実験題材を設定する際の基準について論じる。

実験題材の設定に関して、主に2種類のリサーチデザインがある。1つ目は、調査対象となる動詞リストを決めた上で、動詞リストに従い実験題材を用意する方法である。例えば、佐治他（2010）は、中国語でモノを持つ動作を表す典型的な動詞を先に決め

て、これらの動詞が表す動作のビデオ映像を作成し、実験を行っている。2つ目は、調査対象となる事象の構成要素を考慮し、構成要素の特徴と下位分類に基づき、実験題材の種類を設定する方法である。例えば、松本（2021）は移動事象の様態である「歩き」、「走り」、「スキップ」の3つを考慮し、それぞれの様態を表す移動事象が同じ割合になるように実験題材を設定した。洪（2020）は、分断・破壊事象に関する実験題材を設定する際に、分断・破壊事象の構成要素として、「物の特徴」、「動作の特徴」、「道具」、「物の結果状態の特徴」の4つを考慮して実験題材を提示した。その中で、「物の特徴」に関しては、「形状」と「硬さ」でラベリングされ、「動作の特徴」に関しては、「方向」と「力の強さ」でラベリングされ、「物の結果状態の特徴」に関して、物の裁断面の予測可能性と分断された結果状態でラベリングされる。

前者のリサーチデザイン、すなわち、主要な動詞に基づくリサーチデザインよりも、後者の事象の構成要素に基づくリサーチデザインの方が、より事象の多様性を保証できると考えられる。このため、本実験は、事象の構成要素の観点を採用して実験題材を設定する。第5章の分離事象の特徴に関する意味論・類型論的分析では、日本語には状態変化型分離事象と位置変化型分離事象という2種類の事象が存在することを主張した。また、この2種類の分離事象は、分離元と分離物の空間的関係、位置変化と状態変化の関係付け<sup>65</sup>、そしてそれぞれの表す位置変化と状態変化の下位類型などといった側面で違いが見られ、分離事象の類型化において重要な要因となると想定できる。また、分離事象では、分離動作の様態に様々な種類が存在する。主体が対象にどのように分離動作を行使するかによって、分離事象の言語化の結果が異なる。このため、動作の方向性と道具を含む「動作/様態」という要素も分離事象の類型化に重要であると考える。このような理論的分析の結果を踏まえ、分離事象を構成する要素1「分離物/焦点」、要素2「分離元/背景」、要素3「動作/様態」、要素4「変化結果」の4つの要素を考慮し、様々な分離事象を映像化したビデオクリップを48件作成した。表7-2は本実験の題材であるビデオクリップと各場面の特徴づけをまとめたものである。

---

<sup>65</sup> 位置変化と状態変化の関係付けである「時間的関係」と「論理的関係」は、実験題材の設定に反映させることが難しく、また、これらに関するラベリングも容易ではない。このため、両事象の関係付けを本実験の題材の設定基準とせず、両事象の特徴を示す変化結果を設定基準とする。

表 7-2 分離事象ビデオクリップとその特徴づけ

ビデオ	分離物/焦点			分離元/背景			動作/様態		変化結果	
	物	形	硬さ	物	形	空間	方向	道具	位置	状態
M1	髪	1	軟	頭	2	全体	水平	ハサミ	遠心	自体
M2	爪	2	硬	指	2	全体	水平	爪切り	遠心	自体
M3	葉っぱ	2	軟	バラ	1	全体	水平	ハサミ	遠心	自体
M4	枝	1	硬	木	0	全体	垂直	ノコギリ	遠心	自体
M5	雑草	1	軟	芝生	2	全体	垂直	鎌	遠心	自体
M6	後ろ髪	1	軟	頭	2	全体	垂直	バリカン	遠心	自体
M7	髪	1	軟	頸	2	全体	水平	シェーバー	遠心	自体
M8	屑/表面	2	硬	鉛筆	2	全体	水平	カッター	遠心	自体
M9	皮	2	軟	リンゴ	2	全体	水平	ナイフ	遠心	自体
M10	殻	2	硬	卵	2	全体	垂直	手	遠心	自体
M11	皮	2	軟	バナナ	2	全体	垂直	手	遠心	自体
M12	桃	3	硬	木	0	全体	垂直	手	求心	自体
M13	花びら	2	軟	バラ	1	全体	垂直	手	求心	自体
M14	葡萄	3	軟	木	0	全体	水平	ハサミ	求心	自体
M15	花	3	軟	木	1	全体	垂直	手	求心	自体
M16	毛玉	0	軟	セーター	2	全体	水平	クリーナー	遠心	自体
M17	鱗	2	硬	魚	2	全体	垂直	包丁	遠心	自体
M18	コーン	3	硬	煙	2	全体	水平	手	遠心	自体
M19	髪	1	軟	頭	2	全体	垂直	手	遠心	総体
M20	雑草	1	硬	芝生	2	全体	垂直	手	遠心	総体
M21	電池	1	軟	リモコン	2	容器	垂直	手	遠心	総体
M22	ナイフ	1	硬	鞘	3	容器	水平	ポンプ	求心	総体
M23	空気	0	硬	袋	3	容器	垂直	ポンプ	遠心	総体
M24	水	0	硬	鉢	3	容器	垂直	注射器	求心	総体
M25	インク	0	軟	瓶	3	容器	水平	手	遠心	総体
M26	詰め物	3	軟	ぬいぐるみ	3	容器	水平	手	遠心	総体
M27	レンズ	2	軟	目	3	容器	水平	手	遠心	総体
M28	水	0	一	タオル	3	容器	回転	手	遠心	総体
M29	ポスター	2	一	壁	2	表面	垂直	手	遠心	総体
M30	糸創膏	2	一	腕	2	表面	水平	手	遠心	総体
M31	紙	2	一	ノート	1	表面	水平	手	遠心	総体
M32	塗料	2	一	缶	2	表面	水平	ドライバー	遠心	総体
M33	コルク	1	一	ワイン	0	表面	垂直	コルク抜き	遠心	総体
M34	ネジ	1	硬	机	0	表面	水平	レンチ	遠心	総体
M35	プラグ	3	硬	コンセント	2	表面	水平	手	遠心	総体
M36	指輪	3	硬	指	3	表面	水平	手	遠心	総体
M37	メガネ	3	硬	顔	2	表面	垂直	手	遠心	総体
M38	マスク	2	軟	顔	2	表面	垂直	手	遠心	総体
M39	リボン	2	軟	プレゼント	2	表面	回転	手	遠心	総体
M40	包帯	2	軟	腕	2	表面	回転	手	遠心	総体
M41	包装紙	2	軟	プレゼント	2	表面	水平	手	遠心	総体
M42	車輪	3	硬	自転車	3	表面	水平	レンチ	遠心	総体
M43	メイク	0	一	顔	2	表面	水平	コットン	遠心	総体
M44	黒ずみ	0	一	床	2	表面	水平	ブラシ	遠心	総体
M45	文字	0	一	黒板	2	表面	水平	黒板消し	遠心	総体
M46	紙	2	一	カレンダー	1	表面	水平	手	遠心	総体
M47	時計	3	硬	壁	2	表面	垂直	手	遠心	総体
M48	キャップ	1	硬	ペン	2	表面	水平	手	遠心	総体
P1	皮	2	硬	ポテト	2	表面	水平	ピーラー	遠心	自体
P2	切手	2	軟	封筒	2	全体	垂直	手	遠心	自体
D1				ニンジン		表面	水平	包丁		自体
D2				ダンボール		表面	垂直	ハサミ		自体
D3				箸		表面	垂直	手		自体
D4	空き缶	3	硬						遠心	
D5	ボール	3	硬						遠心	
D6	紙飛行機	3	軟						遠心	

次に、各要素のラベリングについて説明する。要素1「分離物/焦点」は、「形状」と「硬さ」で特徴づける。物の形状については、細長い1次元の物（例：M1の髪、M4の枝）、平面のような平たく薄い2次元の物（例：M2の爪、M11のバナナの皮）、立体的な3次元の物（例：M12の桃、M36の指輪）の3種類に加え、点状のような物（例：M44「黒ずみ」、M45の「文字」）または無形の物（例：M23の「空気」、M24の「水」）を0次元と記述する。物の硬さについては、軟らかい物（例：M11のバナナの皮）、硬いもの（例：M10の卵の殻）、および触れないもの（例：M23の空気）の3種類がある。触れないものを「—」で記述する。

要素2「分離元/背景」は、「形状」と「空間的関係（分離物との空間的位置）」で特徴づける。ここで特に留意すべき点は、要素2の特徴は、分離元自体の特徴ではなく、分離物に対する分離元の特徴であるということである。このため、要素2の形状として記述されるのは、分離物がどのような形状で分離元に位置するかということである。言い換えれば、分離元と分離物の接触面の形状を指す。分離元と分離物の接触面が点状である場合、すなわち、0次元の接触面（例：M4では、分離元の木は1次元のものであるが、木と枝の接触面は点状である）、分離元と分離物の接触面が線状である場合、すなわち、1次元の接触面（例：M31では、紙がノリによってノートに接しているが、その接触面は線状である）、分離元と分離物の接触面が面状である場合、すなわち、2次元の接触面（例：M7では、髪は頸の表面を覆う形で位置する）、分離物が分離元を囲みながら位置する、もしくは分離物が分離元の中に位置するという3次元の接触面（例：M23では、空気は袋の中身として位置する）に分かれる。また、空間的関係に関して、分離元と分離物が「全体-部分」の関係に当たる場面（例：M1の頭と髪）、「容器-中身」の関係に当たる場面（例：M21の電池とリモコン）、「表面-付着物」の関係に当たる場面（例：M29のポスターと壁）の3種類を設定した。表7-2の中では、それぞれのタイプを「全体」、「容器」、「表面」で略述する。

要素3「動作/様態」については、「方向」と「道具」で特徴付ける。動作の方向によって、水平方向で動作を行使する場面（例：M1のように、ハサミを水平方向（右から左）で移動させて髪を切る場面）、垂直方向で動作を行使する場面（例：M4のように、ノコギリを垂直方向（上から下）で行使して枝を切る場面）、回転動作の場面（例：M28のように、タオルを絞る場面）の3種類に分かれる。また、様々な道具が実験題材に含まれる。道具の刃の数が1つである場面（例：M4のノコギリ）、刃の数が2つであ

る場面（例：M1 のハサミ）、刃ではない道具を行使する場面（例：M23 のポンプ）、道具行使せず手を使う場面（例：M10 の手）の 4 種類を設定した。

要素 4「変化結果」は、分離動作の前後、対象がどのような方向に向けて変化するかを示す。分離事象には、「分離物の位置変化」と「分離元の状態変化」の 2 つの変化があり、この 2 つの変化結果の両方の観点から、ビデオクリップを特徴づける。位置変化に関して、動作主体は分離物を分離して利用するか、分離して除くかによって、分離物が主体の位置から遠ざかる「遠心型」（例：M1 のように、髪を切り落とす）と動作主体の位置に向けて移動する「求心型」（例：M12 のように、桃をもぎ取る）の 2 種類に大きく分かれる。一方、状態変化の類型は、川野（2021）による状態変化の下位類型を踏まえ、物自体の形状や大きさの属性が変化する「自体変化型」（例：M4 のように、枝を除去することで、木の部分的形状変化が生じる）と、伴っていた事物が除去されることで空間全体の埋まり具合や美観が変化する「総体変化型」（例：M24 のように、鉢自体の性質が変化せず、水を空けることによって、鉢が埋まっていない状態になる）という 2 種類に分類する。

以上の通り、分離事象を構成する 4 つの要素で分離事象の題材を設定した。また、本研究の第 5 章では、現代日本語の分離動詞と分離事象の特徴を考察する際に、「空間的一体性」の違いによって、日本語では「状態変化型分離事象」と「位置変化型分離事象」という 2 種類に分かれるという仮説（以下、「空間的関係の仮説」）を立てた。本章はこの「空間的関係の仮説」を検証する意図もあり、表 7-2 では、空間的関係の順にビデオクリップの題材をリストしている。M1–20 は「全体–部分」、M20–28 は「容器–中身」、M29–48 は「表面–付着物」という空間的関係に当たる。この 48 件の分離事象のビデオのほかに、本研究の分離事象の定義に当てはまらない、状態変化事象のみを表すもの（すなわち、Majid et al. (2008)、洪（2020）による分断・破壊事象）と移動事象のみを表すものをダミー変数 D1–6 として作成した。また、実験対象者が実験の手続きとタスクを理解できるよう、練習用のビデオクリップ P1–2 を用意した。なお、実際の分析では、分離事象のビデオ M1–48 のみを分析対象としている。

### 7.3.2 実験対象者

本実験は、日本語母語話者 20 名 ( $M=26, SD=3.6^{66}$ )、中国語母語話者 23 名 ( $M=25, SD=2.9$ )、中国手話母語話者 18 名 ( $M=21, SD=3.8$ ) を実験対象者とした<sup>67</sup>。特に、母語以外の影響を避けるため、実験対象者となる日本語の母語話者は中国語を勉強した経験がない人、中国語の母語話者は日本語を勉強した経験がない人に限定した。中国手話母語話者の 18 名のうち、7 名はろう家族で育ったろう者であり、生後、手話を用いる環境で育てられた。残りの 11 名は、ろう学校または社会のろうコミュニティに入ってから初めて手話を使い始めている。

実験を実施する前に、実験対象者に実験計画書を提示した。実験計画書には、研究題目、目的、実験対象者の権利、研究方法および機関、個人情報の取り扱い、結果の開示及び公開、研究から生じる知的財産権の帰属、研究終了後の資料取り扱いの方針、費用負担、謝礼に関する事項、問い合わせ先などを明記している。実験対象者には、本実験の目的と注意点を口頭と書面の両方の形で説明し、実験協力同意書に署名してもらった。本実験は全ての実験対象者の承諾を得た上で実施した。

### 7.3.3 実験方法

本研究で行ったビデオ発話実験の実験方法は、次のとおりである。

まず、実験対象者により明確にビデオの内容を伝えるために、実験開始前、以下の指示文を各言語において提示した。

「指示文：これから複数の短いビデオ ( $t \leq 12s$ ) <sup>68</sup>を見せます。これらのビデオ映像はすべて「ある人（太郎）がある物 X からある物 Y を引き離す」という場面を表すものである。それぞれのビデオの中で、太郎が何をしたか、その行為によって何が起こっているかについて、自分の母語で説明してください。各ビデオ終了後、15 秒の合間をおきますので、その間に声を出して回答してください。」

実験対象者が指示文を読み終わり、準備が整ったという合図を受けたのち、実験を

<sup>66</sup> M は実験協力者の平均年齢であり、SD は年齢の標準偏差である。

<sup>67</sup> 本実験は、2023 年度 6 月に大阪大学人文学研究科倫理専門委員会の承認を得た。

<sup>68</sup> t はビデオクリップの時間の長さである。

開始した。本実験は、実験実施者と各実験協力者の二名で、対面あるいはZOOMを介したオンラインの形で行った。実験においては、分離事象を描写したビデオ映像をパソコンの画面上で再生し、実験対象者にビデオの内容をその場で口頭で説明してもらった<sup>69</sup>。正式な実験段階に入る前に、2つの練習用のビデオクリップを用意し、実験対象者に実験の形を慣れもらつた。また、日本語話者と中国語話者による実験データの録音、中国手話話者によるデータの録画を行つた。

そして、実験終了後、実験対象者によるデータの文字化を行つた。日本語話者と中国語話者による発話の実験データに関してはそのまま文字で書き起こした。中国手話による視覚の実験データに関しては、各手型を切り分けてスクリーンショットの形で残してから、語彙素を分析した上で、各手型の意味と文全体の意味を記述した。

## 7.4 分析方法

### 7.4.1 分析の観点

本研究では、分離事象の語彙カテゴリー化を分析するため、Majid et al. (2008) と洪 (2020) による「動詞を軸とした事象の語彙カテゴリー化」という分析の観点を採用した。この観点では、話者が異なるビデオクリップの状況を同じ動詞を用いて描写した場合、これらのビデオクリップが表す事象を類似したものと捉える。このように、動詞をもとに語彙カテゴリー化について考察するという観点がすでに提唱されていることを踏まえると、分離動詞を中心に分離事象の語彙カテゴリー化を考察することが、一定の妥当性をもつて可能となる。

同じ動詞であることを認定する際の基準は以下の3つである。1つ目の基準として、単純動詞と、その単純動詞を前項動詞または後項動詞とした複合動詞を使用した場合、両者を別の語と判断する。例えば、「切る」と「切り取る」、「落とす」と「切り落とす」は別の語を使用したものとみなす。2つ目の基準は、複合動詞全体を分析の対象とすることである<sup>70</sup>。例えば、複合動詞「切り取る」、「切り落とす」は前項動詞V1が同じく「切る」であるが、複合動詞全体を分析の対象とするため、別の語として扱う。3つ

<sup>69</sup> ただし、手話は口頭ではなく、その場で手話を使って実験対象者に説明してもらう形となる。

<sup>70</sup> 複合動詞が使用される場合、複合語単位で動詞を扱うという分析の観点は、Majid et al. (2008) と洪 (2020) と一致する。

目は、「漢語動詞+する」（例えば、「切斷する」）という形の場合、「漢語動詞+する」全体を分析の対象として扱うという基準である。

#### 7.4.2 分析の手続き

上述の分析の観点を踏まえ、本研究の分析の手続きは次のとおりである。

収集したデータに基づき、日本語、中国語、中国手話での分離動詞の語彙カテゴリ化の特徴を分析するため、各言語ごとに「異なるビデオに対して同じ動詞を使用した人数」を指標とし、ビデオ間の類似度をまず測定し、そこから非類似度<sup>71</sup>のマトリックスを作成した。表 7-3 は日本語母語話者のデータに基づく非類似性マトリックスの一部である。

表 7-3 日本語のデータに基づく非類似性マトリックス（一部を抜粋して掲載）

	M1	M2	M3	M4	M5	M6	M7	M8	M9	M10	M11	M12	M13	M14	M15
M1	0	0	3	3	17	11	15	19	20	20	20	20	20	18	20
M2	0	0	3	3	17	11	15	19	20	20	20	20	20	18	20
M3	3	3	0	0	15	13	13	18	19	19	19	20	20	20	20
M4	3	3	0	0	15	13	13	18	19	19	19	20	20	20	20
M5	17	17	15	15	0	17	17	19	20	20	20	20	20	20	20
M6	11	11	13	13	17	0	2	19	20	20	20	20	20	20	20
M7	15	15	13	13	17	2	0	19	20	20	20	20	20	20	20
M8	19	19	18	18	19	19	19	0	18	18	18	20	20	20	20
M9	20	20	19	19	20	20	20	18	0	0	0	20	20	20	20
M10	20	20	19	19	20	20	20	18	0	0	0	20	20	20	20
M11	20	20	19	19	20	20	20	18	0	0	0	20	20	20	20
M12	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	0	9	2	5
M13	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	9	0	4	2
M14	18	18	20	20	20	20	20	20	20	20	20	2	4	0	3
M15	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	5	2	3	0

<sup>71</sup> 階層型クラスター分析は、個々のデータの非類似度を「距離」として表現し、距離の近いデータ同士をまとめてクラスターを作っていく手法である（小林 2017a: 183）。このため、分離事象のビデオクリップに関するクラスター分析を行った際に、非類似度を用いてマトリックスを作成した。

例えば、M1 と M2 というビデオクリップに対して、日本語母語話者の 20 名の実験対象者全員が同様の動詞を使用したため、M1 と M2 の間の類似度を 20 とし、表 7-3 のマトリックスで非類似度を 0 と記述した。M1 と M3 に対して同様な動詞を使用した人数が 17 人であり、M1 と M3 の間の類似度を 17 とし、マトリックスで非類似度を 3 と記述した。

なお、中国手話は、日本語、中国語の言語体系と異なる性質を持つ。手話の言語体系には、文字および書き言葉が存在しない。視覚言語であるため、手話動詞はその場面によって異なる形をとる。例えば、以下の (8) と (9) のように、日本語と中国語の話者において非常に類似していると認識される M1 と M2 に関しても、中国手話の話者がこの 2 つの場面を手話で表す場合、完全に一致する動詞が使用されることはほとんどない。

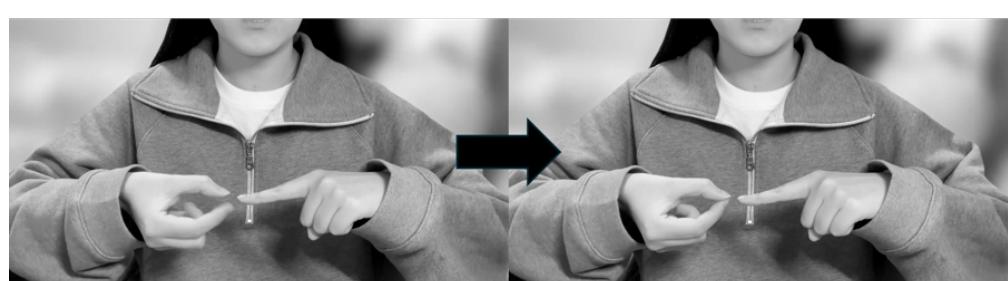
(8)



髪/  
焦点/背景/　長い/  
変化前の状態/　切る（動詞部）/　背景（非利き手）+動作/　短い  
結果状態

「ハサミで髪を短く切る。」

(9)



（爪を）切る（動詞部）  
道具+背景+焦点+動作

「爪切りで爪を切る。」

類似した動きを映したビデオクリップに対して、日本語や中国語などの音声言語では同じ動詞「切る」、“剪 (jian, 切る)”を使って表せる。しかし、手話の場合には、(8)

と (9) のように同じ動きであっても異なる形をとるので、それらをそのまま完全に同じ動詞と認めるることは難しい。中国手話のデータの分析に際しては、動詞の類似度を判定するためには別の基準が必要となる。

そこで、本研究では、手話音韻論（倪 2015, 松岡 2015 など）で主張される「位置」、「手型」、「動き」、「手のひらの向き」<sup>72</sup>という 4 つの音韻パラメータを採用し、中国手話の分離動詞の特徴を文字化し記述した。この 4 つの音韻パラメータの中で、「位置」には、「こめかみ」、「頬」、「胴」などの体の部位が主に含まれる。「手型」の記述に際しては、指文字が多く使用される（中国手話の指文字に関しては、付録 4 を参照されたい）。「動き」には、「利き手→非利き手」、「下→上」、「体の内→外」、「回転」などの表記が含まれる。なお、手話母語話者にとって、左利きの話者は左右が逆になるため、左右という概念を用いて説明すると、混乱を招く場合がある。このため、手話音韻論では、「左右」ではなく、「利き手・非利き手」という表現が用いられる。「手のひらの向き」には、「内向き」、「外向き」、「利き手側」、「非利き手側」、「上向き」、「下向き」などが含まれる。この音韻パラメータのアプローチに基づき、本研究は、「位置/手型/動き/手のひらの向き」という 4 つのパラメータを用いた記述方法を採用している。例えば、上記の用例 (8) の動詞部を、「手/V/利き手→非利き手/内向き」と記述し、用例 (9) の動詞部を、「指/O/上→下/内向き」と記述した。

上述のパラメータに基づき、類似度の計算においては、「異なるビデオに対して動詞における同じパラメータを使用した人数」を指標に、各ビデオの類似度を測定した。例えば、手話の実験対象者 A は、M1 と M2 を説明する際に使用した動詞には、「手のひらの向き」という 1 つのパラメータの一致が見られた場合、類似度 0.25 として計算する。「手型」と「手のひらの向き」という 2 つのパラメータの一致が見られた場合、類似度 0.5 として計算する。「手型」、「手のひらの向き」、「動き」、「位置」という 4 つのパラメータが全部一致した場合、1 として計算した。その上で、足し算ですべての実験対象者の類似度の合計を求め、マトリックスを作成した。

<sup>72</sup> この 4 つの音韻パラメータ以外に、手話言語において、口の動きなどの手や指以外の体の部分を含めた「非手指表現 (non-manuals, NM)」という文法的要素がある。NM 表現には、眉（上げ、寄せ）、目（見開き、細め、視線）、頸（動き）、口（口型）、頬（膨らみ、窄め）、舌（舌だし、動き）、頭（傾き、動き）、肩（広げ、窄め、動き）などが含まれる。しかし、NM だけが異なるミニマルペアは数が限られ、特に分離動詞の中でこのようなミニマルペアは基本的に存在しない。このため、本研究では、分離動詞を記述する際に、NM 表現の細かな検討を省き、「位置」、「手型」、「動き」、「手のひらの向き」という 4 つのパラメータのみを検討した。

以上の実験から得られた各言語データのマトリックスに基づき、階層型クラスター分析（ユークリッド距離、群平均法<sup>73</sup>）を行った。階層型クラスター分析を通して、ビデオ同士の類似度の高いものから低いものまで、分離事象が順にいくつかのクラスターに融合している。得られたクラスター分析の結果に基づき、各言語における分離事象の語彙カテゴリー化の特徴を分析し、日本語と中国語、中国手話の類似点と相違点を考察することで、分離事象の類型をまとめた。

## 7.5 結果

### 7.5.1 分離動詞の語彙レパートリー

本節では、次の RQ1 について、まず、各言語の分離事象を表す動詞の全体的な傾向を見る。

RQ1　　日本語、中国語、中国手話において、分離動詞の語彙レパートリーはそれぞれどのような特徴を持つか。

- 1.1 3つの言語における分離動詞はどのような典型性を持つか。
- 1.2 3つの言語における分離動詞はどのような多様性を持つか。

言語学における語彙レパートリーとは、対象の言語において特定の事象を表現するためにどのような語が存在するか、レパートリーとしての語彙の特徴と多様性のこととを指す。本節では、3つの言語の話者によって、各分離事象ビデオクリップに対して最も多く使用される動詞、いわゆる「最頻出動詞」に注目する。それによって、分離動詞はどのような典型性と多様性を持つかのか、日本語、中国語、中国手話における分離動詞の語彙レパートリーの特徴を考察する。各言語における分離事象のビデオクリップの最頻出動詞リストを表 7-4 の通り示す。

---

<sup>73</sup> 本実験は、Majid et al. (2008) と一致する階層型クラスター分析の方法を選択している。

表 7-4 分離事象ビデオクリップの最頻出動詞リスト

	場面	日本語	中国語	中国手話
M1	ハサミで髪を切る	切る	剪(jian)	手/V/利き手→非利き手/内向き
M2	爪切りで爪を切る	切る	剪(jian)	指/O/上→下/内向き
M3	ハサミでバラの葉っぱを切る	切る	剪掉(jian-diao)	手/V/利き手→非利き手/内向き
M4	鋸で木の枝を切る	切る	锯掉(ju-diao)	腕/U/非利き手→利き手/内向き
M5	鎌で芝生の雑草を刈る	刈る	割掉(ge-diao)	腕/D/外→内/非利き手側
M6	バリカンで後ろ髪を剃る	剃る	剃掉(ti-diao)	手/D/下→上/内向き
M7	シェーバーで頬の髭を剃る	剃る	剃掉(ti-diao)	頬/D/非利き手→利き手/内向き
M8	カッターナイフで鉛筆を削る	削る	削(xiao)	指/U/内→外/下向き
M9	ナイフでりんごの皮を剥く	剥く	削(xiao)	手/U/上→下/内向き
M10	手で卵の殻を剥く	剥く	剥掉(bo-diao)	手/Q/内→外/内向き
M11	手でバナナの皮を剥く	剥く	剥掉(bo-diao)	指/Q/上→下/内向き
M12	手で木の桃をもぐ	もぐ	摘下(zhai-diao)	脣/S/外→内/外向き
M13	手でバラの花びらを取る	取る	撕掉(si-diao)	手/Q/外→内/外向き
M14	ハサミで木の葡萄を取る	取る	剪下(jian-xia)	手/V/利き手→非利き手/下向き
M15	手で花を取る	取る	摘下(zhai-xia)	手/CH/外→内/外向き
M16	毛玉クリーナーでセッターの毛玉を取る	取る	剃掉(ti-diao)	手/C/円状の動き/下向き
M17	包丁で魚の鱗を取る	取る	刮掉(gua-diao)	手/U/内→外/内向き
M18	手で畑のコーンを取る	取る	摘掉(ge-diao)	手/D/非利き手→利き手/下向き
M19	手で白髪を抜く	抜く	拔掉(ba-diao)	手/Q/下→上/下向き
M20	手で芝生の雑草を抜く	抜く	拔掉(ba-diao)	指/Q/下→上/下向き
M21	手でリモコンの電池を抜く	抜く	取出(qu-chu)	手/D/内→外/下向き
M22	手で鞘からナイフを抜く	抜く	取出(qu-chu)	手/H/非利き手→利き手/内向き
M23	ポンプで密封袋の空気を抜く	抜く	抽出(chou-chu)	手/CH/下→上/下向き
M24	ポンプで金魚鉢の水を抜く	抜く	抽出(chou-chu)	脣/CH/下→上/下向き
M25	注射器で瓶のインクを吸い上げる	吸い上げる	吸出(xi-chu)	手/H/下→上/下向き
M26	手でぬいぐるみの詰め物を取る	取る	掏出(tao-chu)	手/CH/非利き手→利き手/内向き
M27	手でコンタクトレンズを取る	取る	取出(qu-chu)	目/Q/内→外/内向き
M28	手でタオルを絞る	絞る	拧(ning)	脣/D*2/回転/下向き
M29	手で壁のポスターを剥がす	剥がす	撕掉(si-diao)	手/D/上→下/外向き
M30	手で腕に貼ってある絆創膏を剥がす	剥がす	撕掉(si-diao)	腕/H/非利き手→利き手/下向き
M31	手でノートの紙を剥がす	剥がす	撕掉(si-diao)	手/D/外→内/下向き
M32	ドライバーで金属缶の塗料を剥がす	剥がす	磨掉(mo-diao)	手/H/利き手→非利き手/下向き
M33	コルク抜きでワインのコルクを抜く	抜く	拧掉(ning-diao)	手/H/下→上/下向き
M34	六角レンチで机のネジを抜く	抜く	拧掉(ning-diao)	手/I/回転/下向き
M35	手でコンセントからプラグを抜く	抜く	拔掉(ba-diao)	手/W/非利き手→利き手/下向き
M36	手で指輪を抜く	抜く	摘掉(zhai-diao)	指/O/内→外/下向き
M37	手でメガネを外す	外す	摘掉(zhai-diao)	目/C*2/内→外/外向き
M38	手でマスクを外す	外す	摘掉(zhai-diao)	口/C*2/内→外/外向き
M39	手でリボンを解く	解く	拆掉(chai-diao)	脣/Q*2/回転+非利き手→利き手/下向き
M40	手で腕の包帯を外す	外す	拆掉(chai-diao)	腕/CH/回転/内向き
M41	手でプレゼントの包装紙を外す	外す	拆掉(chai-diao)	手/D/非利き手→利き手/下向き
M42	レンチで自転車の車輪を外す	外す	卸掉(xie-diao)	手/D/回転+非利き手→利き手/下向き
M43	コットンでメイクを落とす	落とす	卸掉(xie-diao)	頬/CH/円状の動き/内向き
M44	ブラシで床の黒ずみを落とす	落とす	刷掉(shua-diao)	手/I/非利き手→利き手/下向き
M45	黒板消しで黒板の字を消す	消す	擦掉(ca-diao)	脣/C/非利き手→利き手/外向き
M46	手でカレンダーの一ページを取る	取る	撕掉(si-diao)	手/D/非利き手→利き手/外向き
M47	手で壁から時計を取る	取る	取下(qu-xia)	頭/L*2/上→下/外向き
M48	手でペンのキャップを取る	取る	取下(qu-xia)	手/D/非利き手→利き手/下向き

表 7-4 の日本語の最頻出動詞リストを見ると、母語話者が各ビデオクリップに対して使用した動詞は、M25 の「吸い上げる」を除いて、全て単純動詞だと分かる。これらの単純動詞のうち、一番多く見られるのは、「取る」(48 件のうち、11 件、22.9%) である。「取る」は特定の様態情報を含意せず、分離事象の経路情報のみを含む経路動詞である。実際、この 48 件のビデオクリップのいずれに対しても、「取る」を使用して描写することが可能である。

それに対し、中国語母語話者の最頻出動詞のリストでは、単純動詞が非常に少なく(5 件, 10.4%)、「主体動作 (V1) + 変化結果 (V2)」という組み合わせの複合動詞が多く存在する。複合動詞の中で、表 7-4 における最頻出動詞として最も見られるのは、“V 掉 (diao)” である(31 件, 64.6%)。“V 掉” が最頻出動詞としてリストされていない残りの 17 件のビデオクリップに対しても、“V 掉” の使用も確認できる。また、“V 掉”的他に、複合動詞 “V 下 (xia, 降りる/下がる)”、“V 出 (chu, 出る)” もリストに見られる。その中で、“V 下” は、“V 掉” と一定の互換性がある。特に、植物や果実の収穫の場面(例: M12、M14、M15) では、“V 掉” よりも “V 下” が使用される傾向がある。第 6 章の 6.4 節で触れたように、“V 下” は、求心型の前項動詞と結合しやすく、物の所有権を獲得するという事象を表現する。“V 掉” は、遠心型の前項動詞と結合しやすく、もの全体から一部を分離するという事象を表す。この点から考えると、植物や果実の収穫という場面において、“V 掉” の使用も可能であるが、どちらかといえば求心型の動きに合致する “V 下” の方が選好されることが説明できる。また、“V 出” は、「容器-中身」の空間的関係にあたる場面(M21-M27) に関して、“V 掉” よりも優先に使用されている。第 6 章の 6.5 節で分析したように、中国語は、日本語と空間的関係の捉え方が異なる。「内から外へ」という移動の経路を表す場合、経路を規定しない “V 掉” よりも、経路を明確に指定する “V 出 (chu)” によってその空間的関係を言語化していることが分かる。

以上、日本語と中国語の分離動詞の語彙レパートリーでは、それぞれ単純動詞「取る」と複合動詞“V 掉”という使用範囲が広く、汎用性が高い語が存在することを示した。また、これらの汎用性が高い語の特徴から、それぞれの言語の類型的特徴がうかがえる。「取る」が経路動詞である点は、語彙化類型論において日本語が「経路言語」とされていることと一致している。複合動詞 “V 掉” においては、前項動詞 V1 (例:

“剪 (jian, 切る)”、“拔 (ba, 抜く)”が主動詞として動作主体の様態や手段を含意する点は、中国語が「様態言語」であることに合致する。

また、動詞の多様性に関して、最頻出動詞のタイプ数（異なり語数）を確認すると、日本語には、15語があり、中国語には、25語がある。日本語と比べると、中国語の分離動詞のレパートリーがより豊富であると言える。

一方、中国手話の場合、最頻出動詞は、前述のように「位置/手型/動き/手のひらの向き」という4つのパラメータの組み合わせの形で記述される。「位置」というパラメータにおいては、「手」が最も多い（48件のうち、28件、58.3%）。この「手」は「非利き手」を指す。中国手話で分離事象を表す際には、非利き手で背景を表しながら、利き手で分離動作（動詞）を表すという形式がよく使用されている。このため、利き手によって表される分離動詞の「位置」というパラメータは、「非利き手」（の付近）であると記述される。また、「手」の他に、「指」、「目」、「口」、「頭」、「頬」、「顎」、「腕」という位置が見られる。次に、「手型」というパラメータにおいては、「D」が一番多く（12件）、次に「Q」（7件）、「H」（5件）、「CH」（5件）、「U」（4件）、「V」（4件）、「C」（4件）、「I」（2件）、「L\*2」（1件）、「5」（1件）、「W」（1件）が見られる。この中で、手型「Q」、「CH」、「5」が類似し、話者の分離物の視覚的形状に関する認識によって、一定の互換性が見られるが、（10）から（12）のように、分離物の特徴によって、それぞれの手型が選好される傾向が見られる。

(10)



花/

(花びらを) 取る (動詞部)

背景/

背景 (非利き手) + 焦点 (利き手) + 動作

「手でバラの花びらをとる。」



木/

花/

(花を) 取る (動詞部)

背景/

焦点/

背景 (非利き手) + 焦点 (利き手) + 動作

「手で花をとる。」



木

桃

(桃を) もぐ (動詞部)

背景/

焦点/

焦点 + 動作

「手で桃をもぐ。」

(10) では、分離物（花びら）が 2 次元の形状にあたり、小さいものである。分離物の形に合わせて、手型「Q」で分離動作を表す。(11) では、分離物（花）が 3 次元の立体的なものであり、(10) の花びらより大きいものの、小さいものであると認識されるため、手型「CH」で分離動作を表す傾向がある。(12) では、分離物（桃）が 3 次元の物であり、(10) の花びら、(11) の花よりも、確実に大きな物であると認識される。このため、手型「5」で分離動作を表す。

そして、「動き」というパラメータに関して、最頻出動詞リストでは、「非利き手→利き手」、「上→下」、「内→外」、「外→内」、「回転」、「円状の動き」などの様々な方向がある。また、手話動詞の「動き」は、現実の分離動作と一定の類似性が捉えられる。例えば、M1 のように、ハサミを行使する場合、「利き手→非利き手」という方向で動く。M47 のように、壁に掛かっている時計を取り外す場合、「上→下」という方向で動く。最後に、「手のひらの向き」というパラメータに関して、「下向き」、「内向き」、「外向き」、「非利き手側」という 4 種類が見られる。

以上の通り、典型性と多様性の観点から 3 つの言語における分離事象を表す動詞の特徴を考察した。次節では、3 つの言語の分離事象の語彙カテゴリー化の特徴を考察する。

### 7.5.2 分離事象の語彙カテゴリー化

本節では、RQ2について、階層型クラスター分析の結果に基づき、日本語、中国語、中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化の特徴を示し、それぞれどのような相違点と類似点があるかを考察する。

RQ2　　日本語、中国語、中国手話において、分離事象の語彙カテゴリー化に関する基準には、どのような相違点と類似点があるのか。

2.1 3つの言語における語彙カテゴリー化の基準には、どのような相違点があるのか。

2.2 3つの言語における語彙カテゴリー化の基準には、どのような類似点があるのか。

#### 7.5.2.1 日本語の分離事象の語彙カテゴリー化

はじめに、日本語母語話者のデータに基づく階層型クラスター分析の結果は、図7-2の通りである。階層型クラスター分析では、デンドログラムのどの位置にカッティングポイントを設定するかによって、クラスターの数が変わる。クラスターの数を合理的な範囲に抑えるため、本実験は、定常状態が最も長い位置にカッティングポイント（破線）を設定する。これにより、日本語の分離事象の語彙カテゴリー化では、6つのクラスターが形成された。各クラスターには、上からの順に、それぞれJ1-J6と番号を付けた<sup>74</sup>。また、クラスター間の上下関係をより明確に示すため、図7-2では2つの上位のクラスターを異なる色で示している。加えて、図7-2のデンドログラムは図7-3のように階層的に表示することもできる。以下、各クラスターの特徴とそれらを区分するカテゴリー化の基準を説明する。

---

<sup>74</sup> Jは日本語母語話者（Japanese native speaker）によるクラスターを意味する。

図 7-2 日本語母語話者の階層型クラスター分析の結果

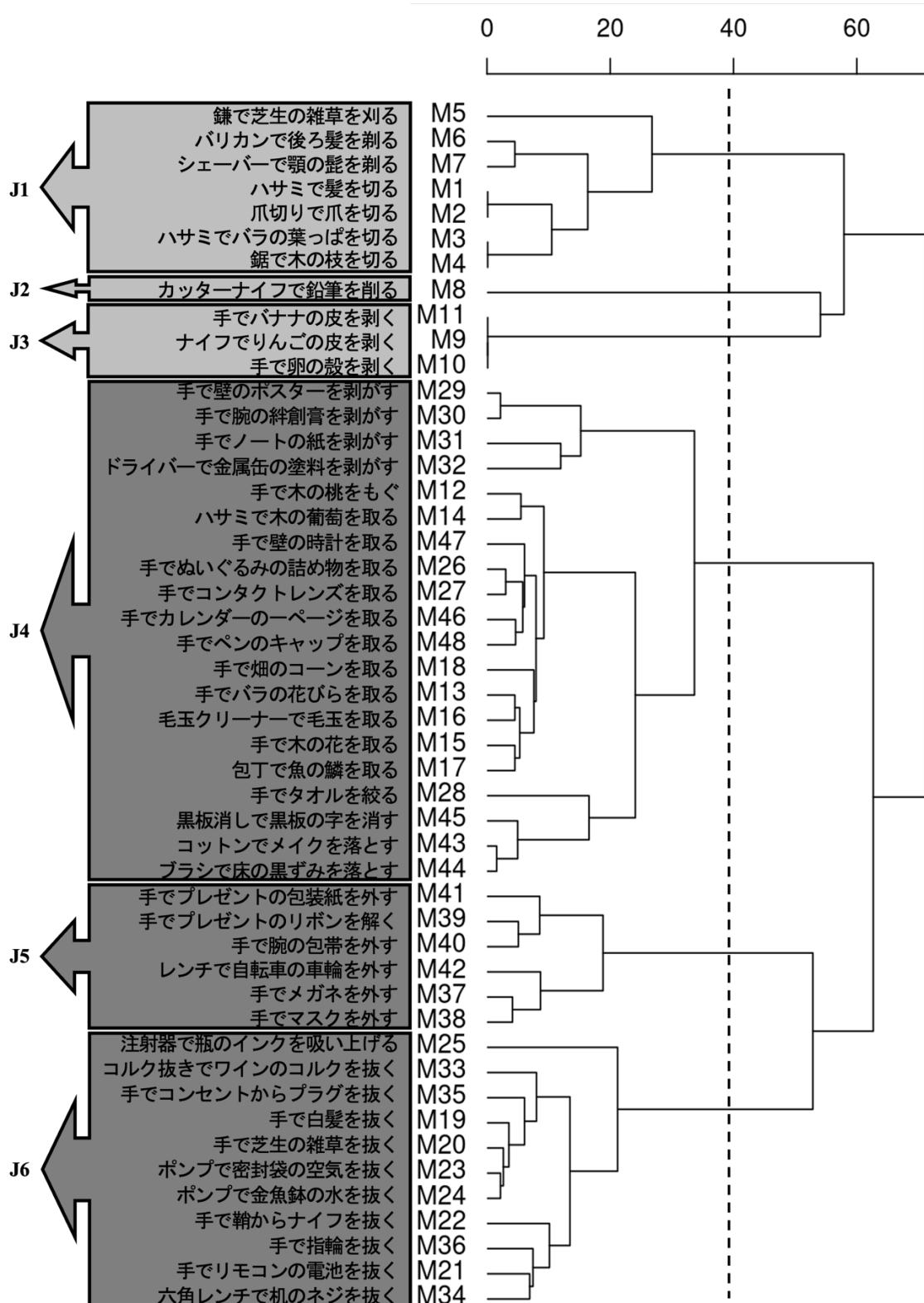
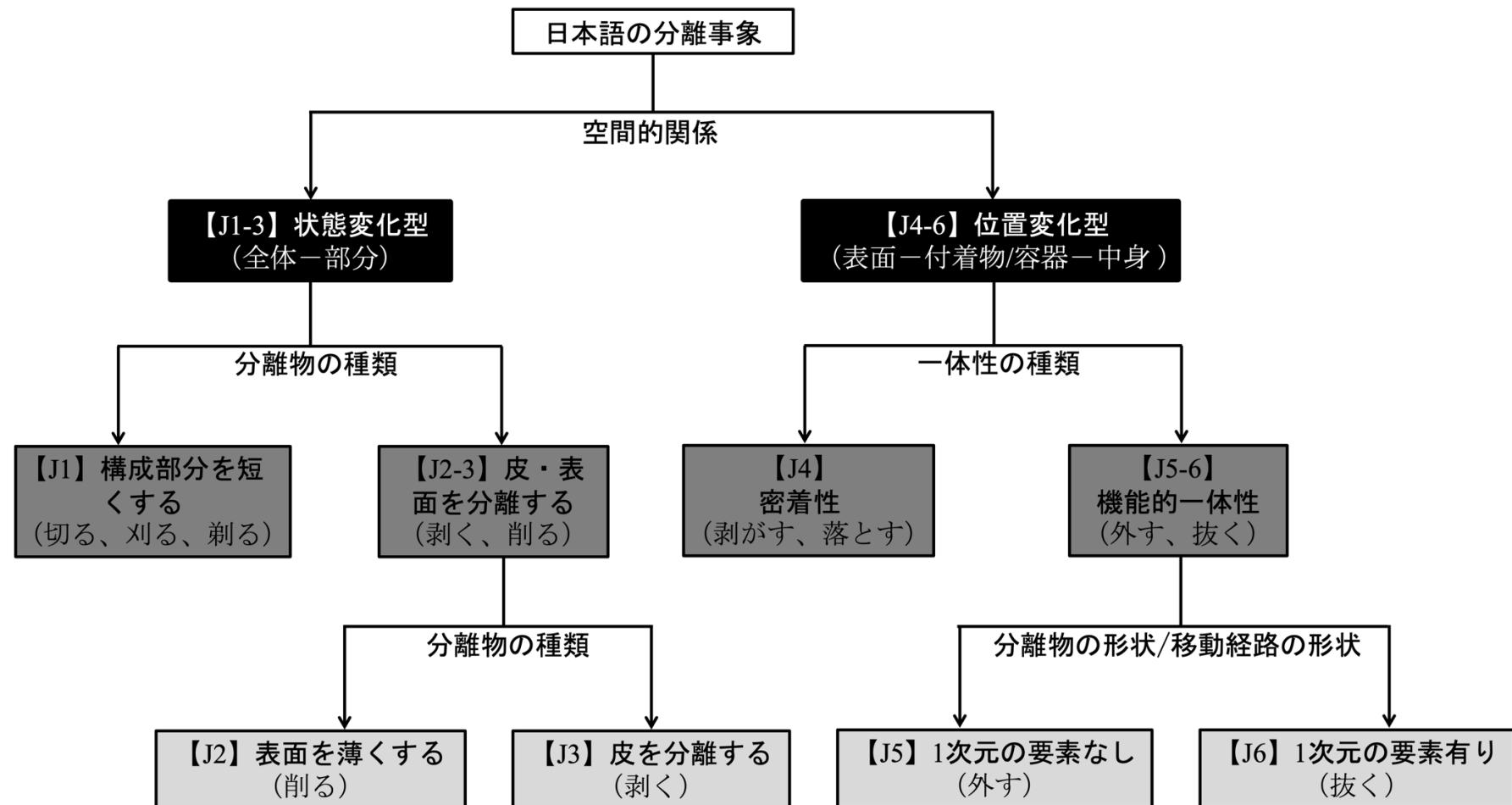
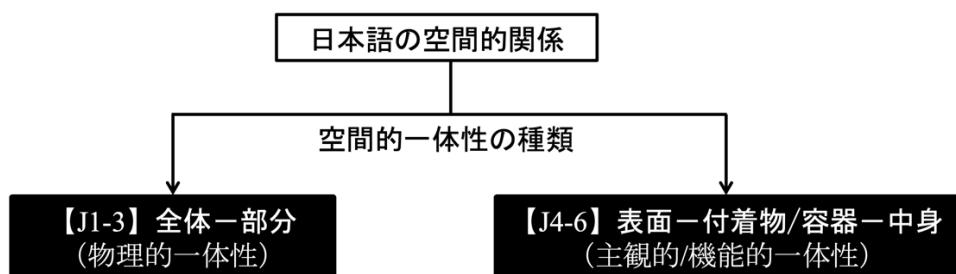


図 7-3 日本語の分離事象の語彙カテゴリー化



まず、上位のクラスターを見る。図 7-3 から分かるように、日本語の分離事象は、空間的関係によって、「全体-部分」の空間的関係に当たる場面【J1-3】と、「容器-中身」または「表面-付着物」の空間的関係が優勢である場面【J4-6】に分かれる。第 5 章の分析の通り、「全体-部分」の空間的関係では、分離元と分離物が本来的に一体化したもの（第 5 章における「物理的一体性」）と捉えられる。それに対し、「容器-中身」と「表面-付着物」の空間的関係では、分離元と分離物が本来的に一体化しておらず、主観的に一体化したもの（第 5 章における「主観的/機能的一体性」）と捉えられる。すなわち、図 7-4 のように、日本語における空間的関係は、空間的一体性の種類によって区別して認識されている。

図 7-4 日本語における空間的関係という基準の捉え方



また、前者の【J1-3】では、「切る」、「刈る」、「剥く」のような使役状態変化動詞が多く使用され、それは、「空間的関係の仮説」における「状態変化型分離事象」を表す動詞の特徴と一致している。このため、【J1-3】を「状態変化型分離事象」のカテゴリーと記述する。それに対し、後者の【J4-6】では、「抜く」、「剥がす」、「外す」のような使役移動動詞が多く使用され、それは、「空間的関係の仮説」における「位置変化型分離事象」を表す動詞の特徴と一致している。このため、【J4-6】を「位置変化型分離事象」のカテゴリーと記述する。すなわち、現代日本語において、2 種類の分離事象が存在するという「空間的関係の仮説」は日本語母語話者の実験データによって立証されたことになる。

さらに、第 5 章で触れたように、構文的特徴だけで全ての分離動詞を 2 種類に分類するのは難しい。日本語の実験結果から、「削る」、「剃る」のような構文的特徴で分類されにくい動詞が表す事象は、「切る」のような状態変化型分離動詞の表す事象と類似

すると捉えられており、「状態変化型分離事象」のカテゴリー【J1-3】に位置付けられることがわかる。すなわち、「空間的関係の仮説」という理論的仮説は、本研究における日本語の実験結果によって、さらに明確化することができる。

次に、それぞれのカテゴリーにおける下位のクラスターを見る。「状態変化型分離事象」の【J1-3】は、すべて「全体-部分」の空間的関係にあたり、一続きの物（分離元）のある部分（分離物）を分離する場面を表す。【J1-3】は、分離物の種類によって、分離元の一般的な構成部分を短くなるように分離する場面【J1】（例：M1「髪を切る」、M7「頸の髪を剃る」）と、分離元を覆う皮・表面を分離する場面【J2-3】（例：M9「りんごの皮を剥く」）に分かれる。また、【J2-3】は、さらに、力強く物の表面を薄くする場面【J2】（例：M8「鉛筆を削る」）と、皮を剥く場面【J3】（例：M9「りんごの皮を剥く」、M10「卵の殻を剥く」）に分かれる。具体的に言えば、【J3】では、分離物が「りんごの果肉」、「卵の中身」と明確に区別される典型的な「皮」であるのに対し、【J2】では、「鉛筆」のどの部分が皮であるか、どの部分が中身であるか、明確に区別できない。分離物が非典型的な「皮」であり、物の外層にある「表面」となっている。

一方、「位置変化型分離事象」の【J4-6】では、「全体-部分」の空間的関係も混在しているが、「表面-付着物」と「容器-中身」の空間的関係の方が優勢である。このカテゴリーにおける分離元と分離物は「主観的/機能的一体性」という空間的一体性を持つことで、分離物の移動によって、分離元の状態変化も生じる。分離動作によって、分離物と分離元のどのような「主観的/機能的一体性」が喪失されるかによって、【J4-6】は、「密着性」に当たる場面【J4】（例：M44「床の黒ずみを落とす」）と「機能的一体性」に当たる場面【J5-6】（例：M21「リモコンから電池を抜く」）に分かれる。また、【J5-6】は、さらに、分離物の特徴または移動の経路の特徴によって、1次元の要素を含意しない場面【J5】（例：M37「メガネを外す」）と1次元の要素を含む場面【J6】（例：M21「リモコンから電池を抜く」）に分かれる。ここで1次元の要素は分離物の特徴を指す場合もあれば、移動の経路の特徴を指す場合もある。例えば、M21の「電池を抜く」では、分離物「電池」が1次元の物である。しかし、M23の「ポンプで袋の空気を抜く」のように、「空気」は1次元の物ではなく、無形の0次元の物と記述されるが、ポンプで空気を取り除く経路が1次元である、というような例も見られる。M36の「指輪を抜く」も同様に、「指輪」は1次元の物ではないが、指から取り除く経路は、1次元である。これらのような場面は、いずれも「抜く」という動詞が使用される傾向

があり、【J6】にカテゴリー化される。

以上の通り、日本語の分離事象は、「状態変化型分離事象」と「位置変化型分離事象」という2つに語彙カテゴリー化され、その2つ上位カテゴリーは、それぞれ3つの下位のクラスターとして細分化される。

#### 7.5.2.2 中国語の分離事象の語彙カテゴリー化

次に、中国語母語話者のデータに基づく階層型クラスター分析に移る。結果は、図7-5の通りである。日本語の階層型クラスター分析と同様な処理を行い、クラスターの数を合理的な範囲で抑え、デンドログラムの定常状態が最も長い位置にカッティングポイント（破線）を設定した。これにより、中国語における分離事象の語彙カテゴリー化では、13個のクラスターが形成された。それぞれのクラスターに【C1-13】で番号を付けた<sup>75</sup>。この13個のクラスターの上下関係を視覚化するため、図7-5の3つの上位のクラスターを異なる色で示している。また、全体を俯瞰しやすいように、図7-5のデンドログラムを図7-6のように図式化する。以下、各クラスターの特徴とカテゴリー化の基準を説明する。

---

<sup>75</sup> Cは中国語母語話者（Chinese native speaker）によるクラスターを意味する。

図 7-5 中中国語母語話者の階層型クラスター分析の結果

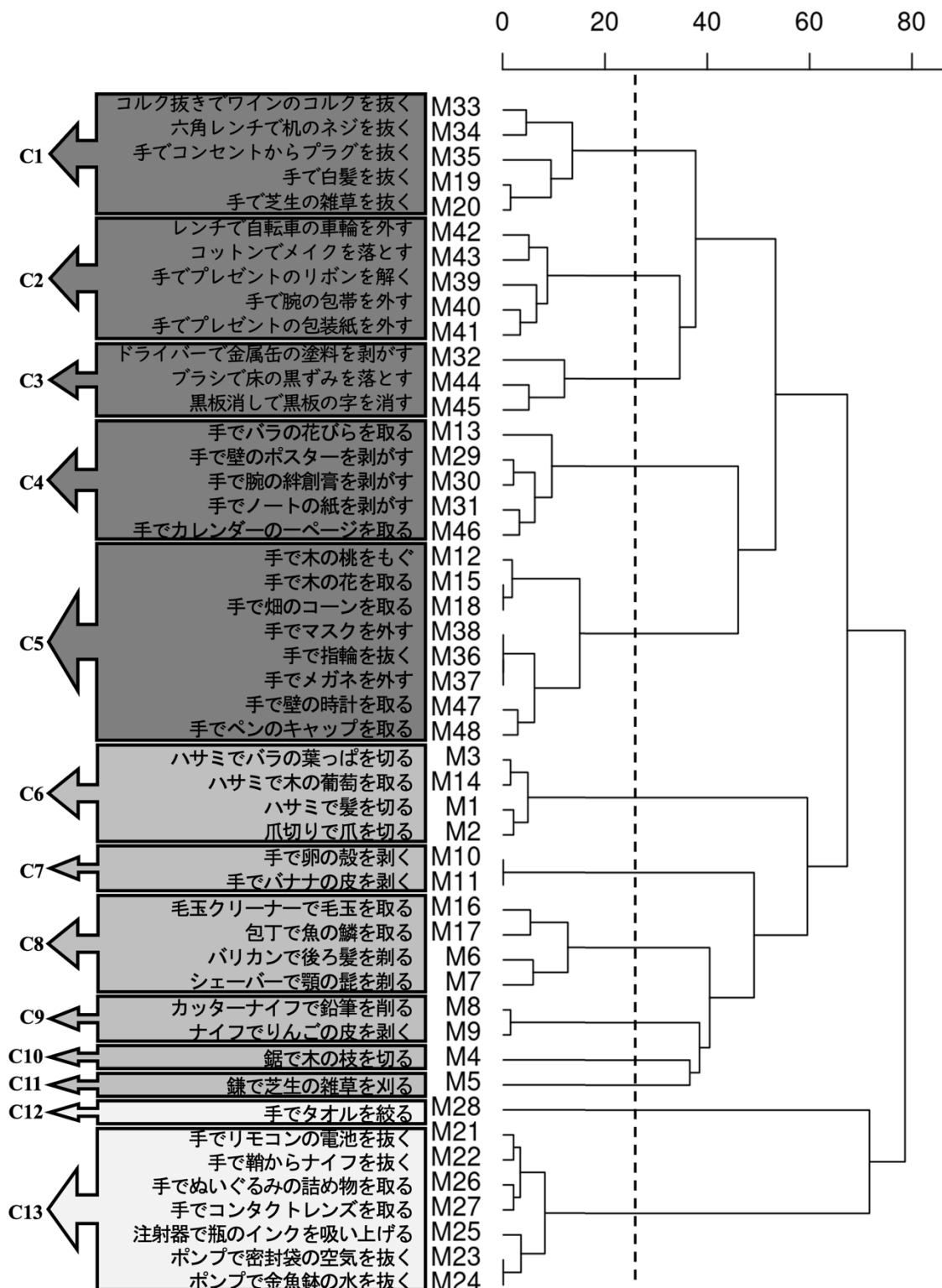
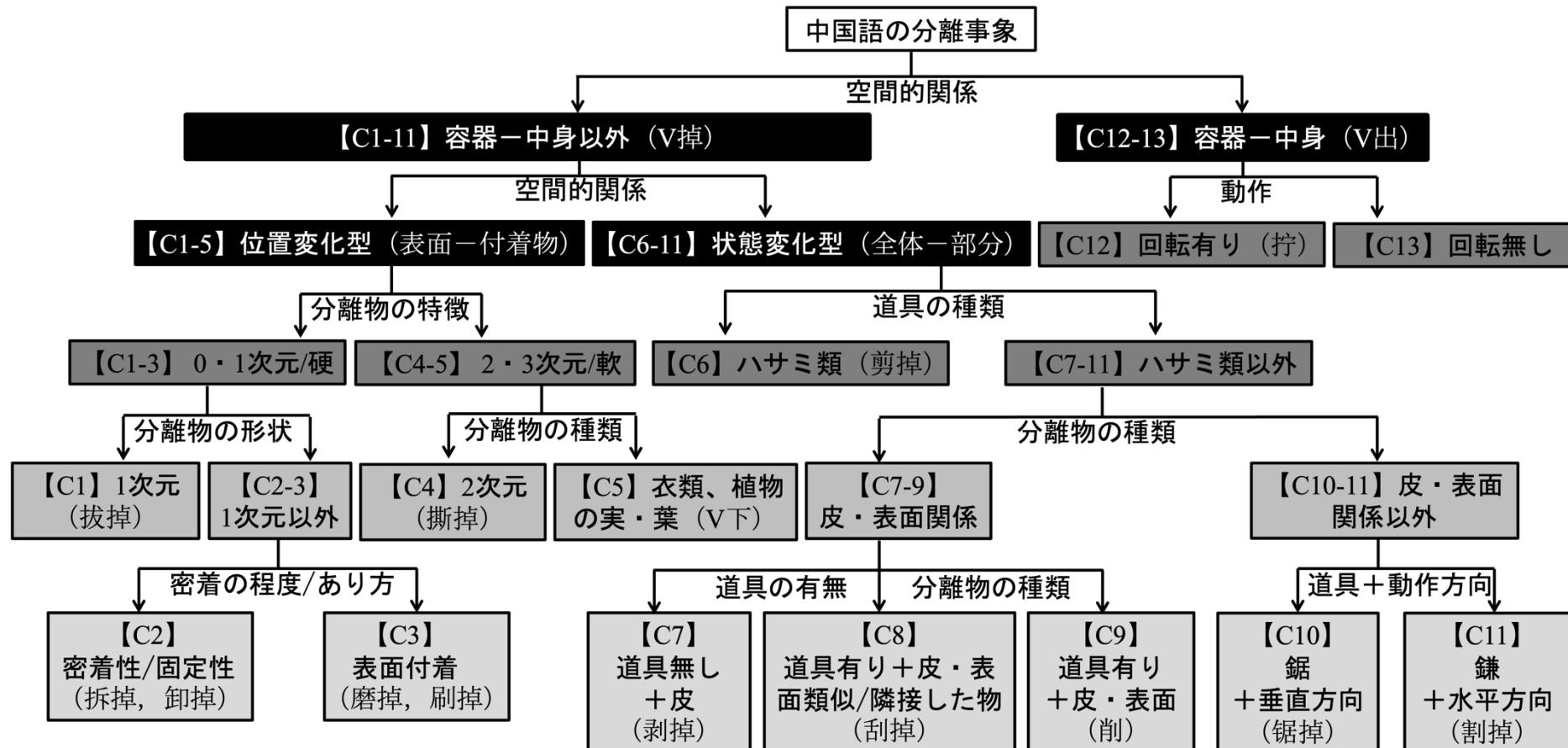
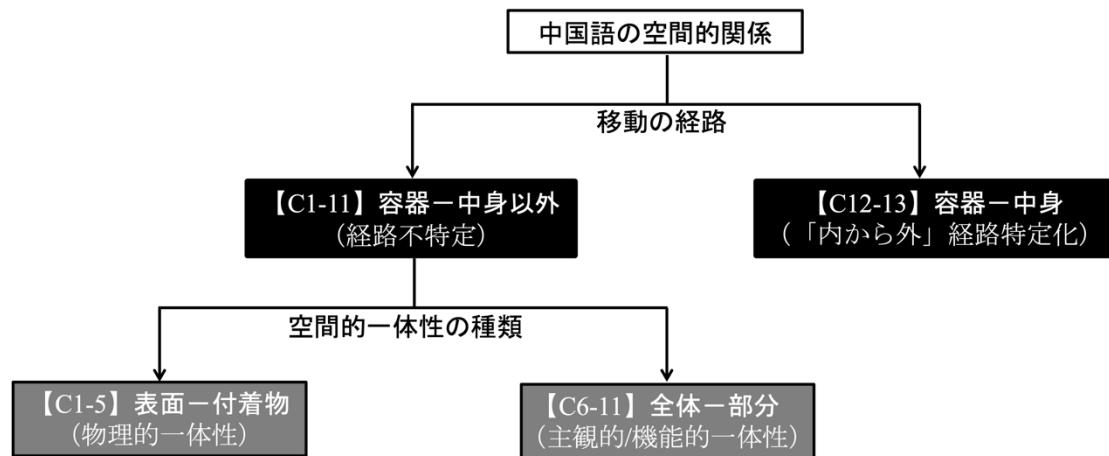


図 7-6 中国語の分離事象の語彙カテゴリー化



まず、上位のクラスターについて見る。図 7-6 を見ると、中国語の分離事象では、日本語の分離事象と同様に、空間的関係が最も上位のカテゴリー化の基準となり、その基準によって、3 つの上位のカテゴリーに大きく分かれる。しかし、日本語の分離事象の語彙カテゴリー化と比べると、中国語では、空間的関係がより細分化される傾向がある。中国語では、「全体-部分」または「表面-付着物」の空間的関係に当たる場面【C1-11】は、「容器-中身」の空間的関係に当たる場面【C12-13】と区別してカテゴリー化される。前者には、“V 掉” が優先に用いられるのに対し、後者には、移動の経路の方向を規定する “V 出” が用いられやすい傾向がある。その上で、【C1-11】は、さらに、「表面-付着物」の空間的関係が優勢である場面【C1-5】（例：M33 の「ワイン」と「コルク」）と「全体-部分」の空間的関係に当たる場面【C6-11】（例：M4 の「木」と「枝」）に分かれる。このことから、中国語の分離事象の空間的関係は、まず、「容器-中身」であるかどうかによって区別された上で、「容器-中身」ではない空間的関係は、日本語と同様に、分離物と分離元が本来的に一体化している「全体-部分」、分離物と分離元が本来的に一体化していない「表面-付着物」として区別して認識されていることが分かる。図 7-7 の通りである。

図 7-7 中國語における空間的関係という基準の捉え方



また、【C1-5】では、使役移動動詞 + “掉” という組み合わせの動詞が多く使用されるのに対し、【C6-11】では、使役状態変化動詞 + “掉” という組み合わせの動詞が多く見られる。前項動詞の意味的特徴から、前者の【C1-5】を「位置変化型分離事象」の力

テゴリーと記述し、後者の【C6-11】を「状態変化型分離事象」のカテゴリーと記述する。これによって、「空間的関係の仮説」は、日本語だけではなく、中国語の母語話者による実験データから同様に立証されたことになる。

次に、下位のクラスターを見る。位置変化型分離事象の【C1-5】では、分離物が形状的に1次元の物・0次元の物である場面、または分離物が硬い物である場面が【C1-3】（例：M34のネジ）としてカテゴリー化され、分離物が形状的に2次元の物・3次元の物である場面、または分離物が軟らかい物である場面【C4-5】（例：M29のポスター）と区別される。その上で、【C1-3】は、分離物の形状によって、1次元の分離物である場面【C1】（例：M34のネジ）と1次元の分離物以外の場面【C2-3】（例：M42の車輪）に分かれる。また、中国語の【C1】は、日本語の1次元の要素を含み、機能的一体性が捉えられる場面【J6】と類似しているが、カテゴリー化の範囲が異なる。中国語の【C1】の1次元は、分離物の形状のみを指すのに対し、日本語の【J6】の1次元は、分離物の形状だけではなく、移動の経路の形状も指す。これにより、M36の「指輪を抜く」のような移動の経路が1次元である場面は、中国語において【C1】にカテゴリー化されていない。

そして、【C2-3】は、どちらも分離物が1次元でない場面であるが、分離物の分離元への密着の程度/あり方によって、高い密着性/固定性を強調する場面【C2】（例：M42「車輪を外す」、M43「マイクを落とす」）と、分離物が分離元の表面へ付着している場面【C3】（例：M44「床の黒ずみを落とす」、M45「黒板の字を消す」）に分かれる。

【C4-5】は、分離物の特徴によって細分化される。2次元の分離物の場面【C4】（例：M13の「花びら」、M29の「ポスター」）と、衣類、植物の葉、実というような3次元の分離物の場面【C5】（例：M38の「マスク」、M12の「桃」）に分かれる。中国語では、2次元の分離物の場面【C4】に対し、“撕掉”（si-diao, 剥がす/ちぎる）が頻繁に使用されており、これは、日本語の「剥がす」が表す場面と類似しているが、「剥がす」という分離事象は分離物と分離元の接触面がノリで付けられていることを含意するのに対し、“撕掉”は、ノリがあるかどうかに関わらず、分離物が2次元の形状/軟らかいであることが際立つ。これにより、M13の「花びらを取る」のような、ノリがない2次元の分離物が移動する場面は、中国語において【C4】にカテゴリー化される。

一方、状態変化型分離事象のカテゴリー【C6-11】は、まず、道具の種類によって、ハサミ類の道具で分離する場面【C6】（例：M1「ハサミで髪を切る」）とハサミ以外の

場面【C7-11】(例:M4「ノコギリで枝を切る」)に分かれる。ハサミという道具は、2つの刃を持つ点で、他の道具と異なる特徴を持つ。また、「爪切り」という道具は、狭義にはハサミではないが、2つの刃を持つ点でハサミと一致するため、同様にハサミ類であると捉えられる。これによって、M2の「爪切りで爪を切る」は、【C6】にカテゴリー化される。

そして、【C7-11】はいずれも道具がハサミではないが、分離物の種類によって、分離物が皮・表面または皮・表面に関わるもの（類似関係と隣接関係の両方を含む）である場面【C7-9】と、皮・表面との関係がないものである場面【C10-11】に分かれる。その上で、【C7-9】では、道具なしで皮を分離する場面【C7】(例:M11「手でバナナの皮を剥く」)、道具を使用して皮・表面に類似する物を分離する場面(例:M17「包丁で魚の鱗を取る」)または皮・表面に隣接する・付着した物を分離する場面(例:M16「毛玉クリーナーでセーターの毛玉を取る」)である【C8】、そして道具を使用して皮・表面を分離する場面【C9】(例:M9「ナイフでりんごの皮を剥く」)という3つが区別されている。この中で、中国語の【C7】、【C9】は、日本語の【J2】、【J3】とカテゴリー化の範囲が概ね対応するが、語彙カテゴリー化の基準に明確な違いがある。日本語では、分離物の種類がカテゴリー化の基準となる。この基準により、分離物が典型的な「皮」である場面【J3】(例:M9「ナイフでりんごの皮を剥く」、M10「手で卵の殻を剥く」、M11「手でバナナの皮を剥く」)と非典型的な「皮」である場面【J2】(例:M8「カッターナイフで鉛筆を削る」)という2つのクラスターが形成される。それに対し、中国語では、動作の特徴の1つ、すなわち道具の有無がカテゴリー化の基準となる。これにより、道具を使用せず、手で分離する場面【C7】(例:M10「手で卵の殻を剥く」、M11「手でバナナの皮を剥く」)は、ナイフを用いて分離する場面【C9】(例:M9「ナイフでりんごの皮を剥く」、M8「カッターナイフで鉛筆を削る」)と区別してカテゴリー化される。

また、中国語の分離事象の語彙カテゴリー化に関して、道具が重要な基準であることは、道具名詞の動詞化という現象からも捉えられる。【C10-11】のような「鋸」や「鎌」という道具を使用する場面に対し、それぞれの道具の特徴を示す特定の動詞が用いられる。また、これらの道具の使い方によって、分離動作の方向も異なることが窺える。鋸で分離する場面【C10】について見ると、この例では、道具“锯子(juzi, 鋸)”から転用操作によって動詞化される“锯掉(ju-diao)”という動詞が用いられる。この動詞

には、動作主体による垂直動作が含意される。一方、鎌で分離する場面【C11】では、道具“收割镰刀 (shouge-liandao, 鎌)”から転用される“割掉 (ge-diao)”という動詞が用いられ、水平動作が含意される。このように、中国語においては、動作の2つの特徴である「道具」と「動作の方向」の間に相関関係が見られる。

一方、先に触れたように、「容器-中身」の場面【C12-13】では、分離物の内から外へという移動の経路を明確に指定する“V出 (chu)”が使用されやすい傾向があり、「容器-中身」以外の場面【C1-11】と区別される。【C12-13】というカテゴリーは、動作の特徴によって、回転動作を含む場面【C12】（例：M28「タオルを絞る」）と回転動作を含まない場面【C13】（例：M24「金魚鉢の水を抜く」）に分かれる。

以上のように、中国語の分離事象の語彙カテゴリー化の結果として、3つの上位のカテゴリーが形成され、それぞれのカテゴリーでさらに複数の下位のクラスターが抽出できる。クラスターの数に着目すると、中国語は日本語よりも遙かに細かいカテゴリー化の傾向があると言える。

#### 7.5.2.3 中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化

以上、日本語、中国語の分離事象の語彙カテゴリー化を考察したが、次に、中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化の特徴を考察する。

図7-8は、中国手話の階層型クラスター分析の結果を示したものである。日本語と中国語の階層型クラスター分析と同様な処理を行い、クラスターの数を合理的な範囲で抑え、デンドログラムの定常状態が最も長い位置にカッティングポイント（破線）を設定した。これにより、中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化では、7つのクラスターが形成された。上からの順に各クラスターに【S1-7】で番号を付けた<sup>76</sup>。この7つのクラスターの上下関係を視覚化するため、図7-8で3つの上位クラスターに異なる色を付いた。また、図7-8のデンドログラムをもとに、クラスターの上下関係を示す図7-9を作成した。以下、中国手話における各クラスターの特徴とカテゴリー化の基準を説明する。

<sup>76</sup> Sは中国手話話者（native signer of Chinese Sign Language）によるクラスターを意味する。

図 7-8 中国手話母語話者の階層型クラスター分析の結果

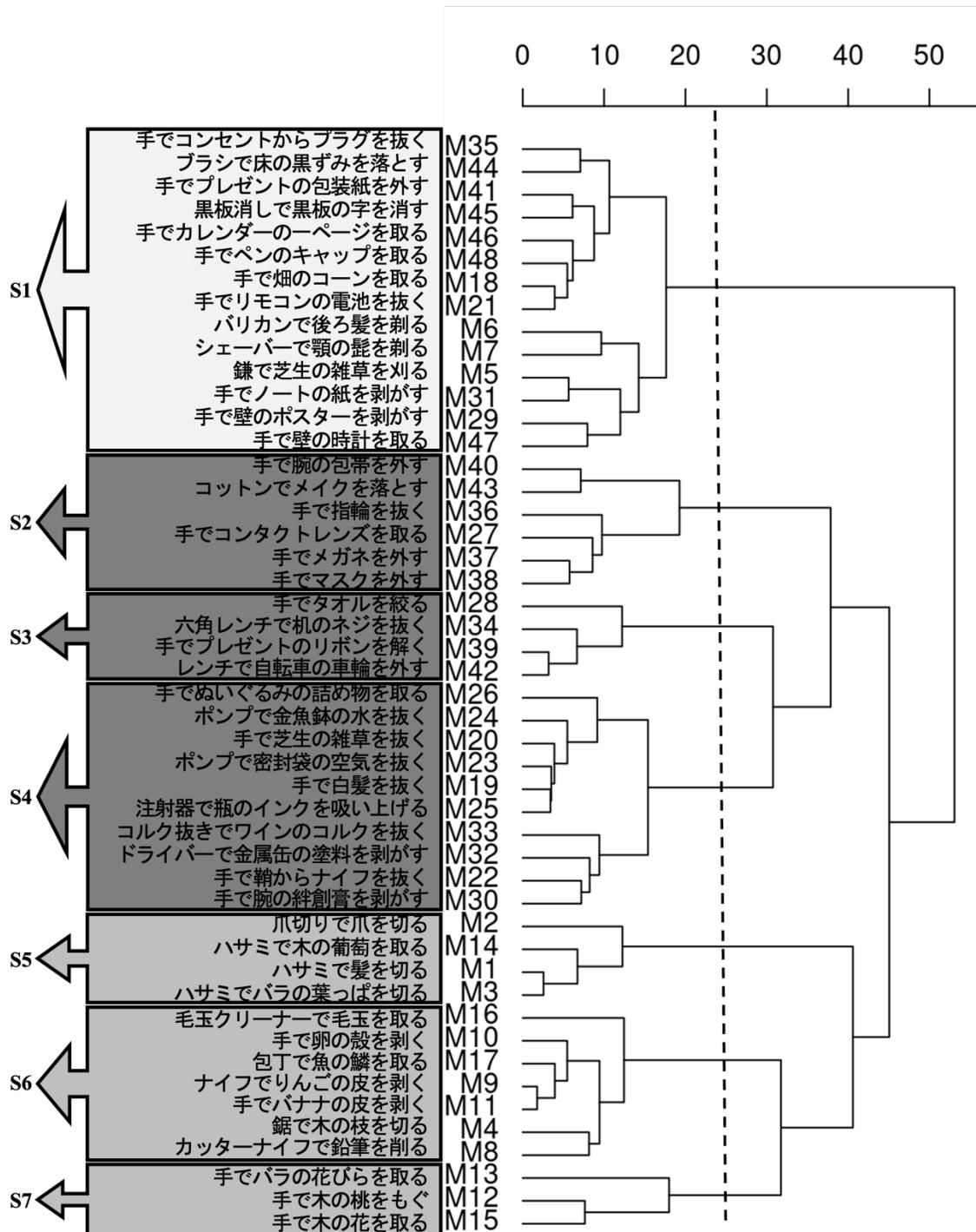


図 7-9 中中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化

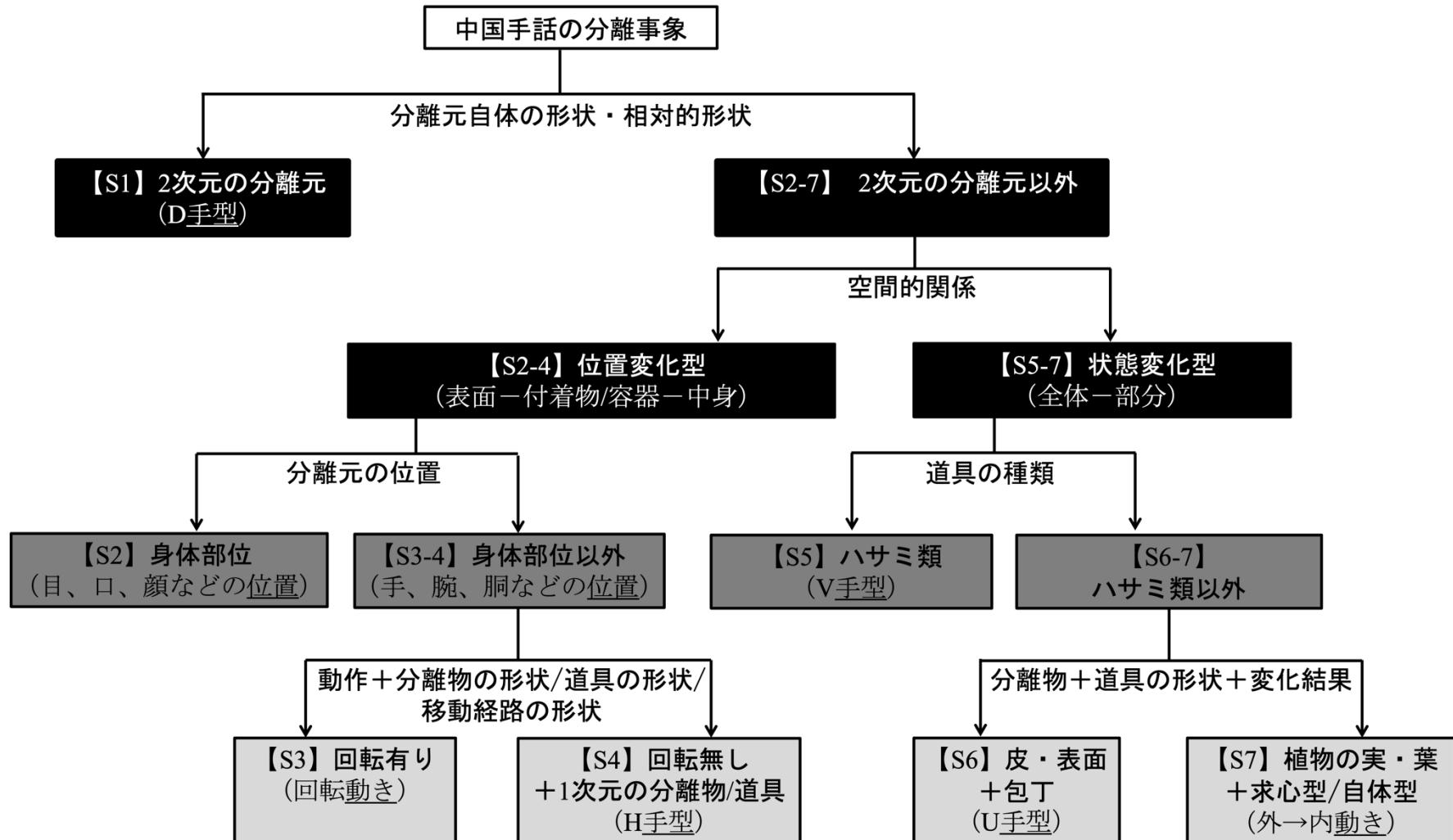


図 7-9 からわかるように、中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化においては、日本語、中国語と同様に、分離元と分離物の空間的関係が上位クラスターの区分の基準となるが、最上位の基準とは言えない。

中国手話では、まず、分離元の形状によって、各クラスターは、分離元が 2 次元である場面【S1】（例：M29「壁からポスターを剥がす」）と 2 次元ではない場面【S2-7】（例：M12「木から桃をもぐ」）に分かれる。また、ここで言う 2 次元の場面は、単に分離元自体の形状が 2 次元である場合だけではなく、7.3 節の実験題材の設定の際に説明したように、分離物に対する分離元の相対的形状、すなわち、分離物との接触面の形状も含まれる。分離元自体の形状、もしくは分離元の相対的形状のどちらか一方が 2 次元であるという条件を満たすなら、手型「D」が使用される傾向があり、【S1】にカテゴリー化される可能性がある。このため、M29 のように、分離元「壁」自身が 2 次元の物であり、分離元と分離物「ポスター」の接触面も 2 次元である場面は、【S1】にカテゴリー化される。M31 のように、分離元「ノート」自身は 2 次元の物であるが、分離物「紙」との接触面が 1 次元である場面も、【S1】にカテゴリー化される。M7 のように、分離元「頸」自身は 3 次元の物であるが、分離物「髪」との接触面が 2 次元である場合、同様に【S1】にカテゴリー化されるという結果が得られた。また、これらの場面の分離動作が、手型「D」で表現される傾向がある理由として、動作主体が 2 次元の分離元に合わせて、類似する様態で分離動作を行うためであると想定できる。これによって、事物を操作する動作の様態を示す「操作 CL 表現」（3.4 節を参照）の特徴がうかがえる。

その上で、【S2-7】という場面では、いずれも分離元は 2 次元に当てはまらないが、空間的関係によって、「表面-付着物」または「容器-中身」の空間的関係が優勢である場面【S2-4】と、「全体-部分」の空間的関係に当たる場面【S5-7】に分かれる。このような空間的関係による語彙カテゴリー化の結果は、前述の「空間的関係の仮説」と一致している。このため、「空間的関係の仮説」は、日本語、中国語だけではなく、中国手話の母語話者の実験データによっても検証されたと言える。日本語、中国語と同様に、前者の【S2-4】を「位置変化型分離事象」、後者の【S5-7】を「状態変化型分離事象」と記述する。

以上の通り、分離元の形状的特徴が、中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化にお

いて、最上位の基準となっている。分離元と分離物の空間的関係は、上位から数えて2番目の基準であると言える。この2つの基準によって、中国手話において、2次元の分離元である【S1】、2次元の分離元ではない「位置変化型分離事象】【S2-4】、2次元の分離元ではない「状態変化型分離事象】【S5-7】という3つの上位のカテゴリーが捉えられる。

次に、下位のクラスターを見る。まず、「位置変化型分離事象」のカテゴリー【S2-4】における下位のクラスターの特徴を分析する。【S2-4】は、まず、分離元の位置によって、分離元が身体部位に当たる場面【S2】（例：M36の「指」、M37の「目」、M38の「口」）と、それ以外の場面【S3-4】に分かれる。分離事象においては、分離元が背景要素として、移動の焦点である分離物の相対的位置/場所を示す。

7.5.1節の中国手話の語彙レパートリーで説明したように、中国手話では、利き手で焦点の分離物の移動を表し、非利き手で背景の分離元を表すという一般的な慣習がある。（13）のように、M4の「木の枝を切る」という場面では、非利き手で分離元「木」を示す。それに対し、分離元が特定の身体部位である場合、あえて非利き手で背景の分離元を示す必要がない。手話話者は、自分の体を利用して、直観的に身体部位の位置（の近く）に利き手で分離物の移動を表す。（14）のように、M38の「マスクを外す」という場面では、「口」の位置で分離動作を表す。すなわち、分離元が身体部位である場合、分離動詞の「位置」は、身体部位の位置と一致している。背景要素に関する表現の仕方が異なるため、分離元が身体部位に当たる場面は他の場面と区別され、【S2】としてカテゴリー化される。

(13)



木

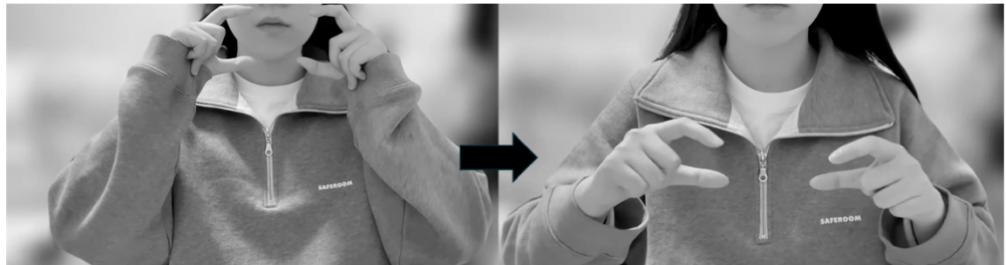
(枝を) 切る

背景

道具+背景+焦点+動作

「木の枝を切る」

(14)



(マスクを) 外す

背景十焦点十動作

「マスクを外す」

また、【S3-4】はいずれも、分離元が身体部位ではないが、動作の特徴によって、回転動作を含む場面【S3】（例：M28「タオルを絞る」）、M34「ネジを抜く」）と回転動作を含まない場面【S4】（例：M22「ナイフを抜く」、M23「ポンプで空気を抜く」）に分かれる。また、回転動作を含まない場面【S4】では、分離物、移動の経路、そして道具の形状にも特徴が見られる。【S4】にカテゴリー化されるビデオクリップは、1次元の要素が含まれるという点で共通している。日本語と中国語の語彙カテゴリー化には、同様に、1次元の要素で特徴付けられるクラスター【J6】、【C1】が存在する。しかし、これら3つの言語では、1次元の要素を含むカテゴリー化の範囲に、違いが見られる。この中で、中国語の【C1】は範囲が一番狭く、分離物が1次元である場合のみ、このクラスターに含まれる（例：M19の「白髪を抜く」）。日本語の【J6】のカテゴリー化の範囲は、中国語の【C1】よりは広いが中国手話の【S4】よりは狭い。分離物の形状だけではなく、移動の経路の形状が1次元である場合も、このクラスターに含まれる（例：M23の「ポンプで袋の空気を抜く」）。中国手話の【S4】は範囲が一番広く、分離物と移動の経路の形状だけではなく、道具の形状が1次元に当たる場合（例：M32の「ドライバーで塗料を抜く」）も、同一のクラスターにカテゴリー化される。これらの場面は、物の形状を示す「形状CL表現」（3.4節を参照）によって、分離動詞は同様に手型「H」で表される傾向がある。

以上の通り、「位置変化型分離事象」のカテゴリーにおける下位のクラスターの特徴を分析した。特に、【S3】と【S4】を区別する基準は、1つの要素のみによるものではなく、動作の方向、分離物の形状、移動経路の形状、道具の形状という複数の条件の相互作用をもとにした基準であることが分かった。

一方、状態変化型分離事象の【S5-7】は、道具の種類によって、ハサミ類の道具で物を分離する場面【S5】（例：M1「ハサミで髪を切る」、M2「爪切りで爪を切る」）と、ハサミ類以外の道具で物を分離する場面【S6-7】（例：M4「ノコギリで枝を切る」）に分かれる。この基準は中国語と完全に一致しており、中国手話の【S5】は、中国語の【C6】とカテゴリー化の結果が対応している。中国手話では、ハサミを表示する手型「V」を動かすように、特定の分離動詞を用いることで他の分離事象の場面と区別してカテゴリー化される。しかし、ここで注意したいのは、中国手話でハサミ類として分類される道具には、話者の認識によって微妙な違いがあるという点である。例えば、M2の「爪切りで爪を切る」という場面では、(15)のような「O」手型で分離動作を表示する話者も存在する一方、(16)のように、「V」手型で分離動作を表示する話者も見られる。すなわち、「爪切り」がハサミ類として認識されるか、それとも他の道具として認識されるかに関して、手話話者の間でも完全に一致しているわけではないのである。

(15)



指/O/上→下/内向き

「爪切りで爪を切る」

(16)



指/V/上→下/非利き手側

「爪切りで爪を切る」

そして、道具がハサミではない場面【S6-7】は、分離物の形状と分離元の形状の相互

作用によって、皮・表面を分離する場面（例：M8「鉛筆を削る」、M11「バナナの皮を剥く」）、または包丁で分離する場面（例：M17「包丁で鱗をとる」）【S6】と、それ以外の場面【S7】に分かれる。分離物「皮・表面」と道具「包丁」は、平たく2次元である形状において類似しており、「形状CL表現」と「操作CL表現」の相互作用によって、分離動詞が手型「U」で表される傾向がある。これにより、分離物が「皮/表面」である場面と道具が「刀」である場面は、【S6】に語彙的にカテゴリー化される。

最後に、【S6】と区別されるクラスター【S7】には、M12、M13、M15という3つのビデオクリップだけが含まれる。この3つの場面は、分離物が植物の葉と実である点で類似しているだけではなく、変化結果のタイプにおいても類似している。はじめに、これらのビデオクリップで見られる状態変化のタイプがどのようなものであるかについて見ると、M12、M13、M15は、植物のある部分にあたる葉と実を摘む動作によって、植物自体の部分的形状変化が生じる。すなわち、「自体変化型」に当たる。一方、位置変化のタイプがどのようなものであるかについて見ると、葉と実を摘む場面は、ある用途のために分離物を分離して利用する（切り取る）ことを含意する。このため、分離物が動作主体に向けて移動するという位置変化が生じる。すなわち、「求心型」に当たる。これらの場面の表現は、中国手話における類像性の反映と捉えられ、分離動詞のパラメータである「動き」が「外→内」として表現されている。

以上の通り、中国手話では、2次元の分離元である【S1】、2次元の分離元ではない「位置変化型分離事象」【S2-4】、2次元の分離元ではない「状態変化型分離事象」【S5-7】という3つの上位のカテゴリーが存在し、「位置変化型分離事象」と「状態変化型分離事象」のカテゴリーでは、さらにそれぞれ3つの下位のクラスターが存在する。また、図7-9から分かるように、【S1】、【S4】、【S5】、【S6】では、動詞のパラメータ「手型」はそれぞれ「D」、「H」、「V」、「U」で表示される傾向があり、それぞれ別のクラスターとしてカテゴリー化される。【S2】では、動詞のパラメータ「位置」は、それぞれの分離元の身体部位と一致する。【S3】、【S7】は手話の類像性に基づき、動詞のパラメータ「動き」は、それぞれ「回転」、「外→内」で表示される。これを踏まえて考えると、4つのパラメータは分離事象の語彙カテゴリー化における重要性に差が認められ、特に「手型」が最も重要なパラメータである一方、「手のひらの向き」はその重要性が低いと言える。

#### 7.5.2.4 日本語・中国語・中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化の類似点と相違点

ここまで、階層型クラスター分析の結果に基づき、日本語、中国語、中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化の特徴を明らかにした。それとともに、各クラスターを区別する基準を導き出した。実験題材を設定するための要素1「分離物/焦点」、要素2「分離元/背景」、要素3「動作/様態」、要素4「変化結果」という4つに応じて、3つの言語の分離事象の語彙カテゴリー化の基準を表7-5のようにまとめている。

表7-5 分離事象の語彙カテゴリー化の基準

	分離物/焦点		分離元/背景		動作/様態		変化結果	
	形	硬さ	形	空間	方向	道具	位置	状態
日本語	○			○				
中国語	○	○		○	○	○		
中国手話	○		○	○	○	○	○	○

表7-5では、カテゴリー化の基準となるものに丸で印をつけている。この表を見ると、4つの要素のうち、日本語では、分離物（形状）と、分離元（分離元と分離物の空間的関係）という2つが語彙カテゴリー化の基準となっている。加えて、この4つの要素のほかに、移動経路の特徴も日本語の語彙カテゴリー化の基準として捉えられる。中国語では、分離物（形状と硬さ）、分離元（分離元と分離物の空間的関係）、動作（方向と道具）という3つの要素が基準となっている。中国手話では、分離物（形状）、分離元（形状、分離物との空間的関係）、動作（方向と道具）、変化結果という4つの要素がすべて語彙カテゴリー化の基準となる。

一方、3つの言語の語彙カテゴリー化の結果から考えると、中国語では、分離事象が13個のクラスターに分かれて最も細分化されているが、最も多いカテゴリー化の基準を持つ言語となっていない。中国語の語彙カテゴリー化の基準は日本語と比べて多いが、分離元の形状的特徴と変化結果という2つの基準が見られず、中国手話の語彙カテゴリー化の基準よりも少ない。中国手話では、下位のクラスターの区分は、単一の基準ではなく、複数の基準の相互作用による特徴が基準となっていることがうかがえる。例えば、「位置変化型分離事象」の下位のクラスター【S3】と【S4】は分離物の形状、道具の形状、移動の経路の形状、そして動作の方向といった基準の相互作用によって区別される。「状態変化型分離事象」の下位のクラスター【S6】と【S7】の区分は、

分離物、道具の形状、変化結果という3つの基準の相互作用による結果である。これにより、手話言語の話者は、視覚情報に基づき言語データを加工する際に、各視覚情報を一つずつ順次に捉えるのではなく、関連性のある視覚情報を同時に捉えて事象を認識しカテゴリー化するという認識のメカニズムが推測できる。

さらに、「分離物/焦点」、「分離元/背景」、「動作/様態」、「変化結果」という4つの要素の間には上下関係（階層性）が見られ、それが言語によって異なると考えられる。先に示した語彙カテゴリー化の図7-3、図7-6、図7-9に基づき、各言語の語彙カテゴリー化の基準を、上位クラスターと下位クラスターで分けたうえで整理し、表7-6としてまとめる。

表7-6 分離事象の語彙カテゴリー化の基準の上下関係

	上位クラスター の基準	下位クラスターの基準	
		状態変化型	位置変化型
日本語	空間的関係	分離物の種類	空間的一体性の種類> 分離物の形状>移動経路の形状
中国語	空間的関係	道具>分離物の種類> 動作	分離物の形状と硬さ> 分離物の種類> 密着の程度/あり方
中国手話	分離元の形状> 空間的関係	道具>分離物の形状> 変化結果	分離元の位置>分離物の形状> 移動経路の形状> 道具の形状>動作

表7-6が示すように、日本語、中国語、中国手話では、上位のクラスターの場面を区別するための基準として、いずれも分離元と分離物の空間的関係が基準に含まれる点で共通している（ただし、空間的関係に関する捉え方が異なる）。この空間的関係の基準によって、「状態変化型分離事象」と「位置変化型分離事象」の2つの上位のクラスターが形成される。また、上位のカテゴリー化の基準に関して、中国手話は、日本語、中国語との相違点が見られる。中国手話では、空間的関係ではなく、分離元の形状が最上位の基準となっている。これにより、中国手話の分離事象では、2次元の平面の分離元である場面は、他の場面と区別され先に1つの独立したクラスターが形成されていた。

一方、下位のクラスターの場面を区別する基準に関して、3つの言語では、明確な相

違が見られる。日本語の「状態変化型分離事象」における下位のクラスターでは、分離物の種類（皮・表面であるか、そして、典型的な皮であるか）という基準が抽出される一方、「位置変化型分離事象」における下位のクラスターでは、空間的・一体性の種類（密着性であるか、それとも機能的一体性であるか）、分離物の形状と移動経路の形状（1次元であるか）という基準が抽出される。

中国語の「状態変化型分離事象」における下位のクラスターでは、道具が他の要素と比べて一番重要な基準となり、道具の種類、有無、道具に含意される動作の方向は、いずれもカテゴリー化の結果に大きな影響を与える。その他に、分離物の種類（皮・表面であるか、そして皮・表面と類似・隣接関係があるか）、動作の方向（回転動作を含むか）もクラスターを区別する基準となる。「位置変化型分離事象」における下位のクラスターでは、分離物の形状と硬さという特徴、密着の程度/あり方という基準が抽出される。

中国手話の「状態変化型分離事象」における下位のクラスターでは、中国語と同様に、道具が一番重要な基準となる。特に道具の種類によって、ハサミを用いて分離する場面はそれ以外の場面と区別されている。道具以外に、分離物と道具の形状（2次元であるか）、そして変化結果（自体変化型+求心型であるか）も基準として抽出される。一方、「位置変化型分離事象」における下位のクラスターでは、分離元（身体部位であるか）が一番重要な基準となる。それ以外に、分離物の形状（1次元であるか）、移動経路の形状（1次元であるか）、道具の形状（1次元であるか）、そして動作（回転動作を含むか）といった基準も抽出される。

本節では、日本語、中国語、中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化の基準について検討した。結果、これらの3つの言語には、共通の上位のカテゴリー化の基準として空間的関係が挙げられることが分かった。これにより、第5章の「空間的関係の仮説」は、日本語だけではなく、中国語と中国手話においても検証されたと言える。一方、下位のクラスターに関しては、多様なカテゴリー化の基準が抽出され、3つの言語では、明確な相違が捉えられる。

次節では、日本語、中国語、中国手話の分離事象の語彙カテゴリー化の結果に違いが生じる要因について、上述の基準に基づき、3つの言語の母語話者はどのように分離事象を認識するかという認知プロセスの形成について検討する。

### 7.5.3 分離事象の認知プロセス

本節は、次の RQ3 について、Langacker (1999) によって提唱された参照点構造を用いて、日本語、中国語、中国手話母語話者の分離事象に関する認知プロセスを説明する。

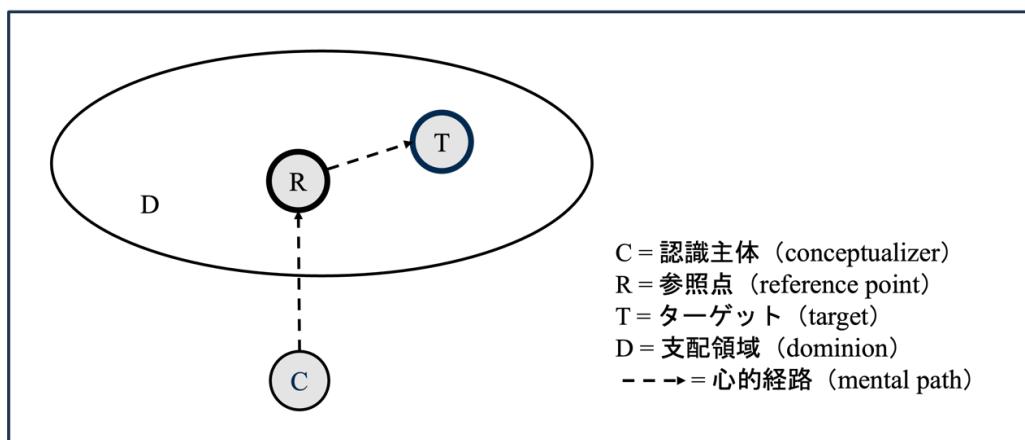
RQ3 日本語、中国語、中国手話において、分離事象の語彙カテゴリー化の認知プロセスには、どのような相違点と類似点があるか。

3.1 3つの言語における認知プロセスには、どのような相違点があるのか。

3.2 3つの言語における認知プロセスには、どのような類似点があるのか。

参照点構造 (reference point model) とは、認識主体がどのようにターゲットを認識するかという認知プロセスを示す事態認識モデルである。図 7-10 のように、このモデルは、認識主体 (conceptualizer)、参照点 (reference point)、ターゲット (target) という 3 つの要素、そしてこれらの要素を結び付ける心的経路 (mental path) と参照点の支配領域 (dominion) によって構成される。参照点は、認識上、一番プロファイルされやすいものであり、すなわち、認識度が高い要素である。支配領域は、参照点と何らかの関連性を持っており、参照点から連想的に接近することができる要素の集合である。また、矢印で表される心的経路は、認識主体から参照点への経路と、参照点からターゲットへの経路の 2 つがある。

図 7-10 参照点構造 (Langacker 1999: 174 をもとに作成)

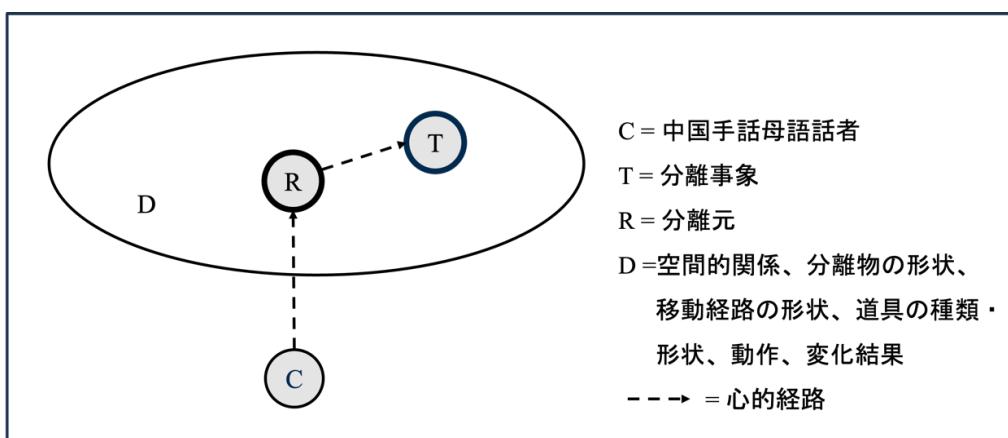


参照点構造に基づき、分離事象の認知プロセスに関して考えると、分離事象そのものが最後に認識されるターゲットとなる。では、日本語、中国語、中国手話の母語話者は、それぞれどのようなものを参照点として活用しターゲットである分離事象に心的接触を確立するのだろうか。前節で述べたように、日本語、中国語、中国手話は、「分離元と分離物の空間的関係」が上位のカテゴリー化の基準である点で共通している。しかし、日本語と中国語と異なり、中国手話は、「分離元と分離物の空間的関係」が最も上位の基準ではない。より上位のカテゴリー化の基準として、分離元の自体・相対的形状（2次元であるか）という基準が抽出される。李・吳（2021）は、中国手話の放置動詞（物のある場所に置く事象を表す動詞、例えば、put the pencil in the box）を分析した際に、手話話者は、場所/背景に関して、他の要素よりもかなり具体的な認識を持っており、物をどのような場所/背景に置くかによって、異なる手話動詞が用いられるなどを指摘した。分離事象においても、同様に場所/背景に相当する分離元の形状的特徴が、一番上位のカテゴリー化の基準であるため、一番プロファイルされやすく、高い認識度を持つ要素であると言える。このため、中国手話の分離事象への認知プロセスでは、分離元が参照点となっており、認識主体とターゲットを仲介する機能を果たす。

また、下位の語彙カテゴリー化の基準となる要素は、分離元と近い関連性を持つものとして、参照点の支配領域に入るるものである。このため、中国手話の母語話者における分離事象の認知プロセスでは、空間的関係、分離物の形状、移動経路の形状、道具の種類・形状、動作、変化結果といった要素の集合は、参照点の支配領域を構成する。この集合の中で、最も参照点から連想的に参照しやすい要素は、空間的関係である。また、分離元が参照点であり、空間的関係は、参照点の支配領域にある要素という関係から考えると、中国手話における空間的関係という基準は、分離元を中心とする関係であり、すなわち、分離元がどのような空間的位置を持つかを表すと想定できる。

図7-11に中国手話の分離事象の認知プロセスを示す。

図 7-11 中国手話母語話者の分離事象の認知プロセス



一方、日本語と中国語における分離事象の認知プロセスは、それぞれ図 7-12、図 7-13 の通りである。

図 7-12 日本語母語話者の分離事象の認知プロセス

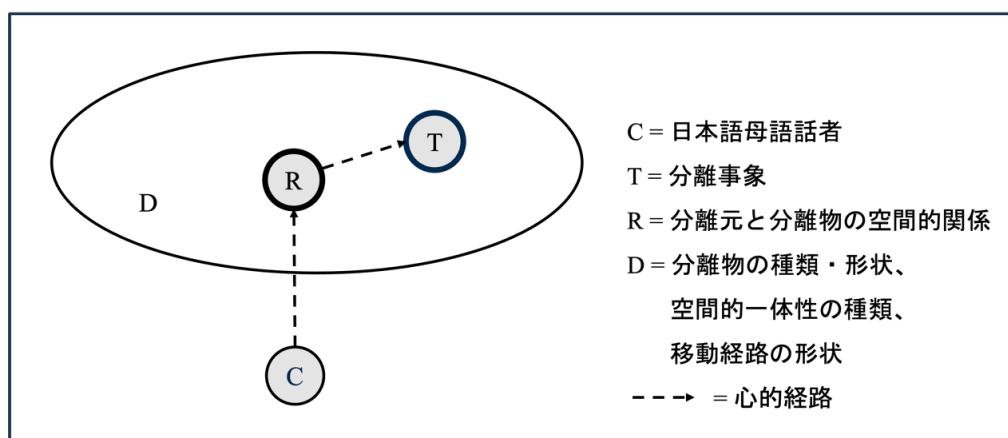
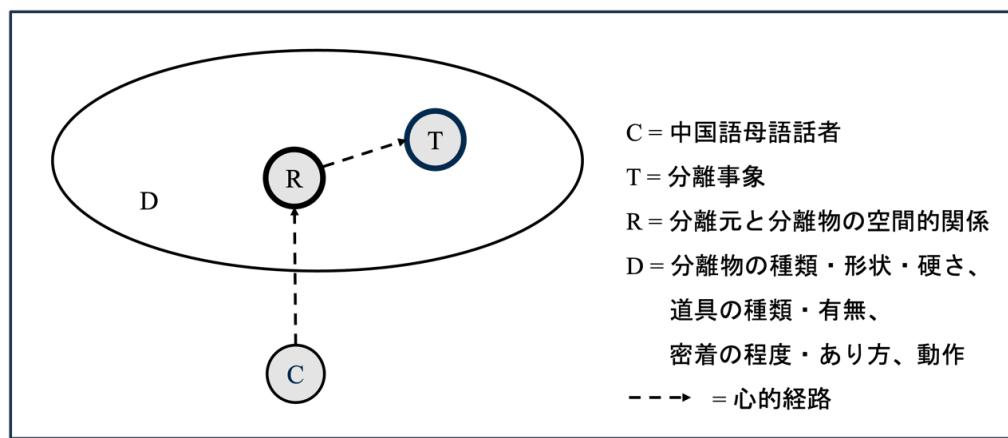


図 7-13 中国語母語話者の分離事象の認知プロセス



日本語と中国語では、分離元と分離物の空間的関係は、最上位のカテゴリー化の基準である。このため、分離事象に関する認知プロセスでは、空間的関係が最もプロファイルされやすく、認識度が高い要素であると捉えられる。すなわち、空間的関係が参照点である点で日本語と中国語は共通している。また、日本語と中国語では、下位のカテゴリー化の基準として、位置変化型分離事象と状態変化型分離事象の両方のカテゴリーにおいて、分離物の特徴がクラスターを区別するための重要な役割を果たす一方、中国手話において観察された、分離元の形状や位置などの特徴といった基準は抽出されていない。このため、日本語と中国語における空間的関係という基準は、分離物を中心とする関係であり、分離物がどのように空間的に位置するかを表すものであると想定できる。しかし、参照点の支配領域を構成する要素の集合に含まれている要素については、日本語と中国語で違いが見られる。図7-12が示すように、日本語では、分離物の形状的特徴、空間的一体性の種類、移動経路の形状といった要素が支配領域に入っている。それに対し、図7-13が示すように、中国語では、分離物の種類・形状・硬さ、道具の種類・有無、密着の程度・あり方、動作といった要素集合が支配領域を構成する。

以上の通り、本節は、分離事象の語彙カテゴリー化の基準の違いに基づき、3つの言語の背景にある認知プロセスを参照点構造として可視化した。なお、これらの認知プロセスの妥当性について、今後、分離事象の具体例を用いて、さらに検証する必要がある。また、支配領域にある要素の位置付けに関して、どの要素が参照点とより近い関連性・心的距離を持つかなどについて、上記の認知プロセスの構造を精緻化する必要があると考えられる。

## 7.6 本章のまとめ

本章は、課題3の「分離動詞と分離事象の類型の提案」に際して行った日本語、中国語、中国手話を対象とするビデオ発話実験について説明した。また、実験データに基づき、分離事象の類型的特徴を検討した。

RQ1の「分離事象を表す動詞の語彙レパートリー」に関しては、日本語、中国語、中国手話の母語話者による各分離事象の最頻出動詞リストに基づき、3つの言語の分離動詞に見られる典型的特徴や言語間の差異の観点から、動詞の語彙レパートリーの

特徴を分析した。結果として、日本語と中国語の分離動詞の語彙レパートリーでは、使用範囲が非常に広い動詞（日本語の「取る」、中国語の“V 掉”）が存在することで共通することが明らかとなった。一方、動詞のタイプ数を見ると、中国語の分離動詞のタイプ数が多く、日本語の分離動詞よりも多様であることが分かる。

中国手話は視覚言語であるため、直接的に日本語、中国語と語彙レパートリーを比較することはできない。本研究は、手話動詞の構成要素である 4 つの音韻的パラメータに着目し、各パラメーターに関して、使用頻度が最も高い形を抽出した上で、分離事象の言語化に際して出現可能な形をリストした。例えば、「手型」に関して、「D」が最もよく使用される手型である。「D」以外に、「Q」、「H」、「CH」、「U」、「V」、「C」、「I」、「L\*2」、「5」、「W」といった手型も使用されている。これによって、中国手話の分離動詞の語彙レパートリーにおいて典型的な動詞と動詞の多様性について検討した。

RQ2 の「分離事象の語彙カテゴリー化の基準」に関して、3 つの言語における共通点として、分離元と分離物における空間的関係は、分離事象の語彙カテゴリー化に関する上位の基準であり、「状態変化型分離事象」と「位置変化型分離事象」というカテゴリーが抽出できる点が挙げられることを明らかにした。一方、3 つの言語における相違点として、上位の語彙カテゴリー化の基準に関しては、2 つの違いが挙げられる。

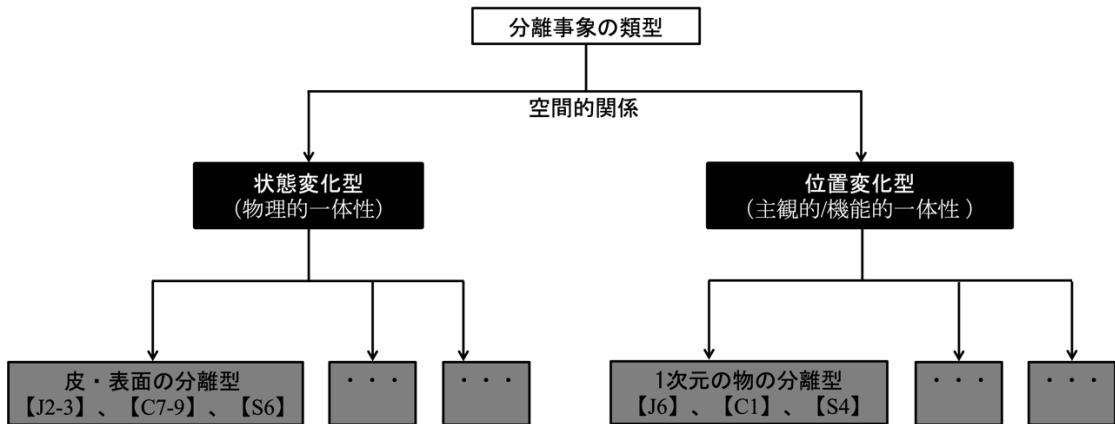
1 つは日本語与中国語における空間的関係の捉え方の違いである。もう 1 つは、中国手話は、分離元の形状的特徴という空間的関係よりも最上位の基準が存在するということである。また、下位の語彙カテゴリー化の基準における相違点に関しては、3 つの言語で多様な基準が抽出され、言語間で大きな違いが見られた。

RQ3 の「分離事象の認知プロセス」に関しては、言語間の共通点として、3 つの言語の母語話者は、認識度が高い特定の要素を「参照点」として先に着目した上で、分離事象へ心的接觸するという「参照点構造」を基盤とする認知プロセスが成立することを主張した。しかし、相違点として、3 つの言語の認知プロセスでは、認識の度合いが最も高く、プロファイルされやすい「参照点」となる要素が異なっている。日本語、中国語では分離元と分離物の空間的関係が「参照点」であり、中国手話では分離元が「参照点」となっていると分析できる。

以上のように、本章は、語彙のレパートリー、語彙カテゴリー化の基準、認知プロセスという 3 つの観点から、日本語、中国語、中国手話の分離事象に関する共通点と相違点を明らかにした。3 つの言語の語彙カテゴリー化の考察に基づくと、分離事象

のカテゴリー化に対して、次のようなモデルを提案できる。

図 7-14 分離事象の類型化モデル



また、3つの言語における分離動詞と分離事象の類型的特徴に基づいて考えると、各言語の類型論的性質が見られる。日本語の「経路言語」の特徴は、「取る」などの経路動詞の高い使用頻度や、移動経路の形状的特徴というカテゴリー化の基準からうかがえる。中国語が「様態言語」であることは、様態動詞の高い使用頻度や、道具というカテゴリー化の基準から裏付けられる。

中国手話は、「焦点言語」の特徴を持つ一方で、背景要素の認識度が高く、動詞に語彙化される可能性がある。これによって、Talmy (1985b) の語彙化類型論による言語類型化の妥当性を検証できた一方、「背景言語」という新たな言語パターンの存在の可能性が示唆される。中国手話が類型論的にどのように位置づけられるか、今後、分離事象の言語化という観点から検討を深めていく必要がある。

## 第8章 結論

### 8.1 本研究のまとめ

本研究では、理論と実証の両面を重要視する「実験認知言語学研究」の観点から、分離動詞と分離事象を研究対象として考察してきた。特に、動詞の多義構造、構文交替、事象の語彙カテゴリー化という言語現象および現象の背後に潜む原理や要因を分析した。認知言語学における「意味論」、「構文論」、「言語類型論」という視点を統合することで、序論で提示した3つの課題、すなわち、課題1「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」(第4章、第6章)、課題2「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」(第5章、第6章)、課題3「分離動詞と分離事象の類型の提案」(第7章)という3つの研究課題に取り組んだ。

各章における考察の結果について、既にリサーチクエスチョンに回答する形で、それぞれの該当する章の最後の節にまとめている。以下では、各課題に関する本論が提示した結論の要点を章の順番を問わずに総括する。その上で、本研究の成果と意義について、理論的な面と記述的な面からまとめる。

まず、課題1「分離動詞の意味・機能とその意味構造の解明」に関して、本研究は、日本語の分離動詞「切る」、中国語の分離動詞“V掉”を中心に、Talmy (1985a, 2000a) の力動性モデルに基づき、分離動詞の各意味・機能を分析し、その意味構造を解明した。主に以下の2つの知見が得られた。

1つ目は、分離動詞に含意される力的関係という認識のメカニズムである。本研究は、分離動詞を軸とした主語項と目的語項の間の対抗関係に着目し、力動性モデルを修正した上で、「切る」と“V掉”的意味分析に応用した。その結果、「切る」と“V掉”的各意味・機能は、力的関係によって、それぞれ4つの意味パターンに分類された。また、各パターン間の相互関係と共通した包括概念であるスーパー・スキーマが抽出された。具体的には、「切る」の意味パターンレベルの意味（局所的スキーマ）としては、「外的連続性」（物理的分断・分離）、「内的傾向性」、「物理的抵抗性」、「心理的抵抗性」（アスペクト的意味）という4つが挙げられる。“V掉”的意味パターンレベルの意味としては、「分離事象型」（物理的分断・分離）、「単純移動型」、「消滅事象型」、「完遂・極度型」（アスペクト的意味）という4つが抽出されている。これらの、両言

語における意味パターンはすべて、力的関係の認識メカニズムに基づき、物理的な力的対抗による分断・分離という実質的な意味から、心理的な力的対抗による完遂・極度というアспект的意味へと拡張している。また、各意味パターンにおける力的関係の影響によって、「切る」と“V掉”には一定の共起制限と結合制限が課される傾向が捉えられる。これらの考察を踏まえ、本研究は、「切る」と“V掉”的具体的な意味・機能、意味パターン的意味、スーパー・スキーマ的意味を3つの意味レベルとして位置付け、複層的意味構造を可視化した（図4-20、図6-9を参照）。

2つ目は、「力学動詞」という新たな動詞クラスの提案である。本研究は、空間的関係と意味の文法化という2つの観点から、日本語と中国語の両言語の分離動詞を比較した。また、空間的関係と力学的関係の詳細に関する比較を通して、それぞれの関係性に基づく動詞の違いを考察した。その結果、空間的関係では、焦点（主語項/目的語項）と背景（場所項）が必須の関係参与者であるのに対し、力的関係では、主動体（目的項）と対抗体（主語項）が必須の関係参与者となる。このため、分離動詞構文では、目的語項である対象の相対的空間位置を示す場所項は、必ずしも文中で出現するとは限らない。「力学動詞」には、力的関係のみを含意する場合（例えば、「船(ANT)が波(AGO)を切った。」のような、分断・破壊動詞としての「切る」と、力的関係と空間的関係の両方を含意する場合（例えば、「太郎(ANT)は木から邪魔な枝(AGO)を切った。」のような、分離動詞としての「切る」）が存在する。また、力学的関係に基づいて拡張される「V切る」、「V抜く」、「V掉」の表す完遂・極度的意味は、心理的な力的対抗が含意されるため、何らかの心的態度（積極的な感情/消極的な感情）を伝達することができる点で他の完遂・極度的意味を表す動詞と異なる。これにより、本研究は、分離動詞（「切る」、「抜く」、「V掉」）と、空間的関係に基づく移動動詞（「上げる」、「下げる」、「V上(shang, 上げる)」、「V下(xia, 下げる)」）との違いを明らかにし、分離動詞を力学的関係に基づいて規定される「力学動詞」に位置付ける必要性を提示した。

次に、課題2「分離動詞の意味体系と分離事象の位置付け」に関して、本研究は、離脱型壁塗り交替現象との比較に基づき、分離動詞と分離事象の意味体系と位置付けを考察した。その要点は、以下の2点である。

1つ目は、分離動詞と分離事象の内部の意味体系である。日本語と中国語の分離動詞では、いずれも「状態変化型分離動詞」と「位置変化型分離動詞」という2つのタ

イプが存在するという仮説（空間的仮説）を提起した。具体的には、日本語の分離動詞は、離脱型壁塗り交替動詞（「空ける」、「片付ける」、「拭う」など）と異なる文法的振舞いを持つ「非交替動詞」として、「X（分離元）からY（分離物）をV」という位置変化の構文形式のみが取れる位置変化型分離動詞（「抜く」、「落とす」、「はがす」など）と、「XからYをV」という位置変化の構文形式、「XをV」という状態変化の構文形式の両方を取るもの、それらの意味が一致しない状態変化型分離動詞（「切る」、「折る」、「ちぎる」など）に分かれる。同様に、中国語の分離動詞“V掉”は、前項動詞のタイプによって、“使役変化動詞+掉”という状態変化型分離動詞と、“使役移動動詞+掉”という位置変化型分離動詞の2つに分かれる。両言語における2種類の分離動詞の表す事象は、分離元と分離物の空間的関係、事象の関係付けにおいて違いが捉えられる。特に、空間的関係に関して、状態変化型分離事象では、「全体一部分」の関係が優勢であり、分離元と分離物が本来的に一体であるという「物理的一体性」が捉えられる。それに対し、位置変化型分離事象では、「表面ー付着物」/「容器ー中身」の関係が優勢であり、分離元と分離物が本来的に一体ではないという「主観的/機能的一体性」が捉えられる。また、本研究は、この2種類の空間的一体性に基づき、状態変化型分離事象と位置変化型分離事象に含意される力的関係と力動性のパターンが異なることを明らかにした。

2つ目は、分離動詞と分離事象の位置付け、すなわち、類義関係にある動詞、事象との関係である。日本語の分離動詞に関して、状態変化型分離動詞は、「カラ」格と共に起できる点で、典型的な使役状態変化動詞、すなわち破壊動詞（「割る」、「裂く」、「破る」など）と異なる。位置変化型分離動詞は、結果補語と共に起でき、「ニ」格と共に起できない点で、典型的な使役移動動詞（「置く」、「出す」）と異なる。また、分離動詞の表す事象は、状態変化事象と位置変化事象の中間にあり、分離元の状態変化と分離物の位置変化の2つの下位事象を含意する。空間的一体性と事象の関係付けによって、両事象が主事象と副事象として1つの複合的事象として統合されている。さらに、構文交替に着目すると、交替動詞の表す事象では、主事象と副事象が交替できるのに対し、分離事象では、主事象と副事象が交替できないという違いが捉えられる。一方、中国語の分離動詞に関しては、下降移動義を含む“V下（xia, 降りる/下がる）”、“V落（luo, 落ちる）”との比較を通して、“V掉”は、本動詞の「移動義」と「分離義」を継承しており、状態変化前景化と位置変化前景化の両方向に意味が拡張されること

や、結合制限の点で“V下”、“V落”と振る舞いが異なることを指摘した。以上により、両言語における分離動詞と関連動詞類の相違点および、分離動詞と分離事象の位置付けを明確にした。

最後に、課題3「分離動詞と分離事象の類型の提案」に関して、本研究は、日本語、中国語、中国手話に関する実験的研究を通して、階層型クラスター分析に基づき、分離事象の語彙カテゴリー化を分析し、主に以下の2つの知見が得られた。

1つ目は、分離事象の類型と分離事象全体の性質である。3つの言語において、分離事象の語彙カテゴリー化の結果（クラスターの数）が異なる一方、空間的関係が上位のカテゴリー化の基準である点で3つの言語が共通している。この空間的関係という基準により、3つの言語において、「全体一部分」の空間的関係が優勢である状態変化型分離事象と、「表面一付着物」／「容器一中身」の関係が優勢である位置変化型分離事象という2つのカテゴリーが形成されている。すなわち、課題2に関する認知言語学の理論的枠組みに基づく「空間的仮説」は日本語だけではなく、中国語と中国手話のデータによっても検証された。また、下位のカテゴリーに関して、いずれの言語においても、状態変化型分離事象のカテゴリーでは、皮・表面の分離型という下位のクラスターが抽出される一方、位置変化型分離事象のカテゴリーでは、1次元の物の分離型という下位のクラスターが抽出されている。これにより、3言語に共通するカテゴリー化の結果に基づいて、分離事象の類型化モデルを提案した（図7-14を参照）。

さらに、課題1と課題2に関する理論的分析の結果と、課題3に関する実験的研究の結果を統合することで、分離事象全体の性質として、序論で提起された「空間的関係」と「力学的関係」の2つが存在することを検証した。この2つの知覚的認知に基づく関係性は、表裏一体の関係であり、相互に関連づけられている。「空間的関係」は、分離事象における物理的・外層的性質である（機能的性質）。認識主体は、視覚的に判断しやすい「空間的関係」に基づき、分離事象を分けて認識しカテゴリー化している。一方、「力学的関係」は、分離事象におけるより深層・内側の性質であり、認知上の分離事象の核となる概念である（認知的性質）。すなわち、動作主体（対抗体）は、どのような力を行使して、分離元から分離物（主動体）を引き離すか、分離元と分離物はどのような力で統合されているかといったように、分離事象は、力学的関係から構成される事象概念である。これらの機能的性質と認知的性質の組み合わせによって、分離事象が概念化し言語化されているのである。

2つ目は、分離事象研究から見た言語の類型的特徴である。本研究は、分離動詞の語彙レパートリー、語彙カテゴリー化の基準、認知プロセスという3つの観点から日本語、中国語、中国手話のデータを考察した。その結果、日本語では、経路動詞の汎用性と移動経路の形状という基準の点で、「経路言語」としての類型的特徴が観察された。中国語では、様態動詞の汎用性と道具、動作の方向という基準の点で、「様態言語」としての類型的特徴が確認されている。中国手話では、形状的CL表現に基づく分離物の形状というカテゴリー化の基準に基づいて、「焦点言語」の類型的特徴が捉えられる。その一方、分離元の自体・相対的形状が最上位の基準であり、認知度が最も高い要素である点で、Talmy (1985b) の語彙化類型論において提示されていない、分離元/背景が動詞に語彙化される「背景言語」の特徴もうかがえる。以上により、本研究は、語彙化類型論の妥当性を検証するとともに、語彙化類型論は精緻化の余地が残されていることを示した。

続いて、研究成果と研究意義を述べる。

はじめに、本研究の理論的成果として、「動力学的な考え方とその応用の有効性」と「言語類型論への貢献」が挙げられる。「動力学的な考え方とその応用の有効性」については、人間の知覚的認知のメカニズムを踏まえ、分離動詞における力的関係に着目し、分離動詞の意味・機能と意味拡張を解明するための動力学的な考え方を示した。そして、意味論的に力学的認知に基づいて規定される「力学動詞」という動詞クラスを提案した。「言語類型論への貢献」については、本研究では、日本語、中国語、中国手話の3つの言語を取り上げている。音声言語の類型論に限らず、従来の先行研究であまり注目されていない手話言語との比較も視野に入れることで、さらに人間言語の普遍性と個別性、およびその背後にある認知的要因の解明に迫ることができた。

そして、記述的成果として、「複層的な多義構造の記述」と「意味論・構文論・類型論を統合した記述」が挙げられる。「複層的な多義構造の記述」に関して、本研究は、「切る」と“V掉”を例として、立体的かつ複層的意味空間で分離動詞の各レベルのスキーマを位置付けている。この多義構造において、一番下にあるレベル1は具体的意味・機能、中間にあるレベル2は意味パターン、すなわち、局所的スキーマ、一番上にあるレベル3は意味パターンから抽出したスーパー・スキーマである。下から上に意味の抽象度が高まり、レベルの間にスキーマの段階性が見られる。このような記述法は、他の多義動詞にも適用できるため、優位性と汎用性があり、多義語研究に一

定の貢献を果たしている。そして、「意味論・構文論・類型論を統合した記述」に関しては、本研究は、1つの側面のみからの考察ではなく、認知言語学研究における「意味論」、「構文論」、「類型論」という多角的な側面から、分離動詞と分離事象に関する全面的な記述を追求した。すなわち、動詞の意味・機能のみを記述する観点から、動詞全体を体系的に捉える観点へ、さらに多言語における事象の類型を提案する観点へと考察と記述を深めている点に、本研究の独自性があると言える。

## 8.2 今後の課題

本研究は、実験認知言語学研究として、実証性の高い研究を目指して考察を行った。しかし、言語研究における実証性の高さはいったいどのような形で保証されるであろうか。この問題について、松本（2020）は次のような2つの考え方を提示している。

1つは、内省、コーパス、実験を用いた、信頼性の高いデータを用いることである。  
もう1つは、網羅的な、あるいは広範囲に渡る調査を行うことである。

（松本 2020: 5）

この2つの提言を念頭に、今後の課題として、「実験データによる考察の拡大」、「研究手法の改善と拡大」、「認知類型論的考察の拡大」という3点を挙げる。以下、それぞれの課題を述べる。

はじめに、松本（2020）による実証性に関する1つ目の提言は、本研究の課題の構成に当てはまるものである。すなわち、単にコーパスと実験という数量的な手法を用いるだけでは実証性が保証されず、理論的分析を行った上で、数量的データの観点からその結果の妥当性と汎用性を検証するという形で、数量的分析と理論的分析を相互に補完し合う必要がある。コーパス調査や心理実験を用いて言語対象の全体の状況を調べるにあたっては、意味分析による予備調査の果たす役割が大きい。理論的分析が最初にあってこそ、コーパスデータの処理や実験のデザインの最適化などを経て良いデータが得られる可能性も著しく向上すると言える。このため、本研究は、第4章から第6章における認知言語学の理論的枠組みに基づく考察結果を踏まえ、第7章ではビデオ発話実験の題材をいくつかの意味要素を用いて特徴づけ、事象の多様性を一定

の程度で保証することができた。その一方、実験的結果は、理論的分析の妥当性を検証しただけでなく、理論的分析において不足していた点を補い、分析の精度を高めた。

しかし、本研究には課題も多く残されている。本研究は、ビデオ発話実験によって収集されたデータを用いて、動詞を軸とした分離事象の語彙カテゴリー化を分析したが、分離事象はどのように言語化されるかについての考察を行っていない。今後、実験的データを用いて考察を拡大する必要がある。具体的には、分離事象に現れる分離物（焦点）や分離元（背景）、変化の経路、動作の方式と様態などといった各意味要素がどのように文中で言語化されるかという視点から、3つの言語の実験データを観察し、言語間の相違と言語内の相違を解明する。また、得られた分析結果を、第7章の語彙カテゴリー化の分析結果と統合することで、分析から抽出した日本語、中国語、中国手話の共通点、相違点を比較し、分離事象の類型的性質に関する説明の一般化を行う。

また、研究手法に関しても、改善や拡大の余地が残されている。本研究は、視覚的情報を刺激として、特定の事象を描くビデオクリップを作成し、それを実験対象者に提示し説明してもらうというビデオ発話実験を採用した。しかし、このような実験的手法は、物理的な事象については用いやすいが、抽象的な変化に関わる事象については使用が困難である（松本・氏家 2024: 30）。例えば、「毒気を抜く」のような抽象的な分離事象はビデオクリップの形で表現できない。このため、より幅広い分離事象を扱うため、コーパスを用いた名義論的な研究（onomasiology）、すなわち、当該概念がコーパスでどのように表現されるかに関する研究が必要である。

そして、松本による2つ目の提言というのは、複数の言語に渡る主張を提示する場合、一定の質を保った上で、できるだけ多くの言語に関する調査を行うことで実証性が保証されるということを意味する。本研究は、第4章と第5章で日本語における分離動詞・分離事象の言語現象を扱った。第6章で中国語も考察対象へと拡大し、また日本語と中国語の分離動詞・分離事象の比較を行った。さらに、第7章は、手話言語を研究対象に入れて、音声言語と手話言語の比較も行った。その結果、3つの言語に共通する「空間的関係」という語彙カテゴリー化の基準が抽出できた。しかし、このような語彙カテゴリー化の基準は、どの程度の汎用性があるのか、他の言語にも適用できる可能性があるのか、分離事象以外の状態変化と位置変化を統合した複合的事象にも適用可能なのかという問い合わせについて、さらなる検討が必要である。このため、今後、

理論的発展を目指し、対象言語と考察事象を拡大した上で言語類型の探究を行いたい。

本研究の成果によって、力学的認知に関わる事象、状態変化と位置変化を統合した事象に光を当てることで、新たな研究の展望が開かれることが大いに期待される。

## 付録1 多義動詞「切る」の意味構造に関する心理実験

このたびは、心理実験への参加にご承諾いただきまして誠にありがとうございます。この用紙にご記入いただいた情報は、実験終了後全て破棄し、第三者に漏れることのないようにいたします。また、実験結果を公表する際には、個人情報を匿名化し、個人が特定されることができないように適切に処理いたします。

ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

尚、内容に関して質問等ございましたら、下記までご連絡ください。

実験責任者：王 鈺（大阪大学大学院博士前期課程）

連絡先：[wangyu\\_ogyoku@yahoo.co.jp](mailto:wangyu_ogyoku@yahoo.co.jp)

### 基本問題

1. 母語

---

2. 年齢

---

3. 学年

---

4. 日本語レベル（点数もご記入してください）

---

5. 留学経験有無

---

## 実験 1 類似性判断テスト

「切る」の意味が似ている例文をグループに分けてください。なお、グループの数と各々のグループ内のカードの数は自由にして構いません。

- (1) ケーキを切る。
- (2) 胃を切る。
- (3) トランプを切る。 【トランプ：扑克牌】
- (4) 野菜の水気を切る。
- (5) 部門を切る。
- (6) 敵をきる。
- (7) 縁を切る。
- (8) 世相を切る。
- (9) 波を切る。
- (10) ハンドルを切る。
- (11) 本を読み切った。
- (12) 100 メートル走で 10 秒を切った。
- (13) 麻雀を切る。
- (14) 手を切る。
- (15) 雲を切って飛ぶ。
- (16) 囲炉裏を切る。 【囲炉裏：地炉】
- (17) 球を切る。
- (18) 彼は心身ともに疲れ切った。
- (19) 最低気温は 5 度を切る見込み。
- (20) 紙を切る。
- (21) マラソン大会で最後まで走り切る。
- (22) 爪を切る。
- (23) 胸にたまつた悩みを思い切って吐き出した。
- (24) 型紙を切る。 【型紙：(裁衣服的) 纸型、纸样】
- (25) 領収書を切る。
- (26) 封筒の封を切る。
- (27) 部屋は冷え切った。

- (28) 小切手を切る。
- (29) 袋を切る。
- (30) 親の反対を押し切った。
- (31) 政治を切る。
- (32) 電源を切る。

分類：

## 実験2 意味素性評定テスト

以下の例文で表される「切る」に関する事象（広義レベルで、すべて分断事象である）において、力の観点からどんなイメージが浮かぶのか、その当てはまる程度を判断してください。

1 全く当てはまらない 2 やや 3 どちらとも言えない 4 やや 5 非常に当てはまる

| ----- | ----- | ----- | ----- |

- ① 対象に行使した力は物理的力であるか？ ( )  
② 錐利な道具またはそれに相当するものの介在があるのか？ ( )  
③ (主語による攻撃力に対し) 対象からの抵抗力が強く感じられるか？ ( )  
④ 分断された対象は元の状態に還元しやすいのか？ ( )  
⑤ 切れ目・裁断面(の存在・位置)は予測しやすいのか？ ( )

- (1) ケーキを切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(2) 胃を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(3) トランプを切る。 【トランプ：扑克牌】 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(4) 野菜の水気を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(5) 部門を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(6) 敵をきる。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(7) 縁を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(8) 世相を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(9) 波を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(10) ハンドルを切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(11) 本を読み切った。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(12) 100 メートル走で 10 秒を切った。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(13) 麻雀を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(14) 手を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(15) 雲を切って飛ぶ。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(16) 囲炉裏を切る。 【囲炉裏：地炉】 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(17) 球を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
(18) 彼は心身ともに疲れ切った。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

- (19) 最低気温は 5 度を切る見込み。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (20) 紙を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (21) マラソン大会で最後まで走り切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (22) 爪を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (23) 胸にたまつた悩みを思い切って吐き出した。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (24) 型紙を切る。 【型紙：(裁衣服的) 纸型、纸样】 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (25) 領収書を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (26) 封筒の封を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (27) 部屋は冷え切った。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (28) 小切手を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (29) 袋を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (30) 親の反対を押し切った。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (31) 政治を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )
- (32) 電源を切る。 ( ) ( ) ( ) ( ) ( )

## 付録 2 分断・破壊動詞の意味・機能に関する心理実験

このたびは、心理実験への参加にご承諾いただきまして誠にありがとうございます。この用紙にご記入いただいた情報は、実験終了後全て破棄し、第三者に漏れることのないようにいたします。また、実験結果を公表する際には、個人情報を匿名化し、個人が特定されることができないように適切に処理いたします。

ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

尚、内容に関して質問等ございましたら、下記までご連絡ください。

実験責任者：王 鈺（大阪大学大学院博士前期課程）

連絡先：[wangyu\\_ogyoku@yahoo.co.jp](mailto:wangyu_ogyoku@yahoo.co.jp)

### 基本問題

1. 母語

---

2. 年齢

---

3. 学年

---

4. 日本語レベル（点数もご記入してください）

---

5. 留学経験有無

---

### 実験3 想起テスト

1. 「**切る**（もしくはその活用形・複合動詞も可）」を使用し、例文を思いついた順に五つ書いてください。（文の長さは特に制約はありませんが、「切る」の意味・機能を明確に判断できるように、出来る限り文脈要素・背景・状況などを付け加え、詳しく書いてください。）

- (1) \_\_\_\_\_
- (2) \_\_\_\_\_
- (3) \_\_\_\_\_
- (4) \_\_\_\_\_
- (5) \_\_\_\_\_

2. 「**割る**（もしくはその活用形・複合動詞も可）」を使用し、例文を思いついた順に五つ書いてください。（文の長さは特に制約はありませんが、「割る」の意味・機能を明確に判断できるように、出来る限り文脈要素・背景・状況などを付け加え、詳しく書いてください。）

- (1) \_\_\_\_\_
- (2) \_\_\_\_\_
- (3) \_\_\_\_\_
- (4) \_\_\_\_\_
- (5) \_\_\_\_\_

3. 「**さく（裂く・割く）**（もしくはその活用形・複合動詞も可）」を使用し、例文を思いついた順に五つ書いてください。（文の長さは特に制約はありませんが、「裂く・割く」の意味・機能を明確に判断できるように、出来る限り文脈要素・背景・状況などを付け加え、詳しく書いてください。）

- (1) \_\_\_\_\_
- (2) \_\_\_\_\_
- (3) \_\_\_\_\_
- (4) \_\_\_\_\_
- (5) \_\_\_\_\_

### 付録3 ビデオ発話実験題材

ビデオ	分離物/焦点			分離元/背景			動作/様態		変化結果	
	物	形	硬さ	物	形	空間	方向	道具	位置	状態
M1	髪	1	軟	頭	2	全体	水平	ハサミ	遠心	自体
M2	爪	2	硬	指	2	全体	水平	爪切り	遠心	自体
M3	葉っぱ	2	軟	バラ	1	全体	水平	ハサミ	遠心	自体
M4	枝	1	硬	木	0	全体	垂直	ノコギリ	遠心	自体
M5	雑草	1	軟	芝生	2	全体	垂直	鎌	遠心	自体
M6	後ろ髪	1	軟	頭	2	全体	水平	バリカン	遠心	自体
M7	髪	1	硬	頸	2	全体	水平	シェーバー	遠心	自体
M8	屑/表面	2	軟	鉛筆	2	全体	水平	カッター	遠心	自体
M9	皮	2	硬	リング	2	全体	水平	ナイフ	遠心	自体
M10	殻	2	軟	卵	2	全体	垂直	手	遠心	自体
M11	皮	2	硬	バナナ	2	全体	垂直	手	遠心	自体
M12	桃	3	軟	木	0	全体	垂直	手	求心	自体
M13	花びら	2	硬	バラ	1	全体	垂直	手	求心	自体
M14	葡萄	3	軟	木	0	全体	水平	ハサミ	求心	自体
M15	花	3	軟	木	1	全体	垂直	手	求心	自体
M16	毛玉	0	軟	セーター	2	全体	水平	クリーナー	遠心	自体
M17	鱗	2	硬	魚	2	全体	水平	包丁	遠心	自体
M18	コーン	3	硬	畑	0	全体	垂直	手	求心	自体
M19	髪	1	軟	頭	2	全体	垂直	手	遠心	総体
M20	雑草	1	硬	芝生	2	全体	垂直	手	遠心	総体
M21	電池	1	硬	リモコン	3	容器	垂直	手	遠心	総体
M22	ナイフ	1	硬	鞘	3	容器	水平	ポンプ	遠心	総体
M23	空気	0	一	袋	3	容器	垂直	ポンプ	遠心	総体
M24	水	0	一	鉢	3	容器	垂直	注射器	求心	総体
M25	インク	0	一	瓶	3	容器	垂直	手	遠心	総体
M26	詰め物	3	軟	ぬいぐるみ	3	容器	水平	手	遠心	総体
M27	レンズ	2	軟	目	3	容器	水平	手	遠心	総体
M28	水	0	一	タオル	3	容器	回転	手	遠心	総体
M29	ポスター	2	軟	壁	2	表面	垂直	手	遠心	総体
M30	糸	2	軟	腕	2	表面	水平	手	遠心	総体
M31	紙	2	軟	ノート	1	表面	水平	手	遠心	総体
M32	塗料	2	一	缶	2	表面	水平	手	遠心	総体
M33	コルク	1	硬	ワイン	0	表面	垂直	手	遠心	総体
M34	ネジ	1	硬	机	0	表面	水平	手	遠心	総体
M35	プラグ	3	硬	コンセント	0	表面	水平	手	遠心	総体
M36	指輪	3	硬	指	3	表面	水平	手	遠心	総体
M37	メガネ	3	硬	顔	2	表面	垂直	手	遠心	総体
M38	マスク	2	軟	顔	2	表面	垂直	手	遠心	総体
M39	リボン	2	軟	プレゼント	2	表面	回転	手	遠心	総体
M40	包帯	2	軟	腕	2	表面	回転	手	遠心	総体
M41	包装紙	2	軟	プレゼント	2	表面	水平	手	遠心	総体
M42	車輪	3	硬	自転車	3	表面	水平	レンチ	遠心	総体
M43	メイク	0	一	顔	2	表面	水平	コットン	遠心	総体
M44	黒ずみ	0	一	床	2	表面	水平	ブラシ	遠心	総体
M45	文字	0	一	黒板	2	表面	水平	黒板消し	遠心	総体
M46	紙	2	軟	カレンダー	1	表面	垂直	手	遠心	総体
M47	時計	3	硬	壁	2	表面	水平	手	遠心	総体
M48	キヤップ	1	硬	ペン	3	表面	垂直	手	遠心	総体
P1	皮	2	硬	ポテト	2	表面	水平	ピーラー	遠心	自体
P2	切手	2	軟	封筒	2	全体	水平	手	遠心	自体
D1	空き缶	3	硬	ニンジン	2	表面	垂直	包丁	遠心	自体
D2	ボール	3	硬	ダンボール	2	表面	垂直	ハサミ	遠心	自体
D3	紙飛行機	3	軟	箸	2	表面	垂直	手	遠心	自体

## 付録4 中国手話の指文字表

### 中国手話の指文字表（单字母）

	右手は親指を伸ばし、指先を上に向け、人差し指、中指、薬指を立てる、小指を曲げ、指先を手のひらに当て、手の甲を右に向ける。
	右手の親指を手のひらの方に曲げ、人差し指、中指、薬指、小指をそろえて立て、手のひらを前方左に向ける。
	右手の親指を上に曲げ、人差し指、中指、薬指、小指をそろえて下に曲げ、指先をハの字に対向させ、虎の口を後ろ上向きにする。
	右手でこぶしを作り、親指を中指の中指の上に置き、虎口を後ろ上向きにする。
	右手の親指と人差し指は円を描くように重ね、中指、薬指、小指は横に伸ばして少し離し、指先は左を向き、手の甲は外側を向く。
	右手の人差し指と中指は水平に伸ばし、少し離して指先を左に向け、親指、薬指、小指は曲げ、親指は薬指の遠位指節に置き、手の甲は外側に向ける。
	右手の人差し指は指先を左に向けて水平に伸ばし、中指、薬指、小指は指先を手のひらに当てて曲げ、親指は中指の中指の上に置き、手の甲を外側に向ける。
	右手の人差し指と中指はそろえて立て、親指、薬指、小指は曲げ、親指は薬指の遠位指節の上に置き、手のひらは前に出して左を向く。

	右手の人差し指は立て、中指、薬指、小指は曲げ、指先は手のひらに当て、親指は中指の中指の上に置き、手のひらは前方、左を向く。
	右手の人差し指を曲げ、中指の甲を上に向け、中指、薬指、小指を曲げ、指先を手のひらに当て、親指を中指の中指の上に置き、虎口を内側に向ける。
	右手の人差し指を立て、中指を水平に伸ばし、親指を中指の中指の上に置き、薬指と小指を曲げ、指先を手のひらに当て、虎口を内側に向ける。
	右手の親指と人差し指は開き、人差し指の先を上に向け、中指、薬指、小指は曲げ、指先を手のひらの中心に当て、前方左側に向ける。
	右手の親指と小指を曲げ、親指は小指の中指の上に置き、人差し指、中指、薬指は親指の上で一緒に曲げ、指先は前と下を向き、手のひらは前と左を向く。
	右手の親指、薬指、小指は曲げ、親指は薬指の中指の上に置き、人差し指と中指は親指の上で一緒に曲げ、指先は前と下を向き、手のひらは前と左を向く。
	右手の親指を上方に曲げ、人差し指、中指、薬指、小指を合わせて下方に曲げ、親指、人差し指、中指の先を互いに押し付けて円形を作り、虎口を内側に向ける。
	右手の親指と人差し指は円を描くように重ね、中指、薬指、小指は一緒に伸ばし、指先は下を向き、虎口は前方左を向いている。
	右手の親指が一番下、人差し指と中指が一番上、親指と人差し指と中指の先をつまんで、指先は前と左を向き、薬指と小指は曲げて指先を手のひらに当てる。
	右手の親指と人差し指を開き、人差し指の先を左に向け、親指の先を上に向け、中指、薬指、小指を曲げ、指先を手のひらに当て、手の甲を外に向ける。
	右手の親指は手のひらに密着し、人差し指、中指、薬指、小指は一緒になって手のひらに對して90度の角度でわずかにカーブし、手のひらは前方に向かって左を向いている。
	右手の親指、中指、薬指の先端を互いに押しつけ、人差し指と小指を立て、手のひらを前に出して左を向く。
	右手の親指は手のひらに近づけ、人差し指、中指、薬指、小指を揃えて立て、手のひらは前方左側に向ける。
	右手の人差し指と中指は直立し、V字型に分離し、親指、薬指、小指は曲げ、親指は薬指の遠位指関節の上に置き、手のひらを前に出して左を向く。
	右手の人差し指、中指、薬指はW字型に直立し、親指と小指は曲げられ、親指は小指の遠位指骨の上に置かれ、手のひらは左前方にある。
	右手の人差し指と中指は立て、中指は人差し指の上に置き、親指、薬指、小指は曲げ、親指は薬指の遠位指骨の上に置き、手のひらは前方で左を向く。
	右手の親指と小指を伸ばし、指先を上に向け、人差し指、中指、薬指を曲げ、手のひらを前方左側に向ける。
	右手の人差し指と小指は水平に伸ばし、指先は左を向き、親指、中指、薬指は曲げ、親指は中指と薬指の遠位指関節の上に置き、手の甲を外側に向ける。

### 中国手話の指文字表（両字母）

	右手の人差し指、中指、小指を水平に伸ばし、人差し指と中指を合わせ、指先は左を向き、親指と薬指は湾曲させ、親指は薬指の遠位の指の関節の上に置き、手の甲を外側に向ける。
	右手の親指は一番下に、人差し指、中指、薬指、小指は一番上にあり、指先は平らな「コ」の形で左を向き、虎口は内側を向いている。
	右手の親指は手のひらに密着し、人差し指と中指は一緒になって手のひらに対して90度の角度でわずかにカーブし、薬指と小指は曲がって指先は手のひらに当たり、手のひらは前に出て左を向いている。
	右手の小指を水平に伸ばして指先を左に向け、親指、人差し指、中指、薬指を曲げ、親指を人差し指、中指、薬指の上に乗せ、手の甲を外側に向ける。

### 中国手話の指文字表（有標字母）

	Eの指文字を使って、手を上下に2回くねらせる。
	Uの指文字で、人差し指、中指、薬指、小指を前後に2回ずつ動かす。（Üの2点が省略されていても、省略されていなくても、この指の使い方をする）。

出典：『国家通用手話常用語表』（2018年3月9日に中国人民共和国教育部、国家語言文字工作委員会、中国障害者連合会による発表、2018年7月1日実施）なお、日本語の説明文は筆者による。

## 参考文献

### <和文>

- 秋田喜美・松本曜・小原京子（2010）「移動表現の類型論における直示的経路表現と様態語彙レパートリー」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム』5, pp. 1–25, 東京：ひつじ書房.
- 網井勇吾（2013）『外国語学習者による語の意味の獲得に関する研究－英語の「壊す／切る」系動詞を例として－』慶應義塾大学博士学位論文.
- Lamarre, Christine (2017) 「中国語の移動表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』pp. 95–128, 東京：くろしお出版.
- 出水孝典（2012）「Talmy の類型論を再考する」『六甲英語学研究』15, pp. 25–79.
- 早瀬尚子・堀田優子（2005）『認知文法の新展開－カテゴリー化と用法基盤モデル－』東京：研究社.
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』東京：ひつじ書房.
- 洪春子（2020）「日中韓の「切る・割る」事象における語彙カテゴリー化の対照研究」『言語研究』158, pp. 63–89.
- 堀江薰（2013）「認知類型論」辻幸夫（編）『新編 認知言語学キーワード事典』pp. 285–286, 東京：研究社.
- 堀田凱樹・酒井邦嘉（2007）『遺伝子・脳・言語』東京：中央公論新社.
- 李暎洙（1997）「中間的複合動詞「きる」の意味用法の記述－本動詞「切る」と前項動詞「切る」、「後項動詞「切る」と関連づけて」－」『世界の日本語教育』7, pp. 219–232.
- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』東京：大修館書店.
- 岩崎宏子（1981）「特集・類義語の意味論的研究－むしる・ちぎる－」『日本語研究』4, pp. 28–30.
- 岩田彩志（2010）「Motion と状態変化」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム』5, pp. 27–52, 東京：ひつじ書房.
- 岩田彩志（2024）「Way 表現と force dynamics」『日本認知言語学会論文集』24, pp. 11–22.

- 影山太郎（2021）『点と線の言語学－言語類型から見えた日本語の本質－』東京：くろしお出版。
- 貝森有祐（2018）「状態変化動詞を伴う英語使役移動動詞構文に課される意味的制約－事象統合の観点から－」山梨正明（編）『認知言語学論考』14, pp. 1–39, 東京：ひつじ書房。
- 川野靖子（2021）『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究』東京：ひつじ書房。
- 木村晴美・市田泰弘（2014）『はじめての手話 初歩からやさしく学べる手話の本（改訂新版）』東京：生活書院。
- 木村静子（2002）「相互動詞「～あう」の相互的な動作の種類」『語学プログラム ワーキングペーパー』12, pp. 17–29, 国際大学。
- 岸本秀樹（2001）「壁塗り構文」影山太郎（編）『日英対照 動詞の意味と構文』pp. 100–126, 東京：大修館書店。
- 小林雄一郎（2017a）『Rによるやさしいテキストマイニング [機械学習編]』東京：オーム社。
- 小林雄一郎（2017b）『Rによるやさしいテキストマイニング』東京：オーム社。
- 古賀裕章（2017）「日英独露語の自律移動表現－対訳コーパスを用いた比較研究－」松本曜（編）『移動表現の類型論』pp. 303–336, 東京：くろしお出版。
- 栗田奈美（2018）『視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析』横浜：春風社。
- 李響（2016）「離脱動詞と移動動詞の比較－「とれる」「おちる」を中心に－」『言語学論叢オンライン版』9, pp. 75–86, 筑波大学。
- 李響（2019a）「離脱動詞のタイプと移動動詞、状態変化動詞との関係－「とれる、はずれる、むける」などを中心に－」『KLS Selected Papers』1, pp. 61–72.
- 李響（2019b）『日中離脱を表す動詞の意味論的研究』筑波大学博士学位論文。
- 丸尾誠（2017）「中国語の結果補語“掉”の用法について－完遂義を中心に－」『言語文化論集』38(2), pp. 47–60, 名古屋大学。
- 松田文子（2000）「日本語学習者による語彙習得－差異化・一般化・典型化の観点から－」『世界の日本語教育 日本語教育論集』10, pp. 73–89.
- 松本曜（1997）「使役移動動詞における語彙化パターン」中右実（編）『空間と移動の表現』pp. 154–180, 東京：研究社。

- 松本曜（2003）（編）『認知意味論』東京：大修館書店。
- 松本曜（2009）「多義語における中心的意味とその典型性—概念的中心性と機能的中心性—」『Sophia Linguistica: Working papers in Linguistics』 57, pp. 89–99.
- 松本曜（2017）「移動表現の類型に関する課題」松本曜（編）『移動表現の類型論』 pp. 1–24, 東京：くろしお出版。
- 松本曜（2020）「実証性の高い言語研究を目指して」松本曜教授還暦記念論文集刊行会（編）『認知言語学の羽ばたき—実証性の高い言語研究を目指して—』 pp. 2–5, 東京：開拓社。
- 松本曜（2021）「移動表現の研究におけるコーパスと実験」篠原和子・宇野良子（編）『実験認知言語学の深化』 pp. 93–111, 東京：ひつじ書房。
- 松本曜・氏家啓吾（2024）「日本語における状態変化の表現—認知的類型論の数量的研究—」『言語研究』 166, pp. 29–57.
- 松岡和美（2015）『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』東京：くろしお出版。
- 松岡和美（2023）「イントロダクション 基礎編」『手話言語学のトピック基礎から最前线へ』 pp. 1–14, 東京：くろしお出版。
- 宮腰幸一（2012）「日本語結果表現に関する予備的考察」『論叢 現代語・現代文化』 9, pp. 1–43, 筑波大学。
- 糸山洋介（1994）「形容詞「かたい」の多義構造」『名古屋大学日本語日本文化論集』 2, pp. 65–90, 名古屋大学。
- 糸山洋介（2001）「多義語の複数の意味を総括するモデルと比喩」山梨正明（編）『認知言語学論考』 1, pp. 29–58, 東京：ひつじ書房。
- 糸山洋介（2021）『日本語の多義語研究—認知言語学の視点から—』東京：大修館書店。
- 桃内佳雄（2004）「譲渡不可能な所有関係の表現に関する対照的な考察」『北海学園大学工学部研究報告』 31, pp. 135–146, 北海学園大学。
- 森山新（2011）（編）『イメージでわかる言葉の意味と使い方 日本語多義語学習辞典 動詞編』東京：アルク。
- 森山新（2012）「認知意味論の観点からの「切る」の意味構造分析」『同日語文研究』 27, pp. 147–159.
- 森山新（2015）「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究—心理的手法により内省分析を検証する—」『認知言語学研究』 1, pp. 138–155.

- 中本敬子・野澤元・黒田航 (2004) 「動詞“襲う”の多義性－カード分類と意味素性評定に基づく検討－」『日本認知心理学会第2回大会発表論文集』 p. 38.
- 仲本康一郎 (1998) 「攻撃力と抵抗力を表わす形容詞－主体性という概念をめぐって－」『言語科学論集』 4, pp. 69–81, 京都大学.
- 仲本康一郎 (2013) 「形容詞「きつい」の意味構造」児玉一宏・小山哲春 (編) 『言語の創発と身体性: 山梨正明教授退官記念論文集』 23–38.
- 仲本康一郎 (2014) 「現代日本語の形容詞の意味分類」『山梨大学教育人間科学部紀要』 16, pp. 83–91, 山梨大学.
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説－日本語の記述文法を目指して－』東京：くろしお出版.
- 仁田義雄 (2007) 「日本語の主語をめぐって」『国語と国文学』 84(6), pp. 1–16, 東京大学.
- 奥津敬一郎 (1981) 「移動変化動詞文－いわゆる spray paint hypallage について－」『国語学』 127, pp. 21–33.
- 佐治伸郎・梶田祐次・今井むつみ (2010) 「L2 習得における類義語の使い分けの学習：複数のことばの意味関係理解の定量的可視化の試み」『Second Language』 9, pp. 83–100.
- 瀬戸賢一 (2007a) (編) 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館.
- 瀬戸賢一 (2007b) 「メタファーと多義語の記述」楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前线』 pp. 31–61, 東京：ひつじ書房.
- 新地綾 (1997) 「形容詞＜重い＞の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』 3, pp. 77–104, 京都大学.
- 篠原和子・宇野良子 (2021) (編) 『実験認知言語学の深化』東京：ひつじ書房.
- 鈴木亨 (2013) 「構文における創造性と生産性：創造的な結果構文における非選択目的語の認可のしくみ」『山形大学人文学部研究年報』 10, pp. 109–130.
- 高嶋由布子 (2020) 「危機言語としての日本手話」『国立国語研究所論集』 18, pp. 121–148.
- 田中茂範 (1990) 『認知意味論－英語動詞の多義の構造－』東京：三友社出版.
- 徳永健伸・小山智史・齋藤豪 (2004) 「日本語空間名詞の分類」『情報処理学会研究報告』 pp. 135–140.

- 辻幸夫 (2013) 「認知言語学」辻幸夫 (編)『新編 認知言語学キーワード事典』pp. 272–273, 東京 : 研究社.
- 角田大作 (1991) 『世界の言語と日本語』東京 : くろしお出版.
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』東京 : くろしお出版.
- 吉村公宏 (2013a) 「認知意味論」辻幸夫 (編)『新編 認知言語学キーワード事典』pp. 264–265, 東京 : 研究社.
- 吉村公宏 (2013b) 「構文文法」辻幸夫 (編)『新編 認知言語学キーワード事典』pp. 116–117, 東京 : 研究社.
- 吉成祐子・アンナ＝ボルジロフスカヤ・江口清子・眞野美穂 (2020) 「複数局面ルートの移動事象を描写する表現の類型論的分析」松本曜教授還暦記念論文集刊行会 (編)『認知言語学の羽ばたき－実証性の高い言語研究を目指して－』pp. 22–38, 東京 : 開拓社.

#### <中文>

- 董秀芳 (2017) 「动词后虚化完结成分的使用特点及性质」『中国语文』3, pp. 290–298.
- 李恒・吴玲 (2021) 「中国手语放置动词认知研究」『语言、翻译与认知(Studies in Language, Translation & Cognition)』2, pp. 35–44.
- 李临定 (1990) 『现代汉语动词』北京 : 中国社会科学出版社.
- 刘焱 (2007) 「“V掉”的语义类型与“掉”的虚化」『中国语文』2, pp. 133–143.
- 倪兰 (2015) 『中国手语动词研究』上海 : 上海大学出版社.
- 朴奎荣 (2000) 「谈“V掉”中“掉”的意义」『汉语学习』5, pp. 12–14.
- 王丹荣 (2014) 「“V掉”的意义虚化与“掉”的虚化机制」『文史天地 理论月刊』10, pp. 66–69.
- 张博・赵春利 (2024) 「消失义动补结构“V掉”的语义组配与情态类型」『华文教学与研究』3, pp. 85–94.

#### <英文・その他>

- Benedicto, Elena and Diane Brentari (2004) Where did all the arguments go?: Argument-changing properties of classifiers in ASL. *Natural Language and Linguistic Theory* 22(4), pp. 743–810.

- Benom, Carey (2012) The semantics of some verbs of separation in Japanese. 『九州大学言語学論集』 33, pp. 107–132.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Chen, Jidong (2007) ‘He cut-break the rope’: Encoding and categorizing cutting and breaking events in Mandarin. *Cognitive Linguistics* 18(2), pp. 273–285.
- Chen, Tung-chu (2014) *Semantic Change and Grammaticalization of Diao*. Ph. D. Dissertation, Taipei: National Taiwan Normal University.
- Cowie, Anthony P. (1998) *Phraseology: Theory, Analysis and Applications*. Oxford: Oxford University Press.
- Divjak, Dagmar S. and Stefan Th. Gries (2006) Ways of trying in Russian: clustering behavioral profiles. *Corpus Linguistics and Linguistic Theory* 2(1), pp. 23–60.
- Fujii, Seiko, Paula Radetzky, and Eve Sweetser (2013) Separation verbs and multi-frame semantics. *Language and the Creative Mind: New Directions in Cognitive Linguistics*, ed. by Mike Borkent, Barbara Dancygier and Jennifer Hinnell, pp. 137–153. Stanford CA: CSLI Publications.
- Gibbs, Raymond W. (2007) Why cognitive linguists should care more about empirical methods. *Methods in Cognitive Linguistics*, ed. by Monica Gonzalez-Marquez, Irene Mittelberg, Seana Coulson and Michael J. Spivey, pp. 2–18.
- Goldberg, Adele E. (1991) It can’t go down the chimney up: Paths and the English resultative. *BLS* 17, pp. 368–378.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press. [河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子（訳）] (2001) 『構文文法論：英語構文への認知的アプローチ』 東京：研究社.]
- Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff (2004) The English Resultative as a Family of Constructions. *Language* 80(3), pp. 532–568.
- Gries, Stefan Th. (2006) Corpus-based methods and cognitive semantics: the many meanings of to run. *Corpora in Cognitive Linguistics: Corpus-based Approaches to Syntax and Lexis*, ed. by Stefan Th. Gries and Anatol Stefanowitsch, pp. 57–99. Berlin and New York: Mouton

de Gruyter.

Guiraud, Pierre (1954) *Les Caractères Statistiques Du Vocabulaire: essai de méthodologie*. Paris: Presses universitaires de France.

Hayase, Naoko (1993) Prototypical meaning vs. semantic constraints in the analysis of English possessive genitives, *English Linguistics* 10, pp. 133–159.

Hayase, Naoko (2018) Issues regarding the status of constructional schema. 『認知言語学研究』3, pp. 71–88.

Heine, Bernd (1997) *Cognitive Foundations of Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Heine, Bernt, Ulrick Claudi and Friederike Hunnemeyer (1991) *Grammaticalization*. Chicago: Chicago University Press.

Langacker, Ronald W (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Volume1: Theoretical Perspective*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Volume2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Our Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The university of Chicago Press.

Lemmens, Maarten (2015) Cognitive semantics. *Routledge Handbook of Semantics*, ed. by Nick Riemer, pp. 90–105. London & New York: Routledge.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: University of Chicago Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Levin, Beth and Peter Sells (2009) Unpredicated particles. *Reality Exploration and Discovery: Pattern Interaction in Language and Life*, ed. by Lian-Hee Wee and Linda Uyechi, pp. 303–324. Stanford: CSLI Publications.

Majid, Asifa, and Marianne Gullberg, Miriam van Staden and Melissa Bowerman (2007) How similar are semantic categories in closely related languages? A comparison of cutting and breaking in four Germanic languages. *Cognitive Linguistics* 18(2), pp. 179–194.

Majid, Asifa, James S. Boster, and Melissa Bowerman (2008) The cross-linguistic categorization

- of everyday events: A study of cutting and breaking. *Cognition* 109(2), pp. 235–250.
- Matsumoto, Yo (2006) Constraints on the co-occurrence of spatial and non-spatial paths in English: A closer look at the unique path constraint, the paper read at *the Fourth International Conference on Construction Grammar*. University of Tokyo.
- Senghas, Ann (2003) Intergenerational influence and ontogenetic development in the emergence of spatial grammar in Nicaraguan Sign Language, *Cognitive Development* 18, pp. 511–531.
- Sinclair, John (1991) *Corpus, Concordance, Collocation*. Oxford: Oxford University Press.
- Stokoe, William C., Dorothy Casterline and Carl G. Croneberg (1965) *A Dictionary of American Sign Language on Linguistic Principles*. Washington, D.C.: Gallaudet University Press.
- Stubbs, Michael (2007) An example of frequent English phraseology: Distributions, structures and functions. *Corpus Linguistics 25 Years on*, ed. by Roberta Facchinetto, pp. 89–106. Amsterdam: Rodopi.
- Talmy, Leonard (1985a) Force dynamics in language and thought. *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity at the 21st Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, pp. 293–337.
- Talmy, Leonard (1985b) Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. *Language Typology and Syntactic Description, Volume 3: Grammatical Categories and the Lexicon*, ed. by Timothy Shopen, pp. 57–149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (2000a) *Toward a Cognitive Semantics, Volume 1: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Talmy, Leonard (2000b) *Toward a Cognitive Semantics, Volume 2: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Taylor, John E. (2003) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*, 3rd edition. Oxford: Oxford University Press.
- Yasuhara, Masaki (2013) A modification of the unique path constraint. *JELS* 30, pp. 355–361.
- Zwitserlood, Inge (2012) Classifiers. *Sign Language: An International Handbook*, ed. by Roland Pfau, Markus Steinbach and Bencie Woll, pp. 158–186. Berlin: Mouton de Gruyter.

<コーパス・辞典>

現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）中納言：<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 オンライン検索ツール NINJAL-LWP for BCCWJ

(NLB) : <https://nlb.ninjal.ac.jp>

『基本動詞ハンドブック』 : <https://www2.ninjal.ac.jp/verbhandbook/>

北京語言大学コーパスセンター (BLCU Corpus Center) 現代中国語コーパス (BCC) :

<https://bcc.blcu.edu.cn>

集英社辞典編集部 (編) (1991) 『ルーツでなるほど慣用句辞典』 東京 : 集英社.

*Oxford English Dictionary Online* (OED Online)

# 既発表論文および学会発表との関係

各章のもととなった論文を以下に示す。本書の趣旨に沿って、本論では、第4章から第7章は既発表論文または学会発表の内容に改訂を加えているものである。特に、第4章は、本研究の主張と他の章との関連性を明確にするために大幅な加筆を行い再構成したものである。

## 第1章 序論

新規執筆

## 第2章 分離動詞の意味論・構文論に関する先行研究

新規執筆

## 第3章 理論的背景

新規執筆

## 第4章 日本語の分離動詞の多義構造研究

論文：

王鈺 (2021a) 「中国人日本語学習者と日本語母語話者における多義動詞「切る」のカテゴリー構造比較」『言語文化共同研究プロジェクト 2020 デジタルヒューマニティーズ』 75–96. (査読なし)

王鈺 (2021b) 「分断・破壊事象を表す動詞「切る」のカテゴリー構造とその習得－力動性モデル・心理実験・コーパスデータに基づく検討－」『日本言語学会第163回大会予稿集』 136–142. (査読なし)

王鈺 (2023a) 「日语分离破坏类动词的语义范畴及区别使用研究」『汉日语言对比研究论集』 13, 85–101. (査読あり)

王鈺 (2024a) 「力動性モデルに基づく分断・破壊事象を表す「切る」の多義構造研究」『言語文化学』 33, 117–133. (査読あり)

### **発表 :**

- 王鈺 (2021a) 「分断・破壊事象を表す動詞「切る」のカテゴリー構造とその習得－力動性モデル・心理実験・コーパスデータに基づく検討－」日本言語学会第 163 回大会 (ZOOM) 2021 年 11 月 20 日. (査読あり)
- 王鈺 (2021b) 「中国人日本語学習者と日本語母語話者における多義動詞「切る」のカテゴリー構造比較」汉日对比语言学研究会第 12 回研究会 (浙江師範大学) 2022 年 8 月 21 日. (査読あり)
- 王鈺 (2021c) 「中国人日本語学習者と日本語母語話者における多義動詞「切る」の意味構造分析－心理実験により意味分析の結果を検証する－」統計数理研究所言語系共同研究グループ研究発表会「言語と統計 2021 (セミナーシリーズ No. 16)」(神戸大学) 2021 年 3 月 20 日. (査読あり)
- 王鈺 (2022) 「分断・破壊事象を表す動詞の使い分けとその習得」汉日对比语言学研究会第 13 回研究会 (山東大学) 2022 年 8 月 20 日. (査読あり)

## **第 5 章 日本語の分離動詞の意味体系研究**

### **論文 :**

- 王鈺 (2023b) 「現代日本語の分離動詞における 2 種類の一体性について」『認知・機能言語学』8, 1–10. (査読なし)
- 王鈺 (2024b) 「現代日本語における 2 種類の分離動詞に関する仮説－離脱型壁塗り交替動詞との比較を通して－」『KLS Selected Papers』6, 61–78. (査読あり)

### **発表 :**

- 王鈺 (2023a) 「日本語における 2 種類の分離動詞の違い－分離元と分離物の関係および構文的意味について－」関西言語学会第 48 回大会 (ZOOM) 2023 年 6 月 11 日. (査読あり)

## **第 6 章 中国語の分離動詞との対照研究**

### **論文 :**

- 王鈺 (2024c) 「中国語の複合動詞「V 掉 (diao)」の構文化の可能性」『日本認知言語学

会論文集』24, 148–160. (査読なし)

王鈺 (2024d) 「中国語の分離動詞“V掉”的意味特徴と多義化プロセス」『認知・機能言語学』9, 1–16. (査読なし)

発表 :

王鈺 (2023b) 「中国語の複合動詞「V掉(diao)」の構文化の可能性」日本認知言語学会第24回大会(桜美林大学) 2023年9月2日. (査読あり)

王鈺 (2024a) 「力動性モデルに基づく中国語の分離動詞“V掉”的意味構造研究」汉日对比语言学研究会第15回研究会(上海建橋学院) 2024年8月17日. (査読あり)

## 第7章 分離事象の語彙カテゴリー化の実験的研究

発表 :

王鈺 (2024b) 「状態変化と位置変化を統合した分離事象の語彙カテゴリー化に関する実験的研究—類型論的視点から—」日本言語学会第169回大会(北海道大学) 2024年11月9日. (査読あり)

## 第8章 結論

新規執筆

## 謝辞

本論文は、筆者が大阪大学大学院人文学研究科博士課程在籍中に取り組んだ研究成果をまとめたものです。多くの方々の支えがあったからこそ、今、このようにして本論文を完成させることができました。この場をお借りして、感謝の気持ちを込めて謝辞を記します。

博士前期課程から大阪大学に進学し、この五年間、指導教員である小薬哲哉先生には一貫して熱心なご指導を賜りました。先生の研究に対するパッション、研究者としてのミッショントン、スタンスなど多く感銘を受けました。そして何より研究の純粋な面白さと楽しさを教えて頂きました。また、研究に行き詰まり落ち込んでいた時、博士論文執筆に苦労した時、先生の温かい励ましの言葉が私の支えとなり、諦めず前に進む勇気を与えてくださいました。心より感謝申し上げます。

そして、元指導教員である早瀬尚子先生に深く御礼を申し上げます。早瀬先生は博士後期課程から私の指導を快く受け入れてくださり、特に、博士論文の構想の初期段階において多くの示唆を頂きました。他研究科の方との共同研究において悩みを抱えていた時に、先生は私を信じて、コーディネーターの先生との相談の時間をとってくださいました。異動されたばかりのお忙しい時期にもかかわらず、丁寧に推薦書をご作成くださったことにも、感謝致します。

また、副指導教員の田畠智司先生、そして審査委員を担当していただいた大森文子先生には、博士論文資格審査会および指導会を通じて、多角的な視点から、貴重な助言を賜りました。先生方のご指導がなければ、本論文の完成には至らなかつたと確信しています。

加えて、日本言語学会、関西言語学会、日本認知言語学会、漢日対照言語学会から研究発表の機会を頂いたことに、感謝の意を申し上げます。発表や論文投稿の際、多くの先生方から頂いた有益なご指摘やご助言は、本研究の発展に大いに寄与しました。大阪認知言語学研究会の皆様には、常に多くの刺激をいただき、大変お世話になりました。

本研究においては、実験協力者の皆様のご支援なしには、データの収集は決して成し得なかつたと思います。マチカネ日本語交流会の桂清子氏は、炎暑の中、日本語母語話者の実験協力者を募集していただきました。ろう者の友人達は、オンライン実験

の不便さにも関わらず、熱心にご協力くださいました。皆様のお力添えに、心より感謝申し上げます。また、研究生の時期からいつも助言をくださり、博士論文の日本語表現を推敲してくださった浅野真菜氏にも、厚く御礼を申し上げます。

本研究は日本学術振興会 JSPS 特別研究員奨励費の助成を受けたものです。言語学研究の道に迷い、自信を失いかけていた時、特別研究員として採用されたことは、私にとって大きな励みとなりました。また、言語学の研究者になる夢を追いかけた日々、論文執筆に明け暮れた夜、台湾のロックバンド Mayday の音楽は、闇の中の光のように、何より勇気と希望を与えてくださいました。ここで深く感謝致します。

最後に、いつも筆者を信じて、支えてくれた家族と友人達へ、皆様の存在があったからこそ、私は今ここにあり、最後まで走り切ることができました。かけがえのない皆様一人ひとりに、心から感謝を捧げます。

2025年3月